

時報

第16号

大阪大学山岳会



剣岳北方稜線より望む剣岳

巻頭言

—— 山登りの原点 ——

篠田軍治

アルプスではモンブランが登頂されても未登の山はまだ沢山残っていた。1865年マッターホルンが登頂されて未登峯がなくなると共に一方ではバリエーションを求めて、より困難なルートへ、他方は広く世界に高い山を求めてウインパーは南米へ、そしてアンデスよりもヒマラヤが高いことがわかると、次第にヒマラヤに眼が向けられるようになった。

25年前エベレストが登頂されたことはアルプスでモンブランが登頂されたことと似ている。その後はエベレストほど高くはないが未登の高峯へという動きが始まった。登山史の大筋はアルプスと変りないがアルプス登山史の繰返しではない。アルプス開拓時代に英国人の果たした役割は大きく、同じような役割をヒマラヤで日本人がやっている感がするが、時代も違うし、七つの海を支配しつつあった大英帝国の上層階級と、今の日本のヒマラヤ登山隊とでは大きな違いがある。ヒマラヤ登山史もアルプス登山史と似てはいるが同じではない。

近代登山の先駆をなしたソーシュールの *Voyages dans les Alpes* の大著の第1巻が発行されたのはフランス革命の10年前であった。ソーシュールと言えばモンブランとの結びつきが強いので、より高くが本領のように思われがちであるが、むしろ彼の本領は「未知の世界へ」であったように思われる。これが“山登りの原点”ではなかろうか。山登りも無理により高く、より困難のみを求める必要もあるまい。

アルプスは局地的な山系であるが、ヒマラヤはグローバルでしかも若い山系である。2年前の唐山の大地震もヒマラヤの造山活動とつながりを持っている。今後のヒマラヤを考える場合にはアルプス的な視野を大巾に改める必要があるのではなかろうか。

山岳部長を退任するに当って

恩 地 裕

篠田先生の退官のあと山岳部長を今日までつとめさせていただいておりますが、その間附属病院長をして一人何役かの多忙なことになり、山岳部長としての実質的なお世話は、あまり長くはできませんでした。昭和 53 年 10 月から香川県に国立の医科大学を創設する仕事を文部省から命ぜられ、そちらの方に参りますので、阪大山岳部長は退任させていただきます。

私の山岳部長の間は、内地での遭難未遂事件、P29遠征隊を2回出し、その募金のお手伝い、最後のP29での遭難があり多事でした。その他、山での墜落、山岳部外の阪大生の遭難救助など、山以外でする山岳部長としての仕事は全部、経験させていただき、人生での貴重な体験と思っております。

山岳部長就任時はまだ私も若く、白馬の冬の新人合宿にもスキーをかねて参加させていただき、毎年、新入部員を宝塚の拙宅におまねきして、一夜の歓を尽くしました。これも家内が年を取り、家族の数が減って、ここ数年は実施できなくなりました。これも、山岳部長を若い人にゆずるべき時が来たことを示しており、病院長就任の時辞任を申し出たのもこのような理由も重なっております。

多くの若い人びとと交歓できたことを感謝します。

目 次

<p>リーダー所感 1</p> <p>1968年度(昭和43年度)活動記録</p> <p>5月山行</p> <p>白馬主稜 11</p> <p>穂高周辺 11</p> <p>白 山 13</p> <p>立山中央山稜OB山行 13</p> <p>夏山定着合宿</p> <p>剣 岳 13</p> <p>夏山縦走</p> <p>剣岳一笠ヶ岳縦走 17</p> <p>剣岳一槍ヶ岳縦走 18</p> <p>剣岳一東沢縦走 19</p> <p>笠ヶ岳第1岩稜 19</p> <p>夏山個人山行</p> <p>小太郎岩 21</p> <p>秋山個人山行</p> <p>南アルプス南半縦走 21</p> <p>南アルプス北半 23</p> <p>大峰山神童子谷廻行 23</p> <p>11月偵察山行</p> <p>真砂尾根上部偵察 26</p> <p>立山中央山稜上部偵察 26</p> <p>立山中央山稜下部偵察 26</p> <p>黒部別山南尾根偵察 27</p> <p>八ッ峰4稜下部偵察 27</p> <p>八ッ峰3稜偵察 28</p> <p>丸山中央壁ダイレクトルート 29</p> <p>御岳アイゼン合宿</p> <p>冬山合宿</p> <p>新人白馬天狗原合宿 30</p> <p>突坂尾根より白馬岳初縦走 31</p> <p>突坂尾根パーティー救援対策本部 報告 33</p> <p>1969年度(昭和44年度)活動記録</p> <p>5月山行</p> <p>立山東面定着 37</p>	<p>新人歓迎大峰山行 38</p> <p>夏山定着合宿</p> <p>槍ヶ岳・千丈沢 39</p> <p>夏山縦走</p> <p>北アルプス北部横断 45</p> <p>裏銀縦走 46</p> <p>黒部上ノ廊下 47</p> <p>北アルプス南部横断 48</p> <p>夏山個人山行</p> <p>穂高岩登り 48</p> <p>11月偵察山行</p> <p>杓子双子尾根一後立山縦走 50</p> <p>御岳アイゼン合宿 51</p> <p>冬山合宿</p> <p>杓子双子尾根 51</p> <p>1970年度(昭和45年度)活動記録</p> <p>4月個人山行</p> <p>八ヶ岳縦走 53</p> <p>5月山行</p> <p>中央アルプス縦走 54</p> <p>穂高・槍縦走 54</p> <p>大峰山横断 55</p> <p>新人歓迎大杉山行 56</p> <p>夏山定着合宿</p> <p>剣 岳 56</p> <p>夏山縦走</p> <p>中谷一毛勝山 59</p> <p>黒 部 61</p> <p>秋山個人山行</p> <p>荒川三山縦走 63</p> <p>北岳バットレス 63</p> <p>11月偵察山行</p> <p>八海山偵察 64</p> <p>郡界尾根偵察 66</p> <p>駒ヶ岳一中之岳偵察 69</p> <p>御岳アイゼン合宿 70</p> <p>冬山合宿</p> <p>後立山縦走 70</p>
--	---

遠見尾根	71
春山合宿	
魚沼三山縦走	72

1971年度(昭和46年度)活動記録

5月山行	
戸隠山塊P ₁ 尾根、ダイレクト尾根	77
大峰七面山南壁試登	88
新人歓迎白馬山行	78
夏山定着合宿	
剣岳	79
夏山縦走	
後立・東谷	82
丸山東壁	84
北アルプス横断	85
秋山個人山行	
北アルプス縦走	85
中央アルプス単独行	86
11月偵察山行	
サンナビキ尾根偵察	86
剣岳北方稜線偵察	87
御岳アイゼン合宿	89
冬山合宿	
塩見岳蝸蝸尾根	89
鋸岳一甲斐駒ヶ岳	90
中央アルプス滑川 三ノ沢周辺	90
春山合宿	
剣岳北方稜線	92

1972年度(昭和47年度)活動記録

5月山行	
新人歓迎白馬山行	95
大峰神童子谷	96
夏山定着合宿	
槍ヶ岳・千丈沢	97
秋山個人山行	
裏剣	98
11月偵察山行	
扇沢周辺	98
御岳アイゼン合宿	100
冬山合宿	
蓮華東尾根	100

春山合宿	
杓子双子尾根	101
阪大小屋合宿	103

1973年度(昭和48年度)活動記録

5月山行	
大峰山北部	107
夏山定着合宿	
剣岳	107
夏山縦走	
東大雪縦走	110
秋山個人山行	
南アルプス南部縦走	111
11月偵察山行	
薬師岳	112
御岳アイゼン合宿	113
冬山合宿	
薬師岳	113
春山合宿	
東大雪	115

1974年度(昭和49年度)活動記録

5月山行	
新人歓迎白馬山行	121
穂高	121
夏山定着合宿	
黒部源流	122
夏山縦走	
立山-西穂縦走	126
槍ヶ岳周辺	127
11月偵察山行	
横尾尾根偵察	127
鹿島槍天狗尾根偵察	128
御岳アイゼン合宿	130
冬山合宿	
横尾尾根	130
春山合宿	
鹿島槍天狗尾根	132

1975年度(昭和50年度)活動報告

5月山行	
新人歓迎白馬山行	135

北鎌尾根	135
魚沼三山縦走	136
夏山定着合宿	
穂高	137
夏山縦走	
剣岳北方稜線縦走	139
黒部上ノ廊下	140
南アルプス奥西河内廻行	141
十勝岳一化雲岳縦走	141
11月偵察山行	
奥大日尾根偵察	142
小窓尾根偵察	143
前穂北尾根偵察	144
御岳アイゼン合宿	145
冬山合宿	
白馬岳	145
前穂北尾根	146
春山合宿	
剣岳・奥大日尾根	147

1976年度(昭和51年度)活動記録

5月山行	
新人歓迎白馬山行	151
白馬スキーツアー	151
前穂高	152
滝谷	152
夏山定着合宿	
剣岳	153
夏山縦走	
後立山縦走	157
南アルプス縦走	158
秋山個人山行	
穂高池巡り	158
北岳バットレス	159
槍ヶ岳・千丈沢	159
11月偵察山行	
剣岳北方稜線偵察	160
抜戸岳南尾根偵察	161
表銀一笠ヶ岳偵察	161
三ノ窓荷上げ	162
池ノ平山荷上げ	163
冬山合宿	

剣岳・早月尾根	163
剣岳・北方稜線	165
石鎚山	168
春山合宿	
表銀縦走	169
抜戸岳南尾根	170
弓折岳南尾根	171

1977年度(昭和52年度)活動記録

5月山行	
新人歓迎白馬山行	173
明神岳東稜	173
北岳バットレス	174
剣岳・八ツ峰縦走	176
夏山定着合宿	
槍ヶ岳・千丈沢	178
夏山縦走	
南アルプス縦走	186
雲ノ平一剣岳縦走	187
滝谷一西穂縦走	188
下又白谷とヒシ形岩壁	189
秋山個人山行	
鹿島槍一五竜	190
荒川本谷廻行	191
11月偵察山行	
毛勝山西北尾根偵察	192
宇奈月尾根偵察	193
明神岳V峰西南尾根偵察	194
小窓尾根偵察	195
三ノ窓荷上げ	196
御岳アイゼン合宿	196
冬山合宿	
毛勝山・西北尾根	197
明神岳・V峰西南尾根	198
剣岳・小窓尾根	199

索引	205
----	-----

'68年度を顧りみて

山田靖則

'67年に我々がリーダーシップを取り、長期計画として積雪期の黒部上ノ廊下を選んだのであるが、予想に反して幸運にも計画一年目にして全域をトレースすることができた。上ノ廊下に数年はかかると思っていた我々は、この成功により部としても個人としても目標を失なった感じであり、これが'68年の山行にも現われている。

個々の山行において、それを計画した者にとってみれば色々と検討もし、自分なりの目的をもって行なったのであろうが、全体の中で見ると残念ながら個人の好みの山行といった感じで部の計画に反映できるような前向きの山行は余りなかった。一つの傾向として、昨年のチンネ岩登山行に見られるような岩壁登攀の山行が増加している。8月の笠ヶ岳第1岩稜、9月の小太郎岩、11月の丸山東壁がそれである。それぞれ体力的、また技術的にも容易でない対象であり、かかる計画が次々と出てくるのは評価すべきであらう。しかしながら実行にあたって計画者のみならず、リーダー会、部会で十分に検討し、十分の勝算を持って行なうべきであり、そうしなければその成果は一部の部員だけに閉じ込められてしまう。

部の年間計画の立て方は冬山、春山の目標を早く立てるべきである。11月の偵察は冬山、春山の山域にまたがって行ない、山行としては非常に盛りだくさんなものであったが、早くから計画を立案していれば、夏、10月などと腰のすわった偵察ができたと思われる。'67年、'68年とリーダーシップをとってみて、'67年が春山へ向けてすべての山行を位置づけ、その結果、1年部員をボッカ要員としてではなく、黒部川まで引っ張って行けたという事を見れば、リーダーグループの目標に対する熱意と実践こそ部を引っ張ってゆける原動力であると考えられる。そのためにも個々の山行の計画は個人の好みだけでなくそのような目標になりうるものとして立案され、調査、研究されねばならない。特に上級部員の計画には季節を問わずそれが必要であると考えられる。

'68年の冬山は当初立山東面より剣岳を計画したのであるが大町トンネルの通過が関電より許可にならず、急拠昨年失敗した突坂尾根へ計画を変更したが、昨年の計画以上に詰めの甘さがあり、救援隊の派遣といった事態を引きおこし、OBの方々に多大の迷惑をかけたことをおわびしたい。

また4年部員の身勝手よりリーダー交代を10月末に行なったが、それ以降の部会やトレーニングに4年部員の欠席が目立ち、部全体に悪影響を及ぼし、冬山の伏線となり、さらに冬山以降の部内の混乱の原因となって最終的に春山合宿を実行できなかったことを深く反省している。一年のうちリーダーが何度も交代することは絶対に避けるべきである。

’69年度を顧りみて

石原敏雄

阪大山岳部は、創立以来、「上向き」の登山から「横向き」の登山へ、さらに「下向き」の登山、谷の横断へとユニークな登山の方法論を駆使し、地域的には後立山連峰から黒部川流域、そして、剣、立山へと展開する輝かしい活動を続けてきた。コンプリート・マンティニアを育てつつ、大学山岳部が活躍しうる国内の山城の開拓が積雪期においても終りを迎えようとする’60年代後半において、ほとんど記録もなく残されていた積雪期の黒部川上ノ廊下を、伝統の終局目標として選ぶことが出来たのは、むしろ幸運であつたらう。

数年間を要する長期計画として、’67年度初めに立案された積雪期上ノ廊下の完全トレースが、計画初年度の春山合宿で完遂されてしまった。その後の部活動は、変動する登山界の情勢に適應する価値感に基く長期的な新しい展望を得るべく試行錯誤の繰返しであった。

’68年10月よりリーダーを引き継いだ我々が最初に直面した難題は、目前に迫る冬山および春山合宿の計画を作成し、具体的な偵察や荷上げなどの行動を早急に起こすことだった。積雪期の気象条件が厳しく、技術的に困難な岩稜が多く、記録的にも興味ある立山中央山稜から剣、および黒部別山南尾根から八ツ峰を経て剣を、それぞれ冬、春の目標に選んだ。これらの計画に必要な偵察と荷上げは、全員参加の合宿形態の中で隊を分散させ、敏速な行動で短期間のうちに効果的に行なわれた。しかし、計画以前の思わぬ齟齬が重なり、これらの計画が実行に移されないまま終わったのは残念であった。

前冬に敗退している突坂尾根に冬山合宿でとりあえず、再挑戦した。首尾よく厳冬期初縦走を果たして白馬まで登ったが、豪雪に阻まれて下山が遅れ、OB諸氏に多大な御迷惑を御掛けする結果になってしまった。この冬山以後、部内は大きな混乱をきたし、活動は低迷し、春山合宿は実施されないままに’68年度が終った。当時全国の大学に波及しつつあった大学紛争の渦に、夏頃から阪大も巻き込まれていったことも、山岳部のこの混乱と無縁ではなかった。全ての既成事実の否定から生まれる部内の問題提起もこの低迷に何ら建設的な解決法を見いだせないまま時は流れた。

再出発の足掛りとすべく’69年度の5月山行は立山東面で定着合宿を行なった。一昨年来求め続けてきた長期的な新しい展望を見出し得ないまま、部活動は再び開始された。冬山合宿は極地法による硫黄尾根から槍アタックを、春山合宿は穂高縦走を目標に、夏合宿は千丈沢で行なうことが決定した。

夏山合宿は、例年にない豪雨に見舞われ、計画の縮少を余儀なくされたが、定着中の北鎌尾根側稜登攀や硫黄尾根偵察等はほぼ所期の成果を上げることが出来た。9月の穂高岩登り山行は、ここ数年続いている岩壁登攀の流れを継ぐものであった。

秋に入って、岩登りトレーニング中に埋込みボルトが抜けリーダー自身が負傷し、続いて上級部員の半数が学業との両立が困難なことを理由に退部する事態に至り、年度初めの冬、春の計画を変更し、急扨、杓子岳小日尾根を偵察し、冬山に備えた。しかし、冬の小日向尾根から杓子アタック

は天候に恵まれたため、昨年の豪雪を思い合わせると拍子抜けの感が強かった。

大学紛争は今年度に入って増々エスカレートし、石橋キャンパスでは幾つもの学舎がバリケード封鎖され、授業の行なわれない状態が続いた。冬前より授業は再開され、春期休暇のない異常な学期が始まり、春山合宿は実行出来ないまま'69年度が終わった。

昨年度に続き、今年度もこのような異常な活動内容で終わってしまった。この原因としては、外的には社会人登山団体の目覚ましい躍進や大学紛争などに眩惑されて、大学山岳部本来の活動を正しく発展させる指針を確立しえなかったことや、内的には、登山に対する情熱の欠除と、直面する課題から安易に逃避する部員の性格的脆さなどが大きな比重を占めていたように思われる。

'70年度をふり返って

稲垣佳夫

春、P29第4次遠征隊参加が決まった黒岩(4年)からリーダーを受け継いだ時、山岳部は4年、3年各1名と2年2名の計4名という近年の阪大山岳部のなかでは最少の構成であった。

このように部員数が激減したのは阪大だけではなく、他大学山岳部ではすでに数年前より始まっていた。阪大山岳部の場合は、2年前までは黒部川上ノ廊下と云う大きな目標があったので活発なエネルギーを維持できていたが、それを目標達成のかたちで失い、更に1969年正月の白馬岳の出来事や、あるいは'70年安保の影響と相まって他大学に遅れ、最近になって急速に停滞するに至った。

大学山岳部が冬の壁の開拓を社会人団体の手に委ねた時から今の大学山岳部の姿があった。熟達者の廃却再生産を繰り返している大学山岳部にとって壁への道は踏み出し得なかった。

日本にもヒマラヤにさえも、未知の部分が失われつつある。登山の基本である未知への踏破が不可能になりつつある時代である。山行ごとに何故登るかを、登る人間がいちいち納得すると云う手続きをふまなければ登れない、そんな時代であるかも知れない。そう云う悩める時にさしかかっていた。山に登る人間がさらに深く山登りを考えることが必要な時となりつつある。

黒部上ノ廊下を評価するとき、その計画の末尾に参加したのものとしてその実績を過少評価するつもりは毛頭ないが、後の部員達に続くべき方向を与えなかった点、あるいは後の部員達が方向を見出せなかった点に心が残る。黒部以後、岩壁への方向が一層明確となり自らの実力不足、意欲の小ささを前にして、困惑し、登高欲さえ失いかけていた。それが1970年春の状態であった。

春が過ぎ、しばらく部を遠ざかっていた大西(4年)、藪本、鹿野(3年)、新人2名を迎え、部員数9名となった山岳部にとって、もう一度登高欲と云うものを、山を想い出し、実力を貯え、納得できる山登りを最初から始めて行くことが第1の課題であった。これが少数ながら部に残った者の残留した理由である。「冬の壁は遠いしヒマラヤも遠い。しかし、平凡乍ら初心にかえり、一歩づつそれらへの道を辿っていると実感できる山行を積みあげていこう。」リーダーとして

そんな気持であった。結果的にみて各々の部員がどれほどみずみずしい登高欲をとりもどし、その喜びをどれほど後の世代に引継げたかは疑問であるが。

今年度の MAIN EVENT である春山には、魚沼と云う新鮮な対象にとり組み、やっとなをとりもどした我々であった。しかし、それ以後の流れをながめてみて魚沼が次なる山へ発展しない単発で終わったことを認めざるを得ない。

最後に簡単に山行概要をふりかえっておく。夏は剣、冬は後立山縦走と、一般的な山行で実力向上に努めた。春は前述の如く魚沼三山の縦走をした。2,000M 前後の低山乍ら想像を越える積雪と、ナイフエッジで久しぶりに痛快であった。当時、積雪期三山縦走記録はなく秋の偵察行を含め北アに慣れた目を洗ってくれるものであった。

’71 年度を顧りみて

大 宅 幸 夫

我が山岳部は時の流れとともに部員が減少し、やがて消滅してしまうのかとも思える程淋しい時期を迎えた。下級生が少なくなった山岳部には、新人教育という山岳部の一つの課題が影をひそめ、自由奔放な気風が流れ出した。山行は少人数で各部員の個性が強く出てきた。新人 1 名、2 年部員 1 名を含め、夏山合宿は 6 名の部員で行なった。関西学連の他大学の部員数も少ない。

夏山合宿は、初めて剣の西面へ入った。この合宿も今年の特異な部員構成から生まれたものであろう。

秋山行の後、1 年部員が去り、冬山合宿の後 2 年部員が去った。そして春山合宿では、リーダー層を最も下の学年が受け持つことになった。この現象は山岳部としては全く異常なものであるが、山行は活発に行なわれ、部員構成の特性をいよいよ発揮していったのである。

篠 田 勝 久

阪大同様部員減少に悩む加盟校が多い関西山岳連盟に、新人の合同合宿構想さえ持ち上がっていたが、それは時機尚早との意見もあり実現には至らなかった。しかし各大学の合宿終了後の 8 月にリーダーメンバーによる合同山行が穂高で行なわれ、阪大から大宅が参加した。その山行で彼は重傷を負い、しばらく活動を停止せざるを得なくなった。リーダーでありまた唯一の 4 年部員の離脱は部にとって大きなマイナスであった。

次期リーダーは 3 年部員にまかされることになった。後半の部の方針は、部員数が更に少なくなる ’72 年度にそなえて、在学 O B の全面的協力を求めて、部員の質的強化をはかることにした。

具体的には、冬春の合宿を剣岳北方稜線に取組むこととして、11月の偵察山行をサンナピキ山から毛勝山と赤谷尾根から剣岳という二つのパーティーに分けて行なう計画を立て、実施した。しかしこの偵察山行において2年部員がスリップ事故を起こし、部を去った。4年部員も2年部員も居なくなった部は、半ば正常な活動をなし得なくなっていた。それでもなお来年度に向けて、残る1年部員を育成せねばならなかった。形式こそ個人山行的なものとならざるを得ぬ状態ではあったが、御岳、冬山と無事に終わることが出来た。しかし年明けに、個人的理由で1年部員も退部した。

ここに至って、部は下級生ゼロという異常事態に陥ってしまった。春山を3年部員2人と在学OBとでやることになったが、サンナピキから剣岳の計画の前半をカットして赤谷尾根から縦走し、'71年度を終えた。

'72年度をふり返って

高橋正身

上級生が卒業してしまうと阪大山岳部員は2名になった。団体構成の最低人数である。

しかも4年のみ。4月に新人が入らなければ20数年続いた山岳部は消滅してしまう土俵であった。その時点で感じた事は、ただつぶしたくないの一語につきた。他人からみれば、つぶしたっていいのではないと言われるかもしれぬが、とにかくつぶしたくはなかった。そこでこの一年はただひたすら阪大山岳部を生きながらえさせる為のみ使われた。

まず部員が減った原因として、人を引きつけるものがなかったと考え、方針を包容力のある山岳部にしようと考えた。つまりソフトムードにし、新人勧誘の時も岩登りが恐かったら最低限のことさえすれば、やらなくてもよいとふれて回った。その結果、5~6人の新人が入ってきた。新人合宿を5月の白馬で行なった。新人にとって初めての山行にしては、荷が重かったし、冬型にはまるなど、しんどかった。しかし晴天の下、残雪の白馬の頂上へ立った新人の顔は、喜びで満ちていたし、事実、口々に感激したと感想を述べていた。しかし、山を降りると一人二人とやめていった。理由は本人と話しあっても、なんとなくという感じしか伝わって来ぬ頼りないものでしかなかった。結局夏合宿を過ぎた時点で残ったのは、後から入った1名を加えた2名のみであった。

夏以後は4名で部活動を行なった。ここでの方針は残った新人2名を翌年までにリーダーとして動けるようにすることであった。このため、随分無理なこともした。元来1年生というのは山に入るのに精一杯で、山を見るまで気が回らない。その彼等にリーダーの目で山を見るように強要した。また4人しかいないため、下界での活動や計画書の作製と発送などの負担が一人一人に普段よりずっと重くかかってきた。こまごまとかばってくれる2年生がおらず、4年から直接ガミガミいわれながらの部活動は、決して快適なものではなかったと思う。しかし彼等はついてきた。しかも春山に、形式だけでも1年生にリーダーをあげた所、スキー登山という新しい形体をとり入れようと

する意欲もみせた。

こうやって考えていくと、この年の最初にたてた方針は誤りであった。山岳部は旅行者者ではないのだから、新人に迎合するような形に部を変えるのは誤りである。一番大事なことは本人が登りたい山に、登りたいように登ればよいのである。新人が本当に山に登ってみたいのであれば、自然についてくるのだと思う。

結局は最初に書いた事と矛盾するが、つぶれるものはしかたないのであろう。客観的にみて、'72年の最初にこのような結論を出せなかった最大の原因は、結局大きな目標、登りたくて登りたくてしようのない山を見つけることができなかつたためだと気がついた。

'73年度をふり返って

上 松 一 雄

もうかなり解け始めた林道の雪を、慣れないスキーで転げながら滑り降りたのは昭和48年の春だった。この年も白馬は毎日の様に晴天に恵まれ、山岳部2年目を迎えた後藤と私は、まだ来ぬ新入部員に思いを馳せながら、ただでさえろくに滑れぬスキーにキスリングをかついで必死でしがみついていた。

それからひと月とたたぬうちに新入部員を迎えた。5月の合宿は、2年生リーダーという力不足を考えて大峰山で行なった。岩登りトレーニング中に足を捻挫した私はこの合宿に参加できず、高橋OBに参加していただいた。夏は、剣岳池ノ平にベースをはり、後半、北海道大雪山系を縦走した。秋に、薬師岳から黒部五郎、双六を通り笠ヶ岳までの縦走や、御岳での雪上訓練を行なった。

そうして、いよいよ冬合宿を迎えた。後藤も私も冬山のリーダーをやるには、まだまだ力不足と思われたので、リーダーは藪田OBをお願いした。冬の薬師岳といえば、私達にとって一つの憧れであった。山は深く、頂上へのアプローチも適度の長さを有している。私たちの体力や登山の技量を試すに最適であり、大きな危険性も秘めている。この山のピークを踏めた事は、私達の衰退し切っていた山岳部にとって大きな意味を持っていた。

こうして、冬山での成功で意気盛んになった後藤と私は、春山へ向けて、行動を開始した。春山の計画は前年の春の白馬山行以前から私の頭の中にあつた大雪山系でのスキーツアーである。毎週の岩登りかわりに、できるだけ兵庫県の雪山でスキーツアーをやる事にした。それやこれやで、準備をしたつもりでも結局、準備不足のうちに春合宿を迎えた。この合宿は、これまでの1年に行なつた合宿と異なり、2年部員2名、1年部員4名で行ない、計画も、まだまだ未熟であつたために、色々の問題点を残したが、反面、非常に変化に富み、私にとって、二度と忘れえぬものであつた。

計画は、ニペソツ岳アタック、石狩岳アタック、トムラウシアタックの3つのアタックから成っ

ていた。

ニベソツは1日の予定であったため時間不足で敗退した。

石狩岳アタックは、24時間をかけるという前代未聞のものとなった。ニベソツのアタック失敗が頭にあった事もあったが、ピークを目前にして帰りの時間など考える余裕はなかった。延々と続く白銀の尾根、左方は大きく谷へスロープを描いていた。快い緊張感、ピークへの強い執着、もはや、石狩岳を語る事はできなかった。ピークを踏むや否や、即座に帰途につき、安全な所まではたどりついたものの、それまでの疲れから、時間ばかりをくってしまった。

トムラウシへの道は、初めに考えていた様に、スキーツアーに最適であった。ただ、昼頃に、雪がベトつき始めたのだけは閉口した。結局、このトムラウシアタックは、不注意から、メンバーの熱湯によるやけどにより失敗したけれども、五色ヶ原などの、大雪原は、実に美しく雄大であり、私の目に今も焼きついている。

最後に一言、年令に関係なく部員という山の仲間達を大切にしてほしい。真剣であればある程、意見が対立する。求める物が大きければ大きい程、部に対する失望も大きい。しかし、いかに未熟で、とるにたらないクラブでも、作るのは部員一人一人である。わずか4年間の活動を、仲間を大切に精一杯やってほしい。これが、私が部員諸君に望む唯一の事である。

'74年度を顧りみて

後 藤 正 教

本年は、3年2名、2年7名、1年6名という構成であったが、学内での学年が様々であるという事情もあり、合宿全員参加という原則が守られなかった。そして、昨年に引き続き、1、2年生の技術的、体力的向上を目標とする活動のみに終始した。

リーダーとして、1年間の活動方針たる大風呂敷を広げてはみたが、リーダー層の弱体により全くと言ってよい程、実行不可能であった。結果的にはクラブの通常状態への一過程的役割を果たすということに全力を注ぐことになったのである。従来クラブの雰囲気知らぬ者同志が、暗中模索の状態で行動し、それが良いにつけ悪しにつけ、新しいクラブのムードを作り出したとも言える1年間であったように思う。

'75年度をふり返って

松尾敬志

「剣」、「穂高」、登山の大衆化が進み、大勢の人が入山する今尚我々を魅了する。それら2つの山域を今年度の目標とする気運が部内に沸いてきた。それは私達の憧れの所為でもあり、部内の自然の成行でもあった。私達の入部以来、部員、特にリーダー層の不足は部活動を制限してきた。そして「何時しか高度の技術を持ち、その活動の安定した山岳部」、これが私達の夢、否、悲願となった。新入部員の獲得育成、2、3年部員の実力増強を主眼として前記の2山域に挑む事とした。特に積雪期の剣岳は将来の為、必ず経験を積まなければならなかった。

以上の思惑に従った今年度の活動であったが、今振り返ると経験不足による拙さ、余裕の無さが悔やまれる。しかし、ある程度は成果を収めたと自負している。

私達は部の再建という過程に情熱をかけ、部全体としてもその目的に合一した。山岳部とは山へ登るという事に於て一致した集団であり、各人その目的はまちまちで、山に登るにつれ深まり変わって行くものと思われる。年々歳々顔触れが変わる大学山岳部では、各人の目的を一致させるのは至難の業である。時のリーダーはこの宿命と対決しなければならない。

'76年度をふり返って

佐野威和雄

'76年度の阪大山岳部は、冬の剣岳北方稜線を目標に、活動に入った。この流れは、'75年以来の我々の念願であり、その第一歩として、'76年3月の春山に、我々としては初めて積雪期の剣岳に足を踏み入れ、着実にこの目標に向かって前進してきた。

クラブ活動は、明確な目的がなければ、その存在意義を失なう。部員のある一点に集中され、それに向かって突き進んでいく事で、クラブという集団の他にない優位性が発揮される。スポーツクラブでありながら、対外的にアピールする物が少なく、“自己との戦い”という要素が、大半を占める山岳部は、特にそれを明確に打ち出す必要がある。

この様な観点からみれば、本年度の我が部の活動はその線に沿っていた。

本年度は、山岳会のカラコルム遠征が重なり、2名の現役部員がこれに参加し、主力OBも隊員となられた為、夏山合宿迄は多少の活動の制約を受けざるを得なかったが、振り返ってみると、我が部の持てる力以上のものを出しきった一年だった様な気がする。

目標であった、剣岳北方稜線は、一応の成功を見た訳であるが、概観的な活動内容以外の点で、まだ我が部には種々の問題が残されている。特に、クラブ活動の本質的意義を何に求めるかという事

と、これに関連して、クラブの方向性をいかにするかという点については、再三のミーティングにもかかわらず、左右両極端とまではいかないにしても、完全な意見の一致を見る事はできず、結局中途半端な方針のもとにしか活動できなかった事は、今後に残された大きな課題といえよう。

私見ながら、過去大学山岳部がそうであったパイオニアワークに基づく活動は、山岳界全体の趨勢がそうである様に、海外に求めるしかなく（多分に極端であるとは思いますが）、国内が主たる活動の場である我々にとって、現時点でこれを求める事は不可能に近いと思われる。従って、問題のある程度個人のレベル迄下げる必要がある。また、この事以外に特に大きな制約となるのは、活動期間が、4年間に限定されている点である。結局問題は、4年間のクラブ活動が、各個人にとってどれだけの意義を持ち得るかという点に集約されると思う。私自身、この個人レベルの考えが非常に重要な位置を占めていると思うし、これが、活動の原動力となるとも思っている。各人が、明確な意識を持てば、全体的な活動は、ある程度個人的な活動の流れをまとめた形で具現化してくるはずであり、各人の欲求も満たされると思うのである。ただ危惧するのは、これを重視する余り、全く統一のとれないクラブになる可能性を多分に有しているという所で、この辺は、リーダー・グループの采配にかかっているとと思う。

’77年度を顧りみて

明 神 知

本年度の特徴として、部員が17名で、うち4年部員が6名もおり、その構成は頭でっかちであった。また吹田キャンパスの工学部の者が9名と過半数をしめ、石橋での部会にも支障をきたし、学部上級生が多いことから、合宿にも参加できない者が目についた。それに対し、1、2年部員の残留数は共に3人であり、徐々に部員数の減少も目につく。

このような部員構成上の関係から、リーダー層に於てリーダー1人の独裁といったことは全くなかったが、部活動は一貫した目標を見出せず、停滞気味であった。逆に大学山岳部のこれからの方向づけというのかなり議論したが、これといった結論も出ず現状を指摘するに終わった。すなわち、OBのチェックに代表される管理された安全第一の我が部に於ては、リーダーシップは3年に任せ基礎技術を修得するための登山学校にし、4年は主に個人山行形式で、やる気のある者を拾い上げるというものなどであった。これはあくまで現状の大阪大学山岳部気質“どれもこれも要領よく、うまくやろう”という者が多い場合にのみあてはまるのだが。

下級生の指導というのも非常に重要かつ困難な使命であるが、山登りが義務感のみになってしまうこともあり、そこに学業との両立の問題がからんで、上になれば急速に山への情熱が醒める傾向がある。目的意識もなく、単なる暇つぶしの為に命もかけ、金もかけるのに疑問が生じるのは当然であろうし、入部当時のクラブに抱いた夢も次々とこわされる場合も多く、これらも1つの原因と

なっている。

このような考えが浮かぶのも上級部員が増えて余裕が出てきたからかも知れないが、とにかく部員も増え、徐々に実力も着き始めており、大きな転換期にあることは確かで、今後、大学山岳部は暇があるという特徴を生かした方向づけを積極的に模索してもらいたい。

1968年度（昭和43年度）活動記録

'68年度 現 役 部 員

C . L	田 中 喜 樹	工 (4)
S . L	山 田 靖 則	工 (4)
	甲 田 吉 彦	基 (4)
	的 場 幹 史	基 (4)
	岡 田 謙 治	法 (4)
装 備 医 療	中 岡 和 哉	医 (3)
記 録	石 原 敏 雄	理 (3)
主 務	田 村 孝	文 (3)
気 象	松 村 一 男	工 (3)
	黒 岩 芳 夫	経 (3)
	大 西 邦 男	工 (3)
	中 川 晃	工 (3)
食 糧	稲 垣 佳 夫	工 (3)
	寒 川 敏 夫	工 (3)
	岩 崎 忠 博	工 (1)
	鹿 野 信 吾	理 (1)
	藪 本 勝	工 (1)
	藤 田 盛 行	工 (1)
	竹 田 清	医 (1)
	栗 原 稔	医 (1)
	大 宅 幸 夫	歯 (1)

5 月 山 行

白馬岳主稜

猿倉台地BC-主稜

期 間 4月27日～5月1日

参加者 石原(L) 中岡、寒川

4月27日 ① 沼地出発(9:50)-猿倉台地CS(11:45)-偵察(13:00~15:40)

石原、中岡で主稜末端部の取付きを偵察する。

4月28日 ◎のち● アタック(石原、中岡)出発(3:15)-取付き(4:00)-Ⅳ峰(7:20)-帰幕(8:20)

気圧の谷が近づきつつあったが、先行パーティーのステップをかりて飛ばす。先行パーティーはザクザクにくさった雪で苦労しているらしい。Ⅳ峰で先行パーティーに追いつくが、時雨が降り出す。この雨は天気図から判断しても止みそうもないので、Ⅳ峰下のコルから大雪渓に降り、引き返す。

4月29日 ● 停滞

4月30日 ◎のち⊗

アタック(石原、中岡)出発(2:00)-白馬ピーク(10:10)

昨日からの気圧の谷はなかなか抜け切らないが天気回復は間違いないので出発する。そんなに冷えこんだ気配はなかったが、それでも雪質は意外に硬く快調なピッチで取付く。Ⅶ峰の上で一時みぞれが降り、これで後続パーティーはほとんど引き返したらしい。ツェルトを被って30分時間待ちをする間に、みぞれは止んだが、ガスがあたりを全くの乳白色の世界と化す。Ⅳ峰までは先日も行っており、エスケープルートも確保されているので続登する。昨日のステップが残っているので、全く疲れることなくⅣ峰

に達す。このあたりから小雪がちらつきだしたため、再び30分間ツェルトを被って時間待ちをする。BCとのトランシーバー交信で天候はもうこれ以上悪化しないと判断して小雪の降るなかを続登する。Ⅳ峰からの急斜面に先日のパーティーのステップが残っている。がっかりしながらザイルを出してⅡ峰の登りにかかる。この急な雪面に雪崩れた跡があり、ステップもそこで消えていた。30mでⅡ峰に出るが、本峰へのルートがガスのためわからない。ここで昼飯を食いながらガスの晴れるのを待つが少しもその気配なし。我々は大体正しいルートと思われる所を直登することにする。30mも登ると上に5m位張り出した雪庇が見えて来た。右上方20mの所に雪庇を切った跡があったので、そこを乗り越す。主峰への最後の雪面はやはりいやらしく、上層が硬くてもろいクラストで、その下はサラサラとしまりのない雪だった。流石に完登したのはうれしくて、ガスに包まれたピークに20分程いた。(記 石原)

5月1日 ○ 起床(4:00)-杓子東尾根取付き(7:00)-杓子岳ピーク(10:20)-白馬沢出合(11:20)-帰幕(12:30)

中岡、寒川が杓子岳アタック。トレースがあったので楽だった。下りはコルから豪快にグリセード。

5月2日 細野へ下山。(記 寒川)

穂高周辺

新穂高-南岳西尾根-横尾本谷-瀬沢
前穂高-横尾-上高地

期 間 4月27～5月5日

参加者 田中(L)、山田、中川、稲垣

4月28日 ●

新穂高(13:45)-白出沢(15:40)
高山に着いたら、濃飛バスがスト中で、いろいろと策を講じてみたが、結局小型タクシー

4,000円でも新穂高入り。雨降り止まず白出沢にテントを張る。

4月29日 ●

停滞。終日雨降り止まず。

4月30日 ○時々●のち○

出発(6:25)ー滝谷出合(8:10~15)ー南沢出合(8:45~9:00)ー2,600m岩峰下(11:00)ー岩峰上CS(12:20)

小雨の中を出発する。滝谷はガスって見えず、よけい陰惨な感じがする。南岳西尾根末端で休憩の後、南沢へ入る。南沢はデブリがいっぱいで歩きづらい。20分程歩いたところから、右手の急なガリーに入る。傾斜は45度位か。このガリーを詰めて稜線へ出るとかすかなトレールと赤旗があった。赤旗に導かれて急な稜線を登る。このあたり、沢と尾根が交錯してやや複雑である。1時間登ったら岩峰が現われる。手前の小岩峰は、後側の草付きと雪のミックスしたところをトラバースして大岩峰の基部に出る。スリップすると右俣谷まで一気に落ちそうな感じだ。岩峰にはフィックスがあり、それを使って一段上へ出る。ここで再度フィックスを使い、田中が上へ上るがフィックスの根元がゆるんでいるのでザイルを出す。ここからは這松をこぎ急な雪壁をトラバースして稜線に出る。記録によればこの先には良いテント地がないらしいので、少し早いですがガスが切れないこともあり、やや細い尾根の雪を平らにしてテントを張る。夕方から晴れる。

5月1日 ○

出発(6:25)ー南岳(8:45)ー濁沢出合(11:45~12:00)ー濁沢(13:30)

1ピッチ目、足がつるような傾斜にアイゼンを効かせて登る。これを過ぎるとしだいにナイフエッジ状になり、南西稜とのジャンクション手前数百メートルはきれいなナイフエッジであった。靴を横にすると巾いっばい程度のナイフエッジをとばす。フィックスが一ヶ所あり60度位の雪壁を登り、南西稜とのジャンクションで緊張から解放される。主稜線は人が多い。南岳

からはアイゼンを効かせて下ったが、このころより少々ダンゴ。大切戸に下るところで前の数パーティーがもたついているので直接横尾本谷へ下る。傾斜がきつかったので荷物を別にして滑り降りした。しかし、これは失敗で、荷物が回転してバラバラになった。デブリの中に散乱したので、さしずめ雪崩にあったような光景だ。荷物拾いとかで1時間。本谷は傾斜緩く、膝までもぐる中を歩かねばならない。濁沢はテントの花盛りだ。

5月2日 ○

出発(5:50)ーV、VIのCOL(6:45~50)ーIV、VのCOL(8:10~15)ーIII、IVのCOL(8:25~9:30)ーCS(10:45)

前穂北尾根へ。少し寝坊して出発が遅れる。V峰はなんととはなしに通過。IV峰は濁沢、奥又白側をそれぞれトラバースしながら登る。急な雪と氷と岩のミックスしたところを登る。緊張感があってなかなか楽しい。ザイルがほしいと思われるところもあったが、ステップがしっかりしているのでノンザイルで行く。III、IVのCOLに10パーティーほど順番待ちしているのでヤル気が減退する。1時間待ったがまだ待たなければならず、又山田が休憩毎に吐くといった状態でもあり、2年生も不安定なので下る。COLからは上部アイゼン、下部グリセードで下る。

5月3日 ①のち●

出発(5:35)ー北穂高(7:35~50)ー濁沢岳(10:50)ー白出のCOL(10:55~11:10)ーCS(11:40)

今日は北穂から白出のCOLへ。北穂沢を1ピッチ少しいったところから急な斜面を登って南稜へ出る。南稜は所々岩が出ているものの別にどうといったところのない尾根である。北穂南峰まで出発後2時間。北穂から南岳西尾根を見るとあきれ程急である。北穂から1ピッチ行かないうちに岩稜帯となる。8mmザイルを2度、延べ40mフィックスしたのち濁沢岳のCOLに出る。COLからは部分的にいやらしいところもあるが全体にどうということはなく、濁沢岳直下の鎖のフィックスしてあるルンゼをつめて濁

沢岳頂上。白出のコルからはザイテンをグリースードで下る。

5月4日 ●のち◎

停滞。

5月5日 ●時々◎

予備日もなく、天気も悪いので上高地へ下る。横尾からは人の多いのに文句を言いながら歩く。上高地着 11:00。最後まで天気の悪い山行であった。(記 山田)

白山

別当谷—御前峰—別山—温泉谷

期間 4月29日～5月3日

参加者 田村(L) 大西、黒岩

4月29日 ●◎

市瀬出発(10:30)—別当谷出合小屋(13:00)

別当谷を偵察し中尾根末端でひき返す。

4月30日 ①のち◎のち◎◎

出発(6:45)—中尾根(7:50)—2,300m弥陀ヶ原取付き(10:45)—一堂小屋(13:00)

別当谷の左股ルートをとったが雪が詰まって上部は広い急斜面となっている。崩壊が甚だしく落石も多い。

5月1日 ○

出発(6:50)—別山ピーク(9:30)—CS(13:15)

弥陀ヶ原から200m程下り、2244のピークに取付く。あとは雪庇に注意して尾根をひたすら駆ける。

5月2日 ①

出発(6:50)—御前峰ピーク(7:30)—四塚山(9:15)—見返り坂下分岐点(10:35)—岩間ヒュッテ(12:40)

ガレ記号下地点より温泉へ長いシリセード。温泉に入り、あやうく風邪をひきそうになる。

5月3日 ①

出発(7:15)—新岩間(10:15)

(記 田村)

立山中央山稜

天狗平—地獄谷—立山中央山稜—黒四ダム

期間 5月5日～5月9日

参加者 牧野(OB)、吉川(OB)

メンバーがOB2人なので気楽なものだ。房治小屋を根城に、積雪期の偵察目的で立山中央山稜を、内蔵助小屋あたりから上半、下半と分けて、それぞれ7日と8日に登る。素晴らしい晴天に恵まれるが、寒気は厳しく、身体が萎縮しそうだ。難場にさしかかると恐怖感が先に湧き、平素のトレーニング不足を痛感する。9日の下山は、内蔵助カールを快適にスキー滑降し、黒四ダムへ向かうが、内蔵助平あたりよりブッシュにスキーをとられ、悪戦苦闘を強いられる。

(談 吉川)

夏山定着合宿

剣岳周辺 BC二股

期間 7月16日～8～1日

参加者 山田(CL)、甲田(SL)、岡田、中岡、田村、石原、稲垣、大西、寒川、黒岩、中川、岩崎、大宅、栗原、鹿野、竹田、藤田、藪本、糸井(OB)、黒田(OB)

今回の夏山合宿は出発直前になってCL田中の交通事故不参加という事態でSLの私が代わって合宿をもったわけであるが、入山早々の石原

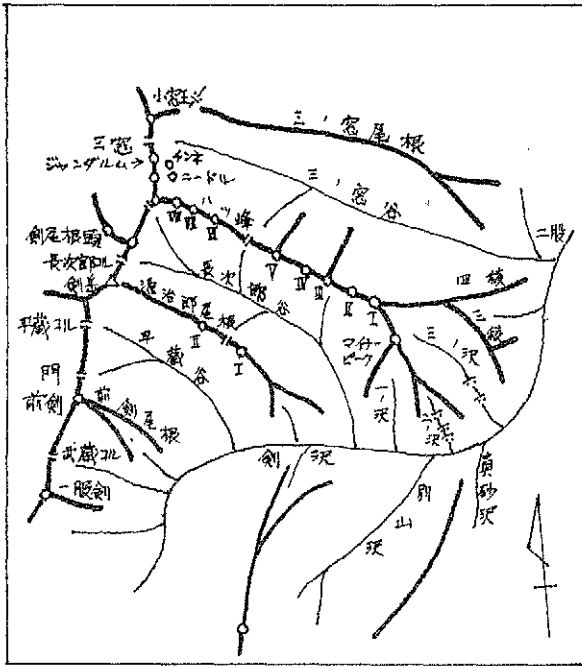


図1. 剣岳東面

の下山などで当初計画を大幅に縮少し、また台風4号のために後半ほとんど行動できなかったために士気の上がらぬ合宿になった。

昨年千丈沢の合宿の反省から今年は雪と岩の剣岳でという考えであったが、我々にとって既知であるという事で、逆に計画の深い検討に欠けた面があった。今回新しく組み入れたフェース、剣大滝などは別として、今まで行っていたということで組みこんだもの、例えばハツ峰「峰東面は「峰東面の領域を調べるといったような目的がはっきりしないまま実行し、合宿早々遭索隊を出す等の行動を強いられた。これは明らかにルートの研究不足であり、リーダーグループの計画立案に問題点を残すものであろう。また、同日の源治郎の取付き附近の雪渓上でピッケルを打ちこんだために雪渓が崩壊した事故もあった。幸い負傷者はなかったが、我々の予想もしなかったこの事故に、3~4年という経験の浅さを感じさせられ、夏山雪渓の恐ろしさを全員に再認識させたものであった。

後半の連日の悪天でリーダーグループを除く士気の低下は、我々リーダーグループのやる

気を下級部員まで浸透できなかったせいで、これは指導力云々をいわれてもしかたないであろうが、新人との接触の多い2年部員が後半くずれてしまったのは残念であった。

縦走を含めて夏山合宿は何のためにやるのかという方針をはっきりと打ち出し、下級部員まで徹底させ慢然たる合宿に終わらせないようにするのが今後の課題であろう。(記 山田)

〈行動概要〉

- 7月16日
先発隊(石原、黒岩、鹿野、竹田) 出発。
- 7月17日 ◎◎
先発隊、房治荘へ荷物デポ。
- 7月18日
本隊、大阪発

- 7月19日 ○
称名出発(9:20) - 大日平CS(15:40)
夜行と暑さでバテる者もでたが、まず例年通りのボッカだ。重さは昨年より軽く45Kg足らずか。
- 7月20日 ○
CS(6:25) - 大日小屋(12:00~30) - CS(14:15)
昨日の疲れが抜けれないかピッチが上がらない。新人の体力のバラツキが大きく、大日小屋からは全体にダレ気味だ。無理をせず中大日の下りにテントを張る。
- 7月21日 ○
CS(5:20) - 二股BC予定地(17:15)
昨日中に奥大日を越えるつもりであったのだが越えられなかったのが、今日の行動をどうするかでもめたが最終判断は御前乗越まで保留して出発する。それ程暑くもないボッカ日と昨日までのペースはどこへやら、予想以上のペースで進むのでこれ幸いと二股のBC予定地まで一

気に行ってしまった。まる一日のボッカではあったが全員の頑張りでBCが設営出来た。

7月22日 ○

長次郎谷側源治郎Ⅱ峰間雪溪にて雪上訓練。

7月23日 ○

・八ッ峰上半

山田、石原、黒岩、岩崎、藪本
(石原当日本峰経由で下山)

・源治郎尾根

田村、寒川、大宅、竹田、栗原、糸井
OB

取付きにて雪溪崩壊、取付かず。

・Ⅰ峰東面三ノ沢

甲田、中川

・Ⅵ峰CフェースRCC右ルート

中岡、大西

・源治郎Ⅱ峰長次郎側フェース白い岩脈ルート

岡田、稲垣

・TK 鹿野、藤田

7月24日 ○

晴天停滞。糸井OB下山。剣大滝パーティー
仙人へ上がる。

7月25日 ○

・八ッ峰下半

甲田、大西、鹿野、藪本、藤田

・Ⅵ峰Cフェース剣稜会ルート

山田、稲垣、大宅

・チンネ左稜線下部gチムニーcdクラック

中岡、黒岩

・本峰北壁 L1

岡田、竹田

・剣大滝(1日目)

田村、中川、寒川

・TK 栗原、岩崎

黒田OB入山

7月26日 ○

・本峰北壁 L1

甲田、栗原、黒田OB

・同 L2

中岡、稲垣、岩崎

・同 L3

岡田、鹿野

・同 L4

大西、黒岩、藪本

・同 L5

山田、藤田 (取付かず)

・剣大滝 (2日目)

田村、中川、寒川

・TK 大宅、竹田

7月27日 ◎風強し

・Ⅵ峰Aフェース魚高ルート

岡田、稲垣

・Ⅵ峰Dフェース

甲田、黒岩

・Ⅶ峰フェースaルート

田村、大西

・内蔵助平

中川、鹿野、大宅、岩崎、黒田OB

・三ノ窓一小窓

山田、中岡、寒川、竹田、栗原

三ノ窓強風のためチンネ、ジャングルム取
付かず。

・TK 藤田、藪本

7月28日 ◎のち☀

三ノ窓雪溪にてアイゼン訓練

7月29日 ◎のち☀

停滞

7月30日 ☀時々◎

停滞。打上げフェイアー

7月31日 ◎

撤収。全員雷鳥沢にて幕営

8月1日 ①

雷鳥沢付近にて雪上訓練後縦走出発。

<登攀記録>

源治郎Ⅱ峰長次郎側白い岩脈ルート

期日 7月23日

参加者 岡田、稲垣

BC(5:00)-取付き(7:30)-アン
ザイレン(8:10)-終了点(9:05)
-Ⅱ峰(10:10)-BC(12:30)

白い岩脈ルートの左下に雪の上から飛びつく。右上するチムニー状クラックをたどって約25mで、ブッシュに着く。直上する凹状の白っぽいルートをながめながら食事をした後、岡田がトップで出発する。7m程登るとかぶり気味になる。左手の残置ハーケンにカラビナを通し、小さなカンテを登り、白っぽい岩の部分直上し、テラスに出る。次のピッチは、きれいな順層で、ホールドは豊富だ。25m程で残置ハーケン有り。凹状の中央にあるブッシュまで35mで2P目を切る。次に、岡田がトップで、凹状になった白っぽい岩を5m登る。さらにハーケンを1枚使用し、細かなホールドを利用して10m登ると、上部がかぶっているが、左へトラバースしてブッシュをつかめば終了だ。15m程、ブッシュ混じりの岩を登れば、Ⅱ峰長次郎側岩壁を左下より中央部を二分する大ルンゼに出会う。ここで事実上登攀終了。コンテでルンゼを詰めⅡ峰に出る。(記 岡田)

ハツ峰Ⅵ峰Dフェース

期 日 7月27日
参加者 甲田、黒岩

長次郎を3ピッチでDフェース取付き点に到着。雪溪上で1時間の順番待ち。1ピッチ目、黒岩がトップで10m直上の後、左へトラバースしてハーケンをビレイする。2ピッチ目は細かく、3ピッチ目はハングを後側から越え右上にトラバースした。ここでまた時間待ち。4ピッチ目のトラバースを終えると後はヤブコギとなり、コンティニューアスでも行けそうである。8ピッチ目でⅥ峰のピークに出る。ハツ峰上半から三ノ窓経由で帰幕。(記 黒岩)

剣大滝偵察

期 間 7月24日～26日
参加者 田村、寒川、中川

7月24日 BC(16:40)一仙人小屋

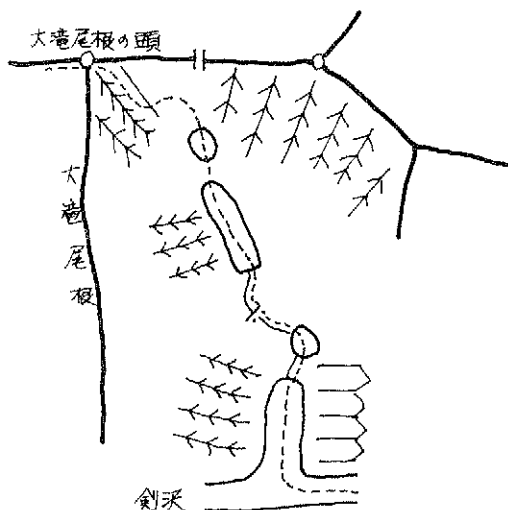
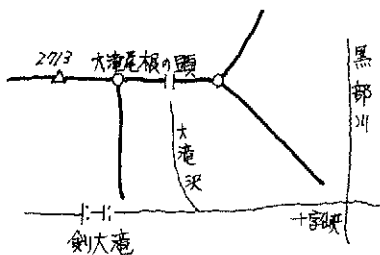


図2. 剣大滝周辺概念図

(18:30)

7月25日 出発(5:15)一大滝尾根頭
(9:00)一剣沢(16:55)一BP
(18:00)

南仙人を越えてから踏み跡もうすくなるが大したブッシュではなく稜線を忠実に行って割合楽に大滝尾根の頭へ。大滝尾根の頭より剣沢へ落ちている沢(大滝沢と仮称)は下部まで雪に埋まっているようだ。ガンドウ尾根を十字峡への尾根とS字峡への尾根とに分けるジャンクションピークのコルへはかなり急で、左へ巻きぎみに下ると目の前がひらけ、ザラザラの大滝沢上部の見えるガラ場へ出た。沢の上部は垂壁で下れそうになく、大滝尾根からの支尾根を使いブッシ

ユの中のアップザイレン、トラバースを混じえて大滝沢へ下る。沢心は不安定な大石のつまったガラ場で自然落石の危険を考えると同時の行動をさけ、それぞれ距離をおいて下る。雪溪に達するところで雪のトンネルをくぐるが上部より大きな落石があり、あやうく寒川に当たるところであった。雪溪をグリセードで下り、インゼルで休憩後更に下ると沢は両側から圧迫されるような感じになり雪溪が切れる。小滝を下ると谷は右へ更に左へと曲がり、そこから剣沢が眼下に見える。後は荒れた厚い雪溪を下りやっと剣沢へ。

大滝の方は何百mと切り立った岩壁になっており大滝の大きさを想像させる。ビバーク地は十字峡へ下って捜すことにし剣沢の雪溪を下り、途中から右岸に入り尾根上にてビバーク。せまいビバーク地だが抱きあうようにしていい夢を見た。

7月26日 出発(6:00)―十字峡(7:00)―阿曾原への分岐(9:20)―仙人小屋(14:30)―BC(16:00)
(記 田村)

夏山縦走

剣一笠ヶ岳縦走

雷鳥沢―黒四ダム―針ノ木峠―三俣蓮華岳―笠ヶ岳―新徳高

期間 8月1日～8月7日

参加者 山田(L)、大西、栗原、藤田

8月1日 ①のち◎

出発(8:35)―立山稜線(10:10～30)―内蔵助平(13:25)―丸山下CS(15:00)

雷鳥沢での雪溪訓練後出発。直接立山稜線を目ざす。稜線までいいピッチで行きその足で内蔵助平を目ざすが道は切開きに毛のはえたようなもので歩きにくい。内蔵助谷の下りは新人が足を滑らせてころび時間を食う。テントは丸山東壁直下の川原に設営した。夕方からガスがかかり猫の耳は見えず残念だった。

8月2日 ○

出発(6:20)―黒四ダム(8:20～25)―御山谷出合(10:00～05)―平(12:05～35)―南沢出合(13:50)

6時出発の予定であったが1年がもたつき20分遅れる。内蔵助谷出合で下ノ廊下の片鱗を見る。春に別山南尾根をやるのならなかなかきびしい。黒四までピッチが上がらずイライラするが、黒四からは12時の渡しにまにあうよう急がせる。このため1年は平付近でフラフラ。渡ってからは針ノ木谷をのんびり南沢出合まで。

8月3日 ○

出発(6:40)―針ノ木谷分岐(9:20)―針ノ木峠(12:10～30)―CS(12:40)

今日は針ノ木峠までとしたのでのんびり出発。針ノ木峠の登りは暑く、ピッチが上がらない。水は針ノ木雪溪を下らねばならず屋からガスのかかったこともあり、針ノ木岳往復は止めた。

8月4日 ○

出発(6:00)―蓮華岳(7:20～25)―北葛乗越(8:20)―北葛岳(9:15～30)―七倉岳(10:45～11:15)―船窪CS(11:40)

稜線に出てやっと縦走に出た気分である。蓮華まではコマクサの群生の中を行く。蓮華の下りはいやらしそうに見えたが、最後の岩場に鎖のフィックスがありどうということはない。北葛までは少しとぼしてピークへ。下りを1ピッチ行くといよいよ左手が大きくガレてきた。コルからの上りには壊れそうなはしごがある。七倉岳のピーク直下が船窪小屋で、ゆっくりとCSへ。

8月5日 ①時々◎

出発(6:15)―不動岳(10:30~45)―烏帽子小屋(13:10~20)―東沢乗越(17:55)

今日から本格的行動開始。出発が少々遅れたがまず順調。樹林中の行動は蒸し暑いがいいペースである。南アのスケールを小さくした感じであり烏帽子まではグングンとばす。小屋前で大休止して水晶まで行こうと頑張るが空腹でペースが落ちる。途中で昼食をもう一度とって頑張るが1年が気力をなくしペース上がらず。東沢乗越で幕営。

8月6日 ①のち◎

出発(5:55)―水晶小屋(6:30)―鷲羽岳(7:55~8:20)―三俣(8:50~9:00)―双六(10:45~11:00)―大ノマ乗越(12:15~30)―杓子平(15:00)

営林署に見つからぬうちにと早々に出発。藤田が腹痛を訴える。双六、大ノマ乗越までは勝手知ったる場所だ。大ノマ乗越からはお花畑の中を秩父平へ、左手の異様な岩峰が目につく。抜戸への登りはダラダラして空腹にこたえる。杓子平へ着いてからも営林署の目をおそれ、16時までテントを張らずに紅茶など飲んでいた。縦走も終りで新人の顔も明るい。

8月7日 ①

出発(6:10)―笠ヶ岳(6:50~7:00)―杓子平(8:00~25)―左俣谷取水所(10:45~11:00)―新穂高(11:30)

撤収して笠ヶ岳へ向かうがガスの中でピークに立ってすぐ帰る。途中第1岩稜の上部が見えたがすぐ隠れた。杓子平へもどって笠新道を下る。例の調子でとばすと、やはり藤田がダウンして結局大西らに遅れること30分近く。取水所で合流したあとぶらぶらと新穂高へ。1時間位して田村らのパーティーが降りてきた。笠に残るパーティーを残して他は富山へ。残留組は岡田を待ったが現われず、新穂高野営場へ。

(記 山田)

剣岳―槍ヶ岳縦走

雷鳥沢―五色ヶ原―薬師岳―黒部五郎岳―双六岳―槍ヶ岳―槍平

期間 8月1日~8月7日

参加者 田村(L)、黒岩、稲垣、鹿野、岩崎

8月1日 ◎

雷鳥沢出発(8:45)―五色CS(15:15)

雪上訓練の後五色へ向かう。

8月2日 ◎のち●

出発(6:15)―越中沢岳(9:00)―スゴCS(13:45)

今日のコースは登り下りが非常に多い。スゴ小屋の手前でついに雨が降り出す。

8月3日 ①時々◎

出発(6:05)―薬師岳(9:05)―太郎小屋(11:05)―北ノ俣岳(13:30)―CS(14:00)

薬師・太郎・北ノ俣とスムーズに行く。縦走路から10分下った所にテントを設営する。

8月4日 ①

出発(6:30)―CS(12:00)

赤城沢を下降する。10時頃岩崎の調子悪くなり、黒岩・稲垣で地図に出ている2つ目の滝まで行って引き返す。

8月5日 ①時々◎

出発(5:50)―黒部五郎岳(8:45)―双六岳(12:45)―双六CS(14:30)

昨日の半日停滞で全員快調、スイスイ行く。双六のテノ場もテントの花が咲いている。

8月6日 ◎時々①のち◎

出発(5:40)―槍の肩(10:00)―中岳と南岳のコル

昨年の千丈沢合宿を思い出しながら槍ヶ岳へ。途中、ブロックンに出くわす。

8月7日 ①

出発(6:00)―槍平(9:30)―新穂

下山(12:00)

大切戸の輪郭がガスの中かすかに見える。このまま穂高へ縦走したい。しかし3ピッチで槍平へ。(記 黒岩)

の徒渉も1人で不安なくやれる様になった。ザイルを出すすと非常に時間を食い、安全性との兼合いが難しい。(記 中岡)

剣岳—東沢縦走

雷鳥沢—五色ヶ原—薬師岳—薬師沢出合—租父平—租父岳—東沢—ダム

笠ヶ岳第1岩稜登攀

期間 8月8日～10日

参加者 山田(L)、岡田、黒岩、鹿野、岩崎

期間 8月1日～8月8日

参加者 中岡(L)、中川、寒川、藪本、竹田大宅

8月1日 ◎

出発(9:00)—ノ越(10:30)—五色CS(15:20)

8月2日 ◎◎

出発(6:00)—スゴCS(13:20)

8月3日 ①のち◎

出発(6:40)—薬師(9:25)—薬師沢左俣CS(13:30)

8月4日 ①のち◎

出発(7:00)—赤城沢出合(11:20)—租父沢(14:00)—租父平CS(14:30)

8月5日 ◎

出発(6:00)—ブッシュこぎ—縦走路(9:35)—租父岳(10:10)—東沢CS(14:30)

8月6日 ◎

出発(6:15)—東沢出合CS(16:00)

8月7日 ◎

出発(11:30)—平の渡(13:15)—針ノ木CS(13:30)

8月8日 ●のち◎

出発(5:30)—黒四ダム(13:20) 岩魚を釣るということで1年生を釣った計画であったが、岩魚は1匹も釣れなかった。しかし初めは水を恐れていた1年生も、もも位まで

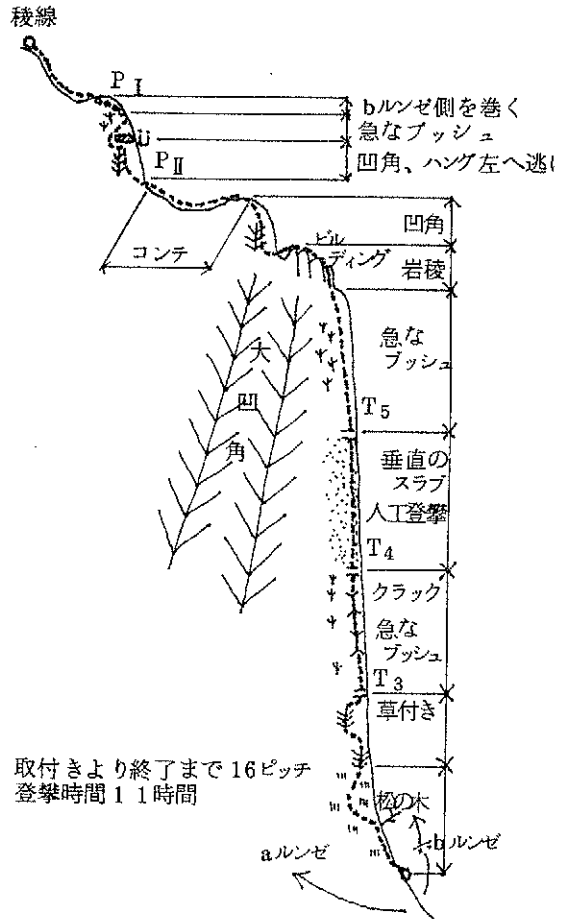


図3. 第1岩稜ルート図

第1岩稜等笠東面の岩場の登攀計画は3年前の佐々木氏らに始まる。この時は剣からのアプローチの途中で1人が怪我をして取付かず、翌年山田、岡田、甲田、石原あたりで計画したが上

級生が見つからずお流れ。昨年は同じく山田、岡田等で計画するがメンバーの1人が急性盲腸炎で計画を放棄した。笠東面は、大阪山の会、社総会、京都府大等の報告を見るととにかく登攀時間の長さが目につく。いままで我々の合宿中で正味の登攀時間は長くても5時間程度であったのを考えると、7～12時間という時間は種々の面で考えさせられるところが多く、食料、装備、またピバークの可否の検討、メンバー構成などそのたびごとに考えてきたが、昨年の計画を基本とし、第1岩稜はメンバー3名、ピバークの準備もしていくという事で計画し、あと二ノ沢奥壁や五ノ沢などに新人を含めて登るという計画を立てた。

8月8日 ①

停滞。岡田が合流しないので1日休養とする。午後山田1人で穴毛小屋まで。穴毛谷は想像していたよりも陰険さはない。テントに帰ると岡田がきており、さっそく明日からの打合せをする。穴毛小屋までの所要時間を考えると、BCをその分(30分)早く出る事にし、BCの位置は計画とは異なるけれども新穂高とする。

8月9日 ② 一時〇

出発(5:25)ー穴毛小屋(6:00)ー第1岩稜取付き(7:45～8:15)ー笠稜線(19:00)ー新穂BC(23:50)テントキーパーの鹿野、岩崎に見送られて出発する。穴毛谷の雪渓はデブリの集りであり、岩が多く、雪も硬い。歩き易い所をさがしながら行くとすぐ4の沢の出合であった。4の沢に入り二俣近くになると写真で見た通りの第1岩稜が鋭くそびえている。左俣雪渓は傾斜もあり、息を切らせて取付きへ。取付きではAルンゼをのぞいたり、Bルンゼ側の雪渓の下で写真を撮ったりして登攀準備完了。

まず岡田トップで草付きの岩をガムシャラに登りダケカンパでビレイ。40m登ってもちっとも登ったように見えない。次いでAルンゼ側をトラバース気味に35mで広いテラス。稜上の凹角を40m、Bルンゼ側のせまいテラスにつく。テラスから右上草付きの脆い岩登り。ブッシュを抜けて大きな岩の上に出る。40m。ここ

で1回目の昼食。傾いたクラックをずり上り(15m)、チムニー状の岩の割目に入り、ザックをはずして抜け出る。20m。70～80度の草付きを40mいっばい。不安定なハイマツでビレイするが2人立てないので山田、黒岩を途中まで上げた後20m登り安定した位置でビレイ。更に15mで第1の難関である大フェース下のテラス(T4)に着く。岡田トップで左側のリスに連打してあるハーケンを使いアブミのかけかえで25m。そこから右手草付き凹角に入る。出口は微妙でアブミを踏み切るのに苦労する。35mのびてダケカンパでビレイ。途中より雨となり、ラストの山田が登る頃には土砂降り、雷鳴もとどろく。ブッシュに入りブッシュをつかんで強引に登る(15:00)。リッジぞいの凹角に入るが雨で濡れているのでいやらしい。20mで凹角を左へ出て草付きをトラバース。かぶり気味の岩をだいて強引に抜け出てブッシュでビレイする。トラバースはAルンゼ側フランケの大シェードル上部なので高度感がある。草付きと濡れた岩を慎重に登る。体が濡れているので非常に寒い。草付きの登りや、土の詰まったホールドなどゲレンデのトレーニングは通用しない。上部の凹角出口でアブミ一台、更にブッシュに捨て縄をかけて抜け出る(35m)。手がふやけ、ザイルやブッシュ、岩で傷ついて痛い。更にブッシュをつかんで35m。傾斜は落ちない。ブッシュを抜けてPⅡに出る。いつのまにか雨は止んでいるが、雷は相変わらず。コンティニューアスでコルに下る(17:00)。

目の前に立ちふさがる壁目がけて岡田トップで登り、20mでBルンゼ側の長方形のテラスに出る。テラス左端のシェードルをアブミ3台で直上。ハングにおさえられ左の壁に移りAルンゼ側へ5mほど腹をこするようなトラバースをし、草付きをホールドにして直上、ブッシュに入る。更にブッシュ登りでPⅠに出、全員歓声を上げる(19:00)。あたりは薄暗い。交信をして登り切った事をテントの1年に伝える。最後の岩峰はBルンゼ側を巻いて稜線へ出る。アンザイレンして11時間ぶりにザイルを解き、食事をして暗い中をランプをつけて槍見

温泉へ下る。精魂つきはてた感じで新穂のBCに着いたのは23:50。1年2人に迎えられた時は非常にうれしかった。

8月10日 ①

昨日の登攀で全員消耗激しく、以後の計画は放棄する事にした。朝はゆっくりと起き温泉に入って昨日に比べると虚のように晴れた空をうらめしげに見ながら新穂をあとにする。

(記 山田)

夏山個人山行

小太郎岩登攀

期間 9月6日～7日

参加者 岡田、甲田

9月6日 ①

名張よりバスで小太郎岩へ40分。見上げると目の前の小太郎岩は、黒々としたハング帯がまるで巨大なライオンの顔のようだ。ライオンルートといわれがよく分る。1時ごろ下部フェースに取付く。岳人251号に説明のある松の木へ直上するルートは、ハーケンがなくボルトの欠損箇所があり、甲田10m登るが途中で止め、右ルートに登る。岡田トップで50cmハングを越す。庇上のハーケンが遠く苦勞する。ハング上はフリーをまじえ30m強でバンドへ。バンドより15m登り、ライオンルートとスラブを直上するボルトルートを偵察して南稜を下る。

9月7日 ①

今日は本番なのでダブル用にザイルを2本持って7時に出る。南稜より下部フェース上バンドへトラバース。7:45アンザイレン。甲田トップでスラブ基部へ。圧倒的なハング帯

を上部にもつスラブは40mは優にある。ホールドは皆無といってよくボルト連打。岡田30m直上し、ボルトスタンスでグリップビレイ、甲田をあげる。トップ交代不可能で続いて岡田トップ。少し上に交代可能なスタンスがあったらしい。甲田、アブミにのってビレイしながら、「陰謀にかかった」と不満顔。

80度近いスラブは下部ハング帯の真上になるので、下部フェースの取付きは見えずダイレクトに下のブッシュが見え高度感満点。7～8m登り、1mの張り出し、15m位の広がりをもつハングの下を左へ登り気味のトラバース。上部ハング帯のまっただ中なので足の下は空間。体が外にふられる。ボルトの間隔が速く、ダブルでなければ非常に苦しいと思う。ライオンルートと出合う。チムニー上部に十分なスタンスとボルトがあるのでビレイ。甲田が最後のマッチ箱のハングの庇を乗り越え、10mで終了。上段バンドに出る。岡田アブミを回収して上段バンドへ出たのは12:15だった。途中ジッヘル、写真撮影に時間をとられなかったら3時間で登れる。下部フェースからは小太郎の頭まで約10ピッチ。

2人パーティーで7～10時間というルート説明もなるほどとうなづける。上級者向きの岩場である。

(記 岡田)

秋山個人山行

南ア南半縦走

塩川—三伏峠—荒川岳—赤石岳—聖岳—茶白山—畑窪ダム

期間 10月9日～10月15日

参加者 山田(L)、稲垣、岩崎、竹田、鹿野

10月9日 ◎のち●

鹿塩(12:00)ー塩川(14:25)ーCS(15:40)

塩川到着早々雨が降り始める。塩川から1ピッチで雨のためテントを張る。夕食時には雨は止んでいた。

10月10日 ◎

出発(6:50)ー三伏峠(10:10)ー鳥帽子岳(11:10)ー小河内岳(13:45)ー避難小屋(14:10)

トレーニング不足で苦しい三伏の登りだ。所々に見られる紅葉に慰められる。さすが稜線に出ると寒い。小河内着後ガス深く道を誤る(1時間のロス)。道が発見できず避難小屋に入る。ガスの晴間をぬって偵察、高山裏への道を見つける。水が少ない(2L弱)ゆえ晩は水なしラーメン、朝焼ソバとする。

10月11日 ①

出発(6:00)ー高山裏(8:20)ー前岳(12:00~14:50)ー荒川小屋(15:45)

最初のピッチは下りである。水を求めてか、1年生の足どりはおちつかない。高山裏着後は水を得て調子づいて荒川の登りに入る。

前岳到着後、山田、岩崎はさぼって中岳まで、その後昼寝。稲垣、竹田、鹿野は張り切って東岳まで、小屋への下りで水を汲み、小屋の横にテント設営する。

10月12日 ◎のち①

出発(6:00)ー大聖寺平(6:30)ー小赤石岳(8:05)ー赤石岳(8:25~9:40)ー百間平(10:40)ー百間洞キャンプ地(11:30)

本山行のクライマックス、赤石岳に向かう。昨日の好天とうって変わってガスが濃い。非常に寒かった。それが幸いして小赤石の登りは快適そのものだ。山頂前の凹地では雪もチラホラした。ムード満点で話はずんだ。少しの休憩後、赤石岳へ向かう。稜線に出ると風が吹きつけ、片方の顔面が凍りそうであった。山頂で記念撮影後、避難小屋に飛び込む。暖い紅茶で体をあた

ためた後、いやらしいガレの下りである。しかし今日は全員快調そのもので、百間平でスケッチするものもあった。次のピッチで百間洞キャンプ地にすべり込む。時間はまだ11時30分だが、今日はさぼってここで幕営する。今までの整理やらで結構忙しかったようだ。

10月13日 ●◎

起床直前雨が降り出し、ガスも濃いので、停滞とする。

10月14日 ①のち●

出発(5:50)ー百間洞小屋(6:15)ー大沢、中盛丸山のコル(7:00)ー中盛丸山(7:25)ー兎岳(8:30)ー前聖岳(10:20)ー聖平(11:20)ー茶臼小屋(14:30)

停滞翌日ゆえ全員元気に出発。1ピッチ目に小屋への道をまちがえ1年草付きで足をすべらす。コルまで登った時、昨日の雪をいただいた富士が美しかった。中盛丸山、兎岳を越え前聖岳の登りで風が強く、ガラ場を下に見て歩く稜線では足がすくんだ。あられまじりの風で顔がいたい。前聖岳から聖平まで非常な勢いでとばす。竹田が稲垣の後から尻をたたいたのが原因。岩崎非常に迷惑そう。計画では聖平までなのだが、まだ11時20分なので一気に茶臼岳まで行くことにする。歩いている時はたいして感じないのだが休むと体が冷える。秋山でこんなに寒いので、冬山ではさぞやと1年は心配顔だ。上河内の登りは風にまじって雪が降り出し非常に寒い。ガスで何も見えずつまらない。上河内の上方を少しトラバースし風の強いガスのかかったいやな稜線づたいに茶臼小屋に着く。仁田小屋まで行く予定だったが雨、ガスの猛攻の前に予定変更する。

10月15日 ○

出発(7:30)ー横窪小屋(8:50~9:05)ーウソッコ吊橋(9:30~50)ー畑籬大吊橋(10:50)

昨日の寒さはどこへやら、暖い朝を迎え、まさに下山日和である。道を少しはずして草付きをさまよったが、後は快適な下山行であった。途

中、吊橋が多くてスリル満点のコースであった。そして屋前、全員大した怪我もなくバスに乗込んだ。(記 山田)

南アルプス北半

笹の平—甲斐駒ヶ岳—仙水峠—広河原—八本歯のコー—北岳アタック—間ノ岳—農鳥岳—奈良田

期間 10月9日～10月13日

参加者 田村(L)、黒岩、藪本、大宅

10月9日 ①のち◎

竹宇駒ヶ岳神社出発(10:25)—笹の平(13:30)

海拔高度も余り高くないので秋らしさは感じられない。

10月10日 ①のち◎

出発(7:00)—7合目小屋(11:25)—甲斐駒ヶ岳(13:50)—仙水峠(16:30)—新北沢小屋(16:55)

黒戸屋根を駒ヶ岳へと目指す。ピークに近づくとつれ風強まり、濃霧と風の駒ヶ岳を通過する。

10月11日 ①時々◎

出発(5:35)—栗沢山(7:50)—アサヨ峰(9:00)—広河原峠(11:30)—広河原CS(13:30)

栗沢山へ登ると、後には甲斐駒、摩利支天が青空に突き上がり、右手には仙丈岳が美しい。

10月12日 ①

出発(5:10)—八本歯のコー(10:10)—北岳の肩(11:00)—北岳アタック—間ノ岳(14:40)—農鳥小屋(15:20)

分岐辺りから、ピークを雲で隠した3,192mの北岳がちらりちらりと見え隠れする。

10月13日 ◎のち①

出発(6:00)—農鳥岳(8:30)—大門沢下降—大門沢小屋(11:10)—奈良田登山口下山(14:10)

農鳥のガスの中へ入ると風も強い。しだいにミゾレから雪に変わっていった。下界に下ると青空が見え始め、イヤな感じだった。

(記 黒岩)

大峰山神童子谷 遊行

川合—神童子谷—山上ヶ岳—洞川

期間 10月5日～10月6日

参加者 石原、栗原(OB)

10月6日は中秋の名月である。この名月を愛でながら、大峰から吉野まで月明りの尾根を歩くのも一興ということで決まった山行だ。

わずか3日間の山行なのに荷が重い。ザックの中味は、現役には信じられない程豪華な食料が、ぎっしり入っている。

6日の神童子谷源頭の雑木林を登る頃、それまで夕映えに赤く染まっていた周囲の山なみは、いつしかガスに包まれ始め、稜線の夏道に出た時は、月も星もない全くの暗闇の中だ。山で月見酒をやろうと云う了見が甘かったのか、期待の満月は雲に隠れたまま出て来そうにない。吉野行きは諦めて、懐電をつけ、一気に洞川へ駆け下る。(記 石原)

11月偵察山行

剣・立山東面(冬、春山偵察)

期間 11月1日～11月8日

参加者 田村 (CL)、石原、山田、甲田、
栗原、渡部 (OB)

岡田、黒岩、中川、大西、稲垣、大宅、岩崎、

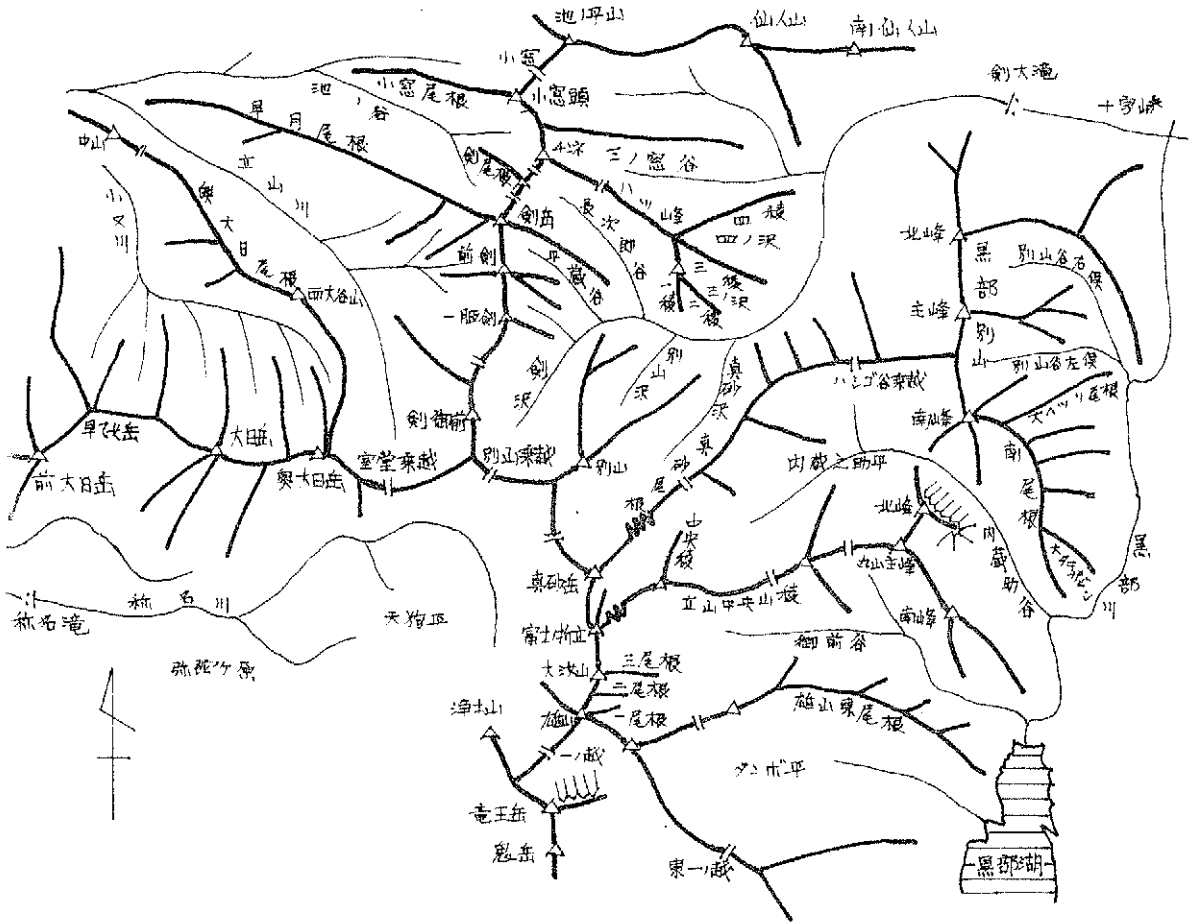


図4. 立山・剣週辺概念図

黒部上ノ廊下に続く目標として剣、立山東面を選び、気象条件のきびしいバリエーションルートを目ざすことにした。剣、立山東面はアプローチの困難さも手伝って記録も少なく格好の目標と思えた。

冬山は立山東面より剣岳へ、春山は別山南尾根、ハツ峰より剣岳へ計画を決定し必要な偵察と荷上げを全員参加の合宿形態をとって行なった。

11月前半と云うのに例年になく積雪量が多かったが、連日の好天続きで、初冬の山の醍醐味を十分満喫しながら快調なペースで計画全て

を消化することが出来た。 (記 石原)

〈行動概要〉

11月1日 ①

天狗小屋 (11:25) - 雷鳥沢 (13:45)
- 御前小屋 (14:45) - 雷鳥沢 (17:20)

天狗小屋から夏道通しに行く。1人平均40kgの荷を担ぎ房治より雷鳥沢へ。テント設置後剣御前へデポに行く。山田、中岡、黒岩は明日からの4稜偵察のため剣御前小屋前に泊る。

(ハツ峰4稜下部偵察参照)

11月2日 ○

起床(5:15)―出発(7:10)―剣御前小屋(8:30)―出発(9:30)―真砂岳J.P.(10:30)―新人アイゼン練習(11:00~13:30)―内蔵助小屋(14:30~15:15)―真砂岳J.P.(15:30~17:20)―剣御前小屋C.S(18:30)

各偵察パーティーおよび新人パーティーごと
に荷分けして出発する。新人パーティーと石原、
渡部は剣御前小屋前にテントを張る。田村、岡
田、稲垣、中川は、そのまま真砂岳から内蔵助平
へ縦走を続ける。

石原、渡部、大西は、テント設営後新人3人
を連れて真砂岳に登り、田村のパーティーに追
いつく。ここで岡田、中川、大西が新人のアイ
ゼン訓練を行なう。その間に田村、稲垣は真砂
尾根上部偵察(別記参照)、石原、渡部は立山
中央山稜上部偵察(別記参照)に各々出発する。

偵察を終えた田村等と新人は内蔵助小屋に降り
る。ここから内蔵助平へ向かう田村、岡田、稲垣、
中川は内蔵助平に下り、以後、別行動となる(別
記内蔵助平隊行動概略参照)。新人パーティーは
内蔵助小屋で休憩の後、真砂岳に登り、立山
中央山稜上部偵察を終えた石原、渡部と合流し
て剣御前小屋へ向かう。(御前小屋C.S泊、石
原、大西、岩崎、大宅、栗原、渡部)

11月3日 ○

剣御前小屋C.S 出発(7:30)―黒百合
の科尔(9:55)―前剣(10:50)―平
蔵の科尔―剣岳(12:00~12:40)―前
剣(13:40)―服剣(14:20)―三
田平(15:20)―剣御前小屋C.S(16
:40)

剣別山屋根と早月尾根の上部偵察を兼ねて石
原、大西が渡部、新人とともに出発する。黒百
合の科尔から新人3人を渡部が三田平経由で一
足先に剣御前のC.Sへ連れて帰る。石原、
大西は、忠実に尾根通しにトレースして、別山
尾根より剣岳に登る。早月尾根上部はのぞくだ
けにとどまった。帰路は三田平を経て剣御前の
C.Sへ。

八ツ峰4稜偵察を終えた山田が、剣沢を登っ
て御前小屋C.Sに入る。夕刻渡部が御前小
屋C.Sより真砂小屋へ下る。石原も鹿島槍の双
耳峰のシルエットを見ながら下り、月明りの剣
沢雪溪を、真砂小屋に入る。翌日より、石原、
渡部、中岡、黒岩は、八ツ峰の3稜末端から頭
までの偵察を行なう。(別記参照)

11月4日 ○

山田、大西は1年生3人を引きつれて大日尾
根を下る。行動がはかどり一日で小又川まで行
きダンプに便乗して伊折へ。(記 石原)

〈内蔵助平隊行動概略〉

期 間 11月2日~11月7日

参加者 田村(L)、岡田、稲垣、中川

11月2日 ○

真砂岳J.P. 出発(13:10)―内蔵助
平BC(17:00)

真砂尾根上部の偵察終了後、新人らと一緒に
内蔵助小屋まで降りる。ここに大西と新人を残し
て、内蔵助谷を下る。膝下までもぐる雪に苦勞
しながら黄昏の内蔵助平に着く。

11月3日 ○

別山南尾根偵察(別記参照)に出発しビバ
クする。

11月4日 ○

別山南尾根偵察より帰幕。甲田、黒四ダムよ
り入山する。

11月5日 ①

立山中央山稜偵察に田村、稲垣、中川が出か
ける(別記参照)。甲田、岡田は丸山東壁のル
ート偵察を兼ねて停滞する。

11月6日 ② 停滞

11月7日 ○

岡田、甲田は丸山東壁に取付く(別記参照)。
稲垣、中川は下ノ廊下を下り、翌8日10:
30 礮平に到着する。田村は黒四ダムを経て当
日下山する。

(記 田村)

真砂尾根上部偵察

期 間 11月2日
参加者 田村、稲垣

真砂岳 J.P. (10:55) - 真砂尾根上
部偵察 - 真砂岳 J.P. (13:05)

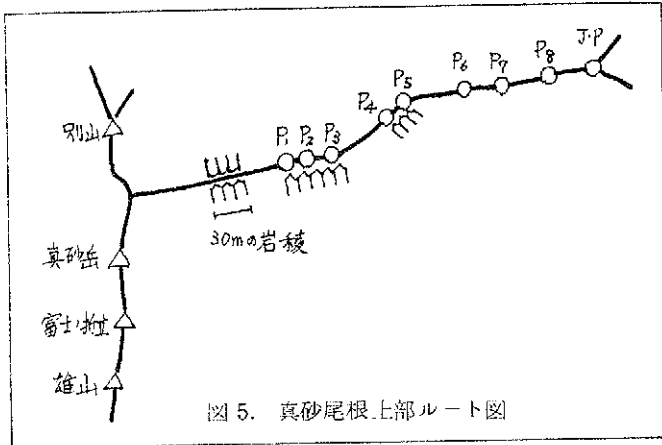


図5. 真砂尾根上部ルート図

この尾根のやばい所は上部のP₁~P₅ 付近である。P₁、P₂、P₃ は、岩の突起のつらなりで、P₃ はデポサイトになる。他は真砂沢側の斜面をトラバース可能である。岩角の程度、積雪の状態によるが、フィックスはP₁の手前、P₂、P₃の間、P₃の下り各々30mずつあれば十分かと思われる。(ただし、登りだけなら不要かと思われる)。(記 田村)

立山中央山稜上部偵察

期 間 11月2日
参加者 石原、渡部(OB)

真砂岳 J.P. 出発(11:00) - J.P.
(11:30) - P₇(14:30) - J.P.
(15:15) - 富士の折立(16:30)
- 真砂岳(17:00)

頂上直下の岩峰群は ルートファインディング
が問題。J.P.から岩峰群基部までは、平坦な広

いプラト一状の尾根でどこにでもテントが張れる。
(石原)

立山中央山稜下部偵察

期 間 11月5日
参加者 田村、稲垣、中川

内蔵助平 C.S 出発(6:30) - 2,281
m J.P. (10:00) - P₆ (13:30)
- 帰幕(15:55)
P₆、P₇の南斜面は急な草付きであり、キス
リングをかついだままでP₆を通過するのはか
なりヤバそう。コルは広く、十分テントが張
れる。終日ヒザまでのラッセルで疲れが残り、
しんどかった。(記 田村)

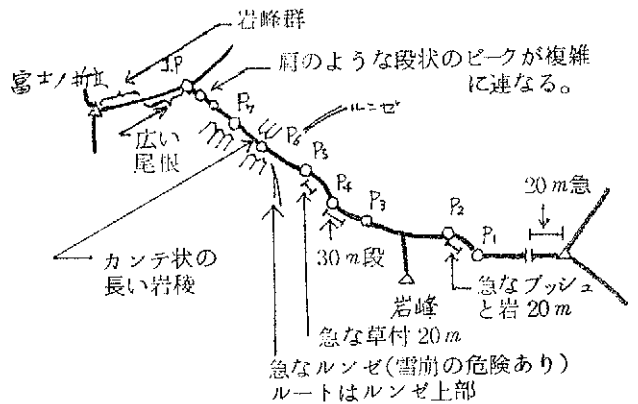


図6. 立山中央山稜ルート図

黒部別山南尾根偵察

期 間 11月3日～11月4日

参加者 田村、岡田、中川、稲垣

11月3日

内蔵助平CS出発(5:30)→出合(6:30)→P₁700(10:15)→P₁900(13:20)→P₂040(16:20)ピバーク

11月4日

出発(7:00)→P₅(10:40)→南峰(14:00)→J.P.(15:30)→ハング谷(16:35)→内蔵助平CS(17:35) (記 田村)

(図7参照)

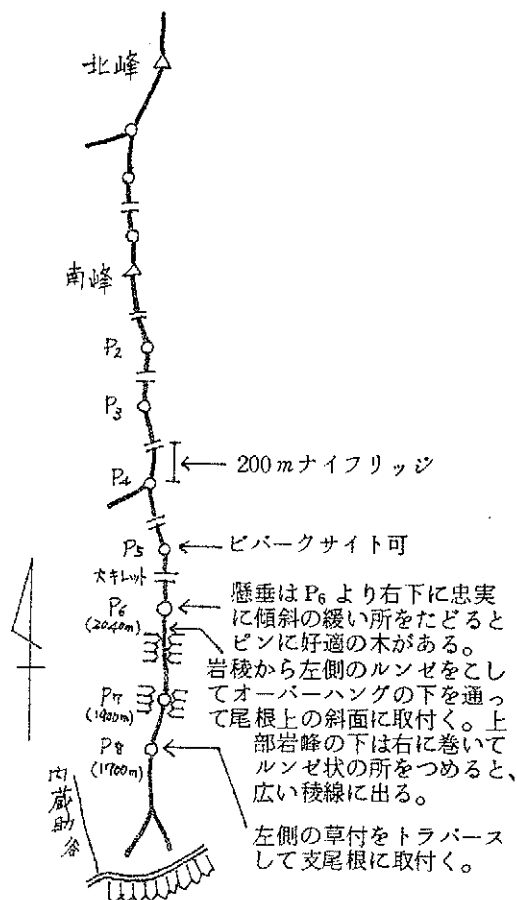


図7. 黒部別山南尾根ルート図

剣岳八ツ峰4稜下部偵察

真砂小屋→4稜下部→真砂小屋

期 間 11月2日～11月3日

参加者 山田(L)、中岡、黒岩

11月2日 ①

剣御前より新雪の剣沢に入り、小さくなった雪溪の上を夏道通しに真砂小屋へ。小屋に荷物

をデポし偵察に出る。春山の偵察に関して4稜を目標とする意見は少数のため、余りやる気はなくピバークの準備はしなかった。

4稜に取付くため、末端部は問題ないと考え、4の沢に入り、最初の分岐(右側のルンゼ入口が滝)より尾根に取付く。下向きのブッシュを下からこぐため、きびしいアルバイトとなったが一応二股から上ってくる尾根と交わる付近まで登る。ここから上はブッシュ混じりとはいえず岩稜があり、その上にちょうどおむすびの頭が2つあるような岩峰があり、そこで切れている事

を確認した。積雪期においてもこの岩稜は露出しているであろうし(高距200m位か)、次のギャップの問題、更にはその上部を考え、今回の春山には適当ではないと考え偵察を打切る。下りは二股への尾根を下り、途中より剣沢側のルンゼに入る。このルンゼは剣沢の出合に30mくらいの滝をかけており、左側のきわめて急なブッシュをつかんで下り真砂小屋へ。

11月3日 ○

昼まで停滞とし、昼前より山田は新人の大日尾根縦走に加わるため剣御前へ登る。中岡、黒岩は停滞する。(記 山田)

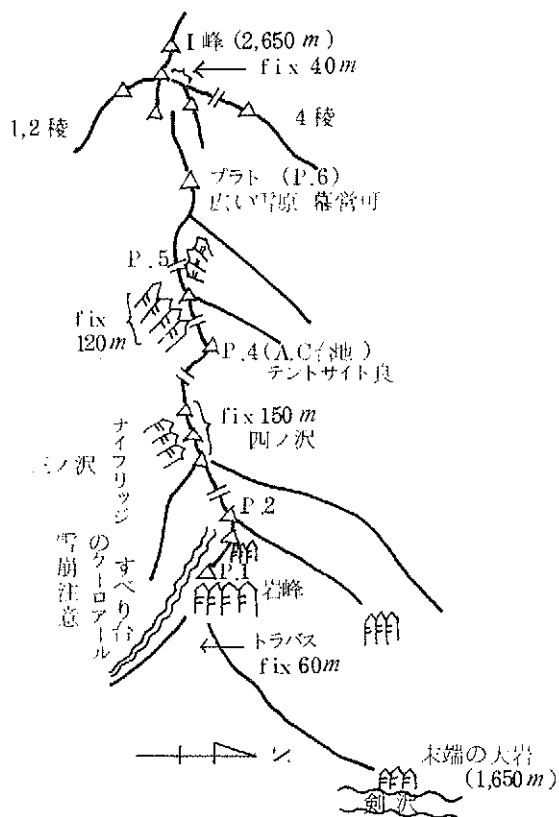


図8. ハツ峰8稜 ルート図
(概念図はP14図1参照)

剣岳ハツ峰偵察(3稜末端より)

期 間 11月4日~11月8日

参加者 石原(L)、中岡、黒岩、渡部(OB)

11月4日 ○

真砂小屋出発(6:05)-3稜末端取付き(6:30)-P1岩峰下(8:10)-P3取付き(10:10)-P3、P4の科尔(12:30)-P5、P6の科尔(14:45)-I峰取付き(16:20)-I峰(17:50)
石原、中岡が個莖を持って、3稜を登攀し、渡部、黒岩はサポートとして長次郎側よりI峰頂上にテントを出すことにして、石原、中岡は先に真砂小屋を出発する。

3稜末端より取付き、ブッシュの中を登ってP1下に出る。このP1の黒い岩壁は直登不可能で左へトラバサ(60m fix必要)するとすべり台のクローワールに出る。降雪時には必ず雪崩そうなガレたルンゼだ。このルンゼをつめてP2、P3の科尔に出る。P3は3つのコブを持つ非常にやせたナイフ・リッジで、緊張を強いられる。P3の三つ目のコブからはリッジも広くなり、科尔から一登りするとP4だ。P4はよいテント地になりそうだ。P5の登りには急峻な鋭い数mのカンテがあり、手掛りのないつるつるの岩で苦勞する。P6付近は広いプラトーで所々に解け残った雪が現われ始める。徐々に高度を上げ、I峰直下で4稜と合す。I峰直下は短いが垂壁のブッシュ登りを強いられる。

I峰直上に着いた時はすでに夕暮が迫り、II峰直上にテントを設営していたサポートの渡部、黒岩と大声で話をし、I峰直上に2人でピバークすることにする。

11月5日 ①のち②のち⊗

I峰BP 出発(7:00) - II峰CS
(8:50~10:50) - III峰(12:
30) - IV峰(13:15) - V峰頂上CS
(17:20)

I、II峰間は、不安定な積雪に悩まされながらスタカットで行くため、意外に時間を費やす。ザイル120m使用。II峰頂上で昨夜からテントを張っている黒岩、渡部と合流する。撤収の後、V峰に向かう。(III峰の下りは20mの懸垂。IV峰の登りにザイル60m使用。同下りに30mの懸垂。V峰登りに1000mザイル使用)。

11月6日 ⊗ 停滞

11月7日 ○

V峰頂上CS 出発(7:00) - V、VIのコ
ル(13:00~13:30) - 熊の岩上C
S(13:50)

V峰からの下りはルート・ファインディングが悪く、手間取る(20m、30mの懸垂)。V、VIのコルよりVI峰からVI、VIIのコルまで偵察する中岡、渡部と別れて、石原、黒岩はテント設営に熊の岩に下る。

11月8日 ○

熊の岩CS 出発(7:00) - VI、VIIのコ
ル(9:00) - VII峰(11:00) - 八ツ
峰の頭(13:30) - 池ノ谷乗越(14:
00) - 真砂小屋(14:45~15:50)
- 黒四ダム(8:30)

テントを撤収して、真砂小屋へ向かう中岡、渡部を残して石原、黒岩はVI、VIIのコルへ向かう。VII峰から上部は雪の着いた岩稜をスタカットで快適に登る。(VII峰下り10m懸垂、VIII峰下り5m懸垂)池ノ谷乗越より長次郎谷を一気に駆け下り、真砂小屋の中岡、渡部と合流し、ハジゴ谷乗越より黒四ダムへ下山する。

(記 石原)

丸山東壁中央壁ダイレクトルート登攀

期 間 11月7日~11月8日

参加者 甲田、岡田

11月7日 ○

取付き(10:00) - 中央バンド(17:
30) 洞穴ピバーク

11月8日 ○

登攀開始(8:30) - 終了点(16:30)

<雑感>

岩登り好きの二人が、丸山東壁を対象にしたのは、ごく自然な選択だった。1年生の夏山で見た開拓中の中央壁の強烈な印象に加え、'65、'66、'68年と3回にわたる剣沢二股での夏山合宿の経験が、黒部別山、丸山周辺を身近なものに感じさせていた。

4年生の夏山合宿を終えて、中央壁ダイレクトルートを目標に定めた2人は、新岩、小太郎岩でオーバーハング登攀のトレーニングを重ね、登攀用具の準備にも慎重を期した。

快晴の中、ふるえるような気持ちで取付いた大スラブの高度感。月明りの下、中央バンドでのピバーク。5mの大ハングの乗越。初めての本格的な人工登攀の相手、丸山東壁が2人に与えた印象は圧倒的だった。ルートは困難であるにもかかわらず、すっきりとした快適な登攀を楽しませてくれた。そして、登攀が快適であったため、一層、初登攀チームの技術の優秀さと、ルート開拓にかける意欲の強烈さが、強く心に残った。(記 岡田)

御岳アイゼン合宿

期 間 11月22日~11月25日

参加者 田村(L)、石原、中岡、大西、中川、
藪本、岩崎、竹田、栗原、田中、
大野(OB)

11月22日 ○

濁河温泉出発(11:00) - 五ノ池(15

: 30)

11月23日 ○

雪訓(6:30~7:30)ー二ノ池移動(8:30)ー雪訓(9:00~15:30)

11月24日 ①後◎

キスリング歩行(7:05)ー一ノ池(11:15)ー雪訓(13:00~14:10)

11月25日 ①

出発(7:10)ー王滝(7:40)ー田の原(12:05)ー八海山荘(13:20)
(記 中川)

冬 山 合 宿

新人白馬天狗原合宿

親ノ原一天狗原

期 間 12月26日~1月5日

参加者 田村(L)、中岡、松林、岩崎、大宅、
藪本、竹田
三沢(OB)、渡部(OB)、
黒田(OB)

12月26日 ◎のち⊗のち●

猪股氏宅(9:30)ーデポ出発(10:30)ー御殿場の小屋前(14:50)ーシラビソ館(16:30)

御殿場までデポ、トレースがあるので、快調に進む。

12月27日 ◎

出発(7:45)ー御殿場(10:40)ー榎ノ木寮(12:30)ーデポ回収(11:15~16:15)

御殿場でスキーだけを回収して、小屋からスキーで荷を回収することにする。現役のスキー技術は大したことないが、それでも愉快地デポを回

収する。

12月28日 ⊗

出発(7:05)ー1,960mCS(8:50)ーデポ回収(9:10~12:30)ー天狗原へデポ(15:00~15:30) 1,960m地点にデポし、榎ノ木寮へデポ回収に下る。後、天狗原端へデポをしに行く。

12月29日 ◎

出発(7:25)ーデポ地(9:00)ー天狗原CS(10:35)

ワッパを使用するがラッセルらしいものはない。デポ地からシングルに変える。昼からスキー練習。

12月30日 ①⊗

小蓮華アタック出発(7:00)ー2,580mの小ピーク(9:40)ー帰幕(10:40)

小蓮華アタックに向かうが、地吹雪の為数人が小さな顔面凍傷にかかる。結局2,580mの小ピークより引き返す。乗鞍の天狗原側は穏かな好天。

12月31日

スキー練習(6:50~11:20 13:30~15:00)

山の神へスキーで出かける。帰途、新人にルート決定権を与える。昼からも例によりスキー。

1月1日

スキー(8:00~15:00)

1日中スキーをつけっぱなしで、雪だらけになる。三沢OBのコーチで、斜滑登山回り、ボーゲン、ステップターン等をやる。

1月2日 ⊗ 停滞

昼からテント1張りを撤収し、5人用の雪洞を掘る。

1月3日 ⊗

ツェー出発(8:25)ー風吹大池手前の1,944m三角点(11:35)ー帰幕(14:55)

パッとしない天気だが風吹大池へツェーに出かける。時間切れで大池へは達せず。帰途、1年生がシールをよくはずしてイヤになる。

1月4日 ⊗のち◎のち⊗

撤収出発(9:05)→成城大小屋(12:00)→樽ノ木寮(12:30)

1年生はまだワッパに慣れていないせいか、能率が上がらない。チョウセンボッカをする。後、樽ノ森でスキーの仕上げをする。

1月5日 ⊗

新人は下山させ、上級生は下に行つて突坂パーティーの動向を聞くことにする。トランシーバーで突坂パーティーと連絡するも応答なし。

突坂尾根より白馬岳初縦走

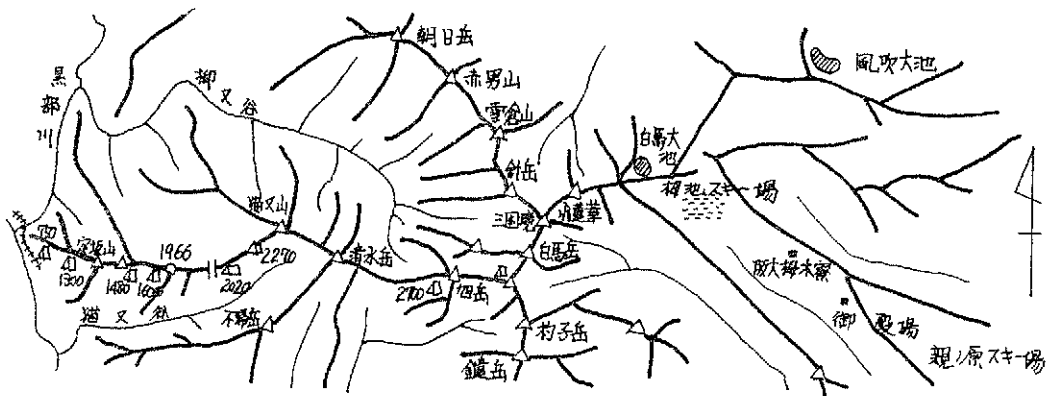


図9. 突坂尾根～白馬岳概念図

黒部川→突坂山→猫又山→白馬岳→天狗原→阪大樽ノ木寮

期間 12月21日～1月9日

参加者 田中(L)、石原、黒岩、中川、稲垣

12月21日 ●一時◎

宇奈月発(10:15)→笹平(12:05)
一同発(13:00)→突坂山750mCS
(15:30)

入山早々雨にたたられた。雨具を着て宇奈月を出発し、テクテク軌道を歩くこと2時間たらず、ついに雪を踏むこともなく笹平小屋に着く。昼食をとりながら天候回復を待つ。1時前ようやく雲が切れ始め、雨も小降りとなったので出発する。今年は昨年とちがって全く雪がないので送電線用に切り開かれた小径をルートにとって尾根筋にとりつく。尾根筋の切り開きに残ったわずかな雪を踏みしめながら今年の雪の少ないのに今更乍らに驚かされる。この頃より再び雨が降り出しびしょぬれになって昨年とほぼ同じ地点にテントを設営する。積雪30cm位。昨年の猛ラッセルを思うと、何か拍子抜けの感がする。

12月22日 ●のち◎

出発(8:30)→突坂山1300m地点CS(15:05)

昨日の夜汽車疲れで寝過す。やはり天気は小雨模様。がっかりしながらも雨の中を歩き始める。しだいにみぞれに変わり、3ピッチ目位から雨が雪となってやっと冬山へ来たという実感が湧く。しかし積雪量が少ないのでひどいブッシュこぎとなる。アルパイト、進度ともに昨

年の猛ラッセルと大差がない。ボソボソもぐる不安定な雪に苦しめられる。そしてただ視界のきかない斜面を上へ上へと、高い所へ高い所へと、ルートを取りながらひたすらに登って又しても昨年とほぼ同じ地点にテントを張る。昨日来の雨で、装備類はびしょぬれで、勿論ずぶぬれになったシュラフにもぐりこんで寝る。

12月23日 ⊗時々◎

出発(7:50)ー突坂山(10:00)ー突坂山コル通過直後1,480m地点CS(17:30)

今日からやっと股までのラッセルが始まる。突坂山頂近くに来て、入山以来初めての太陽が時々雲間から射し込み始める。しかし1時間位でまたしても小雪がちらつき出す。山頂からは積雪も多くなり、ブッシュも多く、胸までもぐってしまうことも度々。止むなく1人が空身で先行し、ラッセルをしてトレースをつくりながら進む。二重山稜気味のなだらかなピークの終了するあたりがナイフエッジのコルとなっている。やはりブッシュのナイフエッジは危険。フィックスは130mを要した。昨年はフィックスをしなかったところまでフィックスをするので時間を費してしまい、日のとっぷりと暮れたナイフエッジの上にテントを張る。

12月24日 ⊗時々◎

フィックス 隊出発(7:50)ー出発(9:00)ー1,600m地点CS(16:15)

この先まだ続くナイフエッジは、昨日見た様子では昨年のごとくフィックスなしで通過するのは危険なので、石原、稲垣が空身でフィックスに向かう。20mずつのフィックスを2ヶ所に張り終えて全員で出発する。更に2ヶ所30mずつのフィックスを張り直して突坂のキレットを通過する。ナイフエッジが終われば猛ラッセルの雪斜面が始まり、遅々として進まない。最後に2ヶ所30mずつのフィックスを張り通過する。通過後すぐテントを設営。昨夜のテント地が小雪の降る中に見え隠れして、手に取るように分かる。全く嫌な気分である。

12月25日 ◎

出発(7:50)ー猫又山コル最低地点(15

:50)ー猫又山2,020m地点CS(16:35)

テント地を出るとすぐ腰以上のラッセルで、激しいアルバイトを強いられるが、1,800m地点で初めて猫又山、清水岳を遠望し、活気づく。猫又山コルの下り口まで幾つかのピークを巻いたり直登したりして、思ったより行程がはかどる。猫又山のコルは複雑なコルである。コルをS字型に尾根が走っている。昨年アワにやられたのはあそこだったかなと思いつら、最低地点まで一気にかけ降りる。それから200mの登りは、はるか剣立山を遠望しながらも、苦しい登りだった。新雪がつもれば十分雪崩の出そうな所なので、逃げ道を断たれた感がする。前進あるのみ。

12月26日 ◎のち⊗

出発(7:50)ー猫又山ジャンクション2,210m地点CS(11:25)

入山以来5日間連日行動なので、そうそう、疲れが感じられるが、稜線での予備日を1日でも多くするため不気味に染まる朝焼けの中で撤収する。昨日遠く望んだ清水岳が目前にせまる。しかしながら相変わらずのナイフエッジとラッセルに苦しめられる。11時すぎ、降り始めた雪をついて広い雪原の様になったジャンクションに着く。辺りは全くのガスと雪の純白の世界。やむなくテントを設営し入山以来の疲れをいやすことにする。ようやくかわきだしたシュラフは快適だ。

12月27日 ①のち⊗

出発(7:50)ー猫又山ピーク(8:05)ー清水岳ピーク(13:00)ー旭岳、清水谷側2,700m地点CS(14:55)

出発してすぐに、猫又山の丸いピークを踏む。しばらくは柳又谷側にスッパリと切れ落ちた樹林帯を、雪庇に気をつけながら、ボソボソもぐったりしながら進む。清水岳のコルで、ワッパをアイゼンにつけ変える。やっとブッシュとラッセルから解放され、アイゼンで飛ばす。心配された清水平辺りのルートも好天に恵まれ、明瞭に分かる。小旭岳は清水谷側を巻く。旭岳を登るあたりから、ガスとなり、旭岳を清水谷側

に巻き始めた頃より、風も強まり進退きわまる。ツェルトを出し天気待ちするも回復の見込みがないので、16時20分、雪崩の心配の全くない斜面にテントを張る。

12月28日 ◎のち⊗ 停滞

朝、起きてみると後立山連峰の稜線が手にとるように間近く、朝焼けの空に浮き出ている。大急ぎで撤収したが、しだいに風雪強くなり行動不可能となる。折角たたんだテントをもう一度張り直す。

12月29日 終日風強く吹雪 停滞

12月30日 ⊗のち○のち⊗

出発(12:15)ー白馬山荘(13:15)

朝、風雪強くとでも出発できない。10時頃から時折、太陽がテントの中に射し込むようになる。喜び勇んで撤収開始。出発。しかし、稜線はものすごい風だ。呼吸も非常に苦しい。二人程、顔面凍傷にやられる。わずか1時間の行動だが、疲労感強し。

12月31日 終日風雪強し 停滞

1月1日～8日 連日風雪強し 停滞

3日、4日は、わずかに風が弱まるが、風雪はかなり強かった。視界は非常に悪い。8日、14:20頃、電々九州とトランシーバー交信。17:30、電々九州より馬場島へ連絡できたとの返信をうける。

1月9日 ①

出発(10:40)ー白馬岳ピーク(10:55)ー三国境(12:00)ー雷鳥坂最上地点(13:15)ー白馬大池小屋(13:40)ー天狗原社(15:05)ー第2次救援隊と出会う(15:20)ー成城大小屋(16:05)ー阪大小屋(16:40)

昨日、一時青空をのぞかすような天気、今日は下山できる期待を胸に起床。天気図によれば、昨日より徐々に冬型がゆるみ、移動高が移動しつつある。ただし、朝は相も変わらず風が吹いている。ゆっくりと時間待ち気味に撤収。出発。白馬岳ピークには一気に登りつく。途中きつねが一匹行く手を横切り、白馬沢の方へガスの中に消える。キスリングをかついだままで、全員肩を組んで円陣になり掛け声をかけ合う。

三国境への下りは一ヶ所危険な所があったが慎重にステップを切って通過する。三国境では関学のテント地跡で、ツェルトを出して一服する。本日初めての休憩で、10分程休む。風はやはり強いが歩ける。ただし、時折ガスで視界がまるで無くなる。こんな時はしばらく立ち止まって、ガスの切れ間を待ち、雪庇の位置を確認してから歩き始める。心配した小蓮華の稜線のナイフエッジもさほどの事もなく、小ピークを登り下りしながら、小蓮華も通過する。ただ雪の多いのには驚いたが、ほとんどがアイゼンのよく効く雪面なので、ピッチもはかどる。大池小屋へは夏道通しに下りアイゼンをワッパにはきかえる。このあたりよりガスが晴れることはなくなった。乗鞍の下り口に少し手間どるが、赤旗をみつけ難く天狗原の祠につく。天狗原の下段で第2次救援隊と出会う。(記 石原)

突坂尾根パーティー救援対策本部報告

1月6日

榎池パーティーは新人合宿を終え、6日夕新人4名を帰阪させた後、田村CL、他5名、及び吉川OB、計7名が猪股氏宅に残留した。6日夜、連絡先の広瀬(OB)宅と連絡の結果、最終下山日の6日中にも突坂パーティーが下山せず、また予定していた榎池パーティーとの交信もないので、救援に向かう必要があるとの結論に達した。同夜、直ちに広瀬OB宅へ、田村(OB)、大工原(OB)、甲田、大西が集り協議し、恩地部長に報告後、救援計画の概要を作成した。

<計画の概要>

- 1) 榎池、阪大榎ノ木寮をベースハウスとし、極地法により最大2つのテントを出し、白馬頂上に2名の捜索隊を出し、付近の捜索、及びトランシーバーによる交信を試みる。
- 2) 期間は最大2週間
- 3) 人員15名、他に5名程度の連絡員を必要とする。上記計画を実行に移す為、食糧調達を直ちに始めるよう榎池パーティーに電話連

絡し、また必要な装備のリストアップを依頼した。

同夜、広瀬（OB）宅に田村（OB）、甲田大西が宿泊し、計画を練った。

1月7日

（午前10時）

恩地部長宅に対策本部を設置すると共に、長野県警察本部に対し恩地部長より、「大阪大学山岳部員、田中リーダー他4名が清水岳から白馬岳付近で大雪の為、閉じ込められているものと思われる。食糧、燃料共まだ充分（あと一週間程）あると思われるが、未曾有の豪雪でもあるし、今後の天候の見通しも悪いので、「(1)今後とも自重した行動をとるようトランシーバーを通じて呼びかけを行なって欲しい。(2)突坂パーティーが持っているトランシーバーの電波を長野県警その他で受信したか否か調査して欲しい。(3)ヘリコプターが飛ぶようなことがあれば白馬岳付近の捜索も行なってもらいたい。(4)阪大山岳会は救援のため樽池より白馬に向かって行動を起こすのでよろしく。」との依頼を行なった。

依頼の結果

- 1) ラジオ放送はNHK長野放送局及び信越放送より7日正午に行なわれた。
- 2) 突坂パーティーからの受信はなし。
- 3) ヘリコプターの件は別記する。

長野県警と同様に依頼を富山県警察本部にも行なった後、直ちに突坂パーティー5名の家族、学生部に上記依頼を行なった旨報告した。

（午前12時）

対策本部に恩地部長の他宮本（OB）、広瀬（OB）、田井（OB）、大工原（OB）、甲田、大西が集まりその後の対策を協議した。

当時の情勢判断

- 1) 12月21日入山以来、12月30日又は31日まで行動可能な天候であった。（天気図及び樽池パーティーの報告により）
- 2) 従って計画から考えて、少くとも猫又山は通過し、現在は清水岳から白馬岳の間で停滞していると考えられる。

上記判断より、捜索は白馬岳頂上付近及び、清水平に重点を置き、又突坂山側（黒部側）に

引返している可能性は極めて低いので、現時点では笹平より突坂山方面には特に人員の派遣を考えない。

その結果、下記の決定を行なった。

- 1) 捜索の方法、隊の規模等は、6日夜、広瀬（OB）、田村（OB）らが作製した計画に従う。
- 2) 上記計画のため、樽池に残留している7名に8名の追加を必要とする。これを7日夜までに現地に出発させる。連絡要員は、1日遅れるのもやむをえない。
- 3) 電話連絡のしやすいOB及び残留現役部員を順次呼出し状況を説明、参加を依頼する。
- 4) 連絡先は下記とする。

大阪—大阪大学附属病院 恩地教授室
東京—トヨタ自販 野田憲一郎
現地—長野県北安曇郡小谷村千国樽池高原
ロッジ 三沢昭三氏宅

5) 隊の構成

木村裕一（OB）～総隊長（8日出発）
保母武彦（OB）～行動隊長（7日出発）
吉川信也（OB）（樽池パーティー）
出雲路敬孝（OB）（7日出発）
糸井文彦（OB）（"）
牧野大輔（OB）（8日出発）
佐々木義弘（OB）（"）
大野義昭（OB）（"）
栗原完治（"）
黒田治朗（7日出発）
渡部 洋（樽池パーティー）
田村 孝（"）
中岡和哉（"）
甲田吉彦（7日出発）
大西邦男（"）
岡田謙治（樽池パーティー）
松村一男（樽池パーティー）
竹村順一（"）
細川明彦（7日出発）
的場幹史（"）
梶本孝治（OB）（9日出発）
三沢日出夫（OB）（"）
宍戸 元（OB）

恩地部長代理
現地渉外係（9日出発）

この他、多くのOBから必要あり次第現地へ向かう体勢を整える旨返事があり、7日より2週間の出勤計画もほぼ完成した。

7日(午後)

学生部次長他、職員2名が対策本部に来室され、次の旨、申し入れがあった。

- 1) 学生部としても出来るだけの援助を行ないたい。
- 2) 大阪大学後援会より3万円の資金援助を行なうことが決定された。

これに対し学生部に

- 1) 富山県及び長野県警本部長に、学長名の公文書で正式の依頼状を発送すること。
- 2) 現地に出動したOBが対策本部に常駐しているOBに対し、学生部長からの依頼状を複製することを依頼した。

上記公文書は8日中に発送された。

この間、在阪OB多数が対策本部に来室、又報道関係者も各社来室された。いずれにも状況を説明すると共に、他のパーティーとの同質のいわゆる遭難ではなく、あくまで下山が大雪のため遅れているのであらうと思われるが、一応大学及び山岳会として独自の判断から予防的な意味で、行動を起こしているものである旨強調した。

7日(夜)

21時51分ちくま3号で出雲路(OB)、糸井(OB)他現役4名が現地に向け出発。又同夜東京方面より保母(OB)と現役1名が現地に向かった。

22時関電中央給電指令所に黒部川方面へ突坂パーティーが下山した様子があるか否かを問合せた。同夜関電側では猫又発電所及び二見取入口に連絡したが、その模様はないとの解答があった。

(23時)

篠田会長が東京より帰阪され、宮本(OB)より電話で状況説明が行なわれた。

(同夜)

対策本部に連絡員として大工原(OB)が宿泊した。

1月8日

(8時30分)

恩地部長よりヘリコプターの依頼を各方面に行なった。

—ヘリコプター要請について—

ヘリコプターによる突坂パーティーの捜索及び交信、食糧、燃料の投下の可能性については1月7日朝以来、恩地部長より長野、富山県警察、各新聞社、NHK、自衛隊、各民間航空会社等に問合せ、天候が許せば、お願いしたい旨依頼したが、北アに飛行可能なヘリコプターはいずれも剣岳又は穂高岳方面に出動中で、すぐには後立山方面に出られないとの返事であった1月8日朝、恩地部長より長野県警へ再度依頼した結果、後立山方面で現在孤立している五パーティー(東京ヘルト山岳会、大阪薬大山岳部、奈良山岳会、国学院大山岳部、神戸市職員親和会山岳部)が共同でチャーターした日本国内航空ヘリコプターが8日正午頃白馬村役場に到着するので、それに加わってはどうかとの問合せがあった。直ちによくお願いしたい旨回答し、梅池にいる救援隊にもその旨報じた。

現地では的場が食糧、燃料を1斗罐に梱包しいつでも積める用意をして白馬村役場に待機したが結局天候が許さず、1月9日夕まで飛行できなかった。

突坂パーティーが持参したトランシーバー(スタンダード製)につき、それに付属しているユアサ充電式乾電池の性能をユアサ乾電池に問い合わせた。その結果通常の交信では総計70分の交信で使用不能になる旨回答があった。従って突坂パーティーの電池が切れている可能性が大で交信はあまり期待できないとの結論に達した。

(14時)

篠田会長、対策本部に来室され、状況説明した。その後篠田会長より斉木(OB)(防衛庁空幕)にヘリコプターの必要があれば、その時はよろしくとのお願いをした。

牧野(OB)他現役は8日夜出発のため装備その他の調達を行なう。

また大川(OB)は恩地部長の指示により黒

部川笹平方面よりの調査隊（5名程度）の計画を作製したが実行に移すまでにはいたらなかった。

（18時20分）

サンケイ新聞社より『阪大パーティーは白馬頂上に全員無事で、次の交信は明朝8時同じルートで行なう』旨の知らせがあった。この知らせは、阪大（白馬頂上）→千葉工大（奥大日）→馬場島のルートでトランシーバーによる交信が、馬場島より富山県警へ電話のルートで入ったとのことであった。直ちに富山県警及び長野県警で上記の情報を確認した後、突坂パーティーの5家族、学生部、学生部長、学長及びNHK大阪放送局に通知した。

また梅池救援隊にも上記情報を通知後、明朝8時に行なわれる予定の交信を傍受するよう、またできれば直接交信するよう依頼した。

一方、富山県警及び長野県警には明朝の交信時、できれば「自重せよ」「家族には連絡した」の2つを通知して欲しい旨依頼した。

21時51分、ちくま3号では、木村（OB）他4名が予定通り出発した。

この情報の結果

- 1) 白馬山頂にいる突坂パーティー5名の食糧燃料状態が不明なので、梅池より白馬に向かって出来るだけテントをのぼしてルート工作を行ない、下山を容易にする。これをこれまでの方針通りの救援で行なう。ヘリコプターもこれまで通り待機させる。
- 2) 黒部側よりの調査隊派遣は中止する。
- 3) 残務整理及び事務手続きのため、宍戸（OB）及び学生部の職員（学生部の依頼の結果保田氏が出張して下さることになった。）を現地に送ることを決定。

（8日夜）

対策本部に広瀬（OB）、大川（OB）が宿泊する。

1月9日

（9時30分）

長野県警、富山県警へ電話しその後のトランシーバーによる交信状況を問合せたが、その後交信なしとの返事であった。

（11時20分）

富山県警より1月8日夕方と同じルートを経て、「阪大山岳部突坂パーティーは白馬山頂に全員元気であり、天気回復を待っている。このことを大阪に連絡してほしい。」旨の交信があったことが電話で入った。直ちに家族、梅池の救援隊本部、学生部、各報道関係に上記情報を連絡した。

また学生部より長野、富山県警本部に対し、学長名文書で正式の礼状を出したとの報告があった。

（17時25分）

梅池救援隊本部より

- 1) 突坂パーティー5名は10時40分に白馬山荘を出発、17時梅ノ木寮に全員独力で無事下山した。
- 2) 救援隊の先頭パーティー（リーダー、保母（OB））とは途中で行きちがい、現在先頭パーティーは乗鞍ないし小蓮華付近にいる模様との報告があった。

上記報告は家族、長野、富山県警本部、学長、学生部長、NHK長野支局、他各報道関係者、自衛隊等に報告した。

1月10日、11日

住吉（OB）、広瀬（OB）、田井（OB）、大川（OB）が交代で対策本部につめて残務整理を行なった。またOBに対する募金の趣意書及び簡単な経過報告を作製、OB全員に発送した。

1月14日

広瀬（OB）並びに大工原（OB）、吉川（OB）、糸井（OB）、田中、田村（孝）が集まり、残務整理を行なった。

1月15日

徳永（OB）宅に、宮本（OB）、広瀬（OB）、大工原（OB）、糸井（OB）、田村、田中が集り、最終的な残務整理を行ない、また主として募金の方法について論議した。

（記 大工原）

1969年度（昭和44年度）活動記録

'69年度 現 役 部 員

C . L	石 原 敏 雄	理 (4)
S . L	中 岡 和 哉	医 (4)
装 備	稻 垣 佳 夫	工 (3)
記 録	黒 岩 芳 夫	経 (3)
	大 西 邦 男	工 (3)
食 糧	大 宅 幸 夫	歯 (2)
	竹 田 清	医 (2)
	岩 崎 忠 博	工 (2)
	中 野 五 海	工 (1)
	藪 田 勝 久	理 (1)
	高 橋 正 身	理 (1)

5 月 山 行

田村下山
5月4日
ダムへ下山

立山東面定着 (概念図 P24図4 参照)

期 間 4月27日～5月4日
参加者 中岡(L)、大西、稲垣、黒岩、
竹田、岩崎、大宅、田村(OB)
豊坂(OB)、石浜(OB)、
大野(OB)、出雲路(OB)

立山中央山稜

期 間 5月2日
参加者 大西、稲垣、出雲路(OB)
出発(5:35)ー取付き(6:00)ー
上部コル(10:00)ー終了(12:00)

4月27日 ●
富山～天狗平～一ノ越CS(16:00)

4月28日 ①
出発(7:00)ー雄山(8:15)ー
2,600m BC(11:05)

4月29日 ①
中央山稜隊(中岡、黒岩)
1尾根雄山尾根(大西、竹田、大宅、岩崎)

4月30日 ●
停滞

5月1日 ①
強風、雪崩の危険で1時間で行動中止(石浜
大野、出雲路、稲垣、豊坂、入山)

5月2日 ○
中央山稜(大西、稲垣、出雲路)出発(5:
35)ー取付き(6:00)ー上部コル
(10:10)ー終了(12:00)
真砂尾根(中岡、岩崎、田村)
剣御前デボ回収(黒岩、竹田、豊坂、石浜)

5月3日 ○
第2、3尾根中間稜(中岡、大西)出発(5:
45)ー取付き(7:00)ー終了(9:
00)
第2尾根(黒岩、出雲路)
タンボ平(稲垣、岩崎、石浜)出発(5:
45)ー東一ノ越(8:00)ー雄山(10:
15)BC(12:00)
真砂尾根(大宅、豊坂、大野)

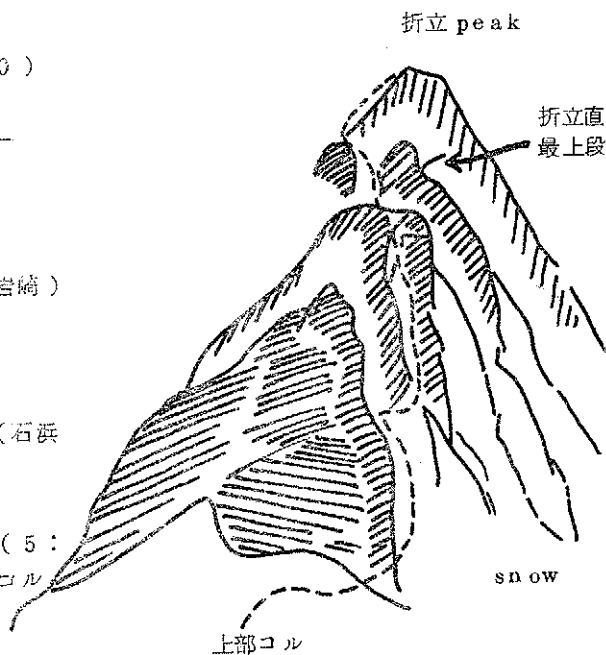


図10. 立山中央山稜上部ルート図

ジャンクションピーク手前まで快調に雪渓を
行くが、時間が早いので岩登りをする。アイゼ
ンはつけたまま。草付きと岩と雪で不快。上部コ
ルへのリッジは15m程であったが、高度感が
あり面白い。折立直下のコルからスタカット
3ピッチで最上段のコルに出る。2、3ピッチ
目は岩のトラバースとチムニー状の穴登り。そ
こからコンティニユアスで折立までトラバース

気味に行く。そこで真砂パーティーと会う。帰路は雄山直下の沢をシリセード。テント地まで25分だった。ハーケンが3枚消費した。

第2・3尾根中間稜

期 間 5月3日
参加者 中岡、大西

出発(5:45)ー取付き(7:00)ー終了(9:00)

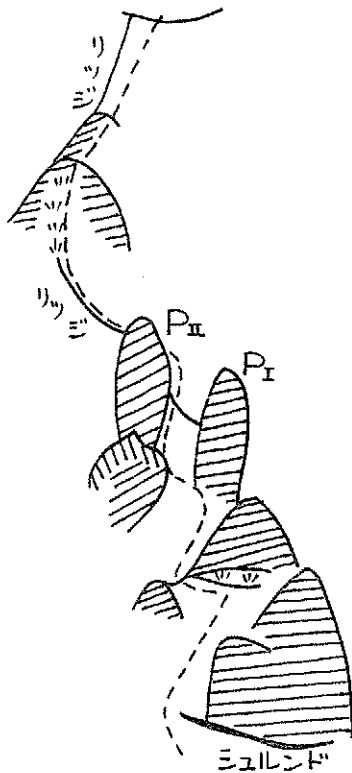


図11. 第2, 3尾根中間稜ルート図

第2尾根パーティーと共に出発。ハーケンが5枚しかないのでやばい岩登りはさける。中間稜はニードルを何本も持つ針山である。下部取付きはシュルンドが広く、ルンゼが凍っていたた

め巻いて二段目に出る。トラバースしてP₁、P₂間のコルに出る。カッチングしながらP₂の上に立つ。ここまでで2ピッチだった。1ピッチコンテの後、再びリッジへ。2ピッチで肩へ。そこからラッセルで稜線に立つ。ハーケン1枚消費。

新人歓迎大峰山行

弥山川ー八剣山ー仏生岳ー前鬼

期 間 5月10日～5月13日
参加者 黒岩(L)、竹田、中野、野坂、藤田、高橋、大塚

5月10日 ①
近鉄阿倍野橋(7:00)ー川合(10:45～11:30)ー熊の渡し(12:30)ーガマ滝前CS(14:10)

5月11日 ②
起床(4:30)ー出発(7:30)ーの滝(8:20)ー河原小屋(13:00)ー狼平CS(15:05)

5月12日 ③
起床(4:40)ー出発(6:55)ー弥山小屋(8:10)ー弥山(8:15)ー八剣山(8:50～9:00)ー仏生岳(11:15)ー孔雀岳(12:20)ー釈迦岳(14:05)ー深仙の宿(14:40～15:45)ー大日岳(16:20)ー前鬼(18:00)

5月13日 ④のち⑤
起床(14:00)ー出発(5:30)ー前鬼口(7:40)

2日目は雨中での行動となり、またハシゴの登りであったため、新人にとっては、あまり楽しいものではなかったと思うが、よく頑張ったと思う。それだけに狼平の小屋での飯はうまかった。

稜線は、さして困難のない縦走路であり、ピッチもあがり、距離的には良く歩けたし、この経験を夏山にいかして欲しい。(記 黒岩)

夏山定着合宿

槍ヶ岳 BC千丈沢

期 間 7月21日～8月1日

参加者 石原(L)、中岡、稲垣、黒岩、
大西、大宅、岩崎、竹田、中野、
藪田、高橋、牧野(OB)

夏山定着合宿の登攀対象として、千丈沢にB
Cを設け、槍ヶ岳北鎌尾根の千丈沢側稜を選ん
だ。今冬に計画している極地法による硫黄尾根
から槍ヶ岳アタックの偵察を兼ね、この山域の
概念を各部に把握させることも目的の一部で
あった。

剣や穂高の岩壁のスケールと雪渓の豊富さと
比較して、千丈沢側稜は見劣りがするが、他パ
ーティーの入山も少なく、ほとんどの部員が初
めて登るルートであり、既成のルートにとらわ
れることのない自由なルートファインディングに
よる登攀を各自楽しんだようだ。

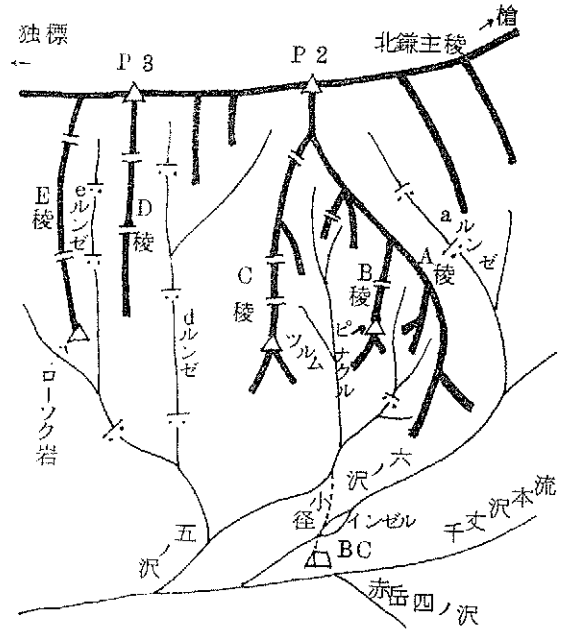


図13. 北鎌尾根千丈沢側側稜概念図

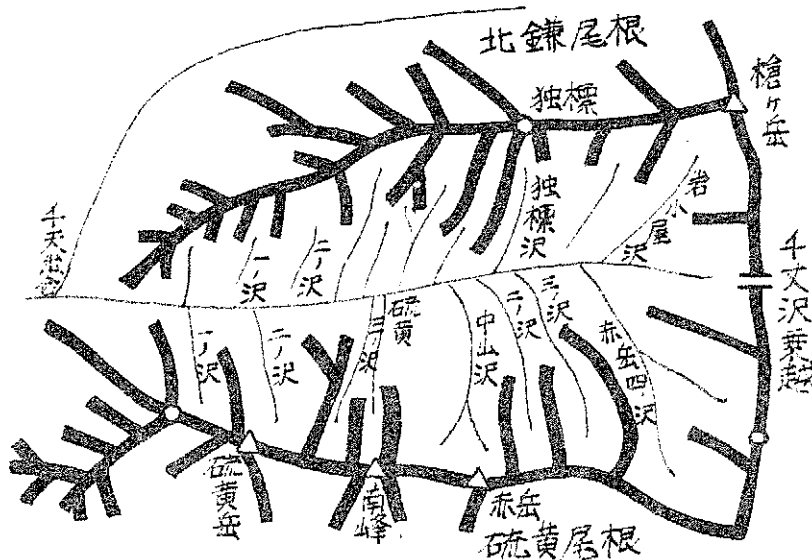


図12. 千丈沢概念図

今夏の合宿は、
例年にない長期の
悪天に見舞われた
ため、定着合宿と、
特に縦走は大幅な
計画の変更を強い
られたが、雨天の
合い間を縫い、さ
らには毎日続く雨
の中でさえ積極的
に行動したことは
評価されるべきで
あろう。9月の穂
高の岩登り山行は、
数年来我部にとっ
て足遠くなってい

た穂高山域を再認識する好機になったであろう。

〈行動概要〉

7月21日 新穂出発(14:00)―柳谷出合CS(19:30)

7月22日 出発(6:00)―白出沢出合(

6:45)―滝谷出合(9:30)―槍平(11:00)

7月23日 出発(5:05)―奥丸山(7:10)―千丈乗越(11:00~11:20)―六ノ沢出合BC(13:40)

7月24日 出発(6:35)―雪上訓練(7:30~11:15)―西鎌往復―BC(14:00)

〈個人行動表〉

	24	25	26	27	28	29	30	31	
石原	雪 上 訓 練 (入山)	A 稜	D 稜	雪 上 (静養) 訓 練 (静養)	硫黄ビバーク		B 稜ピナクル	停滞	
中岡		B 稜	硫黄上半		槍往復	夜下山			
稲垣		C 稜	小槍		B 稜	停滞		A 稜ピラミッド	停滞
黒岩		穂高ビバーク			B 稜	停滞		C 稜ツルム	停滞
大西		B 稜	D 稜		槍往復	硫黄上半		C 稜ツルム	中東沢出合まで
大宅		A 稜	硫黄上半		槍往復	T K		B 稜ピナクル	中東沢出合
竹田		C 稜	T K		硫黄ビバーク			T K	停滞
岩崎		T K	小槍		T K	硫黄上半		A 稜ピラミッド	停滞
中野		穂高ビバーク			槍往復	停滞		T K	停滞
高橋		静養	T K		槍往復	T K		C 稜ツルム	T K
藪田		T K	D 稜		T K	停滞		A 稜ピラミッド	T K

〈登攀記録〉

A 稜

7月25日 ○のち◎

参加者 石原、大宅

BC発(5:15)―取付き(7:30)―登攀終了(10:30)―大槍(12:00)―BC(13:15)

六ノ沢をかなり詰めてA稜をまわりこむ感じでaルンゼに入る。aルンゼとの合流点から見ると六ノ沢が槍につき上げているのがわかる。aルンゼには右岸に踏み跡がみられる。やがてピラミッド状の岩峰が見える。這松をわけて取

付きへ出てまん中のかなり深いクラックを登る。左の壁は小さなハングがある。1ピッチで終了しコンテで丸く広い稜線を1時間程登り、這松をわけてバンドを左へと行くとカンテの取付きへ出る。取付きから2ピッチで終了点に着く。カンテは2ピッチ目で45度位の完全なカンテになり馬乗りになって攀じ登る。4m位のが二つ続いている。ポカポカ暖かく写真を撮ったり岩だけを取ったりして登る。バテバテで大槍に登り、座りグリセードでBCへ。(記 大宅)

A 稜

7月30日 ◎のち●

参加者 稲垣、岩崎、藪田

タイム 出発(7:00)ーピラミッド取付き
(8:40)ー下り始め(11:00)ー
帰幕(12:30)

強い風の中を、ピラミッドに取付く。フリク
ションのよく効く岩を右へトラバースし、テム
ニーに入る1ピッチ40m一杯で終わる。強
風とガスの為ピラミッド上の凹地で天気待ちし
たが、よくなる気配なく、A稜上部を諦らめ
た。このまま帰るのはしゃくなので、ピラミ
ッドをもう一本登った。今度はフェース中央部
を登った。

下りはジャリ制動にもってこいのルンゼを、快
適にとぼした。帰幕後雨となった。

(記 藪田)

B 稜

7月28日 ①のち③一時④

参加者 稲垣、黒岩

五ノ沢の道を通ってツルム右側に出てbルン
ゼの右側の支稜に取付き、中岡、大西パーティ
ーの残した赤旗までトラバースし、そこでアンザ
イレンする。

1P目 ブッシュを避けながら直上。40m
一杯で狭い石のころがっているテラスでビレー。
最後の5m程が脆くていやらしい。

2P目 5m程でピナクルのリッジに出る。
大まかだが脆い。リッジに出る所に残置ハーケ
ンがあり、さらに25m登ると2本残置ハーケ
ンがあった。途中、あまり効いていないが残置
ハーケン1本打つ。ザイル一杯伸ばし、ハーケ
ンを打って確保する。

3P目 リッジよりbルンゼ側のフェースに
入り、右上するクラックを登ってピナクルの上
に出る。快適なクラック登りだ。

4P目 コンテでA稜との間のルンゼのチョ
ックストーンの下まで行く。

5P目 濡れたかぶり気味のチョックストー
ンを残置ハーケンを吊り上げ気味に抜ける。ガ
ラ場のテラスからさらに一段上のピラミダ
ルな岩の基部でビレー。

6P目 このピラミダルな岩を40m一杯で
登る。途中、大西の赤の毛手袋を発見する。大
まかだが非常に脆い。

7P目 ビレー点より直上してハング下のバ
ンドを右にトラバースして3m程登ると残置ハ
ーケンが有る。ザイルを通して上のかぶり気味
の岩を突破しようとするが、ふんぎりつかず左
側に巻いたが、細かくてホールドもはげてしま
いそうで緊張する。更に10m程登って終了する。

C稜ツルム阪大ルート

7月25日 〇後③

参加者 稲垣、竹田

タイム BC発(5:05)ーツルム取付き
(7:00)ーツルム終了(9:30)ー登
攀終了(12:00)ー大槍(13:45)
ー千丈乗越(14:45)ーBC(15:
30)

ツルム阪大ルートに取付く。バンドからバン
ドへと乗り移り、3ピッチでブッシュ帯に出る。
それより右稜線2ピッチで頂上奇岩下へ着く。
どのホールドも浮いた感じでいやらしい。頂上
奇岩は右側フェースを登る。比較的サウンドで
快適。C稜をコンテで少々登った後、Cルンゼ
左俣を渡りC稜支稜に取付く。取付き点は
オダマキの群生である。岩をだましつづ3ピ
ッチで登攀終了。リッジ通しである。終了点
はcルンゼのゴル。dルンゼをトラバースして北
鎌主稜へ出る。ほとんど休まず大槍經由でBC
へ。アンサウンドロックの連続で神経の休まる
時がなかった。

C稜ツルム側壁

7月30日 ①

参加者 黒岩、大西、高橋

タイム BC発(7:00)ー取付き(8:
30)ー登攀終了(12:00)ーBC(13

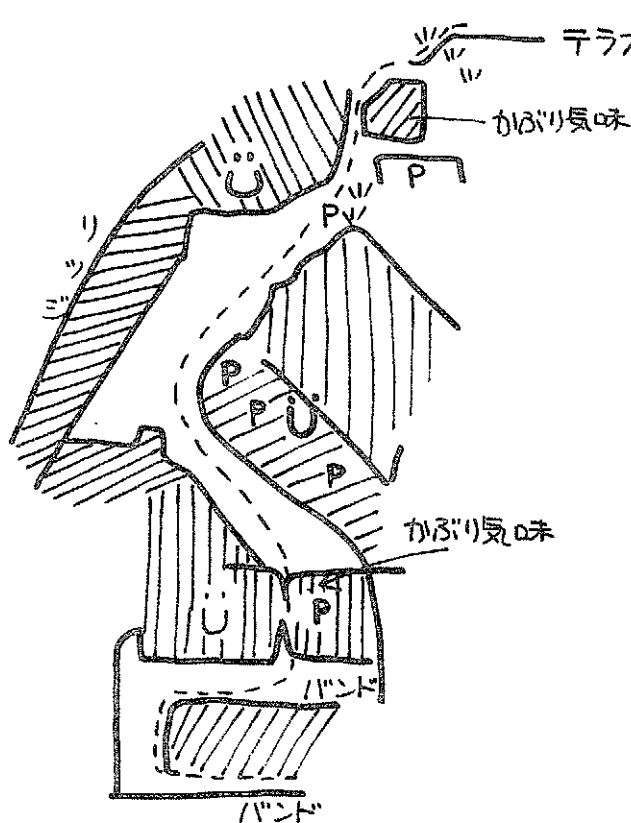


図 14. C 稜ツルム側壁ルート図

: 30)

阪大ルートは濡れているので、その下のハーケンルートを行く。

1 P目 第1ハーケンまでは、かぶり気味のトラバース。その乗越が浮石とハング気味のうえに、ハンドホールドが少なく時間がかかってしまう。ハーケンまで足をあげて越える。斜上のトラバースもややかぶり気味で濡れている。そこからは大まかなホールドにまかせ、ハングした岩の下のバンドに出る。なかなか思いきれず、また時間を食う。テラスは安定していて4人位乗れる。

2 P目 テラスより、いくつものバンドを利用しながら大きなテラスの上に出る。おおまかな階段。

3 P目 大きなテラス上のクラックを直登。ややかぶり気味だがホールドとフリクションで通過。いったんリッジに出て35mのぼし、cルンゼ測に下る。

D 稜

7月26日 ①時々◎一時●

参加者 石原(L)、大西、藤田
 タイム 出発(5:30)→取付き(8:00)→第4ケルン(10:05)→終了点(12:40)→帰幕(15:35)

五ノ沢からeルンゼに入って行っただが、取付きのガリーを見逃し、ブッシュ混じりの側壁に取付いた。2ピッチでリッジに出るが、2ピッチ目はかなりいやらしいクラック登りがあり、腕力を消耗してしまい、後が少々不安になった。リッジから第4ケルンまでは快適な登りであった。以後、一般ルートからはずれ、フェースへ取付き、凹角状のところを登ったが、ここは高度感抜群であった。消費ハーケン3、回収2。

小 槍

7月26日

参加者 稲垣、岩崎
 タイム 出発(5:30)→槍の肩(8:15)→取付き(10:00)→小槍(10:45)→大槍(12:15)→BC(14:00)

朝から大槍周辺にだけガスがかかっている。槍の肩に到着する頃は、ますますガスが深くなる。濃霧の中で、小槍へのトラバースルートがなかなか分らないのでしばらく天気待ちする。第1、第2チムニーをそれぞれ1ピッチで登る。グラグラする岩をピンにして、小槍頂上からア

ップザイレンして降りる。小檜尾根は孫檜までスタカットで行き、大檜の最後の登りは岩崎がトップで頑張る。

穂高ヒバーク

期 間 7月25日～7月26日

参加者 黒岩、中野

7月25日 ①

BC出発(5:25)→檜の肩(7:50)
→南岳小屋(9:40)→横尾本谷下降開始
(10:25)→酒沢出合(11:50)→
VⅥのCOL(15:30)→V峰ピークBS
(16:20)

南岳小屋のそばの岩峰から横尾への下降点を見定める。大切戸への下りの1番下の鉄はしごを降りた辺りから横尾本谷目指して下り始めた。2つ程雪溪を過ぎると、テント2張あり、ここから滝谷へ入るには絶好と思われる。横尾本谷は広く、陰惨な感じは全くない。グリセードで少しずつ下る。夏の終り頃になると雪溪もスタスタに切れるだろう。右岸通しに酒沢出合に至る。今日最後の登りと思いながら、前穂岳北尾根のV、ⅥのCOLへ雪溪をつめる。COL附近は雪溪が消えてガレ場になっている。V峰ピークでヒバークする。

7月26日 ①

出発(5:05)→Ⅳ峰(6:15)→前穂
(6:30)→奥穂(8:00)→酒沢岳
(9:00)→北穂(10:15)→南岳(13
:15)→檜ノ肩(15:15)→BC(16
:20)

Ⅳ峰はリッジ通しに行き、上部では奥又側を巻いて行くとⅢ、ⅣのCOLが見えたので少々トラバース気味に下りCOLに着く。リッジ通しに行った方が楽だったかも知れぬ。Ⅲ峰はリッジ通しに登る。上部チムニーの右側の凹角に登る。Ⅲ峰ピークは酒沢側を巻くと前穂はすぐそこであった。後は穂高の稜線を歩くのみ。滝谷はガスがかかっているドーム中央稜がうっすらと見

えていた。

硫黄尾根下半

期 間 7月27日～7月29日

参加者 石原、竹田

7月27日 ①●●○のち①

BC出発(16:35)→千天出合(18:
50)→湯俣BS(20:10)

7月28日 ①のち①のち●のち①

出発(8:15)→取付き(8:35)→尾根
(9:05)→前衛峰P₁(11:20～12
:00)→P₆(13:50)→折り返しP₆
(14:25)

水俣川左岸の湯俣の吊り橋からひとつ目の沢手前から取付き、70～80m位の登りで尾根上に出る。この登りはかなり急で、ブッシュにつかまってやっとである。荷物をかついで少々やばい。1,600m附近までは、傾斜もなく広い尾根に登る。ただし2、3ヶ所せまい所があるがたいしたことはない。1,600m附近は樹林の笹平で、CSには最適だ。ここから高度のかせげる急登が続く。途中1,800m少し手前で7～8mの岩が露出しているが、右を巻けば簡単。11時20分、前衛峰P₁でBCと交信を行なうが感度なし。P₁、P₂は共に小さなピークでブッシュに助けられて別に問題なし。P₃、P₄は岩峰で、特にP₃は大きく下り80m位のフィックスが必要。P₅はブッシュの登りで、下りは短く傾斜もないが、ガレたリッジである。1時ごろ雨が激しくなりP₆直下で雨やどり、P₆は岩にブッシュのついたピークで、ピーク上はCSに適している。P₆から小次郎沢のCOLへの下りは、ハイ松とシャクナゲのブッシュで、下り口を間違うとブッシュで苦勞するが、分かりやすい踏み跡があり問題なし。ただしかなり急な下りである。P₆頂上まで引きかえしてヒバークする。

7月29日 ①, ①

出発(5:35)→小次郎沢のCOL(6:30)

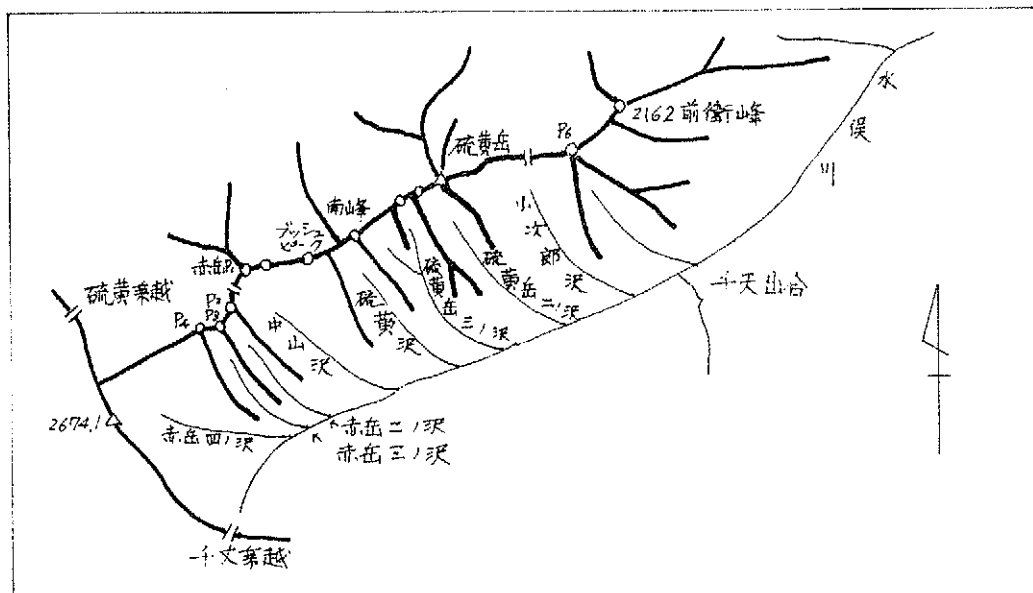


図 15. 硫黄尾根概念図

—JP (7:40)—硫黄岳 (8:10)—
雪溪 (8:20)—ブッシュピーク手前のコル
(11:20)—南峰直下の草付きコル (15
:15)—千丈沢出合 (16:20)—BC
(16:50)

2,300~2,400m 附近フィックス 60m
必要。P₆ の下りは急だが、ブッシュに助けら
れる (P₆ 東面はCS可)。コルからの登りは
急ではあるが踏み跡もあり、ブッシュに助けられ
て2~3ピッチでJPに着けるが、途中右側が
切れており、JP直下も少々岩登りがある。
JPから硫黄岳ピークへも、ブッシュを利用して
楽に行ける。

硫黄尾根上半

7月29日

参加者 大西、岩崎

タイム 出発 (5:30)—二ノ沢 (6:
15)—コル (8:00)—最低コル (11
:20)—中山沢コル (13:00)—P₁
(14:00)—P₂ (14:20)—BC
(16:00)

出合まで左岸のへつり2回、徒渉数回で硫黄
二ノ沢出合の赤旗に着く。ガラ場登り3ピッチ
でコルに登ると稜線は風が強い。ただちにアン
ザイレンして、ザイル2ピッチでテント適地 (2
張)に着く。さらに数ピッチで千丈側ブッシ
ュのコブに着く。下りはかなりやばく、落石が
多い。中山沢右側のコブ印に40mばかりの岩
峰が4つ立ちはだかっていた。はじめのころは
湯俣側をトラバースする。最後のはリッジ通し
に行く。ここはすべてリッジ通しでは不可能だ。
地図で2つめのコブはリッジ通しで頭へ、そこ
から15mのアップザイレンをし、さらにかなり
急なブッシュの下りが40mの後、千丈沢側へ
垂直な200m程のフェースに湯俣側から取付く。
ザイル2ピッチの岩登りで地図3つ目のピーク
に立つ。はじめて中山沢をながめる。2ピッチ
のクライミングダウンの後幅2mのギャップをと
びこすと大ハングに直面する。中山沢側をトラ
バースして、傾斜のないフェースだが浮石多い
所を2ピッチやや下った所に50mのニードル
がある。リッジとクラックを3ピッチ登るとピ
ークに着く。下りは急なジャリ道だ。次に50
mの岩峰が数個ある。湯俣側をトラバースし、
支尾根上のチムニー状を5m登攀すると小さい

コルに出る。コルから上は30mのニードルがあり、リッジどうし3ピッチで岩峰の頭。湯俣側をトラバースしながらリッジを横ぎる。ルンゼを上り7~8mの岩とのコルに出る。中山沢のブッシュのついたコルがのぞめ、その後に赤岳が見える。千丈沢側のルンゼを3ピッチ下り、中山沢のコルにでる。このコルにはテントを数張張れる。赤岳P₁の裏に着く。この時二ノ沢が見える。P₂の登りはやばいトラバース2ピッチと1ピッチのナイフリッジの登りだ。下りは千丈沢側をじゃり制動。

夏 山 縦 走

北アルプス北部横断

赤岩尾根—鹿島槍—唐松—祖母谷—仙人—真砂—室堂

期 間 8月1日~8月10日

参加者 稲垣(L)、岩崎、藪田

8月1日 ◎のち●

千丈沢BC出合(9:00)—千天出合(11:25)—湯俣(13:00)—濁(15:45)—七倉(17:15)

千天出合より雨となる。全員靴擦れと股擦れを作り、七倉へ着いた時には、雨で定着合宿の垢がきれいに落ちた感じである。

8月2日 ●

停滞(大町)

8月3日 ①のち◎のち●のち①

大谷原出合(8:00)—西俣出合(9:45)—高千穂平(13:20)—冷池CS(15:55)

1番バスで大谷原へ。西俣出合へはガラガラと3ピッチ。ここから径は、木の根っ子から根っ子

への急な階段道となって、高千穂平へ至る。今はもう雨となった。稜線に出てシャワーにたたかれて冷地小屋に走り込む。天気図を書き終わる頃には雨もあがり、アーベント・ロートに揮く空に剣の窓が鮮かだ。台風接近中のため、棒小屋沢は断念する。

8月4日 ○のち◎のち●

出発(7:00)—鹿島槍南峰(8:35)—北峰(9:25)—八峰切戸小屋(11:35)—五竜岳(14:50)—唐松岳CS(18:40)

食糧の軽量化を計った後快晴の空の下に出発する。輝く朝日の中を息を弾ませて登高するのは素晴らしい。汗は朝風が拭ってくれる。見る間に登り着く。双耳峰のコルで水を作る。(冷地には水はない。)ガ스에巻かれぼた切戸を降りる。この下りは人待ちで時間を費す。切戸小屋から急に人気の無くなった縦走路に行く。五竜の最後の登りは、脆い岩場のいやらしい登りである。唐松へは惰性で歩いていた様なものであった。

8月5日 ●

出発(11:00)—祖母谷(17:50)

台風通過のため、夜中からツェルトの中は水浸しになった。天気回復の兆しがないので風雨の中で撤収し祖母谷へ下る。

8月6日 ◎時々●

出発(8:00)—樺平(8:20)—阿曾原(15:00)

8月7日 ◎時々●

出発(6:30)—仙人湯(8:45)—仙人池(10:55)—真砂CS(14:00)

天気は相変わらず。もうツェルトで雨に降られるのは真っ平だ。一気に平蔵避難小屋まで行きたいところだが、悪天の為断念せざるを得ない。仙人池より真砂に向かう。

8月8日 ●

出発(8:30)—剣御前(12:00)—室堂(10:00)

剣沢の雪渓はどんどんと落ちている。本流は土砂の激流である。本峰は諦めて御前へ向かう。
<雑感>

今度の縦走は初期の棒小屋沢、池ノ平より劇早月尾根は全部果たせなかった。だが、悪天の中で全員よく頑張った方であろう。

三人パーティーのツェルト縦走は、雨天の時の居住性が最悪になることを思えば、少々重くてもテントの方が快適である。もっとも今山行の場合、ツェルトの事とても停滞する気になれず、雨中行動した為曲りなりにも室堂まで行けたのであろう。(記 稲垣)

裏銀縦走

新穂一雙六一水晶一鳥帽子一針ノ木峠一扇沢

期間 8月3日～8月8日

参加者 黒岩(L)、竹田、中野

8月3日 ①のち◎時々●

新穂出発(7:15)一ワサビ平(8:40)一大ノマ乗越(12:55～13:20)一雙六(15:00～15:15)一三俣CS(17:50)

久しぶりに青空がみられ、天候の持続を祈りながら新穂を後にする。ワサビ平までは車が入る道を左手に穴毛谷を見て、ピッチも上がる。小池新道に入り、大ノマ乗越までの急登はさすがにしんどい。ここから双六小屋までは、たらたらと歩き、小屋から双六への登りは短いが苦しかった。後は三俣まで平らな道。雨も降って来る。

8月4日 ①のち◎時々●

出発(7:30)一鷲羽岳(8:55)一水晶小屋(10:15～10:40)一野口五郎岳(13:25)一三ツ岳直下(15:10)一鳥帽子岳CS(15:45)

朝はよく晴れていた。鷲羽岳への登りはきつそうだが1時間少々で越える。めったに通らない山のピークを踏むのも楽しい。水晶までは、高原散歩だ。強風が吹いているので、野口五郎岳までのやせ尾根は注意して歩く。ガスが出て雨がしょぼついてきた。三ツ岳、鳥帽子岳はすぐ

そこに見えているのだが距離は少しも縮まらない感じがする。疲労していることなのか。三ツ岳を回りこんでやっと鳥帽子のテント地が見えた。

8月5日 ● 停滞

8月6日 ①時々●

出発(6:40)一鳥帽子直下(7:15)一南沢岳直下(7:50)一南沢岳(9:00)一不動岳(10:30)一船窪岳(13:15)一船窪小屋CS(15:00)

昨日来、ラジウスの調子悪く、燃料を多く必要とするので食糧を整理して行く。鳥帽子岳から南沢岳へは何か庭園のような感じの高原である。しかし、地図にある南沢岳直下より不動へのトラバース道はブッシュとガレで立ち消えになっており、結局南岳ピークまで直登してしまう事になった。ここから右側は切れおちている谷を見ながら不動に向かう。不動への急登で雨が降りはじめたが、ガンバリとネバリで一気に頂上まで歩く。今日の登りは終わったと思ったが、船窪岳をこえて、船窪小屋までの道はやせた箇所や、ハシゴをつけた所が数ヶ所あり、意外に時間がかかってしまう。

8月7日 ●

出発(7:20)一七倉岳(9:00)一北葛岳(11:45)一蓮華岳(13:15～13:35)一針ノ木峠CS(14:10)

ラジウス使用不能となり、非常用の燃料でラーメンを作り朝食とする。葛温泉へ向かうトラバースぎみの登り道をたどり地図を見るとどうも方向が違うことに気付いて引返す。七倉から北葛へはかなりの登り降りがある。蓮華岳へはちょっとした岩登りだ。鎖はつけてあるが、定着合宿で自信をつけたのか新人は鎖を使わずにどんどん登って行く。苦しい登りを終えて蓮華頂上に着く。稜線づたいに針ノ木小屋への下りを急ぐ。

8月8日 ●のち◎

出発(10:30)一扇沢(13:30)

昨夜来の強い風雨で針ノ木アタックは断念する。少々天気待ちするが回復の兆しくなく下山する。

黒部上ノ廊下

千丈沢—湯俣—三俣蓮華—赤牛岳—高天ケ原
新道—双六岳—新穂高

期 間 8月1日～8月10日

参加者 大西(L)、大宅

8月1日 ●

千丈沢BC出発(9:30)—千天出合(13:00)—湯俣(14:30)

BC用にテントを持っているし、食糧が待機用5日分プラスなので二人では相当重い。

8月2日 ●

停滞

8月3日 ◎のち●

出発(6:45)—ワリモ沢出合(9:30)—赤沢出合(11:35)—三俣蓮華(15:40)

朝方は少し晴れ間も見えたが、4ピッチ目で雨が降りだした。荷が30kgもありしかも地下足袋なので疲れる。昨日から食いのぼしをしているのでこたえる。満腹までいなくても七、八分は食いたいものだ。三俣のテント地は本当に何も無い。ミソと人参をやっと捜し出した。台風が近づいているので心配だ。明日高天ケ原にベースを張り天気待ちということになりそう。

8月4日 ○のち◎

出発(6:00)—高天ケ原(10:30)

朝は本当に久しぶりに晴れた。太陽がこんなにも大きくてまぶしいとは。岩苔乗越から高天ケ原までの道は相当に悪い。着いてからぬれているものを乾かす。温泉で2週間分のアカを落とした。

8月5日 ●

停滞

8月6日 ◎

出発(11:30)—赤牛沢(15:00)—BP(19:30)

短波放送が入らないので9時の天気図をつけてから出発する。赤牛沢は岩棚を水が滑るように落ちている感じ。シャワークライミングも

滝が5mくらいなので楽。雪溪を2つくぐったところで赤牛の稜線が見えた。P₃までルンゼから尾根にうつり、落石が心配なので速く通過する。大宅がやや疲れ気味だ。読売新道2,300m地点までとばしたが、支尾根に入りブッシュこぎになる。ルンゼにでて地図を見ると尾根を2つ間違っている。このまま下り、高天ケ原新道に出よう。19:30暗いので行動中止してビバークする(東沢出合との高度差400m地点、2つ西の小さい沢)。22時の天気図をつけてから寝る。

8月7日 ●

出発(5:30)—東沢出合(7:40)

高気圧が張り出しているので雨は降らないと思ったが雨になった。しぶしぶ東沢出合へ向かう。途中、やっと高天ケ原新道へ出る。尾根を結局3つ間違えた。東沢出合は水量非常に多く、当分減りそうにない。今日は久しぶりにまきで炊いた飯を食う。しばらく天気待ちだ。

8月8日 ●

停滞

深夜より雨のふり方ひどくなりビチャビチャ。黒部は濁流となり、水位も1m位増す。ここ数日通過不可能だ。食糧もなくなり明日は高天ケ原新道を通りベースへ帰ることにした。

8月9日 ●

出発(6:30)—奥ノタル沢(11:45)—中ノタル沢(11:45)—温泉小屋(15:00)

4時に起きると雨が降っている。雨が小降りになるのを待って出発する。高天ケ原新道を敗惨兵の如く帰る。道は非常に悪く、どの沢もかなり増水している。奥ノタル沢の徒渉は膝までつかる。中ノタル沢での河原歩きも河原が消えて腰までのへつりを2回する。膝までは何回となくやる。高巻き道もくずれてかなりしんどい。ここまで2時間ピッチで来る。中ノタル沢から霞平の急な登りも滑ってあまりはかどらない。温泉小屋までかなりとばす。

8月10日 ●

出発(6:45)—岩苔乗越(9:00)—三俣山荘(10:15)—双六小屋(12:

30) - ワサビ平 (17:00)

すべて濡れているのでほとんど眠れず。雨の中の二人の撤収で意外と時間をくう。今日はどんなに遅くなっても新穂まで下るつもりで出発し、岩苔乗越までとばす。1時間ピッチで2ピッチ。三俣までフラフラだが、ここから先は下りだけだしもつだろう。双六小屋から雨が本格的に降りだし寒い。ワサビ平まで3ピッチで行く。地下足袋で足がかなり痛い。ワサビ平から蒲田の旅館まで車で行き泊る。

(翌朝のバスが、次後全面交通止めとなったため、最終便になった。ザックを担いで泳ぎに行った山行であった。)

北アルプス南部横断

新穂 - 中尾峠 - 上高地 - 徳本峠

期間 8月3日～8月4日

参加者 石原(L)、高橋

8月3日 ①のち●のち①

中尾出発(6:30) - 中尾峠(10:00 ~ 10:30) - 上高地(11:50 ~ 13:30) - 八衛門沢引返し点(16:00) - 小梨平(17:00)

8月4日 ①のち◎

出発(9:00) - 徳沢(9:25) - 徳本峠(10:30 ~ 11:00) - 島々(14:30)

人の行きたがらない中尾峠と徳本峠を越えた上高地横断山行であった。余興に上高地から霞沢を八衛門沢出合まで詰めてみた。巨大な岩がごろごろした何の変哲もない沢だ。上部の方が面白そうだった。徳本峠から島々への路は、古人の苦勞がしのばれる。上高地が神河内であったのも納得がいった。

夏山個人山行

穂高岩登り山行

期間 9月4日～9月10日

参加者 石原(L)、黒岩、岩崎、藪田

9月4日 ①

濁沢入山

9月5日 ◎のち①のち●

・第Ⅳ尾根(黒岩・岩崎)

スノウコル(9:30) - Aカンテ下(10:30) - アンザイレン(11:00) - ピナクル頂上(12:45) - 終了(13:50) - BC(16:15)

・第Ⅱ尾根(石原、藪田)

取付き(10:00) - アンザイレン(10:30) - P₂(12:10) - 水野クラック取付き(12:30) - 終了(13:00)

9月6日

・ドーム中央稜(石原 - 岩崎、黒岩 - 藪田)

出発(6:00) - 北穂(7:45) - アンザイレン(9:20) - ドーム頂上(11:05) - 北穂(11:45) -

・クラック尾根(石原、黒岩、岩崎)

取付き(13:10) - メガネのコル(14:15) - 北穂(16:45) - BC(18:30)

9月7日 ◎のち●

9月8日 ①

出発(8:25) - Ⅲ、Ⅳのコル(10:00)

・前穂北壁 - Aフェース(石原、岩崎)

北壁取付き(10:45) - 登攀開始(11:15) - 第2テラス(12:15)(黒岩パーティーと合流) - Aフェース取付き(13:45) - 前穂(14:15)

・前穂C - B - Aフェース(黒岩、藪田)

9月9日 ○

- ・前穂Ⅳ峰正面北条・新村ルート(石原、黒岩)
出発(6:00)ー第一テラス(9:30~10:00)ー遺松テラス(11:30)ー終了(14:45)(登攀記参照)
- ・前穂北尾根上半(岩崎、藪田)
出発(6:45)ーⅤ、Ⅵの科尔(7:30)ー前穂(9:25)ー奥穂(11:05)ーBC(13:35)

前穂高北尾根Ⅳ峰正面 北条・新村ルート

参加者 石原(L)、黒岩

焼岳の噴火を気にしながら、溜沢に入ったのは9月4日のことであった。それ以来4日間、滝谷に、前穂東面岩壁に登攀を重ねてきた我々であった。そして今回の山行の最後のしめくくりの意味で選んだがこのⅣ峰正面の北条新村ルートであった。もっとも我々としては屏風岩第一ルンゼにも挑みたかったのだが……天候の都合で致しかたなかった。

このルートは名の示すとおり北条、新村両氏により初登攀された、2つのオーバーハングを突破してⅣ峰頂上にぬけるルートである。

9日朝6時テントを出る。取付き1番乗りするためアプローチの足もおのずと速くなる。北尾根Ⅴ、Ⅵの科尔に着くとはるかな南東に富士山が印象的な均整のとれた姿で見えている。この科尔を下降してC沢を登りⅣ峰正面壁の第1テラスに向かう。第1テラスの道をまちがえて、もろい浮石の多いルンゼに入ってしまった。仕方なくザイルを出して草付きとブッシュの急斜面を高めへと登ってやっと第1テラスに着く。

10時、思ったとおり我々だけで、先着や後続パーティーはいないようだ。ルート図を出して岩壁に目をこらす。岩壁は圧倒的に我々の上におおいかぶさってくる。かすかな不安にもいた気持が心の中を駆け去っていった。

10時半、登攀開始。その合図であるかのよりに、確保用のハーケンが快い金属音をたてて

岩にくいこんでいく。1ピッチ、黒岩トップに立ち「行きまーす」「おう」。畳を斜めに立たたようなスラブだ。

その間に草付きのバンドがある。40m一杯のばす。続いて石原が登ってきて、そのまま2ピッチに入る。部分的に細かい所もあるがザイルはどんどのびる。石原の確保点より上部はチムニー状のクラック。3ピッチ目黒岩がクラックを登る。高度感もでてくる。30mで大きなハイ松テラス。横尾や徳沢の小屋がマッチ箱のように見え、梓川が淡い黄色に光っている。

ここからが核心部なのだ。2つのオーバーハングが頭上にのしかかっている。石原がトップにたち4ピッチ目に入る。ハーケンの音が暖かい陽射しの中に消えていく。カラビナ、アブミのセットする音とともに1m、2mとザイルがのびていく。アブミにも慣れてくると速度も上がる。15mで第2の70cmぐらいの庇状のハングの下。続いて石原の身体が完全に空中に出る。やがてハングの上に姿が見えなくなる。ザイルを通しての言葉の往復。「ダウン」、「アップ」を何度かくりかえして、「ようし、コーイ。」という声が落ちてくる。オーバーハングを越してからはずつつのフェースだが、埋込みボルトが連打されている。フェースの上端で石原がグリッピビレーしている。2人やっと立てるぐらいのスタンスで、ちょっとの間、休みをとる。ここからは右の方へトラバースすることはホールドも少なく、かぶり気味で困難なようだ。ということはルートを間違えたことになる。本当のルートはもっと下から右の方にあったピナクルへトラバースするようだ。話し合った結果、左上に直上してしまうことにする。15m位登れば遺松が見えていて、それで登攀も終りのようだ。5ピッチ目黒岩トップになり、ハング気味の岩を半分程しか入ってないグラグラのハーケンを頼りに強引に登る。前穂東壁Bフェースでも、こんな所があったなどと思ながら登る。身長のある石原ならどうということはないであろうにと思うと、背の低いのがうらめしい。やがてブッシュに入り枝をつかんで40m一杯登り、岩の上に腰を下ろして確保し、石原の来

るのを待つ。上高地を見おろしながら今日のクライミングを思い返していると、「これで終わりか？」という声とともに石原が登ってくる。彼は1時間半以上も小さなスタンスに立ったままビレーしていたのだ。

登攀用具をしまい、もう1度梓川を見てⅣ峰よりⅤ、Ⅵの科尔へ下る。4時まで少し黄色くなりかけた陽を浴びて昼寝としゃれこむ。眼下の洞沢峡谷にはテントもまばらである。

「ルートをまちがえたのは部会でたたかれるな。」「けど、充分面白かったし…。」

時々、秋のにおいをさせた風が通りすぎて行く。眼前には奥穂、洞沢、北穂の3,000mのスカイラインが金色に光っている。

(記 黒岩)

11月偵察山行

杓子双子尾根—後立山縦走

期 間 10月31日～11月6日

参加者 中岡(L)、黒岩、稲垣、大宅、藪田
高橋、出雲路(OB)、細川(OB)

10月31日 ①

猿倉(12:00)—小日向の科尔(14:00)—1,900mCS(15:00)

国鉄ストもあったが、何とか大町に着く。乗り換えて白馬駅へ。駅から見る後立山の峰々が箱庭のように美しい。タクシーに分乗して猿倉まで行く。銚温泉への緩やかな登りを小日向の科尔へと歩き始める。冬の取付き点なので注意して歩く。小日向の科尔より約10分位の地点に設営、明日からはブッシュこぎが始まる。

11月1日 ①のち◎

出発(7:00)—樺平(11:30～12:00)—ジャンクションピーク(15:45)

ブッシュはたいしたこともない。踏み跡もかなりある。樺平までは部分的にやせた箇所もある。樺平で尾根は消えて、奥双子岩から再び尾根となる。この岩より1時間程登ると岩峰があり、ザイルを出して通過する。これからは草付きの急斜面となり所々に雪が付いている。再びブッシュ。2,300mあたりから短いながら2ヶ所ザイルを使用する。傾斜があるので冬なら雪崩はどの方向に…などと息を弾ませて登っているうちにジャンクションピークに上がった。雪が少ないので水用の雪取りに苦勞させられる。杓子の美しさに見とれているうちに暗くなる。しんどい1日であった。

11月2日 ◎のち①

出発(6:40)—杓子岳(11:00～

11:30)—鏈ヶ岳(13:00)—天狗小屋(14:00)

ジャンクションピークから杓子岳ピークまで200m位ナイフリッジが続く。ザイルを固定しながら通過する。最後の3ピッチは重荷を背負っているので緊張する。新人を空身を通してザイルの回収。杓子のピークは風が強かったのでツェルトを出してしばし休憩。鏈ヶ岳へ登り始める時分に陽がさしてきた。鏈のピークから天狗まで快調に進む。夕刻天狗小屋の前のわずかな雪面で雪上訓練をする。

11月3日 ①のち◎

出発(7:30)—唐松(10:30～11:00)—五竜小屋(14:30)

小屋の前で出雲路(OB)と別れる。天狗の大下り、不帰は夏とほとんど変わらない。陽が出ているので風のあたらない時はボカボカと暖かい。唐松を越え牛首のあたりからガスが出て、白岳通過中には雪がチラチラ舞い始めた。気温も急に下った。五竜のテント地に設営する。

11月4日 ◎

出発(7:00)—五竜岳—帰幕(8:00)

朝全員で五竜頂上往復。中岡、細川(OB)高橋、藪田は9:30遠見尾根を下山、残り3名は停滞

11月5日 ◎のち①

出発(10:00)—五竜岳(11:15)

一切戸小屋(15:15)

朝起きるとまだ雪が降っているので、少々時間待ちして出発。アイゼン歩行の練習も兼ねて、五竜を越えるまで着用する。風もなく、雪も少なく少々期待はずれ。前方に鹿島槍の雄姿を見ながら八峰の切戸の登降を繰り返し切戸小屋に入る。

11月6日 ①

出発(7:00)ー鹿島槍(8:00~9:30)ー冷池小屋(10:45)ー種池(13:00)ー扇沢(15:30)

荷物はすっかり軽くなり天気も快晴。鹿島槍の北峰では天狗尾根や東尾根の方へ少しばかり行ってみる。下り始めるといつのまにか布引岳を過ぎ、冷池小屋から種池まで、もくもくと歩いて扇沢に下山する。

御岳アイゼン合宿

期間 11月29日~12月2日

参加者 中岡(L)、黒岩、大宅、高橋

11月29日 ○

八海山荘(11:00)ー田ノ原(13:30)ーCS(14:00)

11月30日 ●

停滞

12月1日 ○

出発(7:00)ー頂上(9:00)ー訓練(9:30~12:30)ー帰寮(13:30)

12月2日 ○

出発(6:40)ー八海山荘(8:00)ー王滝(10:00)

好天と堅雪の約束された御岳であるが、時期が遅かった為、日照が弱く、また入山前の天気が悪かった関係上、サンクラストも出来ておら

ず、頂上附近は一面のアスピリン・スノーで期待された雪上訓練の成果は少なかった。

冬山合宿

杓子岳双子尾根 (概念図はP102 図87 参照)

猿倉ー小日向コルー杓子岳ー小日向山

期間 12月25日~1月1日

参加者 中岡(L)、黒岩、稲垣、大宅、高橋

12月25日 ○

細野発(10:30)ー猿倉(14:30)

12月26日 ◎のち⊗ -3℃(8:00)

出発(7:00)ー細野発(10:00)ー猿倉CS(14:30)

12月27日 ◎のち①のち⊗

-2℃(5:00) -10℃(18:00)

出発(6:30)ー小日向コル(10:00)ー猿倉CS(10:20~11:40)ー小日向コル(14:10)

12月28日 ⊗ -10℃(5:00) -8℃

(12:00) -12℃(18:00)

出発(6:30)ー2000m引返し点(8:30)ー小日向コルCS(10:00)

12月29日 ⊗ -8℃(5:00) -6℃

(12:00) -7℃(18:00)

停滞

12月30日 ⊗のち◎時々⊗ -8℃(5:00)

-10℃(12:00) -10℃(18:00)

起床(2:00)ー出発(12:30)ー小日向コル(13:30)

12月31日 ○ -5℃(5:00) -6℃

(12:00)

出発(5:30)ー樺平(7:30)ーJP

(9:00)ー杓子岳(9:20)ー樺平(

10:40)ー小日向CS(12:00)

小日向山往復(12:20~14:45)

1月1日 ○ -6°C(5:00)

出発(7:30)ー小日向山(8:00)ー

細野(12:20)

多くの部員の退部などの理由により、硫黄尾根からの槍アタックを諦めて双子尾根より杓子岳アタックに変更した。今年の好天と去年の悪天を思い合わせると、冬山は天気しただとの感を強くした。我々はどうしても自分の小さな経験の枠に、価値判断も行動もとられてしまう。

現在、後立の双子尾根クラスの尾根のトレースには意義が無いことを考えてみたい。

(記 中岡)

1970年度(昭和45年度)活動記録

70年度 現 役 部 員

C . L	楯 垣 佳 夫	工 (4)
S . L	大 宅 幸 夫	齒 (3)
	黒 岩 芳 夫	経 (4)
記 録	大 西 邦 男	工 (3) (退)
装 備	藪 田 勝 久	理 (2)
食 糧	高 橋 正 身	理 (2)
	鹿 野 信 互	理 (1)
	梶 浦 孝 雄	工 (1)
	渋谷 省 吾	工 (1) (退)
	藪 本 勝	工 (2)

4 月 個人 山 行

八ヶ岳縦走

期 間 4 月 6 日～4 月 1 1 日

参加者 高橋（L）、篠田、石原（OB）

4 月 6 日 ○ 八ヶ岳横断分岐（9：00）
—観音平（10：30）—富士見平（11：
35）—編笠山（16：30）—青年の家 C
S（17：00）

無風快晴。富士山、南ア、中央アが良く見える。青年の家へのトラバース道の分岐までなかなか歩らなかつたが、それを過ぎてからは快調に登る。ピークの少し下でワッパを着ける。頂上付近は岩混じりで、何度も湿雪にもぐりながら CS に着く。

4 月 7 日 ◎のち① 出発（5：35）—権現
岳手前のコル（8：30）—設営終了（9：
00）—権現岳往復（出発 10：30—帰幕
12：00）

アイゼンを着け登りだす。樹林を過ぎると岩場のトラバースや、雪の急斜面があり、少し緊張する。ギボシからは雪のナイフ・リッジが権現ピーク下まで続く。気圧の谷接近のため権限の少し手前のコルにテントを張る。雪庇の上らしい。その後アイゼンを着けて権現岳を往復する。風強く、頂上付近は雪が少ない。東面はバツリ切れている。

4 月 8 日 ◎のち① 出発（6：35）—ケレ
ット（11：15）—赤岳（14：35）—
石室 CS（15：20）

風は強いが、気圧の谷は通過してしまった。権現の下りはハシゴがついているが、雪の状態悪くザイルを出す。その先は雪庇に注意しながら進む。赤岳への登りは急な岩混じりのガリーで、ひたすら登る。頂上直下のトラバースは短いザイルを出す。石室でテントを張った。

4 月 9 日 ①のち◎のち○ 出発（6：25）—
横岳（8：00）—硫黄岳（9：20）—夏
沢峠（9：50）—天狗岳（11：50）—
三角点往復後出発（12：25）—クロエリ
平 CS（13：25）

横岳へは多少悪いところもあるが、石原の先導で通過する。雪はしっかりしている。大同心は思った程大きくない。硫黄岳への登りの頃からガスが出てくる。下りは長く急だった。西側斜面に出ると風当たりが強い、樹林に入ると夏沢峠、根石岳が馬鹿に高く見える。トレースがあったので、もぐらずに歩けるがバテ気味なのか小さなコブも高く感じる。天狗岳を往復したが頂上からは北八ヶ岳が遠く連らなっているのが見える。中山峠へくだら下る。天気は最高に良く、設営後、シュラフをはずす。

4 月 10 日 ○のち◎ 出発（5：15）—高
見石（6：10）—麦草峠（7：05）—茶
臼岳（8：30）—縞枯山（9：00）—三
ツ岳（12：05）—CS（13：10）

雪の状態の良いうちにピッチをあげるため 3 時に起きる。茶臼岳の登りあたりから雪も軟化しもぐり始める。縞枯山の下りでついにワッパを着ける。この下りは道がわかりにくく、トレースは雨池へ行っているようなので北へ下るが、案の定コルを道より東へ降りてしまう。雨池山を越え、三ツ岳の登りの急斜面をワッパで登るのはしんどい。三ツ岳は大きな岩がごろごろしており、その間の雪は、もぐりやすいし、地形も複雑である。高橋がダウンしたので横岳小屋手前で設営する。

4 月 11 日 ◎のち⊗ 出発（6：55）—横
岳（7：40）—亀甲池（10：20）—二
股（15：25）—プール平（17：00）

ついに天気がかずれ雪が降る。湿雪。小屋から少し登ると横岳の頂上で、下りはわかりにくく、地図を頼りに下る。大岳の平坦部に出ようとするが尾根を間違えて引き返し、先行パーティーのトレースに大いに助けられ双子池の分岐に着く。そこから亀甲池におり軟雪に苦しめられながら、蓼科へと下る。

5 月 山 行

中央アルプス縦走

期 間 4月30日～5月4日

参加者 稲垣(L)、大西、石浜(OB)

4月30日 上松よりタクシーで島へ。キャンプ場上CS(18:30)

5月1日 ○ 出発(6:26) 喜美世滝(8:00)→麦草山(14:15)→2,836mピークCS(16:30)

2,200m付近より残雪に苦勞する。麦草より2,836mピークへはやせたガレ尾根で危険な箇所もある。完全にバテた。

5月2日 ① 出発(6:30)→木曾駒(7:30)→宝剣岳(8:30)→桧尾(12:15)→桧尾東直下CS(12:15) 宝剣附近は少々岩と雪が出るが鎖あり。アイゼンは着けず。殆んど夏道が出ている。雨に備える。

5月3日 ◎のち①のち◎ 出発(6:25)→木曾殿越(9:15)→空木岳(11:00)→南駒ヶ岳CS(13:30)

雨は降っていないが、西方に暗雲が浮んでいる。徐々に快復に向かう様子だ。アイゼンは要らない。空木岳は中央ア中最も山としての風格を備えている。近づいてくる低気圧は予報では今夜中に通過しそう。樹林帯まで降りるか、南駒をCSにするか? まだ予備に余裕あることなのでサボることとする。越百は稜線上の突起にさえ見え、行く気もおこらない。

5月4日 ◎のち① 出発(6:25)→ヶサ沢(11:00)→須原(15:30)

霧雨である。低気圧は東日本の高気圧にブロックされて前進できない許りか勢力を弱められているらしい。1ピッチ岩尾根のあとはボソボソもぐる雪道だ。雨の中を、腐っている長いヶ

サ沢沿いの橋道を終え自動車道へ出たが交通の便もなく、須原へ足を引きずる。バテバテになってたどりつく。

穂高・槍縦走

期 間 4月30日～5月3日

参加者 石原(OB)、豊坂(OB)

4月30日 ○ 上高地(10:55)→西穂山荘(15:30)

5月の上高地は、焼岳の雪煙が青空に映え、梓の清流の遠方の穂高連峰が、萌え出たばかりの若葉の梢越しに眺まれ大変印象的だ。西穂への登りは大体夏道どうしにトレースがついている。ほとんど樹林の中の雪道だが、登り一方でしんどい。稜線に出ると二重山稜気味の平らな道を15分も歩くと西穂山荘に着く。そこより上はあまり雪がないので、設営と決め雪洞を掘る。5月の雪は堅くて掘るのに力がある。

5月1日 ○ 出発(6:00)→西穂頂上(9:00→9:20)→天狗の科尔(12:00→13:15)→ジャンダルム(15:30)→奥穂(16:45→17:00)→白出科尔(17:50)

西穂までは、雪も少なくほとんど夏道の土を踏んで単々と登る。間ノ岳、天狗岩、天狗の科尔と、それ程の困難もなく、時々簡単な岩の登降で雪稜を辿る。今日中に白出の科尔まで行く事にする。ジャンダルムは岳沢側を巻き、ロバの耳の下りは、この山行中最悪であった。馬の背を越えると奥穂はすぐそことなる。連休だというのに誰もいない奥穂の頂上。小さな鯉のぼりが祠にたててあった。疲労と空腹で早々に避難小屋にもぐり込む。

5月2日 ○のち①のち◎ 出発(7:05)→潤沢岳(7:30)→潤沢の科尔(8:30)→ドーム(9:50)→北穂(10:10→10:30)→キレット最低科尔(13:15→14:00)→南岳小屋(15:10→15:20)→槍の肩(18:10)

瀧沢岳の登りはたやすい。しかし、下りは意外と手強く、時間待ちもあって1時間かかる。コルからは主に滝谷側を巻いて、夏道を辿る。キレットの下りはバケツがある。最低コルで茶を沸かして槍までの登りにそなえる。南岳へは夏道が出てアイゼン不要であった。南岳の小屋あたりでガスが出始め、時折見え隠れする槍を目指して、ゆっくり歩く。最後の一登りで槍の肩に着く。

5月8日 ○ 出発(7:15)→槍頂上往復(7:50)→横尾(11:00)

低気圧の移動が止まり、天気は持ち直す。槍の穂を往復して、槍沢に下る。上部はアイゼンを使用し、途中より快適なシリセード。横尾にて、豊坂OBと別れ、石原は瀧沢に向かいもう1泊する。(記 石原)

大峰山横断

稲村ヶ岳→大普賢岳

期間 5月13日～16日

参加者 高橋(L)、藪田

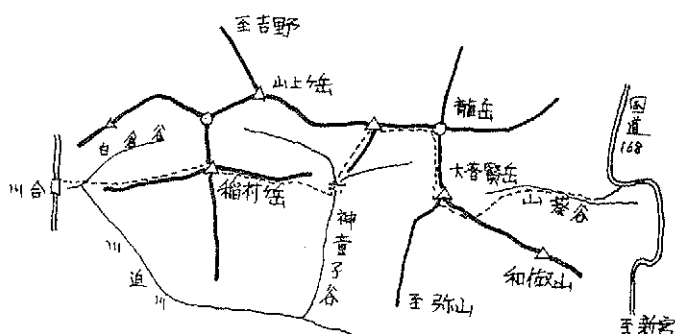


図 16. 大峰山概念図

5月13日 ① 天川川合出発(15:30)→白倉谷出合(16:30)

今日は入山して尾根の取付きまでの短い行動だけなのでノンビリムード。

5月14日 ○ 出発(5:25)→1,088m峰(6:30)→稲村ヶ岳(15:30)→

キレット(16:00)

白倉谷へ100m程入ったところから、植林中に道がありそれをたどる。1,088m峰を過ぎると道はなくなるが、左側が植林なのでブッシュこぎはない。1,300mあたりから、シャクナゲの中を進む。小さなコブを越したところで岩にぶつかった。ザイルをつけブッシュ登りをし、この岩を登りきると、稜線まであと30m程であった。キレットにテントを張った。

5月15日 ①のち◎ 出発(5:25)→大日岳(5:40)→稲村ヶ岳(6:00)→釜滝(12:50)

下り口には踏み跡があったが、1時間も歩くとそれもなくなり、シャクナゲと倒木の中を進む。尾根上に岩が出ているので一ヶ所ザイルを使用、再び岩にぶつかったところで、右へ巻き、ルンゼ状のところを下っていった。途中で滝となっていて、そこはアップザイレンした。結局、釜滝の滝つぼに出た。ここで腹一杯水を飲んでゆっくりしていると、サボリ気が出てきて、釜滝上の河原に設営。

5月16日 ①のち◎のち● 出発(5:30)→大普賢岳(11:00)→コル(1:30)→引き返し(12:00)→再びコル(13:00)→分岐点(13:30)→国道(17:00)

龍岳への尾根を登り縦走路を大普賢へ。急な下りを降りるとコルに出る。このコルの左の沢に赤旗がついていたので下りかけたが行きづまりバックする。再びコルで休んでいると、上方にカモシカが現われた。そのカモシカは今我々が登りなおしてきた沢へかけ降りていった。

小藁谷への道は廃道になっていて、降り口もはっきりしない。先程からガスっているので、迷えば困ったことになるのでテープをつけだした。ずっと山腹をトラバース気味に下っていくと、棧道の朽ち落ちたのがあり、どうやら道に間違いないと安心。ここでアップザイレン二回。

あとは道らしきものをどンドン下るだけであった。振り返ると、ガスの中に、切りたった岩壁があり、一条の滝、樹の緑と、水墨画を思わせる景色であった。(記 藪田)

新人歓迎大杉谷山行

筏場～大台ヶ原～大杉谷～船つき場

期 間 6月13日～6月15日

参加者 大宅(L)、高橋、梶浦

6月13日 ◎ 筏場(18:30)～CS
(18:40)

6月14日 ●のち◎のち● 撤収(5:30)
ー釣出発(7:40)ー大台辻(10:25)
ー日ノ出岳(13:40～14:00)ー堂
倉無人小屋(15:00)

6月15日 ● 出発(6:00)ー
再出発(6:55)ー大杉谷(7:30)ー
桃木小屋(9:10)ー船つき場(12:00)

夏山定着合宿

剣岳 BC二股 (概念図はP14図1参照)

期 間 7月30日～8月12日

参加者 稲垣(L)、大宅、大西、藪田、高橋、
鹿野、渋谷、梶浦、細川(OB)、甲
田(OB)、黒田(OB)

7月30日 先発隊出発(藪田、鹿野)

7月31日 本隊出発

8月1日 ①のち◎のち● 称名小屋発(11
:20)ー大日平CS(16:20)

8月2日 ●のち◎ 出発(6:35)ー大日
小屋(12:15)ー奥大日岳CS(16:
05)

8月3日 ① 出発(6:55)ー剣御前(
12:30)ー真砂沢出合(16:15)ー
二股BC(18:40)

〈登攀記録〉

左下カンテー左方カンテ

8月8日

参加者 大西、藪田

タイム 取付き(8:00)ー左下カンテ終了
(10:00)ー左方カンテ取付き(10:20)
ー終了(13:00)

左方ルンゼの右側でアンザイレンし、1ピッチ目はルンゼを横断してハンゲ下のテラスまで。2ピッチ目はハンゲの乗越しであるが、さしたるハンゲではないのにアブミ2台ではなかなか疲れる。ハンゲ上は、大まかなフェイスで容易。次のピッチはなるべく直上するようにフリクションを効かせて登るが、小さなカンテを左に移るところが細かく、ハーケンを打つ。その後ピナクルまではやさしい。中央バンドまではなるべく岩をよりながら行く。問題となるところはない。左方カンテは取付き付近で岩がアンサウンドなので気を使う。ハーケンがベタ打ちの状態、アブミを使用するとハンゲの乗越しも簡単だ。ゆっくり楽しみながら登ること40m近くで、iクラック上の左稜線に出る。二番目のハンゲ上の小テラスより左にルートをとったためである。あとは高度感を楽しみながらチンネ頂上へ。

< 個人行動表 >

日	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
	☉, ●	○	☉, ●	●	○	○	○	○	①		
稲垣	雪 上 訓 練 (三ノ窓雪渓)	八ッ峰 上半	三ノ窓 往復	雪上訓練 (中止) (長次郎雪渓)	チンネ 中央チムニー a b ジャン	チンネ 左稜線	休養	Ⅵ 峰 Dフェース	撤 収		
大宅		Ⅵ 峰 A, B フェース	三ノ窓		チンネ g c d ジャン	剣本峰	休養 テボ回収	Ⅵ 峰			
大西		Ⅵ 峰 Cフェース	八ッ峰 下半		チンネ 左下カンテ 左方カンテ	Ⅵ 峰 Cフェース	Ⅵ 峰 三ノ窓側 フェース	休養			
高橋		Ⅵ 峰 Cフェース	三ノ窓		チンネ 中央チムニー a b ジャン	チンネ 左稜線	Ⅵ 峰 三ノ窓側 フェース	休養			
藪田		Ⅵ 峰 A, B フェース	三ノ窓		チンネ 左下カンテ 左方カンテ	剣本峰	休養	Ⅵ 峰 Dフェース			
鹿野		八ッ峰 上半	三ノ窓		チンネ 中央チムニー g c d ジャン	T・K	T・K テボ回収	Ⅵ 峰			
渋谷		T・K	八ッ峰 下半		T・K	T・K	Ⅵ 峰 Cフェース	源治郎 尾根		休養	
梶浦		Ⅵ 峰 Cフェース	T・K		T・K	T・K	剣本峰	T・K		T・K	
細川		入山	八ッ峰 上半		三ノ窓	休養	チンネ 中央チムニー g c d	Ⅵ 峰 Cフェース		源治郎 尾根	下山
甲田			入山		チンネ 左稜線	雪訓	下山				
黒田								入山		源治郎 尾根	下山

チンネジャンダルム左稜線

8月8日

参加者 大宅、高橋

取付きがわからなくて左稜線下の適当なところから取付き、いきなり稜線を登り出す。1ピッチ目の最後のリッジ沿いに行けばフェイス登り

で気持ちよく、少し左にずれると横へつき出た薄い岩に乗っていやな所を通らなければならない。ピレ一点はちょうどいい所にある。2ピッチ目の中程に、脆い岩でできた棺を斜めに立てたようなリッジがある。稜線を手で持って、フリクションで登るところが素晴らしい緊張感がある。頂上へは巨岩を2つ程こえればよい。下りの懸

垂場は P₁、P₂間の岩峰の上からで、いやなトラバースで、そこまで行く。3回のアップザイレンで下降するが、落石の巣になったルンゼなので、気を使うこと限りなし。

八ツ峰Ⅶ峰フェース

8月11日

参加者 大宅、鹿野

タイム BC出発(5:00)-取付き(8:30)-終了(11:30)

Dフェース下のインゼルをⅦ峰目指して横切りそのまま雪溪をⅦ峰基部までつめる。上部はクレバスが連続していて楽しみながら基部のシュルンドに着く。見渡した所、細い雪溪が1ヶ所だけ下れそうに岩へ届いていた。下りのステップを何とか3つ4つ切って、やっと基部に達する。本日のメインイベントの感あり。奥に2ピッチ位の壁があり、そこまで段状の岩が続いている。その左側に少しきつい逆層の丸いリッジがあり、初め残置ハーケンを見つけて何とかそのリッジに取付くが、残置ハーケンからどうしても3歩以上登れないので断念し、段状の岩を奥の壁の基部まで登る。壁は左側が長くそのままりッジへと続き、頂上まで行っているが、下部は傾斜がきつく、右の端の方から取付く。手の甲をいくつも岩に張りつけたような、フリクションのよく効く岩だが、しっかりしたホールドもスタンスもなくフリクションのみで登らなければならない。そしてリスもなく、途中で1ヶ所だけ打ち込んだハーケンもあまり効いてはいないようだった。まるで壁に手と足を吸いつかせるようにして1ピッチ登り、横のハイ松でセルフビレーをとり、不安定な確保をする。それから岩手のリッジへ、わざわざトラバースして行く気にもならず、まっすぐ肩を目ざして登る。もう岩の少ないツライミングとなる。終了した時、ちょうどDフェースのパーティーが、顔をのぞかせて手を振っていた。5ピッチかかった。

Ⅶ峰三ノ窓フェース

8月10日

参加者 大西、高橋

雪溪上の大岩より雪溪を降り、小ルンゼでビレーする。

1ピッチ目、ルンゼを詰めると小ハングがあるがホールドがしっかりしているのでオポジションで左へ巻き、乗越す(35m)。

2ピッチ目、フリクションのよく効く快適なフェース登攀だ(35m)。

3ピッチ目、フェースの上は少々かぶり気味になっている。グリップビレー(35m)。

4ピッチ目、草付きを越えると小さなフェースで、テラスでビレーする(30m)。

5ピッチ目、ややなだらかなリッジで、右横は小さなルンゼがあり、上はかぶり気味になっている。左へまわりこんで、小テラスでビレーする(30m)。

6ピッチ目、細かいスラブをフリクションで越し、草付きに出る。かぶり気味のいやらしいところでビレーする(20m)。

7ピッチ目、やばい草付きのトラバースで左へ10m、木に足をかけて乗越し草付きを少々行く小テラスに着く(35m)。

8ピッチ目、20mの岩で小ハングを乗越す(20m)。

9ピッチ目、草付きを越し、白い岩のスラブの途中でビレーする(35m)。

10ピッチ目、白い岩を少し登り、ハイマツを乗越す(30m)。

11ピッチ目、フリクションのよく効く岩に登る(35m)。

12ピッチ目、その岩の続きに登り、草付きに出る(35m)。

コンティニューアスで3ピッチ程、明るい草付きに登る。

13ピッチ目、ハイマツのブッシュの急なりッジを登攀する(35m)。

14ピッチ目、ピナクルへ行く(20m)。

15ピッチ目、ピナクルよりハイマツ混じり

の岩をギャップへ下る(15m)。

16ピッチ目、草付きの緩いルンゼを詰める(30m)。

17ピッチ目、ルンゼを詰め草付きに出る(35m)。

18ピッチ目、ブッシュの中をトラバースして、大岩の下へ行く(30m)。

19ピッチ目、岩と岩の間を目指して登る(25m)。

20ピッチ目、ハイマツのブッシュを登る(35m)。

21ピッチ目、ピナクルへ(35m)。

22ピッチ目、ギャップへ(15m)。

23ピッチ目、目の前の三角形のコブの左のルンゼを詰める(35m)。

24ピッチ目、ルンゼを詰め終る(35m)。

25ピッチ目、非常にやばいブッシュフェースを登る(35m)。

26ピッチ目、やばい草付きを登り、不安定なビレーになる(35m)。右のルンゼの方がよかった。

27ピッチ目、草付きを少し登り、右の岩をトラバースする(30m)。

28ピッチ目、岩稜を登りeフェースの頭に着く。

下部は気持ちよいフェースである。所々、小さなハングがあるが、簡単に越せる。中部は抜けやすい草付きだ。上部フェースは傾斜もあり、草もついていず、登ると登り甲斐のあるものになると思われるが、ビバークの用意が必要だろう。右に巻いたルートは、岩にこびりついた根の浅いハイマツを手がかりに登るのでやばい。とにかくしんどく長い登攀だったが、こういったものの方が充実感を残す。

夏山縦走

毛勝山

二股—小黒部谷—中谷—毛勝山—毛勝谷

期間 8月12日—8月15日

参加者 大宅、大西、鹿野

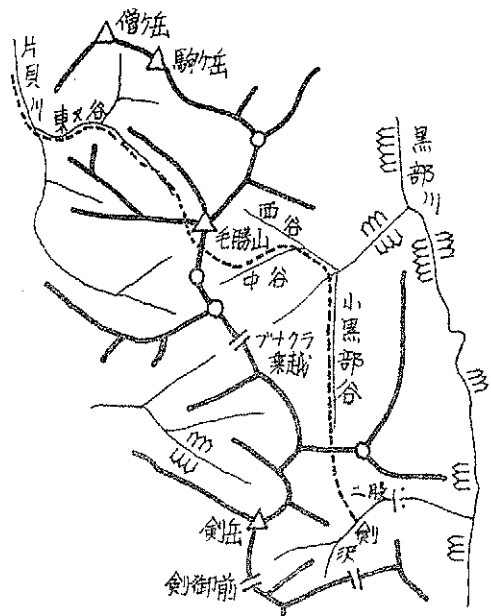


図 17. 毛勝山周辺概念図

8月12日 ①のち② 二股発(7:30)
—池ノ平(9:00—9:20)—大窓出合
(10:20)—BS(16:40)

池ノ平小屋のすぐ下のルンゼを250m程下ると小黒部本谷で、雪溪が大窓出合まで続いている。大窓出合のすぐ下流に滝があり、雪溪が切れている。左岸は岩壁。右岸のきつい草付きとガレを高巻きする(40分)。白ハゲ、赤ハゲ間の沢の出合で雪溪がなくなり、ゴロゴロした石の上を行くと、やがて左岸が大きなガレと交わってくる。スピードが落ちる。しばらくして大きいブロックに行手をはばまれる。その下は先のほうで滝状になっているのでアンザイレンし、異形なブロックの上を通過。何とか左岸に下ると、両側が岩壁になった8~10mの滝の上に出た。中程で左岸だけ大きな段になっているの

で、その段までアップザイレン。なれど木の棒のピンでは、ザイルが濡れて回収できず、やむなく後続2名はアンザイレンして、岩伝いに下りる。中段からは、半分程入ったハーケンでアップザイレン。終点は首から下が水につかってし

ンドから雪溪へはい上る。少し行くと雪溪が滝で切れていて、その上で左へ直角近く曲っている。右岸を1ピッチ、アンザイレンしてハイ松のブッシュの後急な草付きのいやなトラバースをして100m程先のガレ地を下って雪溪に下り

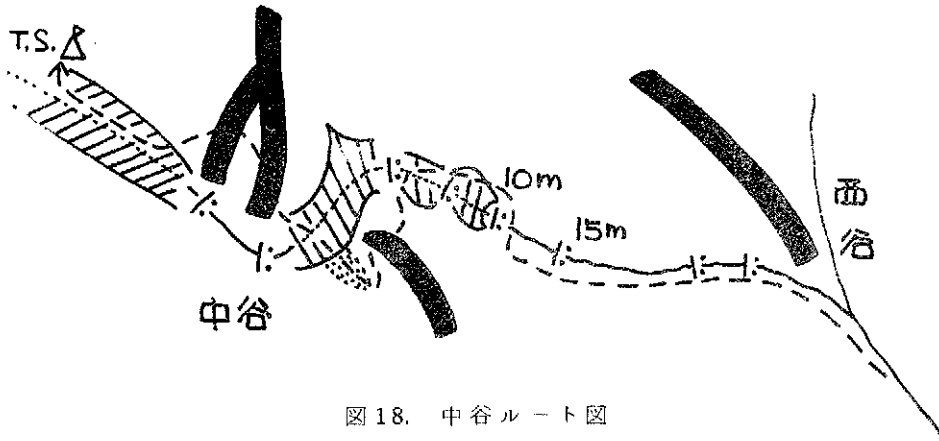


図18. 中谷ルート図

まう滝つぼの中だ。とても登れそうにない滝である。赤ハゲから北東へ下りている沢の出合から少し上流といった見当になる。滝の直下から500m程下流に野営跡あり。下流の方でビバークする。

8月13日 ①のち◎ 出発(6:10) - 西谷出合(8:10) - 中谷出合(10:10) - BS(16:40)

小黑部の谷がひらけ、広河原にでる。地形図では長い距離に思える所が短時間で飛ばせ、谷では距離感がまるで狂ってしまうと思われた。折尾谷のすぐ隣に西谷が入っており、そこで小黑部谷は右へ直角に折れている。中谷出合までは、大きな石が転がっていて小さな滝が続いており、徒渉やちょっとしたへつりのくり返しであった。中谷に入るとまず小さな滝を右岸沿いに3つ程越すと15m程の滝があり、右岸を10m程アンザイレンして乗越す。その後すぐ10m程の滝が現われ、その上は雪溪が乗っており、大きなトンネルが口を開けていた。その中はゴルジュで、先の方に滑滝が見えていた。右岸は岩壁で左岸は7月頃まで残雪があったろうと思われるあたりまでガレて、その上が岩壁となっている。左岸に渡りガレを伝って滝を越し、シュル

立つ。曲った所はまた滝のため切れている。左岸の小尾根へアンザイレンして微妙な所を登り、尾根の向こう側をのぞくと、ブロックがなければ快適に登れそうな滝があり、その上は雪溪であった。仕方なく、ルンゼを1つ横切って小尾根の急なブッシュをこぎ、1時間程で目指す雪溪上に出る。これから谷は広げて、雪溪がずっと続いている様だ。少し登って大きな岩が3~4個積み重なった所でビバークする。

8月14日 ○のち①のち◎ 出発(6:00) - 毛勝の科尔(9:30) - ルンゼ下り始め(10:50) - 大明神沢出合BS(13:20) 雪溪を登り始め、小さな尾根を回りこむと、雪溪が真直に科尔までつき上げているのがわかった。毛勝頂上付近は、東面が草原状で踏み跡があった。ジャンクションピークのすぐ下から、最も上部のルンゼを下る。大して悪い所もなく毛勝谷に出、雪溪を下って大明神沢出合でビバークする。

8月15日 ◎ 出発(6:20) - 東蔵村バス停下山(10:45)

黒部

雷鳥沢—五色—東沢出合 —上ノ廊下—
 読売新道
 針ノ木峠

期 間 8月18日—8月20日

参加者 稲垣、高橋、藪田、渋谷、梶浦

8月18日 ◎ 雷鳥沢CS(11:00)
 —五色CS(16:30)

8月14日 ① 五色CS(7:00)—平
 ノ渡(9:45)—船(10:00—10:
 20)—東沢出合CS(12:20)

8月15日 ◎のち● 停滞
 〈上ノ廊下パーティー〉

稲垣、篠田

8月16日 ◎のち● 出発(6:50)—
 広河原(15:15)—BS(16:00)

高天ヶ原へ向かう3名を送り出し、天幕を閉じて我々も出発する。東沢出合からまもなく早速左岸へ徒渉せねばならない。昨日通過した台風はこの黒部にさしたる風も雨ももたらさなかったが、それでも流れは濁っており、水深はだいたいの見当で判断することになる。最初の徒渉は浅く、そしてしばらく行けば、左岸は砂がなくなってきて水面より30cm位のへつりをせねばならない。ニセビンガ辺りであろうか。そのまま左岸のへつりや高巻きを繰り返して下の黒ビンガに至る。下の黒ビンガは高巻き中に、正面に見た時はかなり大きく見えたのであるが、下から見ればそんなに大きくもない。これが下の黒ビンガだとすれば、もうすぐ口元のタル沢出合のはずである。とすれば右岸に渡らねばならないということで徒渉を試みるが、流れは速く深くとても渡れない。やむなく左岸を更に行くことにする(当初、口元のタル沢へ行く予定であった)。すぐ大ゴルジュ帯にぶつかるのであるが、この時に出合を見過ごしてしまったのである。赤牛の西北と東北に広げた両手の作る広い面積から集めた水をはき出す出口にしては全く予想外であった。大ゴルジュ帯は水際突破を

試みるがならず、高巻くことにする。出来得るかぎり低くトラバースしようと試みるが、上へ上へ押し上げられ、結局水面より40m位の上部のハング帯と下部ハング帯との間のバンドを木から木へと移って行くことになる。沢が右へ大きく回り込めば河原が左岸に出てきて、アップザイレン2回で、河原に降り立つ。河原は長く続き、驚いたことに長さ100m位の池にぶつかる。どうやら昨年夏の集中豪雨によってせきとめられたらしい。左岸を1時間半もかかり、どろどろになって巻く。巻き終れば河原は広く、流れは2本に分れている。広河原に出たらしい。が、未だ口元のタル沢を見出し得ない我々にとって広河原とは信じられない。そろそろ頭の隅は見過ごしたのではなかろうかという疑問で占領されてきているのではあるが、ともかくもう少し前進してみる。ここでやっと流れは徒渉可能な位となり左右に渡り進むが、すぐ河原から廊下状となり徒渉も深くなる。時間も時間だし雨も降ってきたので、池の上端まで引き返シレットを張る。

8月17日 ◎夜● 出発(6:45)—引
 返し点(8:45)—尾根取付き(9:15)
 —高天原新道(11:15)—広河原(13:
 15)—P₆(16:15)—口元のタル
 沢二股(18:30)—高天原新道(18:
 50)—BS(24:30)

昨夜じっくり現在位置を考えるが、疑問は解消されるどころか大きくなる一方である。しかしここより下流ではどちらにしても右岸への徒渉は不可能なので、つまり口元のタル沢があったとしても取付けないので前進してみることにする。流れは澄んでやっと深さがわかるようになってきた。水量も減ったようだ。昨日引き返した岩壁下まですぐ至る。かなり顕著な岩で、上の黒ビンガの様に思われるがそれにしては早すぎる。これより廊下状となるが、左右のどちらかに河原がでていて浅くはないが腰を越える徒渉は無くなり、かなり自由に渡って行く。水際のへつりも岩棚の通過も楽で、かなりのハイペースで進む。が、なかなか右岸に沢は入ってこない。どうやら完全に来過ぎたことを悟るが

もどる訳にいかぬ。やがて本流にゴルジュ状の沢が出合い、そのすぐ上に見事な滝を持ったかなり大きな沢が落ちている。ここまでの最も豊かな水量を持つ沢である。とにかくこの沢を詰めることにする。出合からすぐ左の尾根を使つての高巻きであるがなかなか沢身へ下れない。とうとう2,000m附近の台地へ押し上げられてしまう。そして後を振り向くと、なんと薬師が目の前ではないか。かなり来過ぎていることを予想していたのであるが、まさか上ノ廊下の核心部と思われる個所を通り過ぎ90度屈曲点附近まで来ているとはしばし信じられない思いであった。昨日来の疑問も氷が解ける如く解けていく。核心部は昨夏の豪雨でかなりのトロが埋められ、全体的に瀬となったのではなかろうか。水量が増したとしても大きなトロとなるような個所はあまりみられなかった。とにかくここまで来た以上、高天原新道を帰ることにする。広河原の例の池で道は切れてしまう。昨日巻いた左岸はとても行く気がしないので、右岸を道が巻いていることを期待して取付く。が、道はなくなっているので、西北尾根P₆(2,210m)に向かってヤブをこぐ。P₆から口元のタル沢左俣を下るのが一番早そう。モーレッツな笹をこいで、P₆付近で右俣を探しあてる。この右俣はずっと花崗岩の川床が一度も切れることなく、沢身は実に美しい。滝は30m程のものが3つかかっている。これは横を巻くことになる。タル沢両俣出合より10分程下って再び高天原新道へ出る。雨が降りだし、夕闇がせまってくるが、こうなれば一挙に帰幕することにする。すでに12時間行動しているが体力、気力共に十分である。ヘッドランプを灯し出発する。沢が横切る個所は全て道は切れている。慎重に慎重を期して道をひろいつつ進むが、とうとう最後の沢の下り口で、東沢まで40分の道標を最後に道を失う。沢はそれまでの如く、崩れて砂の斜面となっているのだが、傾斜がきつくだりあるいはトラバースはやばそう。北東尾根支尾根をつめ読売新道に出ようと試みるがこの辺りでは、かなり踏み跡らしきものが交わっておりそれらの間をリングワンデリングしているような

錯覚にとらわれる。東沢と目と鼻の所まで来ているのは判っているのであるが、こんな所でやたらとうろついてもいたしかたないので夜が白むのを待つことにする。大木の根元でツェルトをかぶると、さすがに疲れておりそのまま寝てしまう。

8月18日 ◎ 出発(6:50) - B C (7:20)

昨夜はリングワンデリングを心配したが、どうやら着実に前進していたらしく、観察してみたところこのまま尾根をつめればすぐ北東尾根に出れそう。事実その通りで10分で読売新道、30分で東沢出合BCにたどりつく。

<高天ヶ原パーティー>

高橋、渋谷、梶浦

8月16日 東沢出合 - 読売新道 - 赤牛 - 温泉沢 - 高天ヶ原CS

読売新道は良い道だ。左に裏銀をみながら登る。虫が多い。森林帯を過ぎると、草原になりテントがあった。手前のピークが赤牛かと甘い事を考えるが、地図の通り、遠い赤い山が赤牛だ。ガレ場になってからが結構長い。赤牛はガスで、頂上よりザレの稜線を歩き、水晶へ向かう。途中温泉沢へ下る立派な指導標と道があり、下ってしまったが道はすぐなくなってしまった。おかしいと思いながらも石原OBにルートはガレ場と聞いていたので、進みケルンに出会いホッとす。まもなく河原に出て、温泉に行きつく。そのままテント地へ行き、ツェルトを張る。

8月17日 CS - 岩苔乗越 - 水晶 - 赤牛岳 - 東沢BC

暗い中を岩苔乗越へ。雲が黒く垂れこめ陰鬱だ。しかし、乗越は草原で花が咲きいい所だ。水晶へ向かう。水晶岳は岩峰がいくつかあり、どれがピークか分からない。あとは昨日の道を帰る。

8月18日 ◎時々● 停滯

上の廊下パーティー帰幕

8月19日 ① 出発(7:00) - 針ノ木峠CS(14:00)

8月20日 ○ 針ノ木岳往復後出発(7:00) - 扇沢下山(10:00)

秋山個人山行

荒川三山縦走

期 間 10月10日～10月15日

参加者 高橋、梶浦

10月10日 国代刀(9:50)→転付峠
(14:30)→二軒小屋(15:30)

国代刀は工事をしていた。吊り橋を渡ってから河原沿いの道を歩く。昔はトラックが入ったらしいが今は荒れている。ハチ峠はしんどい登りで、峠からはゆるい河原歩き。転付下の尾根の元に小屋があり、転付への登りは、けっこう長くていやになる。つめは左へトラバースしていてなかなか着かない。少しバテ気味で峠に着く。天気は悪化しており急いで下る。小屋はゴタゴタした感じである。

10月11日 出発(6:50)→千枚(13:00)

4時に起きるが雨がかなり強いのでまた寝る。5時半ごろ目を覚すと雨が止んでいる。あわてて撤収。雨は止んでいるので、そんなにしんどくもない。地図は、2,503mのあたりからわかりにくい。二重山稜もありところどころに一斗缶がある。雨がまたショボ降りだした。ハイ松はなかなか現われない。千枚は明日登ることにして、小屋へ下る。

10月12日 出発(6:15)→小河内(16:30)

前線通過するかもしれないが、多少心配。高山裏露营地あたりから晴れ間も見えだす。しかしそれもわずかの間。小さなコブが続きはかどらない。倒木多くいやな道だ。頑張っって小屋まで行く。

10月13日 ● 停滞

10月14日 出発(13:00)→三伏峠(15:00)

晴れ間が見えだしたので三伏まで行くことにする。風邪で頭がガンガンして、短い所だが、しんどかった。夜中、見ると月がでている。好天まちがいなしだが、風邪のため下山する。

10月15日

三伏峠からは、今まで全然見えなかった山々が眼前にある。塩見はドッシリした風格で少し紅葉している。荒川は小河内の陰で見えず。風もない穏やかな日と和を、なんとなくわびしい思いをして下る。(記 高橋)

北岳バットレス

期 間 10月12日～18日

参加者 大宅(L)、篠田

10月12日 ◎ 伊那北(7:13-9:50)→戸台(11:30-11:45)→赤河原(15:05)

10月13日 ◎のち● 出発(7:00)→北沢峠(7:00)→広河原(12:30)

八丁坂は大した登りでもなく、静かな秋の湿っぽい空気につつまれて静かに歩く。北沢下部1/3あたりから林道をつくる大工事がなされている。途中からトラックに乗せてもらう。紅葉に映える切りたった北岳北面、特に恐い傾斜のルンゼとハンクの重なった壁に驚く。二股まで行っても、明日は登れないだろうと思い、広河原で設営。

10月14日 ● 出発(11:00)→二股(13:30)

10月15日 ○ BC(5:40)→Bガリ→大滝(7:30)→洞終了(8:30)→第四尾根取付き(9:15)→洞終了(13:10)→北岳(13:50-14:10)→BC(5:05)

前夜より快晴。バットレス沢を遡ってBガリ→大滝を登攀。ルートを右に誤りひどい目に会った。四尾根の取付きらしきところより、困難な逆層と木登り5ピッチで取付く。どうやら誤って下部より取付いたらしいとわかる。簡単な岩

稜をトコトコ登り、息切れ激しい。マッチ箱はちょっとした吊り上げの後、傾斜のないナイフエッジ。アップザイレンはナイフを10mほど下る。ふられるととんでもないことになる。クライミングダウンもできる。第三コルは絶好のピバーク点だ。ガスがでてきて中央稜は見えない。最後にせまいチムニーを楽しんで登攀を終了する。頂上はまだ見上げる高さにある。ガスの間に見える中央稜はただ恐ろしいばかりだ。

10月16日 ○のちガス BC(5:30) - Cガリー取付点(7:05-8:25) - 終了(11:05) - 北岳(11:00)

下から見ると困難な滝の連続と落石の巣のようなCガリーもノンザイルでいともたやすく通過できた。中央稜の初めのトラバースは腕力にまかせた強引なもので、激しい息切れが残った。後はバカみたいに易しくなり、第二ハング下のトラバースは高度感あり気持ちよく、その乗越しも弱いところを通れば大きなスタンスもありアプミ不要。リッジに出ると10mほどで傾斜が落ち、写真を撮ったりする。実にあっけなく終わってしまった。

10月17日 ● 停滞

10月18日 ① BC(6:00) - 取付き(Dガリー大滝)(7:40) - 終了(10:00) - BC(11:00) - 広河原(13:00)

前夜、晴れそうなので午前中岩登りすることにして、Dガリー大滝を登り緩傾斜帯よりAガリーを下降することにした。下から見ると何でもなく見えたのに、取付いてみると細かく、逆層のつるつるの岩に悩まされて、大滝の落口へトラバースして逃げる。そこより見ると大滝上部のスラブはつるつるの岩とその間を横断する草付きが続いて、傾斜がきつく、オーバーハングで一昨日取りついた四尾根下部へと続いている。Dガリーをさらに登り、緩傾斜帯へトラバースして下山する。(記 大宅)

11月偵察山行

魚沼三山偵察

来春の春山に魚沼三山へ行こうと云う声がおこったのは、9月下旬の頃であった。それまでも春山についての声(具体的には、硫黄尾根)はあったが一向に大きく燃えあがるに至らなかった。

思うに我々は北アルプスばかりを長く登りすぎた様である。確かに北アルプスは山としてあらゆる要素が凝集していて、最も魅力的である。しかし、我々は北アルプスにばかり入っていたために、登山の魅力の最も大きな事の一つである目の前のピークに穩れてみえない尾根を想像して、期待と不安でゾクゾクする様なあの気持ち、この初心を忘れかけていた様である。

魚沼は我々の目に非常に新鮮に映った。10月秋山前の部会で春山の魚沼行が決定された。文献も少なくほとんど我々には入ったことのないこの山域故、我々は、全員で主稜線を中心に3パーティに分かれて偵察を行なうことにした。(概念図はP73図28参照)

八海山

期間 11月1日～4日

参加者 大宅(L)、鹿野、高橋

11月1日 ○ 大崎(14:30) - CS(16:10)

里宮からの登りは、かなり急な登りで、鎖が3～4ヶ所ある。しかし春は通れそうである。小屋はまだきれいである。水場はパイプがこわれていて、少し上まで行かねばならない。

11月2日 出発(6:30) - 稜線(7:05) - 女人堂(11:10) - 薬師(12

:30) 千本松小屋CS(1:50)

稜線の途中から雪が出てくる。池の峰付近は広く夏道も溝の中を歩いていたりして、ガスった時は、わかりにくい。女人堂へのつめは鎖があるが、急でいやらしい。薬師岳へのつめは、浅いルンゼの中を鎖が張ってある。しかし春は問題ないと思われる。千本松小屋は5~6棟ある。

11月3日 出発(6:40) - 大日岳(9:00) - 丸山(10:10) - おかめ(14:20) - 大黒様(15:20) - CS(16:30)

1峰の取付きは、ハングして全然だめ。右へまわりこむ。下る時には大きな木(たくさんあるが)の下を行かないと下れなくなる。ルンゼを鎖で登ると、やせ尾根となる。2峰へは楽にたどる。2峰は広くテント2張位張れる。下りは岩のやせ尾根で、短いが、風があつたらいやな所だ。降りると左手の水無川側は切れている。これから尾根はほとんどナイフエッジとなる。5m位の鎖にぶらさがって下り、その後鎖をたよりに40m位、トラバースをする。もう一つ同様なコブをこすと屏風尾根への分岐があり、テントが張れる池がある。またコブを越す。この辺は岩に氷がついている。はしごや、鎖を登るひどいコブの連続だ。いずれも10m前後だ。最後に、いわゆるアク、これを越えると、岩峰群は終わり、1208尾根への分岐

点になるのだがP7と、その手前の岩峰は大きく急である。P7の水無側の登りには、キスリングのためザイルを出した。そこからは、尾根はやせてはいるが、広々とした感じで、テントも張れそうだ。丸山へ着くと、おかめが見えた。端から端までうんざりするほど長く、低く、細いでこぼこの稜線が見えた。下りに鎖場が2ヶ所、中岳への登りに2ヶ所ほどあった。お月山の手前2つ目の肩のてっぺんに設営する。(図19、20、21参照)

11月4日 ○のち◎ 中ノ岳-兎岳手前のコル

お月山のてっぺんで、稲垣パーティーに会い、ハイ川源頭のただ広い笹原を、北東の方向に中岳のピークへ登る。兎岳との最低コルで設営する。翌日は、十字狭へ下る。

八海山

丸山からP8まではやせ尾根だがテントは張れる。1,208m尾根への下り口はルンゼ状になっており、道は岩壁の中、60~70度の傾斜の鋭場続きだ。春には使えぬ。P8はほぼ垂直の鎖場、八海山中程にある池附近とP1、P8のあたり以外は両側ともに切れており、巻くことは不可能だろう。池附近はテント10張位張れる。P1は左側をまわりこんで千本松小屋へ向かう。直登はハングしている。みな10m前後のコブだ。

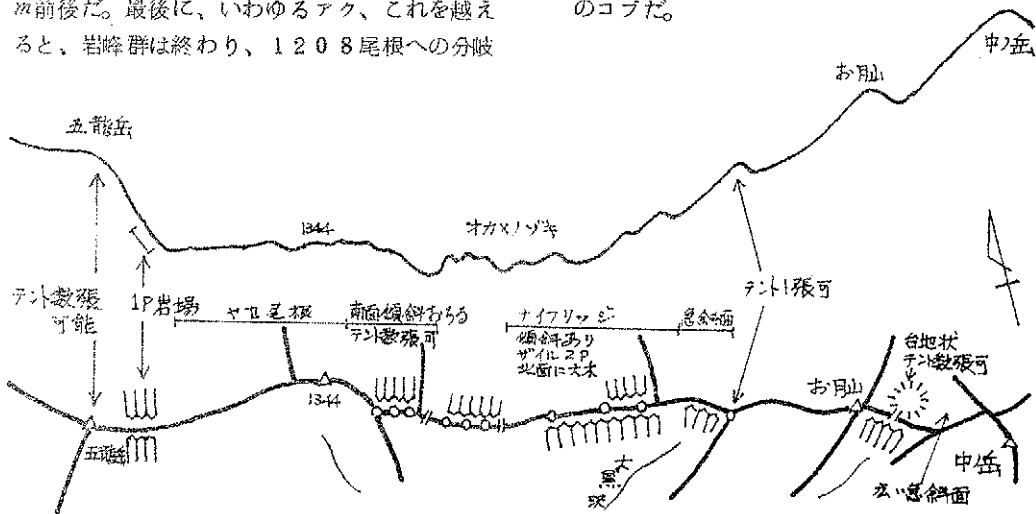


図19. オカメノゾキ周辺

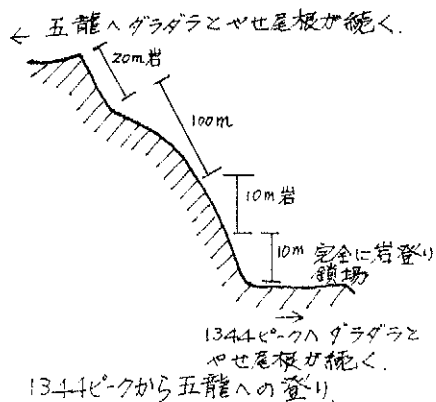
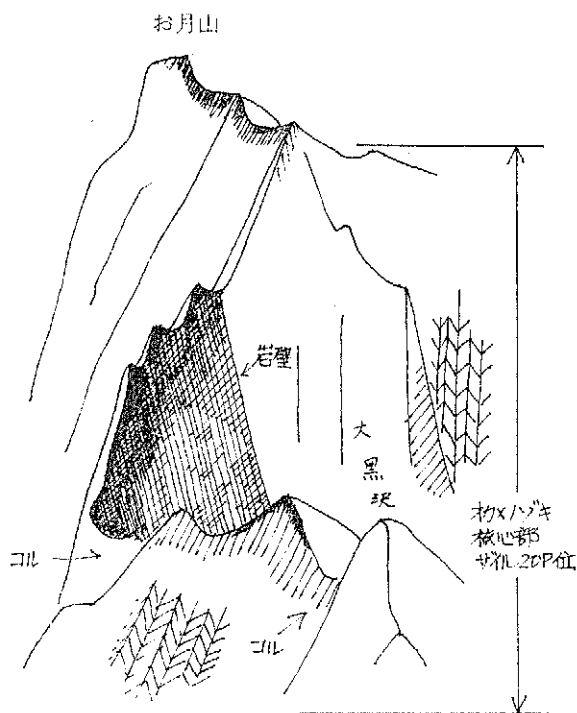


図 20



1344 ピークの1つの東のコブよりお月山方面を望む

図 21

郡界尾根

期 間 11月3日～5日

参加者 大西、藪田

11月3日 駒ヶ岳(7:00) - 池ノ塔C
S(15:45)

稲垣パーティーと別れ、駒ノ小屋の前より左へ尾根を下る。雪は膝までもぐる程度だ。が、ブッシュがあるので歩きづらい。フキギより尾根は大きく曲がり、かなり高度を下げる。ブッシュがひどくなりいよいよはかどらない。オツルミズ沢がすぐ下にあるのに対して佐梨川側ははるか下に雪渓がのぞいている。大きなコブが3つ、小さなのをいれと5つぐらい数えられるが、どのコブも広くなく春にテントを集結できそうにない感じである。全体的に登降の傾斜はきつい。池ノ塔尾根は上部が少しやせた感じであるが大して問題もなさそうである。池塘のあたりは広く、尾根へは斜面となって続いている。

11月4日 出発(6:50) - 高石沢出合
(17:30)

昨日に輪をかけたようなひどいブッシュで、まったくはかどらない。木登りの連続である。アオリの次のピークは登り下りともに傾斜がきつく、岩もところどころ出ている。特に下りは左右両側が岩となっており、その間をジグザグに木にぶらさがりながらの下りとなっている。ここを下りきったコルには3m程岩のギャップがあり、踏み跡らしきものが現われ、少しは楽になるが、相変わらずのブッシュである。丸いコブを一つこせば次がヨモギである。ヨモギで郡界尾根と別れて、踏み跡をたどり北西に下る。途中より沢身の下降となる。一ヶ所滝の高巻きでとどろいたが、夕やみが迫るころには何とか道に出ることができた。

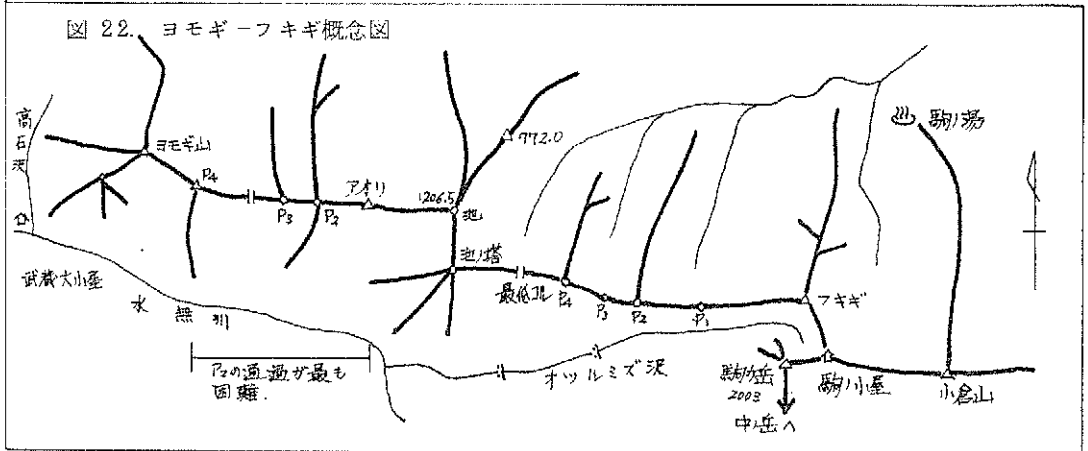
11月5日 ヨモギ偵察

高石沢・水無川出合よりヨモギへの尾根に取

図 21

りつけ、そうそうに下る。ここらあたりは春で
 3~5mの積雪があるとの地元の人の話であっ

〈偵察報告〉



郡界尾根

荒山-ヨモギ山

(荒山まで三月中旬は無雪道路。荒山で3m前後の積雪量)ヨモギ山南西尾根は取付きをどこにとっても同じで、下部に拡がりを持った尾根である。ジャンクション手前に岩があり、ここでは傾斜もあるが左側を巻くように登り尾根に出れば、ピークまで傾斜のない顕著な尾根である。

ヨモギ-アオリ

ヨモギ山からP4までは、タラッとした稜線だが、一ヶ所やせている所がある。P4よりコルまでは傾斜はそうなく忠実に稜線依りに行けば問題なし。ヨモギ、P4ともピークは広い感じの丸山だ。P4-P3間のコルは岩で、ちょうど1m位の窓になっており、P4側が4mの岩、P3の登りはややきつい、北側しか切れておらず、春ならラッセルだけで通過できるだろう。問題はP2の登りである。高度差は80m位だが、両側とも切れ、基部がナイフになっており、傾斜は急で所々に露岩があり、それを巻き乍ら登ることになるだろう。そして一ヶ所、岩を越すのに相当のアルバイトが予想される。フィックスするにしても格好のピンは発見できないであろう。

アオリ-池ノ塔 (図23参照)

アオリから池ノ塔へのピークは2ヶ所短い雪のナイフリッジ(10m位)になるところと一ヶ所急な登りがあり、きれいに90度回ったところに池ノ塔ピークがある。アオリでは池の上より一段上の台地の方がCSとして適する。池ノ塔より最低コルへは楽な稜線のややオツルミズ沢側を、1つのコブを越えて下る。最低コルへ下る時、雪がついてもかなり悪い状態の岩場(60m)がある。

最低コル-フキギ (図24、25、26参照)

最低コル、P6はテント2張ずつ。P5の下りは全体として傾斜はないが、2-8ヶ所10m位のフィックスが必要であろう。ここは雪のつき方が悪い。P4から100mはかなりやばい。佐梨川側に500m垂直に落ち、雪庇が出れば、ザイルの必要がある。その先は比較的広い稜線だ。P3の下りは両側切れていて急であるので、30mのフィックスが必要だろう。P3からP1までは、オツルミズ沢側が傾斜がないのでトラバースが楽であろう。フキギの登りもかなりのアルバイトだ。コルはナイフになるが、オツルミズ沢が近く、高度感はない。この急斜面は直登すれば雪崩の心配はないであろう。フキギのピークは途中でトラバースする方がよい。

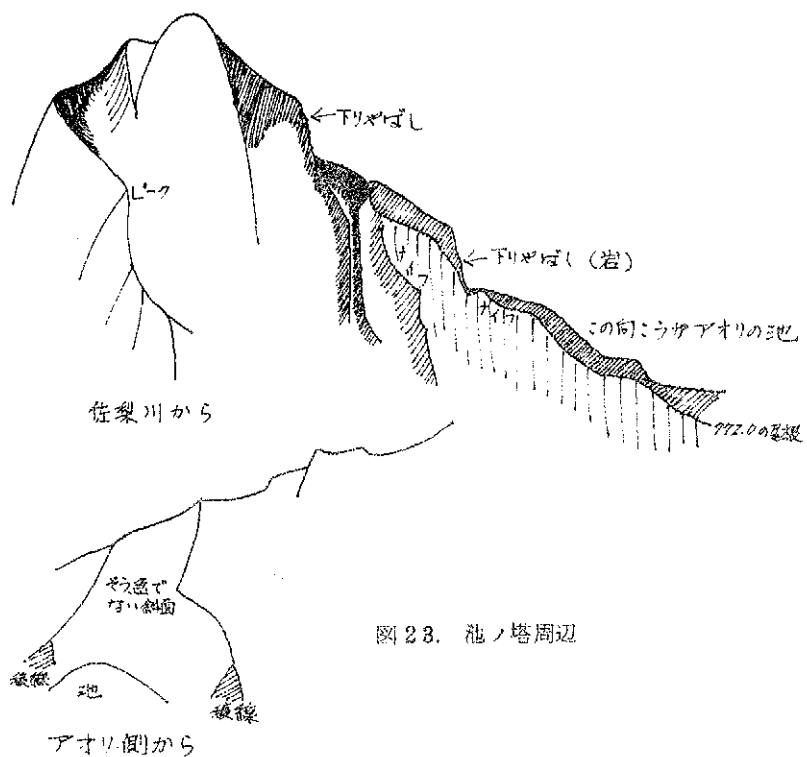


図 23. 池ノ塔周辺

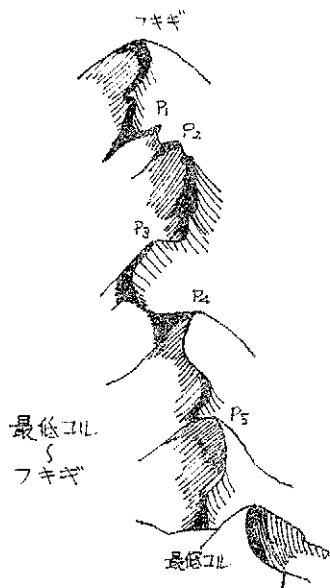


図 24.

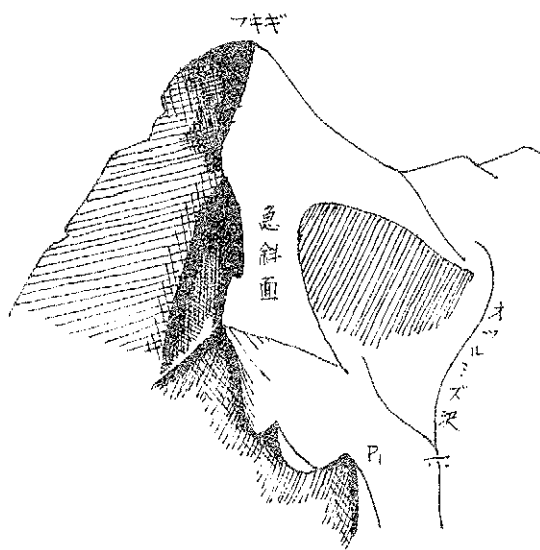


図 25. フキギ拡大図

フキギより駒小屋へは、ラッセルだけで問題はないであろう。駒側からの雪崩は心配なし。

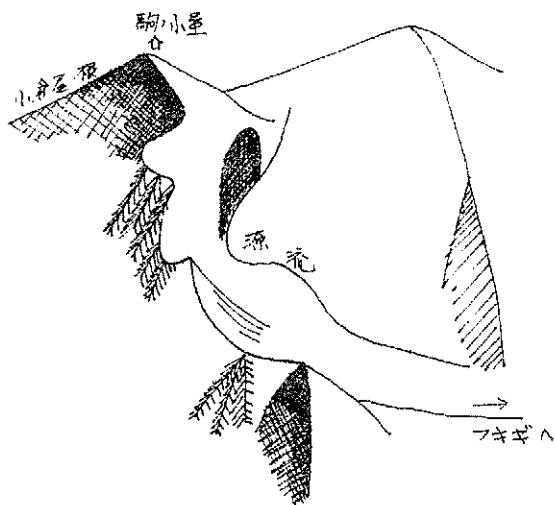


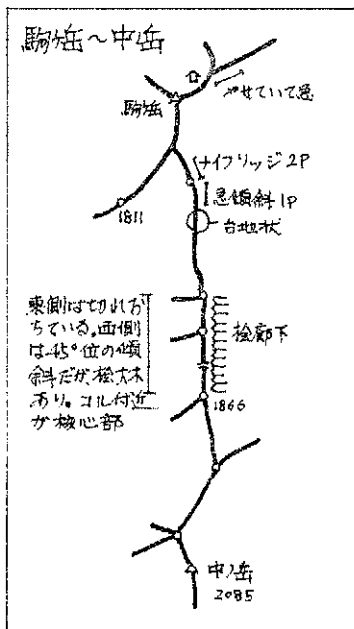
図 26. 駒ヶ岳

駒ヶ岳—中の岳

期 間 11月1日—5日

参加者 稲垣(L)、籓本、梶浦

図 27.



11月1日 ○ 駒の湯出発(11:40)
—900m尾根上CS(16:00)

小出より枝折峠へのバスは昨日の雪で運休の由。タクシーも入ってくれない。いたしかたなく計画を変更して、駒ノ湯～小倉山の尾根から登ることとする。八海へ向かう大宅と別れ郡界尾根パーティーの大西、藪田と共に駒ノ湯手前までマイクロバスで行く。ここで荷分けして出発。重荷と急登にあえぐが荷をおろして休みをとれば、紅葉の奥に、静まりかえる佐梨川奥壁が疲れをとってくれる。尾根上900m位の所で道にテントを張る。なおテント設営の時になってポールを忘れたことに気付く。

11月2日 ○ 出発(6:00)—小倉山
(9:15)—駒の小屋CS(12:45)

CSのすぐ上から雪が出てくる。尾根は非常にきれいに、これといった所もなく小倉山に続いている。小倉山で積雪50cm位か。トレースはバッチリついている。駒ヶ岳の肩にある駒の小屋にデポさせていただく。天気はまだ持ちそうなので、郡界尾根パーティーとテントを変え、計画通り行くことにして立たないテントをかぶる。夜半息苦しくなって時々目をさます。

11月3日 ○ 出発(6:50)—駒ヶ岳
(7:30)—中ノ岳小屋(12:50)

大西パーティーと共に駒に登り、ここで別れる。前駒の下りが少々ヤバイが検廊下は名のとおり檜の大木が密生している。東面は大きく切れおちている。1,866ピーク付近が核心部となろうが、さほどのことはない。ここで檜の根くぐりなどを強いられて大いに消耗する。中ノ岳まで一ヶ所ヤセ尾根があるだけでたんたんとしている。中ノ岳付近は広い。中ノ岳小屋は全く粗末なもの。積雪期使用は不可能だ。

11月4日 ○のち◎ 出発(6:00)—
1,778m CS(16:00)

中ノ岳から真直お月山へ下る。トレースをはずしてしまい時々モモぐらいのラッセルとなる。お月山コルは台地状で設営可能だ。お月山の下りで八海からの大宅パーティーに出会う。お月山から300m下った所で尾根の傾斜が緩くなり、テント地となりそう。ここからいよいよ

おかめにかかる。さすがに尾根は細く急で、一歩一歩慎重に下る。1,344ピークまで顕著なコルが3つあり、この間が核心部と思われる。もちろんオールフィックスが必要であろう。

1,344ピークから振返れば全く大黒沢頭附近のヤセ尾根は今にも倒れそうである。1,344ピーク前後から、尾根は南西の傾斜が落ちテント設営可能か。五龍の登りは岩混じりで下部は10m程岩登りをしなければならない。五龍頂上にてやっと大きなCSがあるそろそろ崩れてきた空模様は追われる様に八海山1,778ピークを越え雪をならしてCSとする。

11月5日 出発(9:00)~1,268m
尾根より下山(14:00)

晴れたら薬師岳を見に行こうと考えるが晴れそうになく1,268ピークのある尾根を下ることにする。尾根といっても上部は岩壁となっていて、春には使えない。道はルンゼ状の壁を下り、トラバースして傾斜のおちた尾根に入っている。ほとんど鎖にぶら下って60~70度の壁を下ることになる。ザックをおろす箇所も満足にない。トラバースも足もとの岩が落ちて神経の休まるヒマがない。やっとトラバースを終え尾根に入ればほっとしてやたらと煙草がうまい。あとは例の如く下山する。

御岳アイゼン合宿

期間 11月21日~24日

参加者 稲垣(L)、大宅、大西、篠本、鹿野、
篠田、高橋、梶浦、佐々木(OB)、
出雲路(OB)、加藤(OB)

11月21日 ○ 濁河温泉(11:25)
-サイの河原CS(4:15)

11月22日 ○ 出発(6:30)-帰幕
(14:45)-大西、篠田、出雲路OB入
幕(15:30)

11月23日 ⊕ ⊕のち○ 出発(6:20)
-再設営(11:45)-帰幕(16:30)

11月24日 ○ ⊕時々⊕ 出発(6:40)

-五の池(7:50)-濁河温泉(10:15)
-下山

今回はアイゼン未経験者が1名のみであったので、アイゼン歩行はゲレンデ斜面ではほとんどやらず、自由にあちこちを歩いた。ゲレンデでは専らピッケルストップとザイルワークに終始した。今回の目標にコンティニューアスクライミングのストップがあったが、これはスタカットの時のいわゆるJAC方式を試みたが、これが最も確実性が高いと思われ、これ一つにしぼって練習した(但しストップの滑落の場合)。かなり止められるまでになったが、習熟には程遠いであろう。今後一層磨きをかけなければいけない。雪は軟かかった。特にアイゼンをけ込まなければならぬ様な氷は全くなかった。が、反面風に積雪が舞い上がり地吹雪となって、毎日訓練日和であった。地吹雪のため3名が両頬に顕著な凍傷をつくった。全体としてかなりの成果があったと思われるが、とても冬山、春山を保証してくれるものとは思えない。日頃のトレーニングに励みたい。(記 稲垣)

冬山合宿

後立山縦走

期間 12月22日~1月1日

参加者 稲垣(L)、篠本、高橋、篠田

12月22日 ⊕ 親の原(9:45)-樹
ノ森(11:00)-阪大桐ノ木寮(12:
00)-成城大小屋(13:00)-天狗原下
段CS

リフトを使用して樹ノ森に上がる。湿雪が舞っているが数日来的好天のためか雪はよくしまっている。トレースをはずしてもほとんどどぐ

らない。重荷ではあるが天狗原下段まで登る。

12月23日 ⊗のち① 出発(7:15)
—白馬大池(11:00)—小蓮華岳(16:30)—三國境手前CS

雷鳥坂でワカンをアイゼンに替えて小蓮華に向かう。この頃より天気は快方に向かうが稜線は風が強い。小蓮華の登りで時々強いられる吹きだまりのラッセルはきつい。全員バテ気味で、三國境手前の稜線上の台地にテントを張る。

12月24日 ⊗ 撤収(14:00)—三國境(14:30)

強風が吹き荒れている。停滞とするが12時の天気図で台湾坊主の発生を知り、天幕を三國境の二重山稜内に移す。移動中ケロシン8.5ℓを、カンに穴をあけ失うが、計算の結果、何とかもつことがわかりホッとする。

12月25日 ⊗ 停滞

日本海低気圧と台湾低気圧にはさまれているが荒れるはずの天気は全く荒れない。午後、3名で三國境を偵察する。雪が吹きだまりイヤらしい。

12月26日 ⊗のち風雪 出発(7:00)
—白馬岳(10:00)—村営小屋冬季小屋(11:00)

三國境は夏道附近をフィックスして通過する。おだやかな朝も低気圧の通過で風雪模様となる。スカイラインは定かでなく緊張する。白馬の下りは夏道ぞいのクイをひろって進むが、村営小屋附近の雪面は方向感覚を失わせる。雪のいっぱい吹き込んだ冬季小屋を除雪して、天幕一張分の空間を作る。

12月27日 風雪 停滞

12月28日 ○ 出発(6:45)—杓子岳(8:30)—白馬鑓ヶ岳(9:45)—天狗小屋(10:45)—不帰沢コル(13:15)—不帰Ⅰ、Ⅱ峰コル(14:30)—Ⅱ峰北峰台地(16:45)—北峰台地に戻り設営(18:25)

快晴。日本海、能登半島から富士山、南アルプスまで見渡せ、全員の意気も上がる。杓子、鑓のあたりで一時ガスるがすぐ晴れる。天狗の大下りは慎重に一步一步下る。不帰Ⅱ峰にかかり、

ザイルをだしてフィックスして登る。ザイル3ピッチで北峰中段に達し、更に1ピッチ登るが今一步で日没となり、台地にアップザイレンで下ればもう真暗。細野の灯がヤケに明るい。台地状の雪面をけずり、設営する。

12月29日 風雪のち◎ 停滞

12月30日 ○ 出発(6:30)—Ⅱ峰北峰(8:45)—唐松岳(10:30)—白岳(14:30)—大遠見附近CS

空が白むのを待って出発する。右リッジに沿って3ピッチでⅡ峰頂稜に達する。以降はほとんど夏道沿いに進む。快晴ともなれば唐松に夏山並の人影を見る。大黒岳下で遠見尾根パーティーと初めてのトランシーバー交信をかわす。16:00ドッキングを約し、汗をかきながら遠見尾根を下る。

12月31日 風雪 出発(6:30)—五竜小屋(7:40)—五竜岳CS(13:45)

遠見パーティーと共に五竜アタックに向かう。ルートはリッジ通しで、かなり緊張する個所もある。下山の時は下からの吹き上げで目があけられない。誤って八峰キレット側に下山しかかるが、気がつき、登って、下り直す。

1月1日 ①時々⊗ 出発(9:00)
—小遠見(10:20)—神城下山(13:00)

遠見尾根は正月ともなれば完全舗装。地吹雪に追われるように遠見小屋へ。本日ここで設営する遠見尾根パーティーと別れ、神城に下山する。(記 稲垣)

遠見尾根(新人)

期間 12月27日～1月2日

参加者 大西(L)、大宅、梶浦、原(OB)、石浜(OB)、細川(OB)

12月27日 ◎時々⊗ 神城(10:30)
遠見小屋(14:30)

先発の現役3名で一人45kgの重荷でラッセルがどうなるかと思ったがトレースを行くこと

にする。こんな人の多い尾根は二度と来る気はない。

12月28日 ○ 出発(6:30) - 小遠見(8:30) - 遠見小屋(10:30)

計画では腰までのラッセルを覚悟してきたので、余裕がありすぎると後発が来るまで先へ動けないので非常に時間をもて余す。全くうらかな天気だ。

12月29日 ⊗のち◎のち○ 出発(6:30) - 小遠見下CS(9:15 - 12:30) - OB出迎え帰幕(15:00)

明るくなると同時に出てテントを張り、昼寝してからOBを迎えに行く。大宅は下山する。それにしても人が多すぎる。降雪20~40cm。

12月30日 ○ 出発(6:35) - 西遠見CS(8:50)

西遠見までOBもいることだし、トレース以外はブッシュで行きにくいので仕方なくトレースを登る。時間が余り雪洞を掘って遊ぶ。

12月31日 ⊗ 出発(9:00) - 五竜岳(9:20) - 西遠見CS(13:45)

五竜岳アタックは後立パーティーと同じ。今日でやっと冬山らしくなった。新人には貴重な体験になったろう。

1月1日 ① 出発(9:00) - 遠見小屋(11:00)

早く下山しても仕方ないし、食糧も余っているのでもう1日いることにする。

1月2日 ⊗ 出発(8:45) - 神城(11:00)

最後の日にかなりの降雪がありもっと早ければと悔やまれた。降雪50cm~60cm、新人の訓練にはスキーをもってくればおもしろいが、人が多いのが気に入らない。(記 大西)

〈合宿を終えて〉

我部ではここ数年尾根から頂上への冬山を行ってきたのであるが、少々飽きたのであろうか、本年は縦走の声が高くなった。また秋の偵察行を春山予定の魚沼一本にしぼった故、偵察の必

要のない勝手知ったる稜線ということで後立山白馬一五竜の縦走となった。出発直前のサブリーダーの病欠などがあり、当初苦戦を覚悟で出たのであるが全くの好天に恵まれ、予備日を大きく余まし、計画を終えられた。しかし乍ら、悪天ならば……と思われるところも多々ある。幸い今回は天候が味方してくれたが、つい見落としがちとなる小さなミスも心して反省し、次に備えねばならない。

また新人パーティー(新人は1名であるが)はOB3名の入山が得られ遠見尾根に入った。従来の白馬天狗原の合宿に比べて、常にトレースのある遠見尾根では雪に苦しむことも少なく、この意味では失敗であったが、風雪の五龍頂上に立てたことは良い経験となるであろう。

(記 稲垣)

春 山 合 宿

魚沼三山縦走

郡界尾根、小倉尾根一越後駒ヶ岳一中ノ岳一八海山

期 間 3月18日 - 4月2日

参加者 稲垣、大西、大宅、藪本、藪田、高橋、鹿野、梶浦

〈郡界尾根パーティー〉

大西、藪本、鹿野

3月18日 ○のち① 荒山(10:45) - 尾根取付き(13:00) - JPCS(16:15)

小出よりタクシーで荒山部落へ入る。意外と多い積雪と好天でかなり面白い山行が予想される。当初、北西尾根からヨモギ山へ取付くつもりでいたが、取付きまでの距離と雪崩の心配から

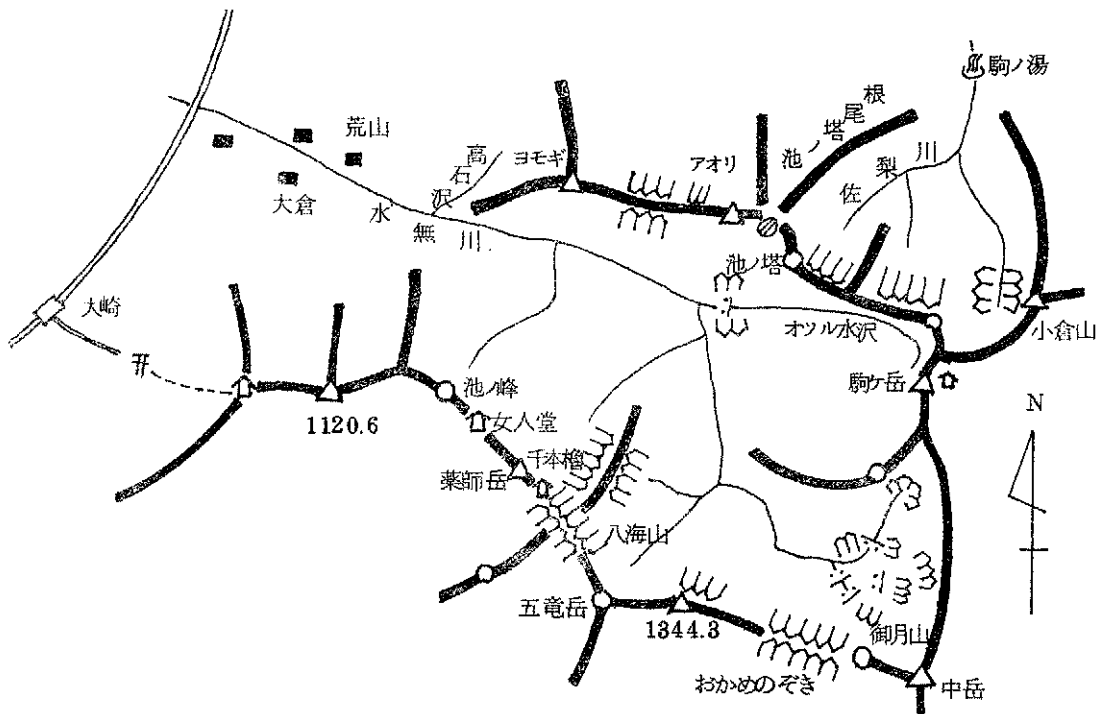


図28. 魚沼三山概念図

比較的状态のよいジャンクションピークへ上る西尾根をルートにとる。雪が重く、ラッセルは予想通りのアルバイトである。最後の突き上げは相当急で、雪崩を気にしながらJPへ登る。
 3月19日 ⊗のち◎ 出発(6:15) - ヨモギ山(8:30) - P₄(9:40) - 最低コル(13:00) - P₃手前CS(15:40)

ヨモギ山までややナイフエッジになっていて、所々大きな雪庇が出ているが、アンザイレンの必要なし。ヨモギ山からクラストしているのでアイゼンに変える。しかし荷物が一人30kg近くあるので行動はかなり制約され、疲労が激しすぎる。P₄附近からガスが濃くなり、最低コルへの下降方向を間違ってしまうルートファインディングに1時間以上もかかる。偵察の時より積雪でかなり様子が変わって最低コルは相当急な下りになっていたが、雪の状態がよく時間をかけて通過し、P₃への急登にかかる。2ヶ所アンザイレンする。

3月20日 ○ 出発(5:20) - P₃(6:00) - P₂(11:00)

P₃へは急な登りで雪板が割れ、キスリングが振られそうになる。クレバスが至る所で口をあけ、雪庇が大きく張り出している。いまにも崩れそうなクレバス帯の一ヶ所はアンザイレンで緊張しながら通過する。P₂の登りは予想通りの急斜面だ。まだ陽があたっておらず、しかも好天でルートがよく見える。フィックスを2ヶ所に施し、後スタカット80mでP₂へ登るアンカーレッジの雪庇が鋭い音と共に落ち、振動を感じながら冷汗とも汗ともわからぬものが一筋背中を伝う。雪がくさりだし、あちこちで雪崩の音が聞えたので行動を中止し昼寝する。この夜は、雪崩の響きが5分おき位に聞える。浅い眠り。

3月21日 ○ 出発(6:30) - P₁(9:30) - アオリ(11:15) - アオリ台地(12:30)

1時間寝過ごし、朝から雪崩の音がする。最初

のキューピーの頭みたいなピークの登りからやばく、20m程のナイフが続き50mアンザイレン。後はチンタラと行くが雪がぐさり始め、鹿野がアイゼンにだんごを作りスリップする。雪が軟かくすぐに止る。急な下りでピンもなく、フィックスパー2本でフィックスし荷物をザイルで下ろし空身で通過する。雪はぐさぐさだ。再び急な下りが続き、雪庇ぎりぎりまでビレーする。岩稜をまわりこみ、大木の陰で一安心。やっと飯が咽喉を通る思いだ。佐梨川の巨大な雪庇が続く中を水無川の雪崩と団子を気にしながらようやく池ノ塔直下へ来る。今日も10時以降、本来なら行動出来ないところだが、テント地がないので緊張しつつアオリ台地へ急ぐ。ホエプスの調子が悪く、全員ガス中毒気味になる。

3月22日 ◎のち◎ 出発(11:00)
-池ノ塔ピーク(15:00)

朝から雨が降る。ガスが濃く、せめて雨が止むまで時間待ちとし、昼前に出発する。池ノ塔か、最低コル P₅間にCSが求められるであろう。気温はやや上がっているが雨量はそう多くなく、池ノ塔へはブッシュ帯を行くので雪崩はそう心配はないだろう。池ノ塔尾根に出ると大きな窓があり、佐梨川へかなり巨大な雪庇が出ている。その側部から登るが、2m位でステップが崩れて滑落する。ザイルをつけていたが雪が軟かく滑らず。回り込んで再びリッジへ出る。大きなクレバスのをぞきこんでブッシュをつかみトラバースして、池ノ塔へ直登する。ガス未だ晴れず、ピークにテントを晴る。

3月23日 ◎のち◎ 出発(11:15)
-P₅(12:30)

朝から雪が降り続き、ガスで視界が全く効かないが、行動できぬこともない。疲労気味とガス中毒で意気消沈しているため、時間待ちをする。明日の好天は80%確実だろう。今日行動しても時間的に何ら得はないが、食糧欠乏と燃料不足から焦躁となり、11時より動くことにする。コルへはクレバスを避け、オツルミズ沢へとトラバースするが、P₅下降で完全にガスにまかれ視界がなくなったためP₅へ戻りテントを張る。先行者のテント跡があった。

3月24日 ○ 出発(5:15)-フキギ直下(9:00)-駒小屋(10:30)
食糧あと一日。ケロシン100cc、メタ0、ラジオ、トランシーバー調子悪し。天気快晴。トレール通しにとぼし快調なピッチで行く。途中佐梨川を恐る恐るのぞき込みながらフキギへ着く。駒から荷上げ隊3人がやってくる。

3月25日 停滞

3月26日 駒小屋-中ノ岳

3月27日 停滞

3月28日 ○ 中岳(10:40)-駒小屋(15:00) 鹿野は八海山隊へ合流、梶浦が入る。

3月29日 ① 駒小屋(7:30)-大湯(12:35)

〈小倉尾根・おかめのぞきパーティー〉

稲垣、大宅、藪田、高橋、梶浦

3月21日 ○ 栃尾又(11:00)-駒ノ湯(15:00)

重荷に加え、クレバスの出現でペースは意外にはかどらない。途中3ヶ所デブリの上を歩く。ここはスキーが有効に使えようである。18:00の交信で郡界尾根パーティーが、アオリ台地にいることが判り、まずは安心する。

3月22日 ガス 出発(6:00)-小倉山(11:00)-デポ(14:00)-駒ノ湯(17:00)

荷物80kgをデポすることにする。小倉山を越えるとガスが薄れ、青空ものぞかれるが、雲の流れは速い。広い雪原といった感のある稜線である。1,750m附近にデポする。

3月23日 ◎のち◎ 出発(6:00)-駒ノ小屋(14:50)

小雪の降る中を登る。小倉山より雪は止んだが強風となる。デポ地通過時よりガスが濃くなり視界は10m位となる。小倉山ピークから小屋に至る稜線には、深さ10m程のクレバスが2本あった。小屋の屋根は3分の1ほど出ている。

3月24日 ○ フキギへ郡界尾根隊出迎え
(9:00-10:30)-デポ回収(12:00-13:00)

合流した郡界尾根隊のホエブス不調のため小屋に入る。

3月25日 ① 強風 出発(7:15)-
中ノ岳肩(11:45)-駒小屋(15:20)

小倉尾根パーティーでデポに向かう。明日のための偵察も兼ねているのでデポ量は50kgとした。前駒の下りは夏道が現われていて問題はない。桧廊下は水無川をトラバースするトレースがありそれに従う。積雪は圧倒的に北又側に多く、広い雪稜となっている。日射のため10時を過ぎると雪がくさりだす。強風が一日中吹きまわった。

3月26日 ① 出発(6:15)-デポ地
(10:30)-中ノ岳(11:00)-御
月山とのコルCS(11:45)-バック隊
発(13:15)

パーティーを再編成して2隊に分け直す。

オカメ隊=稲垣、大宅、鹿野、高橋、藪田

引返し隊=大西、藪本、梶浦

昨日のトレースどうり進む。中ノ岳肩のデポ地点に引返し隊のテント設営後、そのサポートを受けてデポを回収し、御月山手前のコルにテントを張る。

3月27日 ◎のち① 停滞

3月28日 ○ 出発(5:45)-ナイフ
リッジ始め(8:00)-CS(16:30)

天気はいいのだが気温が高い。雪がくさりだすまでにできるだけ進んでおきたい。御月山の下りは夏の鎖場も入れて、3段の急な下りとなっている。雪は足首までもぐる。大黒沢がつき上げるコルよりナイフリッジの開始となる。ここからザイルを出す。最初のナイフリッジ5mが極端に薄く黒又側を巻く。その後は黒又側に小さな雪庇があり、それに乗らぬ程度に行く。この頃より雪崩の音が聞こえ始め、また雪崩が流れるのが見える。ほとんどが壁から落ちる雪崩のようだ。雪庇の落ちるのも時間の問題であろう。ザックを置ける場所を求めてザイルはのびる。空身であっても、足もとの雪はくずれ、ザ

ックを担げば、ステップは崩れるばかりである。いくつかのコブを越え、顕著なコル(桧廊下より望まれる3つの顕著な切戸の真中のもと思われる。)にビバークした跡があり、やっと5人が集結する。これより60mでやや平坦なコブとなっている。ここの夏道の少し黒又側にテントを張る。

3月29日

気温下らず、雪は朝からグサグサだ。夜中も雪崩が落ちる有様。CSより30m程行くと小さなコルになる。ここより黒又寄りに50cm程の薄い雪庇が張り出し、10m程の登りが悪い。再びザイルを100mフィックスするも回収にあたった大宅がステップをくずし水無側に15m程スリップしたが、無事に引張り上げる。次の小さな台地状ピークは、リッジ通しではコルへ降りられず南面の段状になった雪壁にルートを求める。ここで麻ロープ30mをフィックスしたまま放棄する。次のコルが3番目の切戸と思われる。このコルより100mでリッジは広がった。ザイルをしまい1,344mピークへ向かう。徐々に悪くなっていた空模様は、もう雲ばかりであった。鎖場にかかるころポツポツ雨が降り出し、風もでてきた。ここでまたザイルを出す。あとはダンゴになる雪に気をつけながら五龍へ向かう。五龍頂上付近は雪が複雑に割れていた。五龍頂上にテントを張るころには、雨はドシヤ降りになった。

3月30日 ● 停滞

3月31日 ◎のち●

風が強いためしばしばストップしながら進む。八ツ峰のコブコブは相変らずの雪のためザイルをフィックスした。大日からの下りは懸垂(10m)する。南面は露岩し、鎖が部分的ではあるが出ている。再び雲行があやしくなり、強風で体がこわばっていることもあり、中間の月ノ池で天幕を張ることにする。天幕設営は一瞬遅く、またも雨に降られてびしょ濡れとなった。

4月1日 ●のち① 停滞

4月2日 ①

雲海で下界はまったく見えず。やや気温が下がって雪の状態がよくなった。ザイルを出すことも

なく、残りのコブを越し八ツ峰を終える。あとは霞たなびく下界へ降りるだけだ。予定通り池の峰の少し西よりの尾根を大倉へと急ぐ。この尾根は下り向きと言おうか、どんどん高度を下けている。郡界尾根はもう黒々とし、10日前とはうって変わってしまった。

〈後記〉

この春合宿の最大の圧巻であったオカメノゾキはキスリングでソソソソ行くべきところではないとの感じを受けた。計画においても十分な配慮をしたのであるが、実際には1日で通過しきれなかった。主に天候面に気を配り確実なる晴天時に一気に通過の線が強く出ていたのだが、その時における雪の状態の悪化を見落した感がある。北アルプスと違いクラストは保障されていないのである。北アルプスからはなれ越後に来て、今まで知らなかった大きな山を見、歩いたことは今後の山行に大きな展望をもたらすことになると思う。

1971年度（昭和46年度）活動記録

'71年度 現 役 部 員

C . L	大 宅 幸 夫	齒	(4)
	藪 田 勝 久	理 化	(3)
S . L	高 橋 正 身	理 生	(3)
	黒 岩 芳 夫	経	(5)
	稻 垣 佳 夫	工	(5)
	藪 本 勝	工	(3)
	鹿 野 信 吾	理 高	(3)
	梶 浦 孝 雄	工	(2) (退)
	安 田 滋	基	(1) (退)
	大 倉 鐘 一	法	(1) (退)

5 月 山 行

戸隠山塊

P₁尾根—ダイレクト尾根

期 間 4月29日～5月3日

参加者 高橋(L)、鹿野、梶浦、黒岩

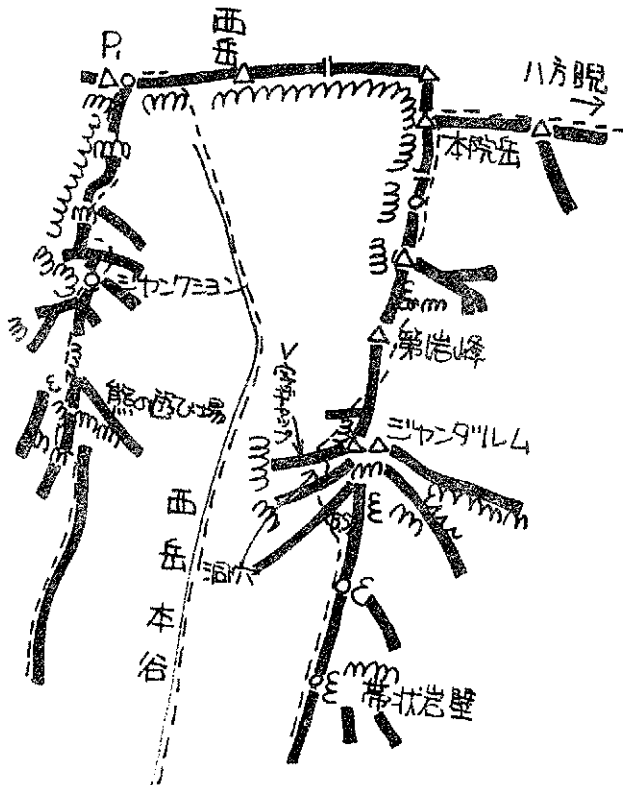


図 29. 戸隠山塊P₁尾根、ダイレクト尾根概念図

4月29日 ◎のち●

宝光社(11:00~12:20)—ダイレクト尾根末端二股CS(15:00)

4月30日 ◎

出発(5:10)—取付き(5:30)—弁

慶岳(12:20)—西岳、P₁間コル(12:05)—BC

沢を20分程下るとP₁尾根の取付点。ちょっと登ると台地(天狗原)の上に出て、あとは笹こぎ。踏み跡がはっきりしているので楽。数ピッチでやせた尾根になり急登となる。越すと熊の遊び場。ガスで見えぬが下までスッパリ切れている感じ。雪が出てくる。トレースがないので時間を食う。この岩原を針金、鎖で越すと、急なやせた稜となり鎖を頼るが、鎖はどれも安心できない。開いているのがある。ジャンクションの下りは雪庇が出ていて雪の状態が悪いため、ザイルを出す。西岳本谷左俣側へ40m下り、そこからコルに向かってトラバース40m。急な雪稜を40mで鐵の刃渡り、10m。2段になった垂直のブッシュ帯を鎖を頼りに登るとP₁直下の緩斜面に出て弁慶岳に着く。5分程で最低コル。西岳には行かずアイゼンを着けて西岳本谷左俣を駆け降りる。

5月1日 ●のち①

出発(10:05)—帯状岩壁(13:20)—BP(18:50)

起きると外は霧雨。9時の天気図をとってから判断し出発。西岳本谷を登りCSから1ピッチの所から支尾根に取付く。粗なブッシュを30分程で台地に出て、1時間程で猛烈なブッシュとなり、尾根もやせてくる。更に1時間程頑張ると帯状岩壁に出た。はっきりしない踏み跡に導かれて左を巻いて雪のつまったルンゼを登って、再び尾根上に出る。ここからは非常にやせてくる。ちょっとした岩を乗り越し稜線の左を巻いてしばらく行き、ブッシュの支尾根をつ

める。また岩壁(ジャンダルム)に出る。キリキリ巻いていき、かどをまわり込みさらに行く。もう5:00なのでピバークサイトを探しながら行くが適当なのがない。6:00頃雪田の上部に見つける。

5月2日

出発(5:00)ー本院岳(1:45)ー八方脱(4:00)ーBC(6:00)

昨日鹿野が物見した支稜をアップザイレインして大伽藍をトラバース。すぐ洞穴だ。冬天4張の大きさ。全員悔やしがる。トラバース気味にV字ギャップを目ざし乗り越え、雪面をトラバース。プラトー上部稜線に出る。第一岩峰(行くが敗退)を右に巻き、ヤバイブッシュをこぎ第一岩峰のピークに立つ。ピナクルを左から巻き、第二岩峰を右から2ピッチ巻きこむと本院岳頂上直下の雪稜。梶浦トップでピークに立つ。そこからは道をたどり八方脱へ。全員コテバテで奥社へ向かって駆け降りる。水芭蕉を見ながらCSに着く。

5月3日

上楠川へ下山。いい道があった。

大峰七面山南壁試登

期間 4月30日

参加者 藪田、藪本

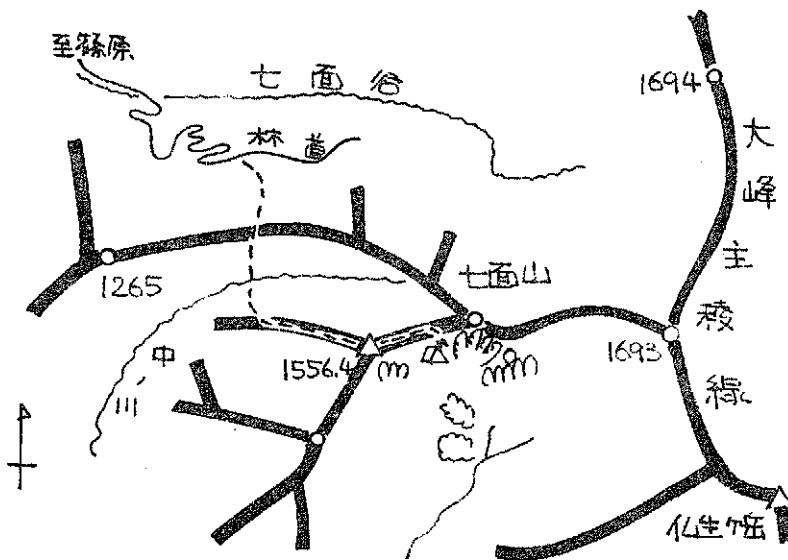


図30. 大峰七面山周辺概念図

七面に入るには奈良県五条より篠原行きバスが出ている。1日1本。篠原から舟の川に沿って湯俣へ行き、それより地図上の林道を上り地図点線の道に行く。ペースはあまり良い所はない。探せばテント1張位はなんとかなるかもしれない。

七面南壁は200~300mの高度差で傾斜は80度近くあるようである。岩そのもののフリクションはよいが逆層である。オーバーハングは3つ程あるがそれほど大きいものではない。リスは以外と多くあり、ハーケンは案外よく利用出来そうである。ほとんどは縦リスである。

新人歓迎白馬山行

阪大小屋(柵池)~白馬往復

期間 5月1日~5月5日

参加者 大宅(L)、安田、石浜(OB)

出雲路(OB)、糸井(OB)

5月1日 ◎のち○

リフト終点(11:30)ー阪大小屋(12:00~12:50)ー天狗原CS(14:45)

5月2日 ①のち◎
出発(6:15)ー白馬大池CS(8:30)

5月3日 ①のち◎
出発(5:45)ー小蓮華(7:30)ー白馬岳(9:05~9:15)ー白馬大池CS(12:00)

5月4日 ●
出発(5:45)ー阪大小屋(7:30)

5月5日 ◎

出発(5:50) - 東急山荘(7:15)

今回の山行は総じて計画に無理があり、その上出発までに新人が諸々の用事で抜けて、結局新人1人OB3人というわけのわからぬ山行になってしまった。白馬アタックは新人を除く4人で行った。新人歓迎山行とはいうものの内容が伴わず残念である。一応新人には様々の湿雪を知り歩く機会になったことだけが成果である。この経験を今後の山行に生かしてもらいたい。

(記 大宅)

夏山定着合宿

剣岳 BC 池ノ谷

期間 7月14日～7月30日

参加者 大宅(L)、高橋、藪田、梶浦、安田、黒岩、稲垣、大野(OB)

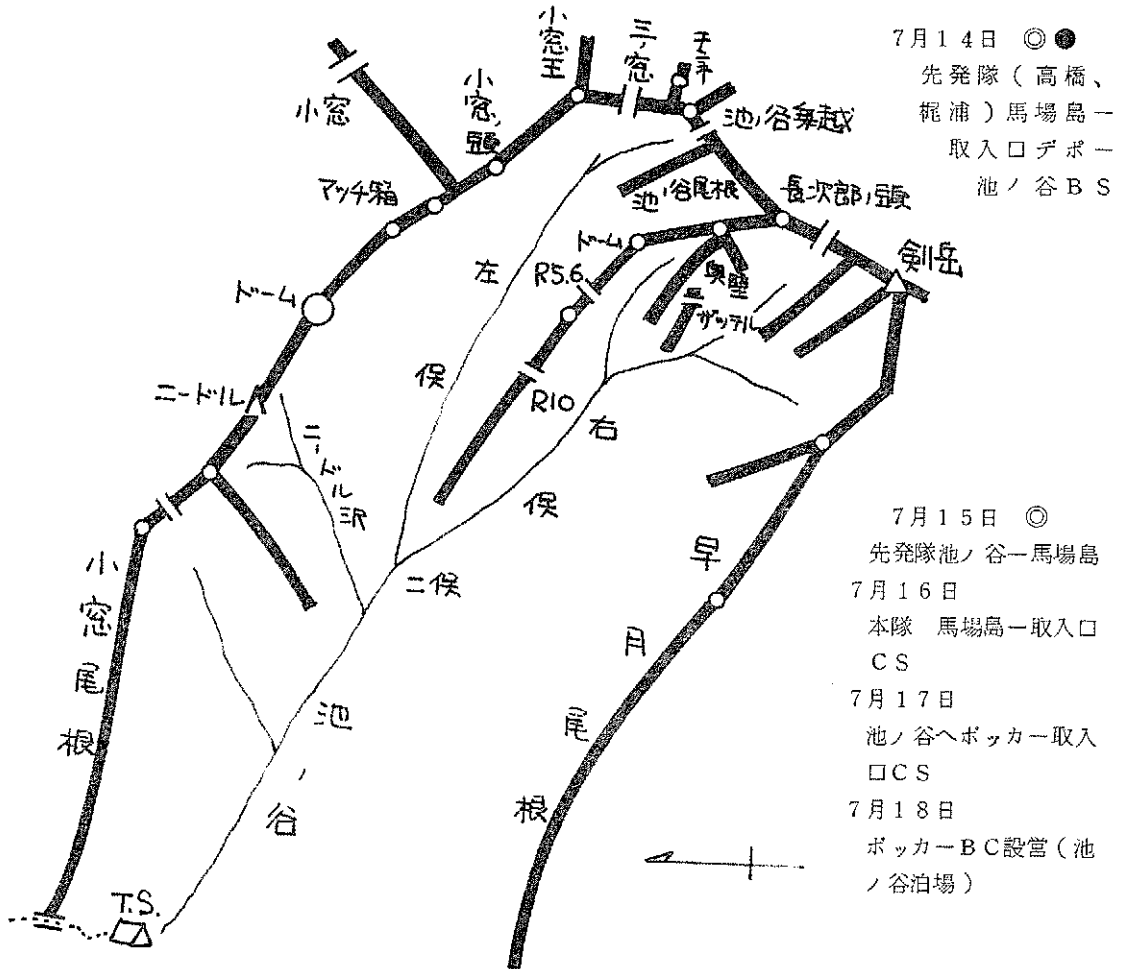


図31. 剣岳池ノ谷周辺概念図

個人行動表

日	大宅	高橋	藪田	梶浦	安田	黒岩	稲垣	
19	●, ◎	二股	沈	二股	沈	沈	二股	
20	○のち◎	雪上訓練 (右股入口)						
21	①のち◎	左下カンテ 左方線	日嶺ルート 左方カンテ	日嶺ルート 左方カンテ	左下カンテ 左稜線	T K	日嶺ルート 左方カンテ	大野入山
22	●	沈	沈	沈	沈	沈	沈	沈
23	●	沈	沈	沈	沈	沈	沈	沈
24	●◎	雪上訓練 (右俣中央R出合)						
25	◎のち●	T K	馬場島	馬場島	本峰	本峰	本峰	入山 大野下山 藪本人山
26	●	沈	沈	沈	沈	沈	沈	沈
27	①	R 5.6	R3上半	R5.6	R3上半	T K	奥壁	奥壁 藪本下山
28	◎●	二股	二股	二股	二股	二股	T K	T K
29	①	ニードル沢	ニードル沢	池ノ谷 尾根	池ノ谷 尾根	ニードル沢	R 7	R 7

7月30日

撤収馬場島へ下山。

〈登攀記録〉

R 5, 6から剣尾根上半

期日 7月27日

参加者 大宅、藪田

BC発(6:05) - R5取付き(8:20)
) - R5終了(9:45) - 同発(10:00)
) - ドーム中段のコル(10:40~11:
 00) - ドーム頂上直下コルでザイル解く(
 12:20) - コルB発(12:20) - 雪
 溪に降りたつー(12:40) - BC(13
 :50)

取付きを少し誤ったらしい。正しくは、R4寄りに取付くようだ。最初の1ピッチは、いやな草付きに乗るあたりで恐かった。それからコンテで10分ほど行くと洞穴(大きなチョックス

トーン状の岩の下がえぐれている)にでる。右手のカンテラインに出ようと思うが、爪のようなスタンスに乗って、おまけにかぶり気味になってきたりするためルートを変えてカンテにでる。ザイルが出ない。これで時間を喰った。ルンゼ通しに行けば簡単に行けるだろう。推定1時間。R6を抜けるとドーム中段に出た。岩塔の北壁とカンテラインは見事にそげ落ちている。右ルートに登る。アブミは一度使用しただけで楽に抜けられる。R2の下りは狭いルンゼで、中程にチョックスと肩巾いっぱいのチムニーがあって、下れるが落石が怖い。

池ノ谷右俣奥壁

期日 7月27日 ①

参加者 黒岩、稲垣

BC(5:30) - 中央ルンゼ出合(8:
 10) - ザッテル(10:15~10:30)
) - 剣尾根の頭(15:15~15:30)

—BC(17:00)

二股でR5,6, R3各パーティーと別れ、右俣に入る。中央ルンゼ下半の雪溪はクレバスがあり、右側のブッシュ帯に入る。踏み跡らしきものあり、ザッテルまで行けそうなのでほぼ真上に行く。ブッシュ帯を抜けると、碎石を積み重ねたようなボロボロの斜面となり緊張の連続である。絶えず落石の恐怖に悩まされる。ザッテルでアンザイレンし、登攀開始。「岳人」のルート図と壁とを比較してもルートは定かではないので、岩の部分を選んで行くことにし、右岩稜の上部に目標をおいて登ることにした。

1P. 凹角を10m登り、小ハングで押さえられたところを左に巻いて一枚岩を左上する。

40m

2P. コンティニューアスでも行けそうで、浮石に気を付ければなんてことはない。40m

3P. 真上凹角を直上。残置ハーケン2本回収。今までと比較すれば快適といえる。40m

4P. 40m位、ガラ場をコンティニューアスで行く。

5P. ビレー点よりすぐ上のかぶり気味の岩をハーケン2枚で越える。そこからは緩傾斜の脆い壁となる。35m

6P. 凹角の少し右をハーケン2本とシュリングを使ってバンドに立ちそこより脆い凹角に入る。小石がばらばら落ちてくる。凹角を抜けると残置ハーケンがあるが、岩は脆い。2m位の垂壁を越えると傾斜が落ち、上方に剣尾根の頭が霧の中にかすんで見える。15m

7P. 傾斜の落ちた壁で岩も堅そうであるが残置ハーケンがやたらと多い。40m

8P. 7P目と同じような所を15mで剣尾根の頭に着く。雨がパラつきだす。

ザッテルから上部よりは、そこまでのアプローチで緊張させられた。左股よりコルB経由で取付くのが安全だと思える。奥壁はすっかりした壁ではないし、碎石の固まりみたくで落石の危険が大きく、あまり行く価値はない。

池ノ谷尾根R稜

期間 7月29日

参加者 藪田、梶浦

取付き(7:40)ー中央のコル(10:10)ー稜線(15:00)ーBC(16:30)

1P目はかなり傾斜のあるリッジで最初はカンテライン左側を5m、ホールドが細かく遠いので無理な姿勢を強いられる。次に右へ移って15m程直上。再び左へ出ると取付きが真下に見える。ハーケン3本打って、脆い岩を登ると小さなテラス。2P目、テラスすぐ上のかぶり気味を越えるとブッシュが現われる。ブッシュと岩の混じった所を行くが、浮石が多くスピードは上がらないもやがてルート図にあるハングにぶつかると、これは難なく越せる。残置ハーケン3本あり、このあたりより、フリクションの効かない岩になり緊張することしきり。ハングから1ピッチで小さなコル。コルより上部は未知の部分。いきなり傾斜のきつい岩であるが、残置ハーケンに導かれて抜ける。すぐフェースに突きあたり、その右を巻くように進むと短いチムニー状になっている。次のピッチはかぶり気味の、ホールド、スタンスのないフェースで始まり、岩の割れ目のチムニー登りと続く。やがて岩塔につきあたる。下の方は傾斜は緩いが、上部はかぶっている。フリクションが全く効かず四つんばいになり、ハーケンにすがりつく。かぶり気味の所はホールドが細かく、のび上るのがためらわれる。足下はるか下に雪溪が見え、高度感満点。梶浦頭張って、無理な姿勢からハーケンを打ち、とうとう乗越し成功。あとはハイ松混じりの岩稜で、コンティニューアスで行く。ザイルを解きガレたルンゼを登ると池ノ谷乗越のすぐ上の主稜線にとび出した。未知のルートということで張りきって行ったのだが、浮石とフリクションの効かないのに悩まされ続けた。だがやはり合宿最後にふさわしい充実した登攀であった。

ニードル沢

期 間 7月29日

参加者 大宅、高橋、安田

二股少し下、左手に入る沢に入っていく。取付きは急な雪溪。その上に2つ滝がある。一つ目は階段状。二つ目は落口の細かい所に行く。ハーケン1。そこからしばらく緩い滑状の沢。上にニードルらしき岩峰が見える。二股になり、左手の方がまったく簡単そうだが時間が早いので右のルンゼ状へ行く。傾斜はないが、狭くみなチョックストーンを持っている。内面登攀の連続。途中3ヶ所にハーケンあり。みなチョックストーン乗越のため。最後のハーケンはかなり悪く、草付きのやさしい所へ出る。その上はドーム、ニードル間へ突き上る急な草付き。時間を食ったので小窓尾根を下ることにする。ニードルの下りが分かりにくい。ゴミをたどっていくと正しいルートに行くことになった。小窓尾根へのアプローチのつもりであったのに、易しい左手の沢へ行かず、右手の沢(ニードル沢)へ行き、時間を食ってしまった。計画を変更したのは反省すべき点である。

夏山縦走

後立東谷

馬場島—小窓—阿曾原—東谷—赤岩尾根

期 間 7月31日～8月5日

参加者 藪田、梶浦

7月31日 ○

馬場島発(11:15)—雷岩(15:00)
)—CS(16:20)

8月1日 ○

出発(6:40)—三又(7:20)—小窓
(11:00)

残雪は軽く、キックステップがしんどい。三又あたりで途切れるが、すぐまた雪溪となる。大きく左へ曲がってしばらく行くと、大きなクレバス。ザイルをつけてカッチングで底に降り

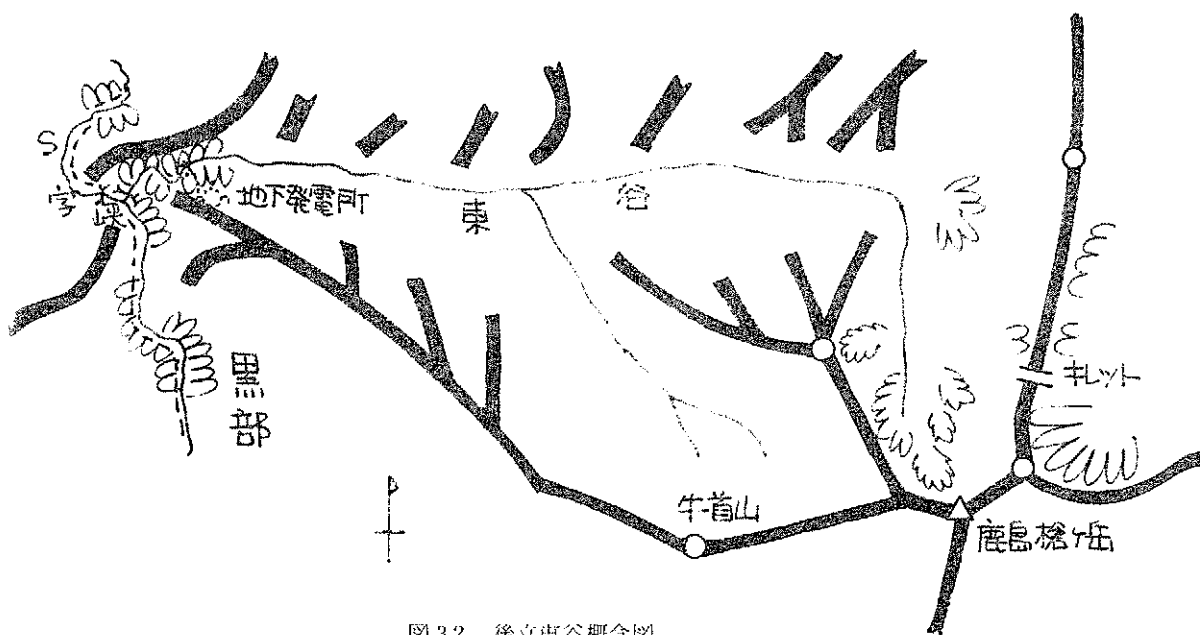


図32. 後立東谷概念図

再び登る。あとは単調な雪溪でのんびり歩く。雪溪を過ぎると小窓はすぐ上である

8月2日 ○

出発(6:00)ー取付き(6:15)ーリッジ取付き(8:40)ー終了(10:00)ー三ノ窓(11:30)ージャン取付き(12:30)ー終了(13:30)ー三ノ窓(14:15)ー小窓(17:00)

小窓王の小窓からみて左側に突き上げているルンゼを登る。小窓雪溪を少し下り岩へ飛び移る。そのまま登り下部大滝をやりすごした辺りで左へトラバース。傾斜が強まる所でアンザイレンし、ザイル一杯のトラバースでルンゼに入る。ルンゼはフリクションのよく効く快適な岩が続く。傾斜は全体に緩いが数個の小さな滝を持っている。コンティニユアス100mをはきんで12ピッチの登攀である。ルンゼが二分するところよりリッジに取付く。このリッジは長くはないが傾斜がある。最初の脆いリッジ30mでハイ松のブッシュに入る。ブッシュ15mの後、右へ岩溝15mでピナクル。直上しようとするがハングに拒まれ右へ回り込んで進む。チョックストーンのあるチムニーに入り出口を左へ出ると2mでジャンクション。このピッチが最も面白い。稜線を30m進みザイルを解く。岩とハイ松のリッジを行くと懸垂場(10m)に出会う。これを過ぎるとすぐ尾根に出る。このまま小窓王の方向へ行ってもつまらなそうなので、下の雪溪を目指してブッシュを下る。雪溪に降り立つと三ノ窓はすぐであった。

8月3日 ①

出発(7:20)ー池ノ平山(8:30)ー東沢出合(14:40)

8月4日 ①のち◎

出発(6:00)ー下降開始(11:45)ー東谷(13:10)ーBS(18:15)

台風接近をラジオが伝えているが今日中は天気はもつであらう。もし多量の雨となれば牛首尾根を登ることにして出発する。吊橋の左側を河原へ下る。東谷を見に行きそれから前進。徒渉3回でルンゼ出合。予想通り問題なく登れる様子。どんどん高度をかせぐ。上部を右へ行

くと尾根上に踏み跡があり、これを使う。下降が早すぎるとゴルジュへぶつかるので慎重にならざるを得ない。尾根上にでっかいアンテナがありびっくりする。検討の結果もう下ってよいであろうということで下降開始。ブッシュを滑る様にして下って行くとやがてガレ谷となり、難無く下れる。途中小さな滝が2、3あっただけである。東谷に降り立つとそこはゴルジュ上端という感じの所であった。下流はみごとな廊下になっている。対岸へ飛び移りさかのぼる。土砂の崩壊をいくつも感えて進むと牛首山よりの大きな沢の合流点。ここで水量がぐんと減り河原も広がって来る。地図で水線が大きく曲がる。所より約1.5km程まで足をのぼしビバークする。

8月5日 ◎

出発(5:45)ー滝(6:50)ー鹿島槍(13:20)ー冷池(14:20)ー大谷原(17:30)

昨夜半より風が吹き出した。歩き始めるとすぐ雨が降りだした。25分位で雪溪となりまた30分位歩いて滝にぶつかった。滝を登ることはできないので右手正面の少しかぶり気味の岩を登り、滝落口へ出ることにした。ここは右手より小さな急傾斜のガレた沢が入っていてその落口も滝となっている。雪溪中央部岩へ取付く地点で打ち降ろしたピッケルのショックで突端部の雪溪が4m程落ちた。その部分に置いてあった裾浦のザックも消えている。裾浦が突端に立ち下をのぞいた時に落ちなかったのが幸いである。ザイルをつけて捜しに行くと雪に半分埋もれたザックを発見し回収できた。そのままハーケン3本を打って正面の岩を乗越し滝落口へ行く。それより上部は再び急な細い雪溪となり、ガスの中に消えている。ここで悪天、エスケープルート等を考えあわせ、これより上部は諦め、右手尾根へ逃げることにした。草付きを少し登ると木登りが始まるが、これがまたいつまでたっても傾斜が緩まない感じである。右手は崩壊して切れ落ち、左手は草付きが少しありそれから下の沢まで脆い壁となっている様子である。やがて尾根の方向が変わり、ハイ松が現われ、牛首尾根がガスに見え隠れするようになる。風雨に

たたかれ寒い寒いといいながら進むとひょっこりピークに着いた。後はドンドン下るだけである。

丸山東壁 緑ルート

期 間 7月31日～8月8日

参加者 大宅、黒岩

7月31日 ○

馬場島(11:15)ー池ノ谷二股(17:00)

8月1日 ①

出発(8:30)ー三ノ窓(13:30～14:00)ー剣沢二股(16:00)

8月2日 ①

出発(6:30)ーハシゴ谷乗越(12:30～13:20)ー内蔵助平CS(15:00)

8月3日 ①

出発(9:30)ー東壁直下の河原BC(10:30)

8月4日 ①

出発(5:00)ー東壁下(5:15～5:30)ー直登ルートー下降開始(14:30)ーBC(16:00)

タッチの差で先行パーティーに緑ルートをとられてしまった。同じ所よりはとすぐ右のボルト連打のルートにとりかかる。大宅が登り始める。アブミのかけかえが始まる。初めは上部で緑ルートと同じになると思っていたが、3～4ピッチ頃で全く別のルートと確認する。4P目草付きを越えるのにボルト一本使用する。5P目岩のでっぱりを2ヶ所越えて、ハング下でビレーする。6P目、このピッチで大宅と交代する時アブミを一台落としてしまう。大宅がテープのアブミを持っていたのでそれを使う。ルートはハング基部から左へトラバースし、一番庇の長い所にとっている。完全に空中に身体が浮く。クルクル回るアブミ踊り。結局越えられず下降と決める。ハングはもう一ヶ所越えているル

トがあったから、これも試してみる必要があったかもしれない。アップザイレン4回で東壁下に帰ってくる。懸垂ザイルに身を締められながら、悔やしきでいっぱいだった。

8月5日 ①のち① 台風接近で停滞

8月6日 ①

出発(5:00)ー登攀開始(5:30)ー中央テラス(12:10～12:30)ービバーク(19:30)

天気は昨日と変わらないようなので緑ルートに行く。4日の失敗で、ともかくもドッペルザイルとアブミの操作に慣れたので少しピッチは上がっている。3P目、ハング下でビレーし、大宅が三日月ハングを越える。さらに2ピッチで中央テラスに至る。最後のピッチは脆い草付きの部分があり、トラバース気味に登るのでザイルが少し重くなる。テラスより大ハング下まで40mいっぱい。大宅トップでハングを越える。ハングは左へ左へ越えていくのだが、抜ける所で大宅が困っている。「ボルトが一本抜けたみたいだ。」という。ここがOBの甲田、岡田パーティーが登った時抜けたという所だろう。とにかくこのハングを越えるのに時間がかかってしまった。ここからブッシュをつかんで4ピッチ登って日没。ビバーク。ブッシュ帯でも所々アブミを使わなければならない岩壁部分がある。

8月7日 ①

出発(6:30)ー丸山(7:30～8:00)ーBC(10:30)

ビバーク地より2時間のブッシュこぎで丸山頂上に立つ。しばし休憩。あまり疲労感などなかった。踏み跡づたいにルンゼ状の所をどんどん下る。滑りやすい。途中、20mたらずのアップザイレン2回。ブッシュを抜けると内蔵助の道だった。

8月8日 ①

黒四ダムへ下山

北アルプス横断

馬場島—剣—五色—ブナ立—尾根

期 間 7月31日—8月5日

参加者 高橋、安田

7月31日 ○

馬場島—早月避難小屋

合宿での疲労が残っていて、早月の登りはしんどく、おまけに避難小屋には水がなく、みじめな一日であった。

8月1日 ①

出発—剣岳—剣沢

小屋から少し先の残雪で水をつくりメシとする。本峰は人だらけ。三田平までは結構長くしんどかった。

8月2日 ○

出発—ノ越—五色

快晴の中、五色までポックラ歩く。

8月3日 ①

出発—平の渡—舟—南沢出合—支尾根B P

舟の時間がよくわからず、結局舟待ちで2時間昼寝。南沢に入り、途中で小さな沢に入り沢を詰める。ブッシュをこいで稜線を目指す着かず、途中の支尾根上に一畳程の場所を見つけて寝ぐらとする。

8月4日 ①

出発—稜線—烏帽子—東沢出合

1時間程で稜線に出る。さらに4時間程で烏帽子に着くが途中で水がなくなり、ミジンコの泳ぐ池の水を飲む。急なブナ立尾根を下り、濁沢についてようやく水にありつく。濁沢小屋のあたりはダムの工事現場となっている。台風の影響か雲の動きがあやしい。

8月5日 ◎

葛へ下山

台風が接近しており大雨の恐れがある。唐沢を上がり唐沢岳から餓鬼岳へ行く予定ではあったが諦めて下山とする。

秋山個人山行

北アルプス縦走

室堂—薬師—雲の平—槍

期 間 10月11日—10月16日

参加者 藪田、梶浦、安田、大倉

10月11日 ●

室堂(10:30)—ノ越(11:40)
—五色(16:30)

雨の中を出発、稜線では風が強くザラ峠への下りあたりでは猛烈な風。ニツ玉低気圧発生し前線通過による風であった。

10月12日 ●のち◎

出発(8:00)—越中沢岳(10:50)
—スゴ小屋(14:20)

夜半かなり激しく吹いた風も朝になると止んで濃いガス。やがてガスが消え足下は白い雲海。快適に飛ばす。

10月13日 ◎のち◎

出発(6:00)—薬師岳(9:40)—大
郎兵衛平(11:45)—カベツケ(13:
45)

前日と似たような天気、薬師の頂上で大休止、北アが実によく見える。

10月14日 ●のち◎

出発(6:00)—雲の平(9:50)—祖
父岳トラバース終了点CS(11:30)

雨の中を出発、雲の平へ出たあたりで雪となる。祖父岳をまく頃はかなり激しく降り、道を失ったが、あせることもなからうと思いテントを設営する。

10月15日 ○

出発(6:30)—三俣蓮華岳(9:00)
双六岳(11:50)—千丈沢乗越(16:
20)

無風快晴一同狂喜しアイゼンを着けて槍目指し出発。約30cmの積雪。この為槍までいけず千丈沢乗越で幕営。

10月16日 ○

出発(6:20)―槍岳(8:45)―上高地

朝の間少しアイゼン練習をしてから出発。大槍の登りでやや緊張し、頂上で記念撮影後ひたすら下山する。

中央アルプス単独行

越百山―駒ヶ岳

期間 10月

参加者 大宅幸夫

飯田線駒ヶ根駅で揺り起こされ、あわてて乗り換え、飯島で下車した。この季節には誰もいない与田切川沿いをリスと遊んで廻る。オンボロ沢出合で泊り、翌日、オンボロ沢廻行の予定であったが、あまりにも荒れた沢なので諦めて越百山へ直接入っている沢を夏道伝いに廻る。大きな岩の重なった明るい沢である。稜線に出ると、左に御岳が美しく、外輪山をたどるようにいつも左に望まれた。天気もよく、全く人に会わずにのんびりと歩く。空木岳冬季小屋で泊るが、戸がいやな音を立て、夜の時間が永い。翌日も同じような良い天気と同じような稜線をたどるが9時頃になって、三日ぶりに人に会う。人の顔がなつかしかったが、相手は多人数なので、知らぬ顔で通り過ぎていった。小さなコブを越えた時突然宝剣岳の鋭峰が現われて躍々としたが、同時に人の姿が非常に多く、少しがっかりした。駒ヶ岳のテント場で、きたないツェルトに潜り込み、宝剣岳の天狗を見ながら一人飯を食う。

下山は一気に3時間走り降りる。高原の紅葉が陽の光を彩り目くらめく想いだった。何とかバスの時間に間に合い上松へ下る。

11月偵察山行

サンナビキ尾根偵察

期間 10月31日～11月6日

参加者 藪田(L)、鹿野、梶浦

10月31日 ●

雨のため停滞として、水道管横の台地にテントを張った。夕方には雨もあがり、星空となった。

11月1日 ○

出発(6:15)―1,250mCS(15:30)

水道管横の階段はたいへんな急登である。その後は藪こぎとなるが割合はかどる。850m位に台地状となったところがあり、ここから藪がひどくなり進みづらい。1ヶ所ザイルでザックを引っ張り上げる。この箇所は雪がつけばフィックスの必要がありそうである。1,250m付近のジャンクションに、藪を切り払いテントを設営する。

11月2日 ○

出発(6:15)―P₃(1,400m)CS(15:15)

相変わらずのブッシュである。1,300mを越え、進む方向が変わるとコブが続いている。まず1番目はだらった感じで越えたあたりに台地があり設営可能。コルは3m程岩となっておりザイルを出してスタカットで通過する。次のコル前後にフィックス60m。下から3つ目のコブは東西に長い。これをP₃と呼ぶことにする。東端で設営。

11月3日 ○

出発(6:20)―1,949三角点CS(14:30)―フィックス回収終了(17:10)

昨日はザックで苦しんだので、今日は各自2つに分けてダブルすることにする。P₃の下降に

フィックス 30 m。ここよりサンナビキ谷側をトラバースして尾根屈曲後の 1,550 m のコルへ出る。この間のコブは小さい。ここより顕著なスラブを 2 つ見せている頭への登りとなる。このピークは昨日よりよく見えていたもので P₂ と呼ぶことにする。P₂ は最後リッジ通しでは行けず、右手の雪壁状の所を 60 m フィックスして登る。P₂ と P₁ の間には小さいながらも切れたコルが 1 つあるだけである。

11月4日 ○

出発(6:15)―事故(6:25~8:00)―滝倉山(9:45)―ウドの頭直前のコル(15:00)―東又谷上流CS(18:00)

滝倉山までブッシュを避けて雪上を歩けそうである。リッジ上のブッシュを避けて北側斜面をトラバースしようと少し下りかけた時に、梶浦が転倒滑落した。800 m 下で自力で止まる。左手首を強打した様子である。手当てをして再出発する。滝倉山からの稜線はやせていて複雑な感じをうける。ウドの頭手前に岩峰があり、その手前で稜線は90度方向を変える。岩峰を巻くのに60 m、コルへの下りに30 m フィックスする。梶浦の左手が使えないので下山することにし、ウドの頭直前のルンゼを下降に移る。上部で落石に気がついたのと、下部で小滝をアップザイレンした他は楽に下れた。東又上部、毛勝北面からの沢との合流点付近でビバークする。

11月5日 ①のち◎

出発(7:45)―三階棚滝廊下高巻き(9:20~15:30)―取入口(17:00)

三階棚滝前後の廊下の高巻きに時間を喰ってしまう。結局3回のアップザイレンで河原に降り立つ。そこからは大きな石を避けて右岸のブッシュの中を下る。左側から沢が入り、その後しばらくして新しい堰堤に出た。

11月6日 ●のち①

出発(8:20)―第4発電所(10:00)―魚津(11:30)

やっとブッシュから開放されて車の通れる道をポテポテ歩いた。ダンプに便乗しバス停へ。

〈偵察報告〉

この尾根の小ピーク群は、高度差は何れもザイルピッチ(40 m)以内であるが傾斜が強く、また大きな木があったり、岩が露出して直登は無理となっていたりして大きなザックをかついで行くのは不利である。P₃ より上部はサンナビキ谷の沢筋がぐっと近くなり、こちら側の傾斜も落ちる。しかし似合谷側はスパッと切れ落ち、雪庇が張り出すと思われる。積雪期には全体的にブッシュの上に雪がのったナイフリッジになると思われる。しかし大きな木がありザイルの支点には不足はないであろう。テントサイトは850 m 付近、1,300 m と P₄ の間、P₁ は充分広い。(P88 図 38 参照)

剣岳北方稜線偵察

赤谷尾根―北方稜線―早月尾根

期間 10月30日~11月6日

参加者 高橋、稲垣、藪本

10月30日 ●

馬場島(10:00)―CS(5:15)

雨の中、赤谷尾根をひたすら登る。途中から雨も止むが、主稜線に出ると雪が散らつき始めた。笹の上に雪が積もった所をCSとする。

10月31日 ●

出発(6:45)―1,500 m CS(9:30)

今にも降りだしそうな空の下出発。やせた尾根を進む。1,500 m 付近で激しくみぞれが降り出したので沈殿を決定する。

11月1日 ○

出発(6:45)―2,000 m CS(14:00)

快晴、今までくすんでいた剣が傲然とそそり立っている。大窓、三ノ窓は目前に並び朝日が顔をのぞかせようとしている。急な登りが続きけっこう尾根はやせている。1,900 m の平坦な所で今日は終わり。三段になっている赤谷尾根の二段目である。

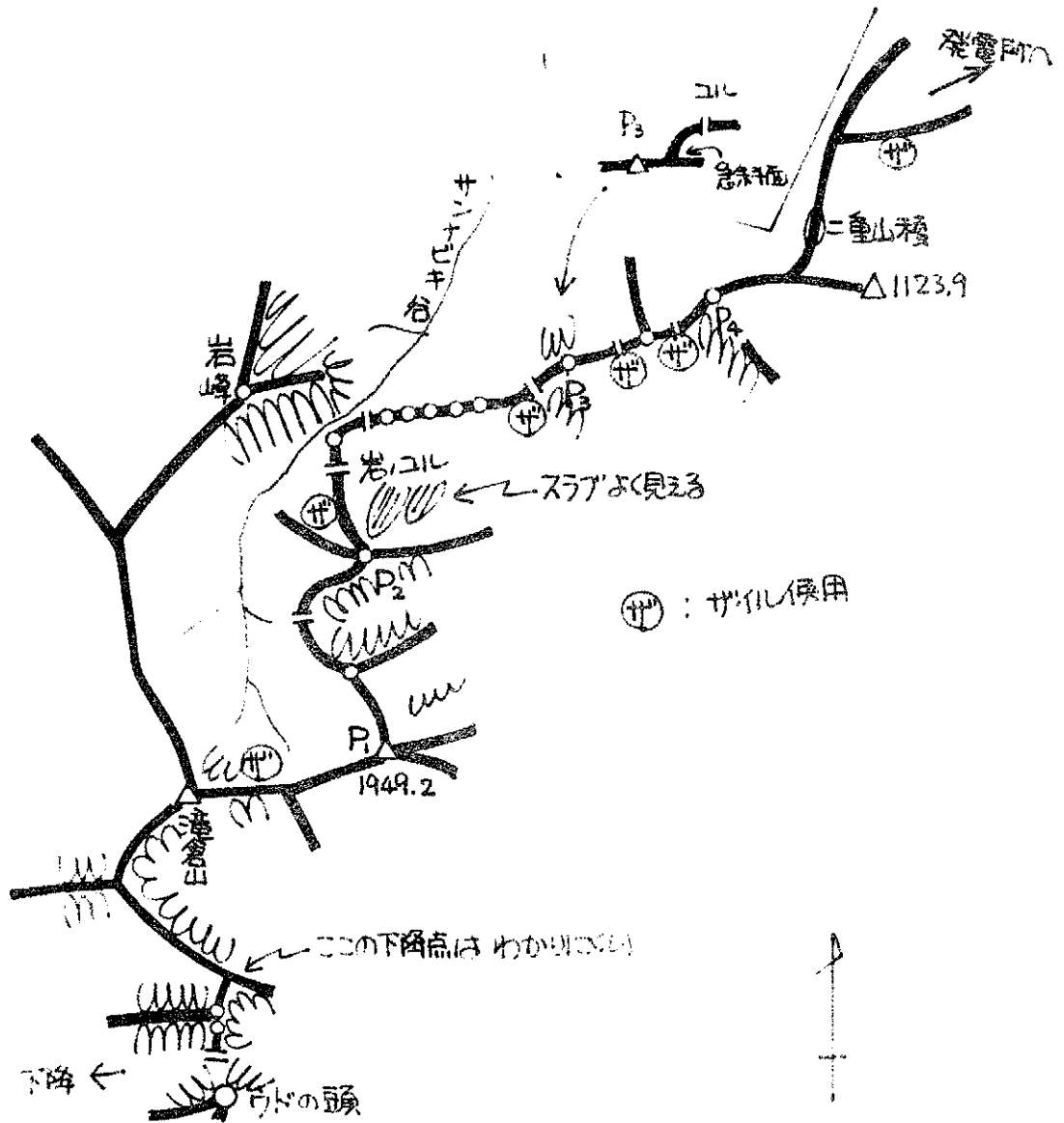


図33. サンナビキ尾根ルート図

11月2日 ①

出発(6:00)ー赤谷山(10:00~
10:25)ー白萩山CS(12:00)

途中でアイゼンを着けて登る。赤谷山直下の急登箇所にはフィックスがありかなりやばい。越した所が赤谷山。稜線をさらに進み、時間が早いので白萩山でテント設営とする。

11月3日 ①のち◎

出発(6:00)ー白ハゲ(8:35)ー
大窓(10:00~10:20)ー大窓の
頭CS(15:30)

初めは二重山稜気味である。赤ハゲからは小さな岩峰のナイフリッジを黒部側へ巻いていく。大窓への下りは主稜線の右手のルンゼを使う。ところどころザイルを出しながら進む。フィックス、赤旗等も残っている。大窓は意外に狭い。ザイルを出しながら大窓の頭まで進む。この先は池ノ平山までやせた尾根が続いている。しかたがないので山頂にテントを張る。

11月4日 ①

出発(6:00)ー小窓CS(10:00)

岩稜が続いているので右手のルンゼを下る。やせてはいるが起伏のない稜線が池ノ平山まで続く。池ノ平山の登りは急なクローアルを使う。小窓までは急な下りで雪質悪くいやらしい。小窓の科尔5m手前のところで藪本、高橋が小窓谷へ30m滑落。小窓尾根の登りも急で雪が悪そうなので天気図をとってみる。結局ここにテント設営する。

11月5日 ①

出発(5:00)ー小窓尾根科尔(6:10)
ー三ノ窓(9:30)ー池ノ谷乗越(10:
30)ー剣岳(13:15)ー伝蔵小屋CS
(16:45)

稜線を進む。小窓王のトラバースは最初雪はついてないが、最後は急な雪面になっている。三ノ窓に着きホッとす。池ノ谷乗越、長次郎の頭を越え本峰へ。雪の状態は悪い。早月への下りは最初ルンゼを下る。後はやせ尾根をどんどん下り、伝蔵小屋まで頭張る。

11月6日 ①

出発(5:45)ー馬場島下山(9:10)

御岳アイゼン合宿

期間 11月19日~11月24日

参加者 藪田、高橋、黒岩、藪本、稲垣、安田、
石原(OB)

11月20日 先発 濁河温泉一頂上

後発 2名大阪発(夜)

11月21日 先発 頂上附近でトレーニング

後発 同ルートでベース入り

11月22日 トレーニング

11月23日 八海山荘へ下山

冬山合宿

塩見岳蝙蝠尾根

転付峠ー蝙蝠尾根ー塩見岳ー三伏峠

期間 12月22日~12月29日

参加者 藪田、高橋、安田

12月22日 ①

新倉発(10:30)ー転付峠(16:00)
)積雪20cm

12月23日 ①

出発(6:40)ー二軒小屋(7:35)ー
尾根末端(8:10)ー2,200mCS(
14:25)

蝙蝠尾根末端には道標がある。踏み跡をたどり高度をかせぐ。1,900m位より積雪現われCSでは50cm位か。

12月24日 ①

出発(7:00)ー徳衛門岳(14:30)
ーCS(15:15)

雪にもぐるのとブッシュに苦しめられる。

2,380mよりワッパを着用した。

12月25日 ①のち②

出発(6:25)ー樹林限界CS(11:20)

押し出し沢を右に見て進む。倒木がひどくラッセルは難渋する。やっと樹林が切れたときは強風と雪で視界悪い。

12月26日 ②夜① 停滞

12月27日 ③たり②

出発ー蝙蝠岳(7:30)ーコルCS(9:00)

アイゼンを効かして蝙蝠岳を越えるが、あいにくの天気でも見えず。コルを越して30分程で広い尾根上にテントを設営した。

12月28日 ④強風

出発ー塩見岳(12:10)ー権右衛門山CS

昨夜より強風。何もかも凍りつき、撤収に苦労する。結局ポールは抜けずそのままザックにのせて歩くことにした。北俣岳附近の岩混じりのリッジはザイルをフィックスして通過。縦走路にはトレースがあり、塩見岳の下りもザイルを使うことなく降りた。

12月29日 ⑤

三伏より鹿塩へ下山

別に問題のない雪稜を気持よく下る。

鋸岳一甲斐駒ヶ岳

期間 12月23日～12月25日

参加者 黒岩、鹿野

12月23日

塩尻着(5:04)ー辰野ー伊那北ー戸台

冬とは思われない陽気の中、平坦な戸台河原を歩く。見上げる両岸の山々に雪の気配もない。角兵衛沢出合で水を汲み(15:30)角兵衛沢に入る。30分程登ってツェルトを張る。

12月24日

明るくなってから出発。1時間程でガレ場となり段々と急傾斜となる。ぐんぐん高度が上が

りコルに着く。信州側は雪が着き、戸台側は無雪期そのままの状態であり、難無く第1高点のピークに着く。前方に第2高点が黒い岩肌を見せているが雪もない為かもう一つ山に迫力がない。小ギャップは20mの懸垂で降りる。風穴までザイルを出し、すぐ大ギャップへの下降点に到着。大ギャップへの下降は、夏道らしき踏み跡に従って一段下の肩に降りそこから木の根を支点に20mの懸垂で充分である。続いて第2高点から派生している第2尾根を目指して急な斜面を登る。すぐ第2高点に達し、急な下りを済ませば中ノ川乗越で、樹林帯のラッセルを繰り返して三ツ頭の手前のコルに着く。ここでツェルト設営。

12月25日

強い風の中を出発。樹林帯の中を進む。6合目の避難小屋を過ぎひたすら駒ヶ岳を目指す。頂上で大休止。周囲の山々が美しい。黒戸尾根を下り七合目小屋で泊る。

12月26日

霧雨の中をひたすら下る。黒戸尾根は実に長い。

中央アルプス滑川奥三ノ沢

期間 12月24日～1月1日

参加者 敷本(L)、稲垣、石原(OB)

12月24日 ①

明るく広い滑川本谷を遊行して、三ノ沢出合の岩小屋の近くにBCを設営する。河原の岩の上に綿帽子を被ったような雪が残っているだけで、雪は少なく、ぼかぼか汗ばむ程の陽気で気温も高い。

12月25日 ①のち②

昨夜も気温が下がらず雪が締まっていないので、奥三ノ沢偵察のために、奥三ノ沢の右手の尾根をワン・ピバークで登ることにする。この樹林帯の尾根も雪が少なく、ほとんどラッセルもない。みぞれのような湿雪が降る中、雪洞が掘れる程の雪がないので、ツェルトを被ってピバークし

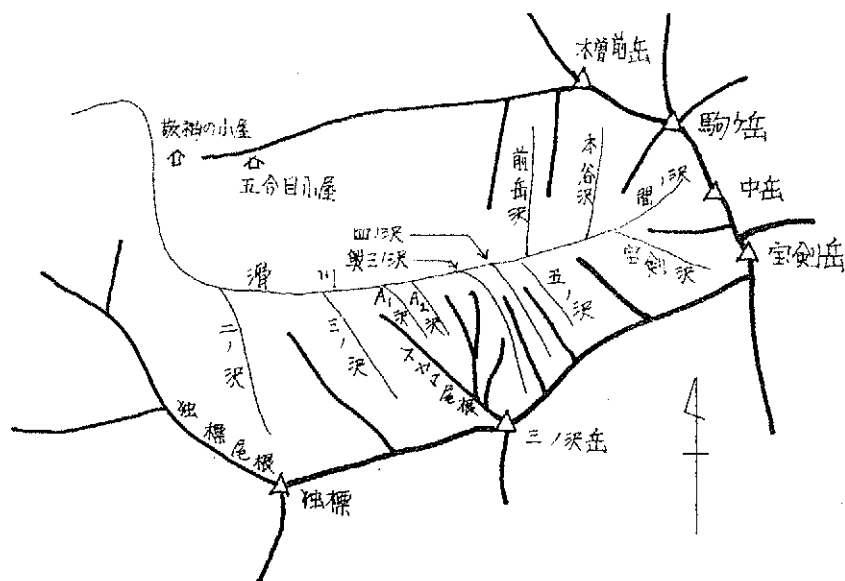


図 34. 中アルプス滑川周辺概念図

たが、3人の着ているものは全てびしょ濡れになってしまった。

12月26日 ⑧のち①

濡れて寒くて仕方がないので、出直すこととしてBCに帰る。肝心の三ノ沢は全く偵察することが出来なかった。

12月27日 ●

停滞

12月28日 ●のち◎

停滞

12月29日 ①

気温も下がったので奥三ノ沢出合に向かう。出合のF₁、F₂は高度差60m以上の見事な氷瀑である。しかし、瀑に張りついた氷は軟らかくて薄く、アイゼンを蹴り込んだだけで中の水が流れ出してしまう程の最悪の状態である。氷瀑の直登を諦めて、左岸を巻いてF₃の上に出る。河原は急に広くなり傾斜もなくなり、二股に分かれるあたりまで見通せる。奥壁のあたりも先日の雨のせいか黒々としており、ちっとも登高欲が湧かないので、奥三ノ沢の登攀は諦めて帰る。

12月30日 ○

せめて駒ヶ岳位は登っておこうと五合目小屋

あたりから尾根を登り玉ノ窪小屋で泊る。

12月31日 ◎のち①

駒ヶ岳から、宝剣に向かう頃から急にケーブルで上がって来たらしい登山者が増え出す。主稜線から三ノ沢岳に登り、先日登りかけた尾根を下る。初めての尾根を下るのは難しいものだ。樹林で視界が効かないため、何度か尾根を間違いかけるが、無事BCに帰着する。石原はその夜に下山する。

1月1日 ①

下山。(時間記録なし)

氷瀑や雪壁と云う他では味わう事の出来ない登攀要素を求めて計画した山行であった。しかし、積雪期の沢登りは、気象条件や積雪状態など氷の状態、ラッセル、雪崩など登攀の成否を決める外的条件によって大きく左右される。これらの外的な登攀条件が好ましい状態になるまで、何度でも取付きに足を運び、チャンスを待つ情熱が無ければ、積雪期の沢登りは完登出来ないだろう。(記 石原)

春山合宿

期間 3月15日～3月28日

参加者 藪田(C.L)、高橋(S.L)、石原
稲垣、黒岩、藪本

剣岳北方稜線

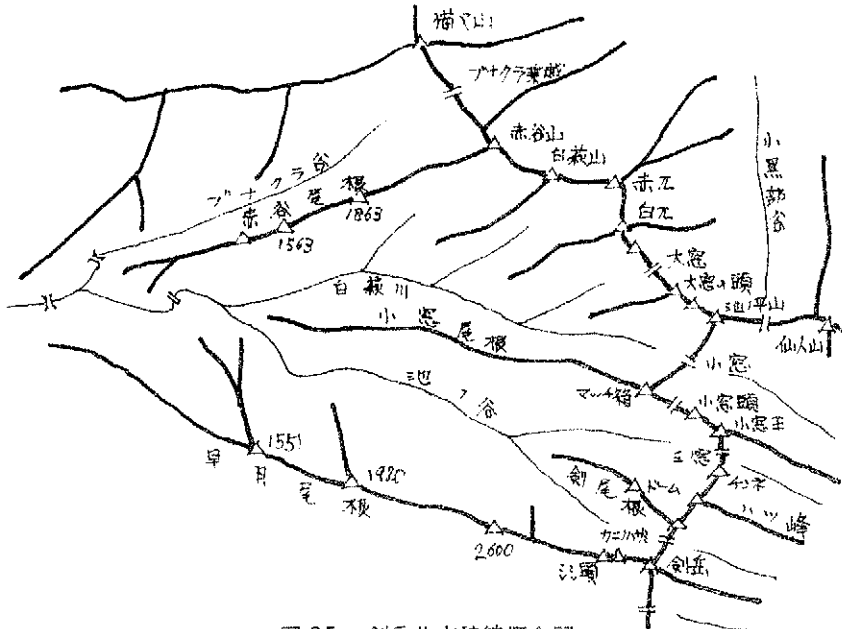


図 35. 剣岳北方稜線概念図

3月16日 ①

トラック終点(9:10)→馬場島(13:35)

富山で地铁に乗り替え、上市に着くと、既に中村氏のトラックが迎えに来てくれていた。同じ電車で来た佐賀大の3名のパーティーと共に馬場島へ。伊折からは除雪していない道を強引に30分位進んだ所で下車。春の陽光をあびて歩き始める。いくらも行かぬうちに身体中汗ばんでくる。行く手には、雪と岩の剣岳がそのアルペンの姿を見せている。途中で佐伯富男氏と一緒にになり、しばし談笑する。剣岳への入山パーティーのことなど話してくれた。馬場島では我々の設営風景を16mmに撮っていた。

3月17日 ●のち◎のち①

馬場島(10:15)→1,400mデボ地点

(15:00)→馬場島(16:30)

昨夜、雨がテントを打つ音に目覚めたが、朝になってもやはり雨である。止むのを期待し、しばらく天気待ちとする。9時の気象通報を開き終わるころ、雨も止んだようなので、デボに行くことに決める。10時すぎ4名で出発。赤谷尾根取付きまではトレールがあったが末端からは急な樹林帯のラッセルが始まる。雲が切れて青空と陽が出て暑くなって来る。雪は湿気を含んで重い。近大隊の赤旗があるがトレールはないも同然である。1,400mあたりにデボして引き返す。

3月18日 ①

馬場島発(5:40)→1,900m地点CS

(12:30)→デボ回収終了(16:15)

昨日のトレールを追ってどんどん高度を上げ

ていく。デポ地点までは何ということもなく着いてしまう。陽も高くなり雪がくさってくる。デポ地点を過ぎると尾根は傾斜がなくなる。

1,500 m付近の台地を越えナイフリッジにかかる、小窓尾根から本峰までが手に取るように望まれる。ザラメの雪を踏みつけワッセワッセと登れば1,900 mのプラトー。今日はここにテントを設営。汗にまみれた首すじを風が涼しく撫でていく。暑さで消耗した身体を休ませて「それでは。」とデポ回収に行く4名の足取りは心なしか重そうに見えた。

3月19日 ①

CS出発(5:45)ー赤谷山(9:10~9:45)ー赤ハゲ直下CS(10:00)ー1,900 mデポ回収終了(13:20)・赤谷山デポ回収終了(12:20)

今日も青空が望まれる。テント地に3人で回収出来る荷物を残して出発する。アイゼンを着けてはいるがツェッケを効かせて登るところが交互に出てくる。赤谷山直下のナイフリッジも安定した雪なのでフィックスの必要はなかった。赤谷山頂に立つと後立山、そして3年前の冬、豪雪に苦しめられた白馬の西尾根、また最初の計画であったウドの頭への尾根が、ピンク色のモヤがかかったように見える。ここで3名がデポ回収に、残り3名は前進し赤ハゲ直下にテントを設営することにした。夕刻、馬場島と位置確認のための交信を行なう。馬場島とは以後一度も交信出来なかった。

3月20日 沈殿

日本海を低気圧が北上し、終日強風が吹き雨。昨日防風ブロックを作らなかったため、雨の中、作り上げる。

3月21日 沈殿

富士山での遭難をラジオが告げている。家族がまた心配していることだろう。昼を過ぎると風も弱くなり晴れ間もでてきた。

3月22日 ①

CS発(6:30)ー大窓(13:10~13:45)ー大窓から1つ目のピークを越えたCS(15:50)

本日からデポの必要がなくなった。だが30

kg位の荷物なので、フィックス仕事を積極的にこなして進むので時間がかかる。ネチネチと進むという言葉通りでもあるが、スタスタ歩ける稜線ではないことも事実である。2日間荒れた後ではあるが、新雪の積もり具合はたいしたことはない。やはり雨のせいだろう。赤ハゲ、白ハゲを越え大窓への下りにかかる、雪はザラメの様になってきたが雪崩の心配はない。40 mザイル4ピッチで大窓のコルに降り立つ。近大隊のテントがあり、今日2名本峰アタックに出たとのことであった。熱い紅茶を頂いて大窓の頭への登りにかかる。急な登りで、最初の部分に40 mフィックスする。大窓から1つ目のピークを越えた所に設営する。

3月23日 ①のち②

CS発(5:35)ー池ノ平山(8:10~8:30)ー小窓コル(11:30)ーフィックス回収終了(12:10)

5時過ぎテントを飛び出すと後立山連峰は薄赤く染まり始めていた。黒岩、藪田で大窓の頭までフィックスをするために荷物を持たずに先発する。残り4名で撤収。大窓の頭の1つ手前の岩峰は小黒部谷側を巻くことが出来、頭へはすぐ着いてしまった。前方に池ノ平山が見えていてそこまでトレールをつけることに決めた。池ノ平山にフィックスしてしまったところ後継が大窓の頭までやって来た。4人で6個のキスリングを運ぶのだから全くゴクローサンである。おかげで少しははかどった。まだ8時過ぎなので今日中に三ノ窓まで行けるだろうか考える。天気は崩れそうである。小窓へ下り始めるころ雪が散らつき出した。池ノ平山から見た近大アタック隊の姿はもう見えない。ザイル40 mを4本フィックスして小窓に降り立つ。雪も本格的に降り出し、風もでてきた。防風ブロックが一度風で倒れた。

3月24日 ② 沈殿

風は19日程強くはない。昨日からの降雪で小窓尾根の稜線までの登りは雪崩の危険が多分にあるし、また視界が全くない。ここまで来ていればあと1日の好天で本峰を越えられないこともない。1時すぎドーンという大きな音。小窓

尾根で雪崩発生だ。

3月25日 ①

CS発(5:55)ー小窓尾根稜線(6:50)
)ー小窓ノ王トラバース開始(8:10)ー
三ノ窓(9:45~10:00)ー池ノ谷乗
越(10:50~11:05)ー長次郎のコ
ル(13:40)ー本峰CS(15:00)

小窓稜線まで一息で登りつめる。雪は締まっ
ているがくるぶし位はもぐる。昨日の大きな雪
崩の発生面は歴然としている。今日はまず雪崩
の心配は無いとはいえ、無気味である。小窓ノ王
まではできるだけリッジ近くを歩いた。南壁下
のトラバースは3本のフィックスを張った。

20m位雪面を切ってトラバースをしたが、フ
ワフワの雪でステップが崩れそうだった。フ
ィックスをつかんで小走りに通り抜け三ノ窓へ
飛び出す。しばし緊張を和らげ頭上のチンネに
目をやればたいして雪もついてないようだし、岩
登りでもやるかという言葉もでてくる。テルモ
スの紅茶にのどをうるおし池ノ谷ガリーの登り
が始る。ガリーの中央に大きな岩が顔を出して
いる所まではチンネ寄りに直登して行く。膝位
のラッセルでみんなのピッチも何とはなしに早
くなって行く。ハツ峰の頭がおおいかぶさっ
てくるようになって池ノ谷のコルに着いた。

約50分位のアルバイトだったが、短く感じら
れた。長次郎の頭までは細い稜線を剣沢へ張り
出した雪庇に注意して慎重に前進する。長次郎
のコルの下りにザイル2本をフィックスする。
前方は剣岳ピークへの最後の登りで、手前から
見ると急斜面に感じられたが、取付いてみると
何ということもない。ここもザイル2本フィッ
クスした。少し時間がかかってしまったが全員
がのんびりとピークに立ったのは3時過ぎであ
った。頂上の雪に埋まった祠の上で記念写真をと
り四方の眺めに見いる。今日25日で3名が卒

業を迎える。これからのOUMCは前途多難で
はあろうが、お互に力を合わせてやっしていこう。

3月26日 ㊗ ㊗ 沈殿

北寄りに低気圧が通過しているようがかすか
ながら雪も降っている。風は強くない。夕刻ガ
スも切れてきた。頂上へ行ってみると富山平野
の灯が美しく輝いていた。

3月27日 ①

本峰CSー馬場島(16:00)

大した風もなく下山日和というところであろ
うか。早月尾根は滑落事故が多いので全員最後
の気持ちを引き締めて下降にかかる。2,600m
までは40mザイルのフィックスを16回位張
った。昨日の新雪のために表層雪崩の危険が大
である。できるだけリッジを行くが、かといっ
て雪庇を踏み破るわけにもいかないし、2~3
度足下の少し下より音もなく雪面が切れて落ち
て行くのには肝を冷やしてしまう。急な下りや雪
崩の危険があると思われる所はすべてフィッ
クスした。とにかく時間はかかる。滑落が多いの
もうなづけるのであるが…。2,600mを過ぎ
たころ下から9名のパーティーが登ってくる。
伝蔵小屋まで来てアイゼンをぬぎ、これからは滑
り落ちるようにしてひたすら馬場島へ。背後の
剣岳はガスの中に消えていった。

3月28日 ①

馬場島(7:50)ー伊折(10:00)

朝伊折発(11:00)のバスに間に合うよ
う出発する。剣岳の見える所に来ては眺めや
った。春風をほほにうけて、青空の下さわやか
な気分で行く。何の失敗もなく縦走を完遂でき
た。大窓の下り、小窓の王のトラバースなどが
楽しく頭に浮かんでくる。中村氏宅の前で近大の
3名とも総勢8名、ピールの栓を抜く。疲れた体
に心地よくしみこんでいった。

1972年度（昭和47年度）活動記録

'72年度 現 役 部 員

C . L	高 橋 正 身	理 生 4 (4)
S . L	藪 田 勝 久	理 化 3 (4)
	後 藤 正 教	法 1 (1)
主 務	上 松 一 雄	工 機 2 (1)
	佐 原 健	法 1 (1) (退)
	木 下 進	理 化 1 (1) (退)
	芦 原 栄 治	工 土 1 (1) (退)
	常 松 豪	工 建 1 (1) (退)

5 月 山 行

新人歓迎白馬山行

親ノ原—天狗原—白馬大池—白馬岳

期 間 4月30日～5月6日

参加者 高橋(L)、藪田、芦原、木下、
後藤、佐原、常松

4月30日 ①

親ノ原—リフト—阪大小屋裏CS(15:00)

バスがストのためリフト起点まで歩く。初めての山行で30Kgを持たすのは酷と考えられたがみな元気いっぱい歩く。第一リフトは10時までしか動いておらず歩かされる。リフトの終点は雪が残っておりスキーをしていた。小屋まで雪道を一時間程。

5月1日 ①のち●

出発(7:15)—成城大小屋(8:00)—
天狗原(10:15)—大池CS(12:45)

気圧の谷が近づき、天気が悪くなりそうだが、天狗原まではと思い出発する。案の定天気は不安定で白馬が突如現われたり、見えなくなったりする。成城大小屋の裏の登りで、みんな適度にばてて天狗原へたどり着く。天気もなんとか持ちそうなので予定通り大池を目指す。乗鞍の斜面の途中でついに雨がぱらつく。雨具を着てみんな頑張る。大池に着きテントを張ったとたん風雨が強まる。ぎりぎりセーフでした。

5月2日 ◎強風 停滞

どういわけか冬型にはまり-10℃で強風という冬山並みの天気。皆さすがにしゅんとし、少し風邪気味でもあるがあまりの風に耐えかね、4年2人が外へ出て防風壁を作る。新人にとっては試練の日でした。

5月3日 ①

出発(6:30)—雪上訓練—帰幕(10:30)—木下、高橋出発(11:15)—一同帰幕(14:00)

気温が低くテントの前の雪は、アイゼンをはく位締まっている。が、キックステップで雷鳥坂の斜面まで行き、キックステップ、ストップの練習をする。みんな今日までの疲れが出てきたのか、しんどそうであった。10:30頃、帰って来てテントで昼飯。木下、高橋は白馬への様子を見に小蓮華手前まで行く。帰りはアイゼンを着けた。他は寝たり、スキーをしたり。

5月4日 ①

出発(6:15)—白馬岳(10:20)—
帰幕(13:00)

次の気圧の谷は上海にある。まだ持ちそうなので白馬へアタックをかける。新人5人と高橋、藪田、それに合流した稲垣、藪本のOB連。キックステップで雷鳥坂を登り、頭に藪田はスキーをデポする。アイゼンを着け、ひっかけぬよう注意をしながら進む。途中常松が岩の間につめをひっかけ少し足をねじったが、大したことはない。適度のそよ風をうけながら三国境まで来ると頂上はすぐ頭の上にある。主稜を登っている人を見ながら雪稜を登ると頂に着いた。人でいっぱい。帰りは小蓮華の手前までアイゼンを着けたが雪がくさってきたのではずす。雷鳥坂はシリセード。高橋はすぐ下山。

5月5日 ● 停滞

雨と風。昼頃少し雨がおさまったので、スキーやら散歩で過ごす。エッセンが大量に余っているのだが、新人はみな食欲なし。いきなりこんなテント生活に入ったのがこたえているのだろうか。食後、明日下山を告げる。新人に笑顔。

5月6日 ◎

朝はまだガスであるが、下山する。乗鞍の斜面をスキー、シリセードで下る。スキー組と歩き組が追いつ追われつ。またなんと情けないスキーなんでしょう。梅ノ森からそろって下る。東急山荘前で下山宣言。下はおおらかな春の一日でした。

〈新人の感想〉

木 下 進

僕は高校時代一応山岳同好会に入っていたが、そこでは附近の京都北山、西山、比良などに日帰りで行くハイキング的なものが多かった。北アルプスへ行ったことは一度しかない。(これも山小屋利用の4日間の山行であった)。従ってかつぐ荷物もせいぜい十数キロまでであった。それが今度の山行では三十数キロの荷物を背負ったのだからザックをかついだ瞬間まさに足がよろめいた。特に第1日目 白馬大池駅から歩き始めた時のつらさは今でもはっきり覚えている。予定していたバスがストであったため、バス道を歩きだしたのはいいが、途中からバス道はずれスキー道近道と称する道を登って行くのである。荷が軽ければその程度の道はたいしたことではないのだが、なにしろ未曾有の重量の荷物がかついでいるため進行がままならぬのである。左右どちらかへ体が傾いた時など、バランスをとるのに苦勞した。その上共同装備の配分でパイナップルがあたりそれを一番上に置いてバックキングしたところ、ザックがゆれるたびにパイナップルがごつんごつんと頭にあたるのである。そして次第にそれを包んでいた袋が破れ、頭にあたるたびに甘いねっとりした液が首すじにこびりつくのには大いに閉口した。これからパイナップルを山に持っていくなら生よりも罐づめの方がよいと思う。それでもやっとの思いで樽池のスキー場にたどりついた。このことだけでも今までの僕にとっては驚異である。そこで期待していたリフトは動いていないことを知りこれから登らねばならない雪のないスキー場の斜面を見上げ、さらにその上に続く山並みを見上げたときは照りつける太陽の下、周囲に人っ子一人いない特種な環境と相まって実に悲愴的、絶望的な心境であった。

まだこのほかにも罵声で明け、罵声で暮れたテントでの生活や雪上訓練の散々のていらく、新入生がくたびれているのに、先輩OBは意気盛んであり、山岳部に三年四年と入っているとあまでなるのだろうかと思嘆したことなど、印象

に残っていることは数えあげればきりがなが、一番強く残っていることを書いて筆をおく。

後 藤 正 教

今度の山行で最も参ったのは食事である。オジヤの連続。しかもその味つけにコンソメを使うのである。コンソメは俺の最も嫌いなものなのである。変な臭いがあるのだ。それから飯がいけない。しんがあるのだ。とてもじゃないが喰えない。先輩に問うと、山歴を少し積みばどんな奴でも喰えるようになるとのこと。夏の合宿では皆競争してむさぼるとのこと。ちょっと安心。しかしちょっと心配。こんな風に食事面では困難を極めたが白馬の山頂に立つとこんなことは忘れてしまう。人が多いのは気に入らないが、しかし山はいい。大糸線から眺めた時白馬三山が雪で真っ白で「あんな山に登るのか!!」と、ちょっと心配した山の頂に立った気持ちはなんとも言えない。いい気持。四年間やっていく気になる。残念だったのは自分の体力不足であった。ザックを背負ってちょっと歩くと肩が痛くてどうしようもない。体力のない証拠だ。これから鍛える必要あり。

大峰神童子谷

神童子谷一大普賢岳

期 間 5月30日～5月31日

参加者 藤田、上松

5月30日 ● 川合発(2:20)ーCS(4:00)

雨が終日続いたので少し日和って予定の少し手前のあばら家で泊る。

5月31日 ○ 出発(5:30)ー神童子谷出合(6:15)ー釜滝(9:10)ー稜線(12:35)ー大普賢岳往復(12:35～13:00)ー柏木の手前(16:00)

昨日とは違って変わった五月晴れで終始心かは

夏山定着合宿

ずむ。しかし神童子谷は下流のほとんどに林道がつき大いに白ける。遡行中、滑りやすい岩を
行く時ザックをかついで若干の水泳を楽しんだ。
ノウナ三谷へ入った所、大きな滝と岩壁につき
当り巻いたつもりがエスケープしてしまうこと
になり、そのまま支尾根をつたって大普覧へ。
あとは奥駆分岐から柏木方面へ、全般として水
量が少なかったせいか予定を大幅に縮める。

槍ヶ岳 BC 千丈沢 (概念図は P39 図 12, 13 参照)

期 間 8月1日～8月17日

参加者 現役、藪田、高橋、上松、後藤、佐原
OB、石原、中岡、出雲路、稲垣、
鹿野、田中、山田、糸井、大野
原、大宅

〈行動概要〉

8月1日 ポッカ 穂高平―滝谷出合

8月2日 ポッカ 千丈沢BCへ

8月3日～12日 定着

8月13日 新穂下山

8月14日～17日 阪大生遭難者収容作業に
協力、縦走中止

〈個人行動表〉

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
藪田	沈	雪	A稜	べ	C稜	北穂	B稜	雪	沈	D稜
高橋									入山	硫黄岳
後藤	沈	上 訓 練	小槍	I ス 移 転	TK	北穂	B稜	上 訓 練	沈	硫黄岳
佐原	沈		TK		小槍	TK	天上沢		沈	D稜
上松	沈		A稜		穂高ビバーク		赤岳		沈	TK
大宅	沈		小槍		B稜	下山				
石原	沈	下山								
中岡		入山	小槍	沈	穂高ビバーク	下山				
出雲路		入山	下山							
稲垣			入山	沈	小槍	D稜	B稜	沈	下山	
鹿野			入山	沈	小槍	下山				
田中				入山	小槍	A稜	赤岳	沈	沈	硫黄岳
山田				入山	B稜	下山				
糸井				入山	C稜	D稜	天上沢	下山		
大野				入山	B稜	A稜	下山			
原						入山	赤岳	沈	沈	下山

6日のベース移転は熊にテントを破られたため。

秋山個人山行

裏 剣

阿曾原—池ノ平山—小窓—三ノ窓—剣岳—馬場島

期 間 10月5日～10月9日

参加者 稲垣(OB)、後藤

10月5日 ① 樺平(11:55)—阿曾原CS(16:30)

樺平から水平道まで1ピッチ半。それからバランスに注意して、ひたすら歩く。左手に奥鐘山の岩壁が威圧的なたざまいを見せて眼前に迫ってくる。途中のトンネルは真暗で底は水が流れている。手さぐりで前進。二、三度岩に頭をぶつけながらも10分ほどで脱出。

阿曾原の小屋よりちょっと手前の河原で幕営。

10月6日 ① 出発(7:00)—仙人池(11:45)—池ノ平小屋CS(12:55)

阿曾原から小黒部谷を見おろす尾根に出るまで2ピッチ。それから仙人池までトボトボ歩く。紅葉がだんだん色濃くなってくる。やはり大自然を背景にした美しさは最高だ。行きかう人も数少なく、天気も申し分なく空気がうまい。仙人湯小屋は8月24日頃に閉じたそう。解体されていた。仙人湯から仙人池までの沢で飲んだ水は、沁いたのどにしみた。仙人池からの剣の雄姿は素晴しかった。仙人池に影を映し紅葉で背景を飾った剣、抜群!! 仙人池で40分程目の保養をして池ノ平小屋へ。小屋はすでに閉じられていた。

10月7日 ① 出発(6:35)—池ノ平山(8:15)—小窓(9:50)—三ノ窓CS(12:05)

池ノ平小屋から池ノ平山へ。池ノ平山から小窓のコルまで急な下り。春山のフィックスの残

りが、かなりあった。小窓のコルから三ノ窓へ後立山連峰を眺めながら歩くが、小窓ノ王の下までくると、剣尾根の恐ろしいほどの岩峰、チンネ、ジャングルムの素晴らしいフェース、深く刻みこまれた池ノ谷が見えた。

10月8日 ①

本日は天気もよいし、日数もあることだしということで沈と決定。本当は三ノ窓でジャコビニ流星群を見たかったのだ。PM5:00からAM2:00まで寝て目を覚まして外へ出てみれども、流星雨など見えはせぬ。あほらしくなってふて寝する。

10月9日 ① 出発(7:10)—剣岳(9:30)—伝蔵小屋(11:30)—馬場島CS(13:40)

今日は本峰を越して早月を下り馬場島へ。本峰は人が大勢。早月は下りが少しやばい。一度バランスを崩して落ちそうになった。どンドン下って今年の春つぶれたという伝蔵小屋に着くと小屋は再建されていて、テンの皮が干されていた。ここで一服して馬場島へ一直線。

稲垣OBとの二人だけの山行ではあったが、大変勉強になった。一ピッチでどれほどの高度がかせげるものか。歩行技術に対する助言、山の名前、岩の名前などいろいろ教えていただいた。これから先の山行に於いて役立つことばかりである。秋山の素晴らしさをたっぷり味わったという感でいっぱいだ。(記 後藤)

11月偵察山行

扇沢周辺

爺岳—鳴沢岳—赤沢岳—針ノ木岳—蓮華岳

期 間 10月29日～11月5日

参加者 縦走隊 藪田、後藤

ポッカ隊 高橋、上松

<ポッカ隊記録>

10月31日 ⊗ 扇沢(10:00)ー種池
下1,200m地点CS(15:50)

大町より扇沢へバスで行き、種池小屋を目指して登り始める。小1時間で冬山用の荷物をデポしダブルすることにする。種池を目指す、16:00になってもかなり距離があるため道にテントを張る。

11月1日 ○ 出発(6:20)ー種池小屋
(10:10~11:10)ーデポ回収(12:
45~13:15)ー種池CS(17:
20)

満天の星。テントをたたみ出発。途中夏道が雪に隠れ雪の下がガレた沢のトラバースであったため非常に時間を喰う。種池でテントを張り、一息。デポを取りに扇沢へ。トレールがあるので快適に行くが、帰りはバテバテ。

11月2日 ○ 出発(7:15)ー新越乗越
(11:30~12:10)ー種池(14:
45)

デポだけ持ち、新越小屋へ。ラッセルも加わって随分長く感じた。種池へ戻りシュラフをほしたりしてくつろぐ。空は次第に青さを失いつつあった。

11月3日 ◎のち○ 出発(6:30)ー新
越乗越(9:10)ー赤沢岳CS(11:30)
空模様を心配しながら停滞も考えていたが結局出発する。新越への中道あたりで縦走隊と出会う。このあたりよりみぞれ。バテ気味で赤沢岳へ。頂上直下の絶好のテント地にテントを張り、寒さに耐えながら晩飯を待つ。

11月4日 ○ 出発(6:20)ー新越(7:
30~7:45)ー大沢の頭(10:00)
ー赤沢岳(10:30~12:40)ー大
沢の頭CS(13:15)

出発をやや戸惑ったが空荷で出発。新越でデポを回収し赤沢岳へ戻り、さらに大沢の頭までデポをしに行く。赤沢岳よりテントを撤収し、頭にテントを張る。

11月5日 ◎のち◎ 出発(6:40)ース

バリ岳(8:00)ー針ノ木岳(9:00)
ー大沢の頭(10:50~12:30)ー大
沢尾根末端(17:00)ー扇沢(17:
50)

朝方、雪が薄っすらと積もりややクラストしていた。天気はガスっているが上空は晴れている模様。気分を良くして針ノ木へアタックをかける。針ノ木は雲海の上で爽快に写真を撮る。テントへ戻り撤収し、大沢尾根を下る。上部は左右が切れておりかなり急。下部はうんざりするブッシュ。やけ気味に降り真暗の中扇沢に着いた。

<縦走隊記録>

10月29日 ○ 北葛沢出合出発(7:30)
ー1,500mコブ(14:15)ーCS(
15:00)

北葛沢にかかる橋で車を降りて、蓮華東尾根を登ることにする。1,200mのコブまでは切り通しに沿って歩く。しかしそれからは切り通しもなくなりものすごいブッシュの登場。まずはシャクナゲのでかいやつ。キスリングとピッケルがブッシュにひっかかって進むのがしんどい。水もだんだん乏しくなってくる。1,500mのコブまで必死にはい上り、そこからちょっと下ったコルでテントを張る。

10月30日 ○のち夜◎のち⊗ 出発(6:
30)ー1,740mジャンクション(10:
40)ー1,950m(14:40)ーCS(
15:05)

水がほとんどなくなり悲しげな風で歩いて行くとコルから2ピッチ歩いた地点で急にブッシュが切れた所があり、藪田が見当をつけて水を採しに行くと、バッチリ。思いっきり水を飲んで再出発。しかしブッシュが切れたのはほんの少し。また前よりものすごいのが現われる。シャクナゲに加え、ササ、倒木も登場とあいまって、絶望的な気持ちにおそわれることもたびたび。1,950mピークを越えたコルでテントを張る。またもや水がなくなっていたが、この晩運良く前線通過となり、雨後雪で水不足は解消した。

10月31日 ⊗ 出発(7:10)ー2,500

mジャンクションCS(14:40)

朝起きてみると一面雪となっている。2日間のブッシュとの苦闘でかなりいやな気分でお発。ブッシュはあい変わらずであるが、雪がついているのでちょっとは楽。しかし笹の上についた雪などは滑りやすいので苦勞する。2,500mのジャンクションの手前はかなりの雪で冬になると雪崩れるのではないかと思われる。

11月1日 ○

出発(7:20)ー蓮華岳(10:30)ー針ノ木峠CS(11:55)

起きてみると素晴らしい快晴。いよいよブッシュとおさらば。蓮華岳山頂に近づくとつれて素晴らしい眺望を目の前にするようになる。2,650mから夏道らしきものに導かれて山頂へ。蓮華の頂上から見た針ノ木岳はかなりの威圧感がある。針ノ木峠まで行き、雪がだんだんくさって来たこと、連日の行動で疲れていることを理由に、テントを張ることにする。

11月2日 ○

出発(6:15)ー針ノ木岳(7:45)ーマヤクボのゴル(8:20)ースバリ岳山頂(8:50)ー大沢の頭(10:20)ー赤沢岳(11:30)ー鳴沢岳(12:50)ー新越乗越CS(14:00)

夏道に沿って針ノ木岳へ。冬はリッジ通しになりそう。針ノ木からの下りはアイゼンを着けて慎重に下る。スバリ岳の下りも夏道沿いに慎重に。冬はリッジ通しになりそう。スバリから新越までのりくらくり歩く。

11月3日 ◎のち⊗

出発(6:30)ー種池小屋(9:15)ー爺岳南峰CS

新越と種池の中間点ほどでボッカ隊とすれちがう。

11月4日 ◎のち⊗ 停滞

11月5日

出発(7:35)ー鹿島槍北峰(10:20)ー爺岳南峰(12:25)ー扇沢駅(16:40)

テントを撤収した後、サブザックで鹿島槍アタック。爺岳南峰はよく踏まれていて蓮華東尾

根と比べればものの数ではない。2,300mのジャンクションから扇沢の道を目指して一直線にブッシュの中を下る。

御岳アイゼン合宿

期間 11月26日～11月29日

参加者 高橋、藪田、上松、後藤

雪が多く、五ノ池まで2日かかった。二ノ池へ行く途中、摩利支天を過ぎる頃より猛烈な風雪となり、視界もなくなる。1年生がよく頑張る、なんとか二ノ池へたどりつく。風雪で雪上訓練はほとんどできなかったが、風雪中の行動のよい訓練になった。下山は濁河温泉へもどったが、夏道が雪に没し、ルートがわからず苦勞する。御岳は雪が深いと、地形が単調なためルートファインディングが難しい、要注意。小屋の人と前後しながらなんとか下る。

冬山合宿

蓮華東尾根

北葛沢出合ー東尾根ー2,700mJPー黒沢出合

期間 12月

参加者 高橋、藪田、上松、後藤、大宅(OB)

計画は蓮華東尾根から針ノ木ー赤沢一爺と縦走して余裕があれば鹿島へアタックをかけると

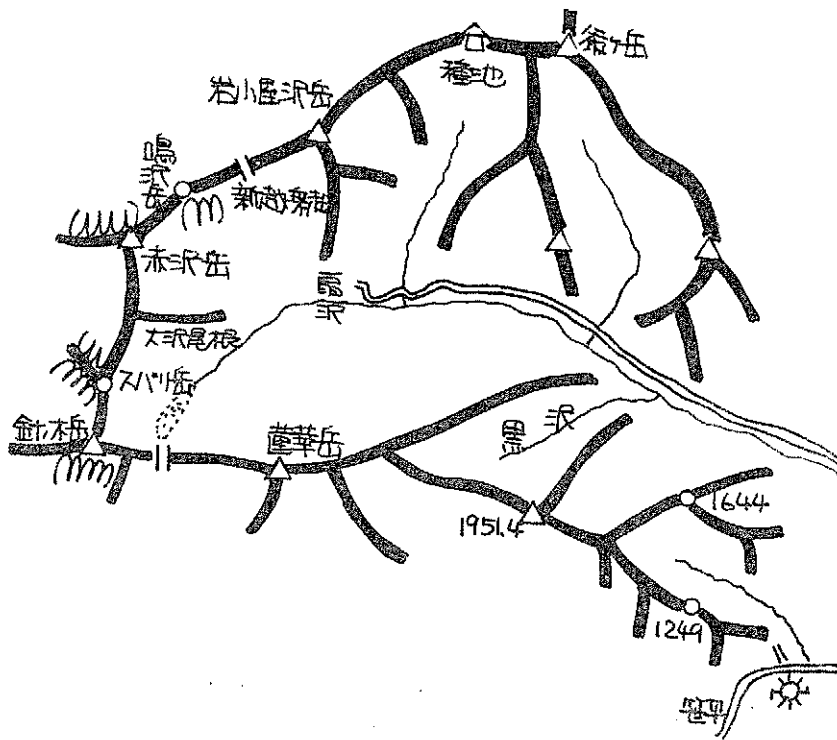


図 36. 扇沢周辺概念図

いう大きなものだった。しかし結果は、蘆華岳にも行けず東尾根を黒沢出合へと下り完全な失敗に終わった。原因は色々あるがなんといっても計画のまずさである。4年2人、1年2人の部会ではチェックらしいチェックもできず、大きな穴を見過ごしていた。それはデポを大沢の頭に置いた事である。予備が必要なのは針ノ木～赤沢間であるにもかかわらず、軽い荷で通過するという事にのみとられてしまったため、針ノ木峠にデポすることを考えもしなかった。このためリーダーの余裕のなさも手伝って、蘆華の手前で敗退してしまった。また計画のまとまりのなさもあげられる。新人を鍛えるため、雪の多い稜線を歩かせるということで新人には多少無理であろうとは思いつつこの計画をたてたのである。しかし、無理をおしての計画であるならアプローチは短くすべきであった。

笹平からの長大な尾根で時間を喰ってしまったため針ノ木岳へのアタックすら出来ずに終わっ

てしまった。

反面、東尾根の長い道をラッセルし続けるという泥くさい山行になったのはある意味では新人の為になったのではないかと思っている。

冬山ルートとしての蘆華尾根は北葛川出合から登るかぎりラッセルのみの長い尾根である。ただ1ヶ所1,951mピークの手前に40mの非常に急なやせた斜面の登りがあり、ザイルのフィックスをした。ピンはブッシュが豊富にある。2,500m

J Pへの登りは広い急斜面で、積雪直後は雪崩の危険がある。雪庇は出ていなかった。

大沢尾根は11月の偵察でみたくかぎり下部は問題がない。しかし上部はやせて急であり、ザイルのフィックスが必要であると思われる。

春山合宿

杓子岳双子尾根

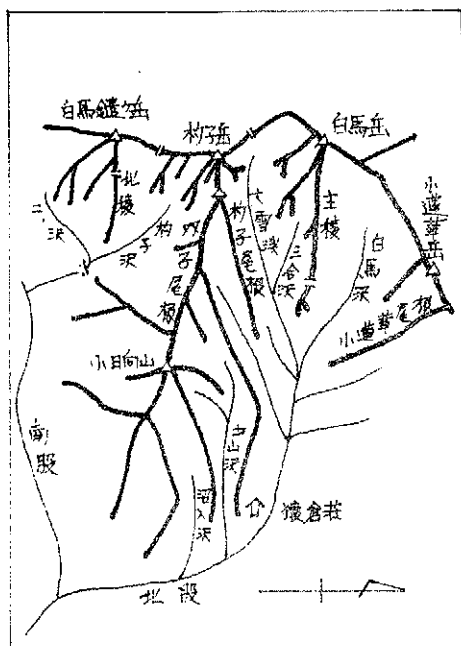
猿倉—杓子岳—白馬岳—樺池阪大小屋

期 間 3月26日～4月1日

参加者 上松(L)、高橋、後藤、石原(OB)

翌年度、2年生が最高学年となってしまったため、無理を承知で1年生をリーダーにした。

図 37. 杓子岳双子尾根概念図



3月26日 ⊗のち①、◎

細野(10:35)→二股(10:55)→猿倉(14:35)→台地CS(15:50)
白馬に着き、朝食をとり、大阪本部である大川さんに連絡し登山補導所に計画書を渡した後バスで細野まで。ここより二股へ歩き始めたが、途中発電所の車が沢の中にはまっているのを見つけ、しめたとばかりに助けに行き、そのまま二股まで乗せてもらおう。とてもラッキー。二股よりは割と速いピッチで猿倉へ向かい小原に着く。ここまではちゃんと道があったが、ここからひどいラッセルとまでは行かぬが必死のラッセルで猿倉台地の適当に平らな所にテントを張る。そろそろ暗くなりなぜか風も強くなってきていた。

3月27日 ○

出発(6:30)→小日向コル(10:30)→樺平CS(14:30)
4:00の起床予定より30分遅れ、ややがっかり。快晴でなかなかの登山日和ではあった

が若干中山沢のトラバースでの雪崩が気になる。7:00よりトラバース開始。急斜面を一目散でといってもラッセルしながらはい上がる。小日向コルに上がったのが10:30。ここから双子尾根に取付いたわけである。雪庇と雪崩との危険に身を縮めながら、ナイフリッジ状になった尾根を右へ左へとラッセルをし必死で頑張る。途中高橋が雪庇を落とした。なかなか大きな雪庇で驚くというより見ている面白かった。樺平へは4人も、といっても石原OEは元気そうであったが、バタバタになって着きテント場を地形を見て決める。

3月28日 ⊕雷 停滞

強風、しかも南風ときたので昨日からの積みかけのブロックをせせせと作る。途中雷が鳴りしばらくしゃがんでじっとしている場面もあった。風はどんどん強くなっていくようであった。

3月29日 ⊙のち⊗

出発(6:30)→樺平上部100mのコルのCS(7:30)

朝方天気はよくなかったが、しばらくの間晴れていたため予定通りテントを撤収し出発。

100m程の急斜面を登った。上の方まできて横に亀裂が走ったので一同ドキリとして、早々にちょっとしたコルにはい上がる。次第に天候も悪化したようなのでそのコルを整地してテントを張る。張り始めの頃よりあられのようなものが降り始め、テントに入った頃にはみぞれとも湿雪とも言えぬものが降っていた。

3月30日 ○

出発(7:00)→ジャンクションピーク(9:50)→雪悪く時間待ち(10:30~15:00)→CS(16:00)

まさかと思う無風快晴。ちょっと昨日の天気図からは想像もつかぬかったが、一応晴れているのは確かなのでテントを撤収し出発。ちょっとやばい所に来たのでザイルを出し上松トップ。爽快爽快。実際、岩に雪がついているという感じの所があってヒヤリとした。ここでフィックス30m。ジャンクションから50mほど行った所で穴にもぐり、ごそごそやっている、すぐ下の方に横へ亀裂が走り、2mぐらいの厚さの

雪の層が音もなく落ちていった。この時は、前の雪庇と違ってかなり気分が動揺した。そのときは2~3m下が落ちたような気がしたが、後で見ると10m以上下の方であった。しかし、かなり大きな雪壁雪崩であった。このショックで次の地点までやや雪崩れそうな斜面に行く気になれず、10:30~15:00間、時間待ち。白馬、八方を眺めながら日なたぼっこというものもなかなか楽しかった。15:00から動き出し、50mフィックスして通過。目の前に杓子を見ながら石原OB、高橋が杓子への登りのフィックス工作をする。しかしながら16:00もすでに回っていたため諦めて、杓子より150mほど下の平らな所にテントを張る。
3月31日 ①のち◎

出発(7:00)ー杓子岳(10:30)ー頂上小屋CS(12:30)

朝晴れていたがテントを撤収の後、どうも崩れそうだという事でテントを張り、5:45の天気図をつける。しかし、そんなに崩れないだろうという事で再びテントを撤収し出発。しかし、白馬には鷲雲が不気味にかかっていた。

80mのフィックスを登り終えた頃から天気が崩れ始め、本当に杓子直下の40mのフィックスを登り終える頃には強風とガス。9:00の天気図をつけ、もうここまで来たからにはとばかりに杓子からガスの中を下る。ガスは濃く視界はほとんどなかったが、礫石をたよりに前進し強風の中、頂上ホテル付近にたどりつき、ここでテントを張る。

4月1日 ○

出発(10:00)ー白馬岳(10:50)ー小蓮華(12:30)ー乗鞍(13:50)ー阪大小屋(14:50)

快晴と喜ぶべきか非常な強風。明日が最終下山日であったので10:00までは風が弱まるのを待つとして弱まらなくとも強行にいかうと決する。果たして10:00 風はむしろ強くなっているのではとさえ思えるほどの強風。意を決して10:00 出発し、白馬山荘にて名工大の人と会い、たばこなどいただいて即白馬へ。白馬に着き、写真などを写し、足早に強風の中を

下山して行った。フラフラになりながら、ひたすら阪大小屋へ。

阪大小屋合宿

この小屋合宿の目的はリーダー養成と、来春の北海道におけるスキーツアーの準備としてのスキー技術の上達であった。しかしながら縦走後のこととていろいろごたごたして最初の予定にあった風吹大池へのスキーツアー、シールをつけての歩行訓練は行なえなかった。しかしアタックとピバークはノルマを消化しスキー技術も少しながら上達した模様。スキーはもっぱらグレンデスキーに徹した。

〈新人パーティーー雪倉アタック・ピバーク〉

参加者 上松、後藤

4月3日 ◎のち◎, ①

出発(5:15)ー乗鞍(7:35)ー白馬大池(8:30)ー小蓮華(10:00)ー乗鞍(12:00)ーBS(13:00)

小屋を出発する時、雪がサラサラ舞う程度であったが、成城大小屋付近から風がちょっと出てきた。前日の失敗から行ける所まで行こうということに決定。大池までは快調なペースで進む。心配していた天気も、良くなりもしないが悪くなりもしないといった程度。しかしながら稜線を上がるに従い風が次第に強くなっていく。雪はクラストしていて、アイゼンが気持ちよく効く。だが風が非常に強く、弱くなりそうもないことから小蓮華まで行った所で雪倉アタックは諦める。時間があまったのでトボトボ引き返す。大池付近からピバークの場所をうかがいながら乗鞍を経て、天狗原を通過しどんどん降りて、とうとう成城大小屋より150m程上のゆるい斜面をピバーク地に決定、雪洞を3時間程かけて掘る。

4月4日 ◎

出発(5:15)ー阪大小屋(6:00)

<個人行動表>

	3/31	4/1	2	3	4	5	6	7
上松			スキー	雪倉アタック・ピバーク	スキー	スキー		下山
後藤			スキー	雪倉アタック・ピバーク	スキー	スキー		下山
高橋			買い出し	沈	主 稜			下山
藪田	入山	乗鞍	スキー	小蓮華	主 稜		下山	
OB 石原			下山					
大宅		入山	スキー	下山				
大野	入山	乗鞍	スキー	下山				
石浜	入山	乗鞍	スキー	下山				

<白馬岳主稜>

4月4日 ⊗

参加者 高橋、藪田

タイム 阪大小屋(6:15)ー小蓮華尾

根分岐点(10:30)ー小蓮華尾根 末端台地 BS(15:00)

昨夜ピバークした1年の帰りを待って、交棒の打ち合せ後出発。小雪が降っているが、これは小さな気圧の谷の通過のせいだろう。今日の行動は主稜に取付けたら上々という見当だ。1時間半で天狗原、ゆっくりしたペースである。大池からの斜面を登りきった頃より風が強まってきた。たいした寒さではないが湿雪で濡れるのでヤッケを着た。昨日下り口に立てておいた竹ザオが目に入った。稜線直下の急な雪壁は、慎重にアイゼンを効かせて降りた。ガレ場を過ぎるとブッシュが現われる。ダンゴに悩まされ、ブツブツ言いながら下る。ガスっているので時々目に入る赤旗が有難い。大分下ったところ、一瞬ガスがうすらいで主稜が目に入ったが、ここらあたりをよく知らない我々は取付点の方ばかりに目が行く。大体の見当で支尾根に入って下ってみたが、そこから取付きへ行くにはデブリの出ている小さな沢を横断しなければならないことが分かり、引き返す。結局小蓮華尾根を末端まで降りることにした。そして見晴しのきくブッシュの切れた台地状のはずれに雪洞を掘っ

た。

4月5日 ○のち◎

出発(6:55)ー主稜取付き(7:10)ーⅧ峰(9:35)ー頂上直下 BS(17:00)

寝過ごした。外は快晴。沢筋めがけて樹間を駆け降りると、そこは白馬沢出合100m程下だった。頂上が高い所に黒々と見えている。沢は静まりかえり陽の光だけがおどっている。変てこりんな感じであった。樺ノ木を目指して登りかけたが、以外と急なのに驚いた。しかしまだ雪崩ないというもの、通り道にいるというのは気持ちよくないので樺までノンストップ。割合急な上、だんごになるので疲れる。岩の出ている所ではザラメとなったが、かなりの傾斜で休めない。リッジに出る少し手前にピバークした跡がありそこからはトレールがあり楽になった。リッジに出てしばらく行くと、テントを張った跡がありちょっとビックリ。次の小ピークを越すとキスリングを背負ったパーティーがⅧ峰の登りにかかっているのが見えた。アンザイレンしてⅧ峰を越し、しばらくして追いついた。キスリングの連中を追い越し、ここでアタックザックのオッサンが単独行なのを知った。この地点から2ピッチ程そのオッサンがラッセルしていたが、その後は我々がトップとなった。一ヶ所だけ昨日の新雪がフワフワの状態であって、それを落としながら行く所があったが、それ

以外は割と締まっていた。Ⅳ峰あたりで昨日来
できなかった交信がやっとできた。Ⅲ峰に登る
ころよりガスとなり、視界10mほどになる。
雪庇かどうか分からないのでずっとスタカ
ットで登ることにした。Ⅱ峰の登りになる頃か
ら風もでてきて寒い。ここは左側の雪壁に登っ
た。何もわからないまま登って行くとどうやら
頂上直下のようなのである。時計を見れば5時だし、
こんなガスの中を登ってもというので雪洞を堀
りにかかった。単独行のオッサンは小屋に入る、
と登っていった。

4月6日 ○

出発(6:45)ー頂上(7:30)ー阪大
小屋(11:00)

また寝過ごした。昨日のオッサンのステップを
掘りだしながら雪壁を1ピッチ登るとすぐ上に
雪庇がおおいかぶさっている。雪庇基部の割れ
目の中には昨日のオッサンがいるらしく、トン
ネルを掘っているらしかった。我々は右へトラ
バースして雪庇が張り出してないところを抜け
出た。

1973年度（昭和48年度）活動記録

73年度 現 役 部 員

C . L	上 松 一 雄	工 機 3	(2)
S . L	後 藤 正 教	法 2	(2)
	藪 田 勝 久	理 化 4	(5)
主 務	松 尾 敬 志	齒 1	(1)
	佐 野 威和雄	理 物 1	(1)
	木 嶋 良 雄	工 治 1	(1)
	根 本 修	人 1	(1)
	井 上 太 一	理 化 M ₁	(1)
	松 浦 寿 彦	工 土 3	(1)
	中 島 敬 治	工 治 3	(1)

5 月 山 行

大峰山北部

川合—大川口—行者還岳—大普賢岳—山上ヶ岳

期 間 5月4日～5月6日

参加者 高橋(OB, L)、井上、松浦、佐野
木嶋、松尾

5月4日 ◎

下市口(11:10)—川合(13:30)
—川追ダム(15:35)—CS(16:
30)

下市口で入山屋を出して出発するが、途中で雨が降り始め、川合からCSまで傘をさして行く。CSまでの道は広く建設会社等の車がよく通る。

5月5日 ①

出発(6:15)—大川口(6:25)—行者還岳山頂アタック(9:30)—七曜岳(11:00)—大普賢岳(12:50)—竜ヶ岳(14:30)—山上ヶ岳(15:30)
—洞辻付近CS(16:50)

いよいよ本山行の本命、山上ヶ岳までの第1歩を歩き始める。まず、うっそうとした林を行者還岳目指して登るが、途中犬のような鳴き声を耳にする。目をやると野性の猿であった。新人には珍らしかったことと思う。行者還岳小屋より行者還岳山頂を目指し、ヤブの中に入って行くが岩場に阻まれ断念する。大普賢岳への道はほとんどがヌカルミで新人の真新しい靴もどろんこである。

5月6日 ①

出発(6:15)—水分神社下山(12:
15)

今日は下山の日、たった3日間俗世間から離

れていただけに妙に下界が恋しくなる。途中の景色は最初のうちこそ山々と、新緑の木々に目を奪われていたが、どこまで行っても変化がないので次第に飽きが出てしまった。しかし新人の連体感形成には有意義な山行であった。

(記 佐野)

本年の新歓山行は旧人2名が事情で不参加、高橋OBに行っていた。そんな関係で大峰という事になったが、今年の新人は非常に優秀で将来の山折部の為に旧人一同大いに期待する。

(記 上松)

夏山定着合宿

剣岳 BC 池ノ平

期 間 7月18日～7月30日

参加者 上松(CL)、後藤(SL)、松浦、井上、松尾、佐野、木嶋、中島、根本高橋(OB)、藪本(OB)、大宅(OB)、糸井(OB)、原(OB)、石原(OB)、大野(OB)、藪田(OB)

今回の夏合宿は好天が続き、まさに全力を出し切った合宿といえよう。登山に成功、失敗の区別があるとすれば成功であったと言い切ってもよいものである。1年部員の態度はこれ以上望めぬほどに活気に満ちたものであった。

定着合宿は実に1年にとっては充実したものとなった。例年の1年への待遇を聞くにつれ、我々も上級生のみパーティーという構想を抱き、幾度か実行に移そうとしたけれども、結局一度として実行されなかった。これは実に残念な事でありながら一方1年へ充実した活動という贈り物となった。我々は自分自身の力のなさと1年の実力向上というジレンマの中でどうすることもできない壁を感じる次第である。し

かし今我々にできることはOBに頼るという最も不安定な状態を作ることではなく、自らの手で頼れるに足る現役の集団を作ることにある。

次に縦走は北海道という新天地で行なわれた。しかし我々の行った地域は規模は違うが、およそ兵庫の山奥を考えれば足るようなものであった。とにかく登山の基礎といえる地図読み、テント場探し、水汲みなどの訓練には事欠かなかった。それでも1年が意外にも割と面白いという感想をもってくれたことは救いであった。春再びこの地に来るならば夏とは違ったすばらしい山々が広々とした北海道の原野に伸びやかに連なっていることを期待するものである。

最後に夏山を終え、冬山へ向かう現時点における苦しみを少々述べよう。軟弱な我が山岳部は今最も危険な時を迎えつつあり、山から見て不可能といえる計画を実行へ移さざるを得なくなりつつある。1年生7名、2年生2名を数える我が部は、いかにOBを加えても冬山へ行く事そのものが無理に近い。それでも行こうとするからには先ず安全性に重点を置くことになろう。従って弱気ではありますが計画の成功よりも冬山へ入ったという事実を目を向けてくださるようお願いする次第であります。

今合宿に参加下さったOB諸兄に深く感謝いたします。(記 上松)

〈行動概要〉

7月18日

室堂一剣沢

7月19日

剣沢一二股

7月20日

二股一池ノ平BC

到着後近くで雪上訓練

7月21日

三ノ窓雪溪にて雪上訓練

7月22日

- ・本峰遠足(藪本OB、松尾)
- ・黒部遠足(ピバーク)(高橋OB、後藤、松浦、佐野)

7月23日

停滞

7月24日

- ・八ツ峰M峰Cフェース剣稜会ルート(後藤、中島、糸井OB)
- ・チンネ 中央チムニー-g。c。d(井上、大宅OB)
- ・八ツ峰下半(根本、高橋OB)
- ・北方稜線(ピバーク)(上松、木嶋、松尾、藪田OB)

7月25日

- ・チンネ 日嶺-g。c。d(後藤、松浦、糸井OB)
- ・本峰北壁L₁、L₂(佐野、高橋OB)
- ・剣尾根R3(根本、大宅OB、原OB)

7月26日

小窓雪溪にて雪上訓練

7月27日

- ・チンネ 中央チムニー-g。c。d(上松、松尾)
- ・チンネ 左稜線(木嶋、藪田OB)
- ・八ツ峰上半(後藤、根本)
- ・源治郎尾根(井上、中島、大宅OB)

7月28日

- ・八ツ峰下半(上松、松浦)
- ・本峰遠足(後藤、井上、中島、佐野)

7月29日

- ・ジャンダルム(松浦、石原OB)
- ・大窓遠足(根本、中島、高橋OB、大野OB)
- ・剣尾根R3(上松、後藤、木嶋、井上)

7月30日

樺平へ下山

〈遠足及び登攀記録〉

北方稜線

参加者 上松、木嶋、松尾、藪田OB

7月24日

BC(5:25)一大窓雪溪出合(7:30)
)一大窓、白ハゲBP(18:00)

7月25日

出発(7:05)一大窓(7:45)一池ノ
平山(10:00)一BC(11:30)

池ノ平小屋より小黒部谷へと下る。傾斜のきついのは初めだけ。大窓出合を過ぎると滝が現われ苦勞して巻くがポリタンのガソリンがもれほとんど失う。ここからすぐ取付こうとする尾根の近くまで行くが、雪溪が割れ、かなり難しい。しかたなく沢の滝を2ピッチ、ザイルにして40mほどでつめ尾根に取付く。取付いてからブッシュとしてはかなりのペースで進む。時折岩っばい所に出るがブッシュ深く大して問題ではない。最後の急登を終えとなだらかなブッシュとなり最後にハイマツの最もえげつないブッシュを乗越え、赤ハゲのピークに達する。ここより踏み跡もあり何なく白ハゲを越える。後は雪とピバーク地を求め、白ハゲ寄りの小さな沢の雪溪のある部分から少し上がったお花畑にてピバーク。天気良かったせいか朝方急に冷えこむがそれほど苦しいピバークでない。

翌日、踏み跡を進み苦もなく池ノ平山へと到着しグリセードなどで遊びながらBCへ。

(記 上松)

チンネ左稜線

7月27日

参加者 木嶋、藪田OB

タイム BC(5:20)一取付き(9:00)一T5(12:50)一上半取付き(14:30)一チンネ頂上(15:45)一真砂(17:50)一BC(18:50)

1P目、ガリーといってもフェース状を10m登り左へトラバース。15m。2P目、フェース直上30m。3P目、右へトラバースの後直上で大きなテラス。ここで1パーティに先を許す。右斜上するガレを登り、回り込んだところで1ピッチを区切り、そこから岩の間を左へ登りフェースを直上。このフェースは快適。続いて大まかなフェースを2ピッチ。小さなコブを越え、フェース10m程でT5手前。T5で時間待ち。

上半1P目、がっちりしたホールドを頼りにグイグイ登る。快適な40m。クラックを15m登ると頂稜に出た。あと2ピッチでチンネ頂上。取付きから8ピッチ位調子がのらず手こずった。

(記 藪田)

ジャンダルム Aチムニー

7月29日

参加者 松浦、石原OB

タイム BC(5:40)一三ノ窓(8:15)一取付き(9:15)一PⅡ(終了点)(10:40)一BC(13:30)

最初のルートはAチムニーに取る。トップの石原は最初のテラスの前のチムニーを通らず右のフェースにまわりこむが、松浦はチムニーを登る。テラスからはチムニーを登らず右のフェースを登り、途中からバックアンドフットの姿勢で登るが頭をチョックストーンにはばまれ右のリッジに逃げ、後は安定したホールドのあるルートとなる。PⅠの上でPⅠ、PⅡ間のガリーへトラバースし浮石の多いガリーを登る。ガリーの最上部、コル状のところまで2P目を終える。後はノンザイルでPⅡへ向かい、PⅠとほとんど同じ高さの池ノ谷側のリッジ上のテラスよりザイルを出し、リッジ直上後三ノ窓側を巻く。上部は階段状で楽にPⅡへ。

(記 松浦)

ハツ峰下半

7月28日

参加者 上松、松浦

タイム BC出発(5:45)一ハツ峰末端(7:50)一Ⅰ峰(11:50)一Ⅱ峰(12:10)一V峰(14:00)一V、Ⅵのコル(14:20)一二股(15:25)一BC(16:35)

長次郎谷出合からほんの少し登ると右手に垂直壁が見える。この岩壁に左下から右上に向かってバンド状の傾斜のきついバンドがあり、これを登る。途中から岩壁直下に寄り気味に登り、テラス状の稜線に出る。稜線は笹から大きな灌木、そしてハイ松と変わり、一たんスパッと切れてコルに出る。ここは取付く時岩壁の左手に

見えていたルンゼの最上部ではなかろうかと思う。ここよりスラブ状の所をブッシュを頼り稜線に出る。360度のパノラマを満喫しながらハイ松の上を泳ぎ進む。ジャンクション辺りの稜線はナイフ状で、所々岩が露出している。マイナー側の傾斜は垂直に近い。マイナーピークを後ろに見て稜線を進むと岩塔に阻まれ長次郎側を巻く。この後も2,3度巻き、最後に三ノ沢最上部の沢を詰めるとI峰に達する。沢は草付きで十分な注意を要する。実に4時間のブッシュとの苦闘であったが、I峰からはIV峰とV峰の間のコルにある雪溪の所で懸垂下降用にザイルを出しただけで、難無くV, VIのコルに達する。

(記 松浦)

夏山縦走

北海道東大雪縦走

糖平—ウベペサンケ山—ニペソツ山—石狩岳
—沼の原—五色岳—化雲岳—天人峽

期 間 8月4日～8月13日

参加者 上松(L)、後藤、井上、佐野、松尾
松本、木嶋、中島

本合宿は、春山の偵察として行なわれた。しかし、春の東大雪に比べると、また違った困難に満ちていた。先ず、ウベペサンケ山から、ニペの耳に至る壮大なブッシュ、いやになる登りの繰返し、水汲みの苦勞、また、イナゴの大群と襲ってくるヤブ蚊の群れ、執ようなアブ。今考えても、ゾッとすることはばかりである。しかし、そうした困難も原因して沼の原に着いた時は、まるで桃源郷にでも着いたような感激であった。まさしく、この世のものとも思われぬ、北海道の誇る名所と言えるだろう。五色ヶ原を

歩く時はガスに囲まれてしまい、何も見えなかったけれども、合宿の疲れも快よく、ただ、春見るであろう大雪原に夢をはせたのであった。結局、日程の関係上、予定していた(元々欲張った計画であったが)十勝連峰までは行けなかったけれども、十分に力を使い果たした満足すべき合宿となった。また偵察の観点からすると、全体の地形は、夏も春も、さほど変化はなく、実際に、夏の偵察により頭に描いていた地形が、春にも、そのまま役に立った。元々、それほど危険な所もなかったわけで、ここ東大雪に関する限り、本州の山の偵察とは異なったものとなった。

8月4日 ① 上松、松尾が風邪のため出発延期。

8月5日 ○ 出発(6:20)—稜線(12:00)—1,600m過ぎのコルCS(14:20)

2人とも熱も下がったので出発する。林道に入ると傾斜緩く、また木に隠れて位置確認に苦勞する。

8月6日 ●のち◎ 停滞

8月7日 ①のち◎ 出発(5:30)—ウベペサンケ頂上(7:20)—丸山へのコルCS(14:30)

初めかなりいい調子で進んだが、後半道が笹のため非常にわかりにくく遅々としてはかどらず。昨日、今日と水汲みは沢をかなり下った。風がやむと蚊の大群に襲われる。

8月8日 ① 出発(5:20)—丸山頂上(10:50)—コルへの途中のCS(12:45)

今日も蚊と笹になやまされる。丸山は南側はハイ松で北側はほとんどはげ山。どうも温泉らしく白い煙が出、硫黄臭もある。丸山で笹から解放され気持ちもよいので幕営とする。焚火でソーメンなどをつくり半日のんびり。

8月9日 ◎時々● 出発(5:00)—コル(6:05)—ニペソツ頂上(13:25)—天狗岳(15:35)—1,900m付近CS(16:45)

全員かなり疲れているがあくまでも石狩岳を

目指す。ニベツツの登りは笹の所は道はなく、はい松の所は道があると考え、笹の所は磁石を頼りに強引に進む。はい松帯に入ってもなかなか道が見つからなかったが道を見つけるとあっという間に頂上へ。頂上へはナイフリッジであり雪がつくと少し不安だ。天狗をすぎて道はずれまた時間がかかり出し適当な場所を見つけ幕営する。

8月10日 ●のち○ 出発(7:00)
—コル(12:10)—1,480m付近CS
(16:35)

朝から強い雨であったがためらわず出発する。昨日より正規の道からははずれているがかなりいい道である。コル付近はだだっ広い笹ヤブで磁石を頼りに強引に進むと尾根に上がり、道を見つける。ここから笹のブッシュを急登し1,578m地点に着く。1,478m地点までははい松がいやらしく出張ってまた進まず、その夜は水とホエーブスのせいで晩めしは23時頃となった。

8月11日 ◎ 出発(5:40)—ニベの耳(7:45)—沼の原CS(11:00)
夜中風が強くテントのポールが折れ、5:00にテントを撤収し朝食抜きで出発。石狩岳アタックは希望者なく、上松1人でニベの耳で別れて行く。石狩岳への道はどうということなく沼の原で皆と落ち合い幕営。

8月12日 ◎ 出発(6:05)—五色岳(9:30)—化雲岳CS(11:00)
出発早々道を間違えたがすぐ見つかる。ガスの中をただ道を真直ぐに進む。知らぬうちに五色岳、更に化雲岳へ。明日は下山なので食い切れぬほどの打上げパーティー。

8月13日 ◎ 出発(6:30)—天人峽下山(11:00) (記 上松)

○クマについて

色々問い合わせてみたが、クマは危険であるという事は事実にしろ、間違いのないクマ予防法というのはないようであった。一応、北海道大学山岳部の経験豊かな助言を以下に引用する。

『クマに関しては、別に何んにもしておりません。2~3年もいるとたいいてい1、2度出会

うものですが、まだ何んともないので大丈夫だと思います。ただ残飯はあまり捨てない方がよろしいようです。クマがやってきました。』

とにかく、クマに対しては、残飯を残さず、また、恐怖を与える事を絶対にしない事が予防策の様である。

○ヤブ蚊について

北海道の山、特にブッシュに行く時は、ヤブ蚊の予防を完全にすることがある。これは我々の苦い経験によるものである。

秋山個人山行

南アルプス南部縦走

千枚岳—東岳—中岳—大聖寺平—赤石岳—聖岳—聖平—横窪峠

期間 10月9日~10月14日

参加者 後藤(L)、根本、松尾、木嶋

10月9日 ① 田代入口(9:45)—広河原(10:35)—転付峠(15:00)—二軒小屋キャンプ場CS(16:05)
広河原まで車道がついていて何台も車が通るが乗せてもらえない。転付峠の両側15分位の所には良い水場がありテント設営も可。

10月10日 ① 出発(6:45)—千枚小屋への分岐点(13:05)—千枚岳CS(14:20)

千枚岳へは急でしかも長い、見通しの悪い登りであった。頂上の窪地に設営したが水は無い。

10月11日 ①時々◎ 出発(7:10)—東岳(8:30)—中岳(9:40)—大聖寺平(11:15)—赤石岳(13:25)—百聞洞CS(15:20)

万助小屋はなくなっていたが設営は十分可能。

百間洞はテントも多く幾分汚れが目立つ。

10月12日 ①のち● 出発(6:40)
—中盛丸山(8:15)—兎岳(9:40)
—聖岳(11:15)—聖平小屋CS(13:30)

大沢岳への登りは迂回したが聖岳への登りは避けることができず、登ってはみたもののガスで何も見えない。おまけに聖平に着いてから雨も降り出した。

10月13日 ● 出発(7:40)—茶臼小屋(10:40)

稜線では相当風雨にたたかれたけれど、行程が短かったので助かった。茶臼小屋に着いた時にはびしょ濡れで、急ぎ小屋の中へとび込んだ。

10月14日 ◎時々① 出発(7:00)
—横窪小屋(8:10)—横窪峠(8:25)
—畑籬大吊橋下山(10:25)

昨日の雨が虚のように晴れ上がり畑籬の吊橋目指しよく歩いた。上河内沢にもいたる所に小屋が目についた。

11月偵察山行

薬師岳

期間 10月31日～11月5日

参加者 上松(L)、後藤、井上、松浦、松尾
中島、根本、木嶋、高橋(OB)

11月1日 折立ヒュッテ(15:00)—
1,870m地点(17:00)

小屋の煙突の土台にデポを置く。出発早々に愛知大の遭難碑があり暗い面持ちで通り過ぎる。

11月2日 出発(6:40)—太郎平小屋
(8:40)—薬師岳頂上(11:55)—
太郎平小屋(13:40)

目指す薬師岳がくっきりと浮かんでいた。

1,900m地点の大きなポールを見て太郎平小屋に着き、薬師アタックとする。尾根を忠実にたどっていけば良さそうだが、東側が弱干、やせているのと、下山の際尾根が二股に分岐しているのが気にかかる。

11月3日 出発(7:00)—七ノ岳(8:20)—黒部五郎岳(12:20)—黒部五郎小屋(14:55)

夜、降雪あって10cm程の新雪。皆、黙って寒さをこらえて歩いて行くと、明らかに熊であろうと思われる足跡を見つける。今回は面白半分に通り返したが春の東大雪であったらと考えるとゾッとする。

11月4日 出発(6:10)—三俣蓮華岳(8:38)—双六岳(10:30)—双六小屋(11:40)—弓折岳付近(13:30)—大ノマ乗越(13:45)

双六の下りが急斜面でザイルを出す。それでも1年は皆転んでしまった。しかし悲壮感はなく互いに転ぶのを見ては楽しんでた次第である。

11月5日 出発(6:35)—抜戸岳(8:20)—分岐(8:45)—笠ヶ岳(10:30)—分岐(11:55)—新穂高温泉(16:08)

抜戸岳手前でアイゼンを着ける。ジャケットが雪面に良くさきり快調。笠ヶ岳をアタックして笠新道を新穂へと下る。(記 木嶋)

今年の11月山行は信じられないほど好天に恵まれ、突に夏合宿に引き続き、毎日8～9時間行動という苦しみを味わった。しかし、それでも尚1年生は元気で、リーダーとして、これ以上に不愉快かつ気楽なことはなかっただろう。いずれにしても、好天に恵まれ過ぎるという事は、悪天に対するもろさを持つ事になり、心配ではあるが、ただ単に訓練といった山行ではなく、面白い山行という意味で非常によいものである。山岳部はこれまで人数の減少による一つの厳格ではあるが協調性を持たない没滞した集団であったけれども、今それを乗り越える仲間と

いうもの、さらに山行というものに対するおもしろさを求めようとする心を持ちつつあるように感じられることは、まだまだ山岳部というものがやっつけていけるという印象を強くするものであった。しかし大学山岳部というものはすでに未知を開拓するという使命を失ったのかも知れない。ともかくもまずは山へというところである。
(記 上松)

御岳アイゼン合宿

濁河温泉—五ノ池小屋—二ノ池—八海山荘

期 間 11月22日～11月25日
参加者 上松(L)、後藤、佐野、松浦、松尾
根本、木嶋、高橋(OB)、鹿野(OB)

- 11月22日 ◎時々⊗ 濁河温泉(11:00)—七合目(14:00)—湯花峠(15:20)—300m付近CS(17:00)
11月23日 ◎のち○ 出発(7:00)—八合目(8:00)—五ノ池小屋CS(12:30)
11月24日 ○ 出発(6:45)—二ノ池(8:10)—雪上訓練(9:00～11:45)—二ノ池CS(12:15)—雪上訓練(14:30～16:00)—CS撤収(18:00)—出発(19:00)—剣ヶ峰(20:00)—王滝避難小屋ビバーク(20:50)
11月25日 ◎ 出発(5:40)—田ノ原山荘(7:30)—八海山荘下山(8:30)

アイゼン合宿ではあったが2日をラッセルに費やした。またテントの設営、撤収の遅さが著しく行動を制約するものとなった。しかしこの時期としては例年になく豪雪に会い、4日目をほとんど費やす事なく、吹き出しを避けて3日目の夜を下山に費やす事となったけれども、3日目の行動は雪上訓練としては極めて充分なもので

あったと信ずる。 (記 上松)

冬山合宿

薬師岳

跡津川—大多和部落—大多和峠—発電所—太郎平小屋—薬師岳—大多和峠—土

期 間 12月23日～1月3日
参加者 藪田(CL)、高橋、上松、後藤、
松浦、井上、佐野、松尾、根本、木嶋

- 12月23日 ⊗ 土(8:30)—跡津川(9:55)—佐古(11:45)—大多和部落(15:30)
跡津川付近より積雪があり、佐古部落よりワカンをつける。雪崩のおこりそうな所は10m間隔で行く。この日は大多和部落まで行くのが精一杯。
12月24日 ◎ 起床(4:00)—出発(7:00)—大多和峠(15:30)
ひざ下のラッセルあったが進まず。スキーをはいた隊と抜きつ抜かれつで大多和峠へ。シュラフが濡れ夜寒くて寝られず。
12月25日 ◎ 起床(4:00)—出発(6:45)—島の対岸(14:30)
今日はダムまでと意気込んでみたものの腰までのラッセルにバテ気味。スキー隊に抜かれてからも膝までのラッセルで有峰湖の島の対岸で幕営。
12月26日 ◎ 起床(5:00)—出発(8:00)—発電所過ぎ(13:30)
今日もラッセル。へそまでのラッセルで遅々としてはかどらず発電所を過ぎたところで幕営。後でラッセル隊を出し、あわせてトランシーバーの点検をする。

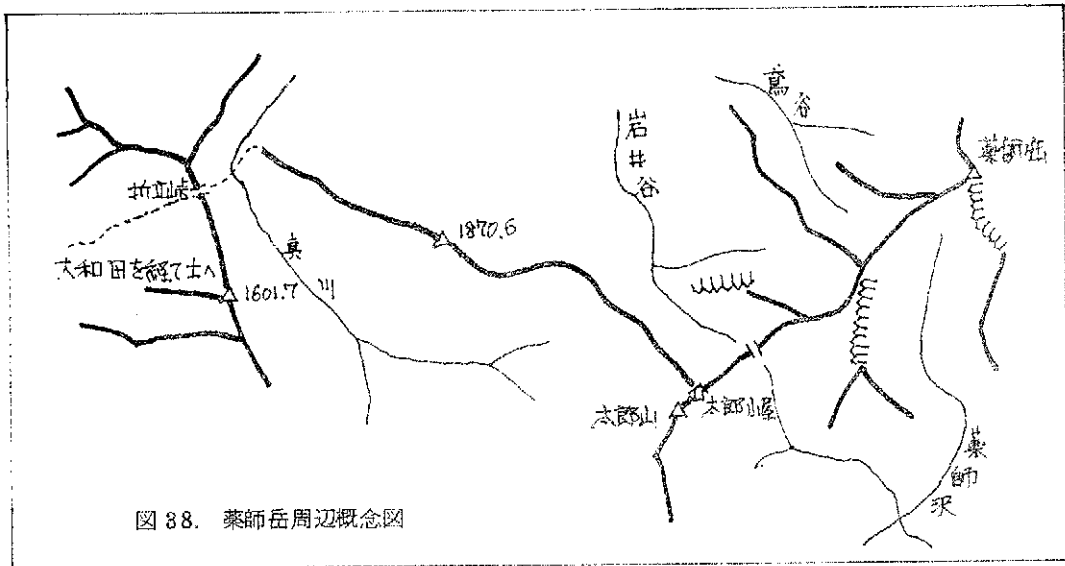


図 88. 薬師岳周辺概念図

12月27日 ① 起床(4:00)―出発(7:00)―トンネル(7:30)―ヒュッテ(10:30~11:30デポ回収)―三角点(16:10)

前日のラッセルのおかげでトンネルまでは順調に進み、ヒュッテでデポ回収。胸までかと予想していたラッセルは腰までで予定の三角点まで。雲行き怪しく明日は荒れそう。

12月28日 ② 風強し 起床(4:00)―出発(7:00)―1,900m付近でUターン―樹林帯に幕営(10:00)

朝から強風。時折り突風が吹きあれる。2,000m付近まで行ったものの予報では午後気圧の谷が通りそうで適当なテント地も見つからず樹林帯へ引き返す。

12月29日 ③ 沈殿

ラッセル隊を出し、太郎平小屋下までトレールをつける。

12月30日 ④ 起床(5:30)―出発(8:30)―太郎平小屋(15:20)

出発が遅れ前日のトレールは全くなし。6時間で小屋の近くまで来たが、沢を避けて尾根回りに小屋へ入る。

12月31日 ⑤ 風強し 起床(4:10)

―出発(6:20)―薬師岳(10:45)―小屋(13:00~14:00)―1,900m地点(16:00)

アタック日。腰近くのラッセルであったが分岐点付近よりアイゼンに変える。アンゼンは調子よく1ピッチで頂上。写真撮影後そそくさと下山。小屋でテントを撤収し、広島工大のつけてくれたトレールを使い前日のCSまで下る。今日は大晦日でウィスキーを飲み紅白歌合戦を聞いて就寝。

1月1日 ⑥ 起床(6:00)―出発(8:00)―ヒュッテ(12:00)―発電所過ぎ(15:50)

三角点までは一苦労するが、その後はトレールを利用する。谷沿いに別のパーティーが入山してくるのでラッセルをせずに助かると感激。

1月2日 ⑦ 起床(4:00)―出発(6:45)―大多和峠手前(14:30)

今日は大多和部落まで行けそうと思っていたがトレールは小見の方へ向かっており皆落胆。膝ぐらいのラッセルであったが井上がバテて「歳だノ井上」と呼ばれる羽目になった。

1月3日 ⑧ 起床(4:00)―出発(6:45)―大多和部落(10:15)―土

下山(13:20)

精神的、肉体的に非常にしんどい山であった。アプローチでの長いラッセルがあり、最後の合宿となる者と今後の者との登高欲と安全性との兼ね合いの問題があった。そんな中で全員がアタックできた事は幸いであった。前線通過前後から吹きまくっていた風がピタッと止まり、気温もあまり下がらないなど冬山としては普通ではない好条件に恵まれなかったなら、合宿はひどくみじめなものとなったかもしれない。アイゼンを着けたのは2時間のみであとは全てワカンという泥くさい山行であったが、これなどもスキーを使えば少しは救われる事になったであろう。

昨年失敗しているだけに計画を消化できた事を持つ意味は大きい。ガスと雪の中を太郎平小屋まで行ったのは冬山としてはたいした悪天ではなく、行動可能である事を体得するのが目的で、力を尽くまぎ退却する無念さが原因であった。そして女神は微笑んだのである。(記 藤田)

春山合宿

北海道・東大雪山域

期間 3月18日～4月1日

参加者 上松(L)、後藤、松浦、松尾、根本中島

'73年度…この最も苦しい一年の最後を飾ったものが、この北海道における春合宿であった。年間を通して、2年、1年のみで構成されたクラブは、様々な意味で、力不足という課題に直面していた。しかし、リーダーより年上の新人3名と元気一杯の大学1年生新人4名、それに同僚である後藤、皆がそれぞれの個性を生かして、新しいクラブ創造のために努力してきたよ

うに思う。そして、その一年の総括としての春合宿は、生まれ変わったクラブらしい新しさとごちなさ、それに、たくましさを十分に表現している。

もともと、北海道を登山の対象として選んだのは、力不足を認識しての事ではなく、単に、北海道という我が部としては未知の対象に、私自身、非常な好奇心を持ったからである。さらに、自らのスキー技術の低さとは別に、スキーを使って、思う存分原野を歩き、好きな所でピバークするという、狩人的な生活への憧れからであった。計画作成も、1年前の春にさかのぼり、その時は必ずできると確信していたものであった。しかし、時間というのは、思いの他、早く過ぎるもので、瞬く間に1年が過ぎ、結局は、なるようになったというのが正直な感想である。心あるOBからは、時として、こうした力不足を認識しない態度に、不安を表明されたものである。確かに、今思えば、私自身、よくあんな事を…と思うけれども、大雪山のおおらかな峰々は、私の苦さも、無鉄砲さも、あるがままに、やさしく包んでくれたのであろう。

〈行動概要〉

3月18日 ① 十勝三股(6:10)―岩間温泉(12:00)―十勝三股(16:00)
営林署にて入山許可をもらい、荷の半分を駅に残し出発する。営林署の前の道を左へ行き、音更川にかかる橋を渡り、坂を登り切ると、右側から林道が別れていく。ここでスキー、シールを付ける。トップが少しもぐる程度で、道も登ったり降りたりを繰り返して、小さな橋を4つ渡る。5つ目の大きな橋を渡り、坂を登ると、後は、岩間温泉まで殆んど起伏のない道であった。このいやになる程長く感じられる道を行き、「安全第一」の標識の所を右へ曲がると、岩間温泉の小屋が見えた。小屋は、それ程大きくはないが、十数人は寝られる程の広さで、雪は全然吹き込んではいず、快適そうであった。帰りは、スキーからシールをはずし、滑って下りた。
3月19日 ① 出発(7:00)―岩間温泉CS(14:00)

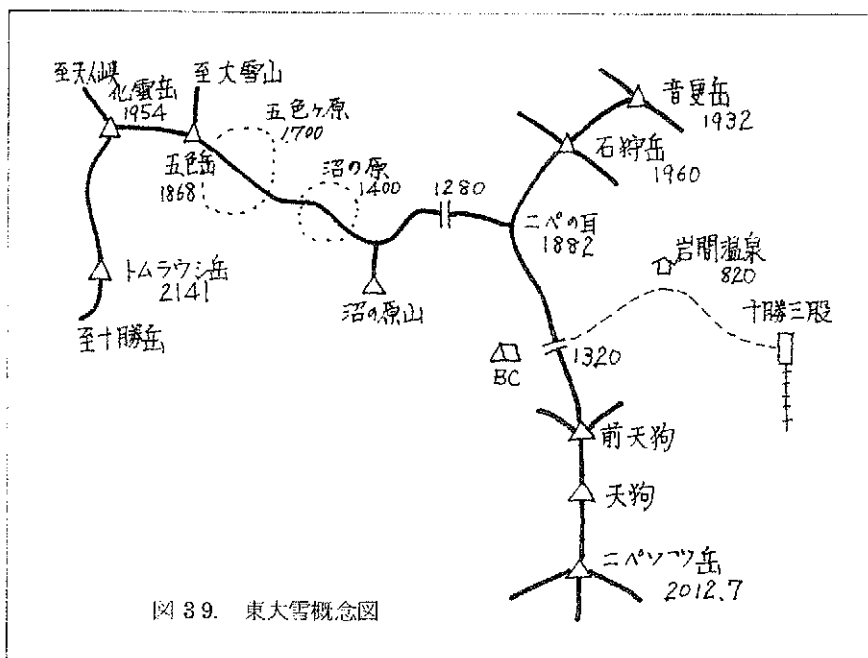


図 39. 東大雪概念図

前日とコースは同じ。しかし、晴れていたため、雪がくさり、シールに固着ができたり、スキーとシールの間に雪がはさまり高下駄をはいたような感じになったりし、非常に歩きづらかった。また、ピンディングのワイヤーの先端部の溶接が不完全な為、先端部がとれる事故が続発した。

3月20日 ①のち◎ 出発(6:00)
ーコル(13:30)ー岩間温泉CS(17:00)

荷の半分を小屋に残して岩間温泉を出発。疎林の中を、所々スノーブリッジを渡りながら、音更川をさか登り、970mの出合に達した。途中は、これといった困難はなかったが、970mの出合手前で、6m程の高さの崖の上に出るが、これから河原への適当な下降が見つかりにくい。970mの出合からは、北側の沢をコースとして選ぶ。沢の下半部は問題なかったが、上部100mにかかると、沢は、はるかに狭くかつ傾斜も急になり、スキーでの直登は無理となった。そこで、横向きで、ステップを踏み固

めて登ったが、雪がふかふかで登りづらかった。ヘトヘトになって、ようやく沢からコルに出たが、先頭と最後尾との到着時刻の差は1時間半程であった。すぐにテント一張を張って、中に荷上げた装備をデポし、同じルートを下降する。さすがに、あの沢をシールをはずして下る気にはなれず、シールをつけたまま下る。下りでは、スキー技術の差にたがってパーティーがばらばらになる為、集合点を決めつつ下る。

3月21日 ① 出発ーコルBC

970mの出合までは、昨日と同じコースを行くが、出合からは、昨日の沢にこりて、沢の南側の尾根にルートを取る。出合から尾根への取付きは急斜面だったので、ジグザク登行をする。最初の斜面を登り切ると、しばらく平坦な所を行くが、やがて上方に樹林帯の見える斜面になる。樹林に入ってから、コースを右へ取り気味にしつつ、コルの中心に出て、さらにしばらく北へ行く。適当な所を選んでBCとし、上松、松浦が、昨日のデポを探しに出発。2人が打った赤旗を頼りに、残り4人もデポ回収に

向かい、回収の後、BCを設営。

3月22日 ⊗のち◎ 休養日

午前中、雪洞を掘る。その夜は、上松、根本が、雪洞で寝る。

3月23日 ① 出発(6:50)→天狗岳(15:00)→帰幕(17:40)

コルの樹林の中を南へ進み、1,360mの小ピークの上に立つと、前方に黒々とした岩肌を見せて、ニペソツの鋭いピークが臨まれた。小ピークを下ると、前方には、小天狗からの尾根が長くそそり立っていた。この長く、急な尾根をジグザグにひたすら登り、1,600m地点にシーデボする。シーデボ地点のすぐ上に、急な岩壁があり、雪が柔らかく崩れやすいためフィックスを20mする。ここを登り切り、アイゼンを効かして登り始めるが、小天狗の北の1,810m地点で、すでに14:00であったため、上松、後藤のみ天狗まで往復し、ただちに下る。スキーをつけてからは順調に下り帰幕する。

3月24日～25日 ①のち◎ 出発(4:30)→1,478mピークにシーデボ(11:00)→石狩岳(14:30)→シーデボ地点(18:00)→帰幕(4:30)

BCを出発して、コルの北方の細長い尾根に取付き、1,578mのピークまでは問題なく行く。このピークからは、稜線(ニペの耳)からの大斜面が臨め、又、1,578mのピークから1,478mのピークまでの尾根に大きな雪庇が、東側に発達しているのが見えた。1,478mのピークまで、雪庇に注意しながら行き、ここにシーデボする。これより、アイゼンを着け稜線への斜面に取付く。下半部は、ハイマツの上に薄く積った雪がクラストしていて、ハイマツの枝をステップとして登る。上半部は、クラストした雪の中に岩が現われていた。稜線は、東側に雪庇が見られ、西側をルートにとるが、下の沢まで、さえぎる物のないクラストした斜面であった。石狩岳までは、クラストした雪に、所々岩があるといった状態でいくつものピークがあり、ガスっていると、どれが石狩岳かわからない。石狩岳に着いたのも東の間、すぐに帰

路を急ぐ。皆、フラフラになりながら、ようやくシーデボ地点に着く。これよりスキーをつけ、出発する頃は、すでに懐電が必要だった。シーデボ地を出発後、皆バラバラになり、最後尾に後藤がつく。1,578mのピークで、先行4人が、残り2人を待ったが、なかなか来ず、上松が引き返して2人と接触、あとの3人は、先にBCへ帰る事にする。3人は、懐電を頼りに、行きの特レールを探しつつ、21:40BC到着。上松は、1,578mピーク下まで、2人と共に行動し、24:001人で帰幕する。BCの4人は、後の2人を待ったが、なかなか帰って来ないので、上松、松浦が、2人を探しに出発(2:00)。1,578mのピークとBCとの中間地点にてビバーク中の2人を発見、4人でBCへ帰ってくる(4:30)。実に、出発から、全員BCに戻るまで24時間を要したアタックであった。25日は、従って休養日となった。

3月26日 ◎時々① 出発(6:30)→1,578mピーク(8:30)→1,478mピーク(9:50)→ニペの耳(13:30)→1,300mコル(15:30)

やや薄曇りであるが、良く晴れている。予定に反し、6:30出発。かなり遅い。アタックのペースに比して、ちょっと苦しい所だが、この4名が現在の阪大の最高レベルのパーティーという事だから十分自信があった。8:30、1,578mピーク。9:50、1,478mピーク。ここまではアタックのペースより速い。トレースがある事もあるが、荷物の事を考えると、かなりいいペースである。これよりニペの耳への急登をアイゼンで登る。もちろん、スキーははずしてザックにつける。11:00急登を登り切り、13:30ニペの耳着。天候はガス。風弱く、寒くはない。24日のアタックでの石狩への稜線はクラストしていて気持ちが良かったが、沼ノ原への稜線は雪がたっぷりついていて歩きづらい。ニペの耳よりしばらく下った所にて、アイゼンの上からワカンをはく。ワカンをつけるとなかなか快適である。この稜線では、上松トップ、後藤ラスト。この西北西にのびた稜線では、北側に雪庇があるが、時折、南側にも雪

底があり、両雪庇となっている。稜線は、岩が所々出ていて、それほどやばくはない。15:30、1,300mコル着。さっそく、斜面に横穴式の雪洞を掘るが、雪が固く、4人ぎりぎり入れる広さでガマンし、そこで一夜を過ごす。

3月27日 ○ 出発(8:30) - 沼の原(11:00) - 五色ヶ原(14:00)

なぜ、こんなに北海道の春は晴れるのか。こんな疑問の中で8:30出発。昨日は、雪洞掘りに時間がかかった上、雪洞生活も慣れないため、どうしても遅くなった。スキーは急な登りでは使いにくく、どうしても時間がかかる。今日も沼の原への登りに時間をとり、上に着いたのが11:00。後は快調にとぼす。しかし、昼も過ぎると、いつもの様に雪がくさり始め、遅々として進まない。五色ヶ原入口まできたのが14:00。トムラウシをアタック圏内に入れたとして、今日は、ここで終わりとする。さっそく雪洞を掘る。今日は、適当な斜面もなく、立て穴式を作る事にする。構造は、4人寝れる程度の大きな穴を掘り、上にスキーを渡し、シェルトをかぶせ屋根とした簡単なもの。この夜、食事を終え、紅茶用のお湯を沸かしている時、お湯をひっくり返し、後藤の足にかかるという失態を演ずる。やけどは、かなり重症で、かかとの皮がズルリとむけてしまっている。この夜は、後藤の看病であけくれる。

3月28日 ○ 停滞

6:00起床し、朝食の後、停滞と決定。外は快晴。予定通りならば、確実にトムラウシアタックができたであろう。しかし、後藤もグックリしているし、彼の状態いかんでは、救援の依頼も考えねばならず、アタックは完全に諦める。8:30より、1人五色ヶ原偵察に向かう。遠々と果てしなく続く五色ヶ原の雪原、目前にある山にどうして届かないのか不思議でさえある。歩を進めるにつれ口惜しさがこみあげてくる。一年間考え続けた北海道での春合宿が、こんな形で失敗に帰そうとは思ひもしなかった事であった。涙が乾いた頃、くさり始めた雪の上を帰路についた。11:00頃帰って、さっそく晩飯のしたくをする。後藤も1日寝ころんでいたせ

いか状態も良く、明日は毛の帽子やくつ下で足をまいて、オーバーシューズをはかせ、スキーをつけて歩かせる事にする。荷物は後藤を空荷にする事と決める。

3月29日 ①時々◎ 出発(5:30) - 化雲岳(9:00) - 天人峡下山(17:30)

昨日決めた通り事を選び、5:30出発。9:00単調に歩を進め、化雲岳に着く。こちらへんは、予想通り、スキーのトレースがつかないほどクラストしている。天人峡近くになると、雪が腐ったりして手こずったが、17:30、ようやく天人峡にたどりつく。皆、かなり無理をしたため惨たんたる状況であった。この夜は、天人峡入口にある土砂よけトンネルのわきで過ごす。

3月30日 ◎ 天人峡 - 旭川 - 帯広 - 十勝三股

山は悪天であったけれども、我々は、バスに揺られ旭川へ。旭川より帯広まで国鉄を使う。帯広には16:30着き、飯を4人で食った後、後藤、松尾は病院捜し。松浦、上松は、ベース撤収のため18:28発の十勝三股行きに乗る。20:43三股着。駅の人好意に任せ、駅のストーブのわきで一夜を過ごす。

3月31日 ○ 出発(5:30) - 岩間温泉(10:00) - 970mの出合(12:40) - BC着(14:30)

5:30出発。松浦不調。8:30より雪が降り始めるが、懸命に進む。14:30、ようやくBC着。さっそく打ち上げし、無事な再会を喜ぶ。

4月1日 ① BC撤収(5:10) - 岩間温泉(11:00) - 十勝三股(17:00)

5:10まで薄暗いうちにBCを撤収出発。20日と同じ沢を下降する。今度は荷物を背負っているにもかかわらず、シールをつけずに下降する。意外な事に、それ程コケずに下る。もっとも、雪がやわらかく、スキーをもぐらせれば、滑らず歩けたのだ。荷上げの時と同様、集合点を決めつつ下り11:00に岩間温泉、あ

とは、十勝三股に集合となる。例のいやになる程長い平坦な道を重い足を引きずり、17:00、全員十勝三股駅に顔を会わせた。駅のストーブで依類を乾かし、無事な下山を喜び、帯広の後藤と松尾の事を思う。　（記　根本、上松）

○スキーについて

この春合宿における最大の問題はスキーであった。スキー技術そのもののうまいへたは、本質的な影響は与えず、むしろ体力的なものの方が問題のようであった。スキーを使った場合の最大の課題は、荷物をかついでのスキー歩行で、特に、ビンディングが、そうした荷重に耐えるものでなければならない。しかし、我々が使用した、東京トップ製ビンディングは値段が安かった事もあってか、全くひどいものであった。色々修理を繰り返したにもかかわらず、結局、ツアー用ビンディングとしての役目を果たさず、それを無理に使ったというのが現状である。こうした事を考えると、やはり、山岳部にとっては、カンダハーが最も向いている様である、他のツアー用ビンディングは、品質の良し悪しは不明であるけれども、あまりに高価である。

1974年度（昭和49年度）活動記録

'74年度 現 役 部 員

C . L	後 藤 正 教	法	2	(3)	
S . L	上 松 一 雄	工 機	4	(3)	
主 務	松 尾 敬 志	函	2	(2)	
	佐 野 威和雄	理 物	2	(2)	
	根 本 修	人	2	(2)	
	木 嶋 良 雄	工 治	2	(2)	体部
	井 上 太 一	理 化 M2		(2)	
	松 浦 寿 彦	工 士	4	(2)	
	中 島 敬 治	工 治	4	(2)	
	明 神 知	基 制	1	(1)	
	住 田 宏 巳	基 情	1	(1)	
	吉 田 真 三	医	2	(1)	
山 口 誠 吾	人	1	(1)		
森 良 平	基 化	1	(1)		
宮 本 敬 正	工 治	1	(1)		

5 月 山 行

新人歓迎白馬山行

親の原—天狗原—白馬岳

期 間 4月29日～5月4日

参加者 後藤(L) 松尾 佐野 中島 山口
明神 住田 佐藤 森 吉田

4月29日 ① 親の原(10:35)—
(リフト)—榎ノ森(12:05)—阪大小
屋付近CS(13:10)

リフト3本乗り継ぎ榎ノ森へ。ここより1時
間ばかり歩いてテントを設営する。午後は簡単
な雪上訓練を行なう。

4月30日 ① 出発(6:30)—成城大小
屋(6:55)—天狗原(8:10)

どうしても出発が遅くなるが、天狗原まで順
調に歩く。BCとしては天狗原が最適であろう
とのことですぐにテント設営。スキーには絶好
のゲレンデではある。午後、乗鞍の1番きつい
斜面で雪訓を行なう。雪の状態が悪かったので大
した効果は上がらなかったが、白馬アタックに
は十分と思われる。

5月1日 ② 沈殿

雨の為沈殿。テントにたまった水をお玉でか
い出す。昼から雨も止み、有志がスキーの練習
をする。

5月2日 ① 出発(5:05)—白馬(10
:00)—天狗原CS(12:30)

第1次白馬アタック(後藤、中島、松尾、明
神、森、吉田)。小蓮華手前と白馬手前のコブ
で神経をとがらせた他はスムーズに進む。頂上
は寒いのですぐ降りる。

5月3日 ① 出発(5:25)—白馬(8
:25)—天狗原CS(11:00)

第2次白馬アタック(後藤、中島、佐野、住

田、佐藤、山口)。今日の1年は威勢のいい連
中ばかり。昨日の難場はバケツになっており、
苦もなく通過し、山頂まですごいペースである。
14:00過ぎ、大野、石浜、細川、出雲路O
Bが来られ、BCが一層にぎやかになる。夜ピ
ールを片手にOBの話に耳を傾ける。

5月4日 ① 出発(8:00)—親の原下
山(11:30)

松尾ねんぎでリフトで、他はスキー隊と、徒
歩隊に分かれ親の原目指し下山する。

(記 後藤)

穂高山行

西穂山荘—独標—西穂—天狗の頭—間の沢—
上高地

期 間 5月1日～5月3日

参加者 上松(L)、根本、井上

5月1日 上高地出発(9:30)—西穂山
荘(13:10)—独標100m手前(14
:00)

5月2日 出発(5:15)—独標(6:
05)—西穂(7:55)—間の岳(9:
40)—天狗の頭(11:30)—頭手前の
コルへ引き返す(14:00)

天候は快晴。西側斜面は完全にクラスト。所
々氷が張っている。東側も同様だったが9時を
過ぎる頃には表面がやわらかくなる。しかし底
は硬く、ステップがないと登降できない。間の
岳の下りでザイルを使用。天狗のコル手前のコル
へ下降中、上松のピッケルの石ツキが雪に突き
刺さったままポッキリと折れる。不安定な状態
で、石ツキを何とか奪い返し、コルへそそくさ
と降りる。天狗の頭まで様子を観るために登っ
てみるが、雪だけならともかく、氷があるので、
ひどく不安を感じる。井上の思いつきで、ピッ
ケルの先端にペグを取りつけて引き返し、コル
にてテントを張る。計画はその時点で断念した。

5月3日 出発(6:30)—上高地(9:

80)

今日も快晴であるが、風が強い。完全にクラストした雪面を上松をトップにして一歩一歩丁寧に降りる。

今回、新人とは別に穂高に来たわけであるが、あまりにも惨めな失敗であった。西穂と奥穂の中間、天狗のコル手前で、リーダー自らのピッケルが折れるというのは全く弁解の余地のないところである。2年の調子も上々であっただけにちょっとやばいかも知れないと思われたピッケルを経済状態の困難を理由に携帯した事は、この上なく自分自身への自責の念を抱かせ、反省している。(記 上松)

夏山定着合宿

黒部源流 BC 兎平

新穂高温泉 一小池新道 一黒部五郎小屋 一兎平

期間 7月12日～7月26日

参加者 後藤(L) 松尾、松浦、根本、佐野、山口、森、宮本、明神、吉田、住田

〈行動概要〉

7月12日 ◎ 新穂高温泉一(マイクロバス)一ワサビ平(11:35)一秩父沢CS(14:50)

7月13日 ◎ 出発(5:45)一大ノマ乗越(13:35)一小池新道一CS(18:45)

7月14日 ● 沈殿

7月15日 ● 沈殿

7月16日 ◎時々① 出発(6:45)一三俣蓮華岳(11:25)一黒部五郎小屋(14:30)

7月17日 ◎ 雪上訓練

7月18日 ① 出発(5:15)一兎平(14:20)

7月20日 ●のち◎

・雲ノ平集中登山

Aコース:後藤、根本、山口、森

出発(6:20)一祖母岳一雲ノ平山荘(9:40)一祖父沢一BC(15:45)

Bコース:佐野、松尾、宮本

出発(6:15)一五郎沢出合(7:15)一祖父沢出合(7:25)一祖父沢終了(8:45)一(ブッシュ)一雲ノ平山荘(11:00)一祖父沢一BC(15:45)

Cコース:松浦、明神

出発(6:10)一五郎沢出合一祖母沢出合100m上流より祖母沢、祖父沢の間の尾根へ取付く一雲ノ平山荘(9:30)一祖父沢一BC(15:45)

7月21日 ①

・赤牛沢ビバーク(後藤、吉田)

・岩苔小谷ビバーク(松尾、佐野、森、住田)

・赤城沢～薬師左俣(松浦、山口)

7月22日 ①一時●

・赤城沢一ウマ沢(根本、明神)

7月24日 ①

・薬師沢右俣～赤城沢ビバーク(根本、松尾、宮本、山口)

今合宿では以下の反省点があげられる。

- 1: 計画自体沢登りをやるという積極的姿勢ではなく、弱体上級部員という点から、岩登り山行に踏みきれなかった。
- 2: 黒部を甘く見ていた。例えば計画では薬師沢出合から立石まで本流伝いをアプローチに使う予定だったが、梅雨中のこととて水量多く近寄れなかった。
- 3: ボッカと定着のけじめがはっきりつかず、定着に入ってからもきびきびした行動がとれなかった。
- 4: 私事になるが、リーダーという立場にありながら、適確な指示が出せずに慣れあいできていた。

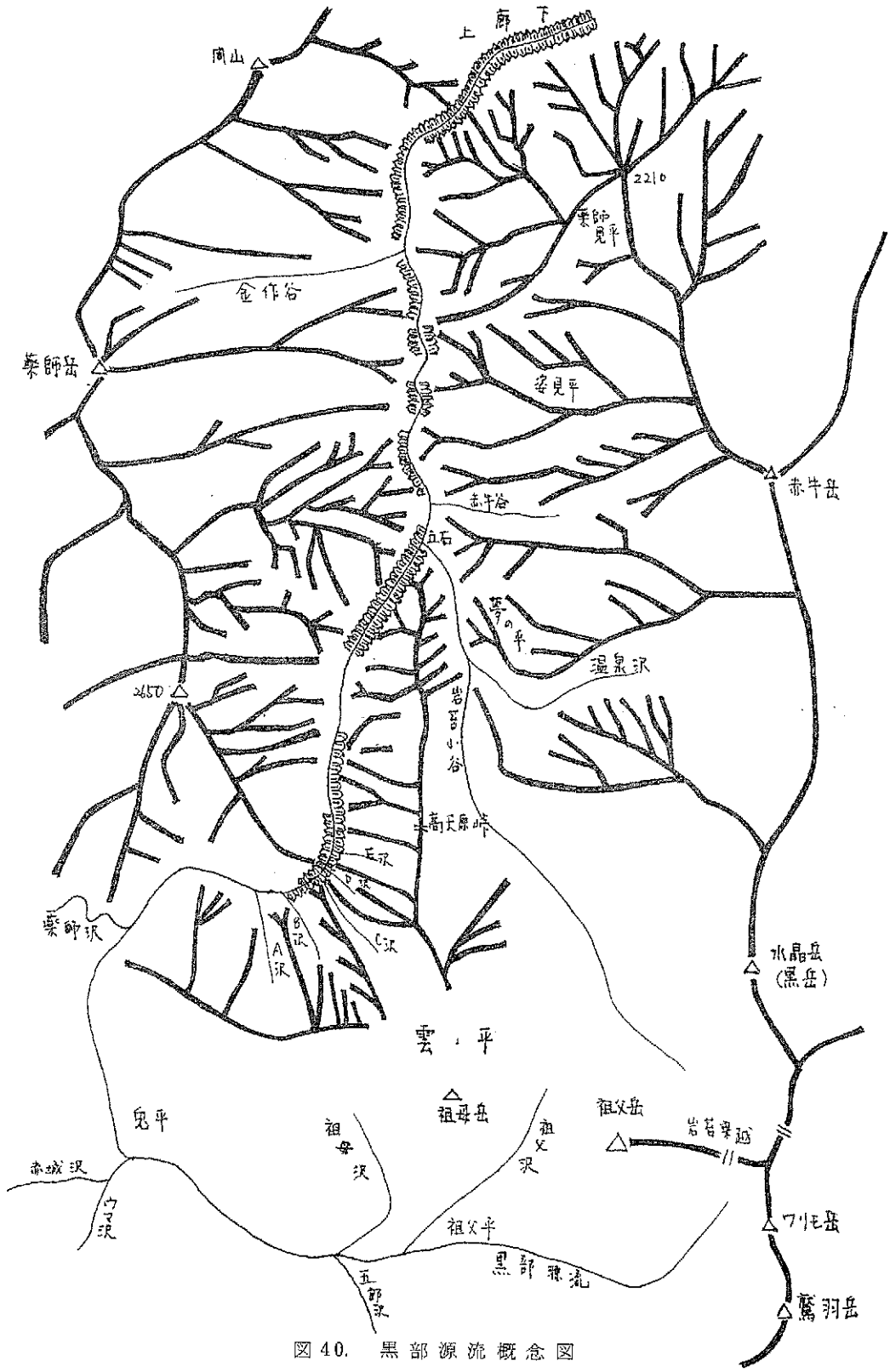


图 40. 黒部源流概念图

その他まだまだあるが、沢登りの特徴である総合判断力の養成という点では成果があったと信じる。(記 後藤)

〈廻行記録〉

赤牛沢

参加者 後藤、吉田

7月21日 ① 兎平BC出発(6:25) - 高天原山荘(11:50) - 岩苔小谷出合(14:45) - 赤牛沢出合(15:15)

温泉沢の温泉小屋より少し進むと標識があって立石への道が分かれる。やせ尾根についているこの道はよく踏まれたいい道ではあったが、岩苔小谷の二俣近くまで来ると前方が切れているので沢へ下る。ここから赤牛沢出合までは右岸を楽に行けて、出合の赤牛沢左岸に小高い所を見つけBSとする。

7月22日 ① 出発(6:10) - 源頭(9:30) - 赤牛山頂(11:05) - BC(18:45)

出合に落ちている傾斜の緩やかな滑滝を登る。以後、大きなもので5~6m位の小滝が連続して現われ、それらも階段状になってスタンス、ホールド豊富なため、ぐんぐん高度を稼ぐ。岩は白っぽいものが多い。出合より見て最初の二俣を右へ、次の二俣を左へルートをとると、それより3ヶ所雪溪が現われた。2番目の雪溪は高巻くが、かなり緊張させられる高巻きであった。源頭より稜線までは急傾斜のガレ場でバテバテになりながら稜線に出た。(記 吉田)

岩苔小谷

参加者 松尾、佐野、森、住田

7月21日 兎平BC出発(6:20) - 薬師沢出合(8:20) - 高天原山荘(12:

15) - 温泉小屋(1:10)

BCより川岸に降りた所で徒渉して左岸に移る。高巻きが2ヶ所あり後の方はザイルをフィックスする。薬師沢出合を過ぎてからは靴にはきかえ、高天原を目指す。高天原はニッコウキスゲ等が満開であった。温泉小屋に荷を置き夢ノ原の散策に出る。薬師が池の水面に映り、のどかな所だ。再び温泉小屋に戻り、温泉につかっ

てからBSを捜す。
7月22日 出発(5:30) - 岩苔小谷出合(6:40) - 立石(7:45) - 岩苔小谷 - 温泉沢出合(13:20) - 温泉小屋(14:10) - 岩苔乗越(16:40) - BC

立石より岩苔小谷を登り始める。滝で1ピッチザイルを出す、3m位の岩登りがあるのみ。ワラジは正確で靴は滑り易い。最初の岩かどをまわりこめば後は楽に登れ、ハーケンを打って確保。さらに徒渉、へつりを繰り返して35mの滝に出る。ここは雨天時の水の通り道らしい浮き石だらけの所を、ザイル2ピッチで登る。温泉沢出合より岩苔小谷偵察の後、あきらめて温泉沢に行く。温泉沢は問題なく、温泉小屋より高天原に出、岩苔乗越を目指す。

赤城沢~薬師沢左俣

参加者 松浦、山口

7月21日 ①

ベースのすぐ前に流れ出る赤城沢は黒部らしい豪快さよりも、その名の響き通りの清冽な感じの明るい沢である。源流を徒渉し出合の滝を左岸に高巻くと緩やかなスロープに鮮かなニッコウキスゲが群生していた。しばらく進むと開けた岩場の真中を数段の滑滝が落ちている。コバルトブルーの滝つぼは左岸にあり、右岸は水城が広がっていて淡い象牙色をしていた。滝にえぐられた左岸のくぼみのへつりでハーケンを1枚打つ。その後、3~5mの滑滝が次々と現われるがいつでも容易に直登する。水量の割に

は川幅広く、場合により左岸、右岸と自由に、快適に進む。川底は一枚岩の様で、人工の水道を思わせたりする。最後に4段の滝を過ぎると、突然、数十mの岩壁、その右手より水が飛びだす。大滝である。とても直登は無理なので左岸を高巻く。そこからすぐ二股となり、滑滝、小滝が連続して水量もぐっと減ってくる。ウグイスが鳴き、ブッシュもむしろ心地良く、急に開けたと思うとそこはハイ松混じりの広い草原だ。そこを登りきると一面草花の赤城平。あいにくとガスり始めたので急ぎ薬師沢左俣を下降する。

薬師沢左俣について

直径数mもあろうかと思われる巨石がゴロゴロしていてイモ沢どころではない。巨岩の上を水が走り、また大イモに当り滝となっている。上流部は、この巨岩の滝が連続していて十数ヶ所もあったろうか、下降に使えたものではない。中流部は小さなゴルジュ帯と数mの滝。ゴルジュといっても短いものが連続している感じ。右俣までの下流部は平坦で所々岩魚が泳いでいる。(記 山口)

赤城沢—ウマ沢

参加者 根本、明神

7月22日 BC出発(7:00)—大滝(8:45)—赤城岳直下(10:15)—BC(14:25)

BC上流の赤城沢出合すぐ下流の滑床を渡って赤城沢へ入る。赤城沢へは渡ってすぐの崖を越えて左岸へ降りる。そこは滑滝で、これより2~3m位の小さな滝が続くが、1ヶ所、水量多いために滑滝の右側へまわり込み、手前の壁から向こう側へとんで渡る所がやばい位である。上流には最後の難関大滝が堂々と水しぶきを上げていたが、右岸を高巻けばどうということはない。ここを過ぎれば水量も減って巾が2~3m位となり両側のブッシュが流れに被さりブッシュこぎとなる。これも少しですぐ草原の赤城

平に出る。ここからブッシュかき分けてウマ沢源頭に入る。初めは大したこともなくスイスイ行くが、突如、ゴルジュ状の10mの滝が現われる。ここは右岸のガラ場を高巻いて降りる。下流に行くにつれ、赤城沢と似た様相を示す。が、赤城沢よりも小さいので流れの中を行くというよりは、体が入らないので高巻きが多かった。最後に赤城沢出合すぐの所で、若干水流多くなり、兩岸切れ立っている所では水流の上10m位の左岸の壁をへつって降りたが、ここが1番やばかった。そしてすぐ赤城沢に出合う。

(記 明神)

薬師沢右俣

参加者 根本、松尾、宮本、山口

7月24日 兎平BC出発(6:15)—薬師沢小屋(7:45)—右俣出合(8:55)—二股(10:40)—避難小屋(13:15)準備に手間取り出発が遅れる。所々徒渉するが大体において左岸沿いに薬師沢出合へと進む。へつれそうもない所には必ず巻き道がある。薬師沢は川幅が広く、底の浅い沢でジャブジャブと難無く進める。右俣に入ると水量も少なくなり、傾斜も緩く滝も出てこない。2,160mの沢の分岐に入ると右俣は滝になっていて面白そうだが予定通り左俣へ入る。俄然水量は少なくなり、進めば進むほど兩岸が開け、小石の多い河原の様相を帯びてくる。そして所々に雪渓がかかり沢も終りに近いことを示し始める。適当な所より西南稜へつき上げることにして、急なガレ場を詰めて稜線に出た。(記 松尾)

夏 山 縦 走

立山—西穂縦走

大日岳—雄山—剣岳—獅子岳—越中沢岳—薬師岳—黒部五郎岳—三俣蓮華岳—槍ヶ岳—奥穂高岳—西穂高岳

期 間 7月28日～8月9日

参加者 後藤（L） 佐野、住田、山口

7月28日 ● 立山駅—CS

アスファルト道を行く途中、トラックに山道まで乗せてもらう。

7月29日 ○のち◎ 出発（6：15）—称名滝（6：35）—大日平小屋（10：40）—大日岳（14：45）—七福園（15：20）—CS（16：45）

称名の滝を立入禁止区域まで行って見物するが2段目までしか見えず、あまりたいしたことない。カンカン照りの中、大日平小屋へ向かい、小屋で煮え湯のような水をもらう。大日岳より曇り始め、ピークではあいにくと四方ガスばかりであった。

7月30日 ◎のち● 出発（6：15）—奥大日岳（7：50）—雷鳥沢CS（10：00）

雷鳥沢にテントを張り、半日停滞とする。

7月31日 ◎のち● 出発（6：10）—雄山（7：20）—前剣（11：40）—剣（13：05）—平蔵谷—剣沢小屋（15：20）—雷鳥沢CS（17：20）

計画の遅れを取り戻す為、サブで立山を回り剣岳をアタックする。景色が何も見えないので下ばかり見て歩く。剣岳では割と人も少なく、平蔵谷をグリセードでとばす。

8月1日 ◎のち● 出発（7：10）—ノ越（8：50）—獅子岳（11：15）—五色ヶ原山荘（12：00）—越中沢岳手前CS（15：00）

昨日同様今日も視界がきかないが、巻き道を避けひたすら稜線を進む。途中どしゃ降りの雨となり道の端へテントを張る。

8月2日 ① 出発（6：20）—越中沢岳

（7：15）—スゴ小屋（10：00）—間山（11：30）—北薬師（13：00）—薬師岳（14：00）—太郎CS（15：45）
急な雪溪を下り小さな流れで水を汲む。薬師の下りは道が悪く、必死で歩く。

8月3日 ① 出発（6：00）—太郎山（6：40）—上ノ岳（8：10）—黒部五郎岳（11：40）—黒部五郎小屋（13：30）
赤城岳を下った所、左手には雪溪が光り、高山植物が咲き乱れている。空は快晴、全員一致で昼寝。黒部五郎はゴロゴロした岩をピョンピョンとんで行く。

8月4日 ○ 出発（5：00）—三俣蓮華岳（7：00）—双六岳（8：15）—千丈乗越（12：45）—槍の肩（14：05）
日の出とともに出発し三俣での眺めを満喫する。わざわざ双六岳へ登って槍に向かうが、千丈乗越はすごい風。槍の肩は満員で仕方なくゴミ捨て場にテントを張る。

8月5日 ◎
休養停滞とする。1年2人が槍の穂先へ行く。

8月6日 ①のち◎ 出発（5：15）—天狗原（7：10）—北穂高岳（11：05）—洞沢岳（13：45）—穂高岳山荘（14：15）

抜けるような空の下をぐいぐいと大切戸にさしかかる。滝谷がきれいに見える。時々クライマー達の奇声がこだまする。緊張して洞沢岳を過ぎ穂高岳山荘にテントを設営する。

8月7日 ◎一時● 出発（5：45）—奥穂高岳（6：25）—穂高山荘（7：10）
水分を含んだ寒風の中をふるえながら奥穂へと向かったが、悪天と雷を恐れ再び山荘に戻る。

8月8日 ①のち◎ 出発（5：15）—奥穂高岳（5：45）—天狗のCOL（8：25）—西穂高岳（10：50）—西穂山荘（13：15）—CS（15：20）

西穂の稜線は昨日の強風であったらと思うほどスリルがある。ジャンダルムのあたりで石を落とされヘルメットをつけて行く。西穂から新穂への道は背丈以上の笹をかきわけていく有様だった。新穂の1時間手前でテント設営。

8月9日 ① 出発(10:05)―新穂高温泉(11:10)

十分に時間をかけ、ゆうゆうと新穂へ下山する。山をたくさん知る、体力を養う、この2点については大きな成果があったと思う。しかししんどかった。(記 後藤)

槍ヶ岳周辺

槍ヶ岳―奥穂高岳―槍ヶ岳―大天井岳―常念岳―蝶ヶ岳―長堀山

期間 7月29日～8月7日

参加者 根本(L)、吉田、明神、宮本

7月29日 ◎のち① 出発(8:10)―槍ヶ岳CS(14:00)

7月30日 ◎のち●時々● 出発(5:45)―飛騨乗越(8:50)―槍ヶ岳山荘(9:10)―中岳CS(12:00)

7月31日 ● 停滞

8月1日 ◎ 出発(7:20)―南岳小屋(8:05)―北穂山頂(12:15)―白出のCOLCS(15:50)

8月2日 ○ 出発(7:00)―奥穂高(7:25)―前穂高(9:05)―白出のCOL(11:15)―瀬沢ヒュッテ(13:15)―横尾(15:30)

8月3日 ① 出発(7:30)―ノノ小屋(8:30)―槍沢小屋(9:10)―槍の肩CS(14:00)

8月4日 ① 出発(8:05)―ヒュッテ西岳(10:45)―大天井ヒュッテ(12:45)―常念乗越CS(16:30)

8月5日 ① 休養停滞

8月6日 ① 出発―常念岳―蝶ヶ岳―長堀山―徳沢園CS

8月7日 出発―上高地下山

縦走の意義を計画の貫徹に求めるならば、今

回の山行は失敗であったが、槍、穂高の地形の把握ができた点を考えれば、half successと云う所だろうか。中途半端な結果になってしまった。全員無事下山できたことは喜ぶべきであろうが、計画の貫徹を捨て、別の意義を求めた判断が正しかったか今だに迷っている次第である。(記 根本)

11月偵察山行

横尾尾根偵察

横尾尾根―中岳―槍ヶ岳―双六―鏡平―新穂高下山

期間 11月1日～11月4日

参加者 上松(L)、根本、佐野、吉田、宮本、森

11月1日 上高地出発(7:55)―徳沢(9:32)―横尾尾根末端(11:10)―2,000m付近CS(13:30)

横尾の末端はくま笹のブッシュこぎで始まる。あっちこっちに赤い布が木々に結ばれているのが目に付く。くま笹のブッシュこぎが終わると踏み跡が現われた。やれやれだ。

11月2日 出発(5:45)―P₂(6:20)―二のガリ―(9:53)―P₄(11:20)―横尾の歯手前CS(15:05)

まさに秋晴れの1日であった。赤沢山、屏風岩、蝶ヶ岳を見ながら尾根をトレースする。上級生がフィックス工作の間、1年は秋日和を満喫する。

11月3日 出発(5:55)―横尾の歯(7:00)―P₈(9:30)―中岳(13:25)―大喰岳(14:20)―槍の肩CS(15:30)

しだいに槍ヶ岳が斜め前方に姿を現わす。南岳山頂の赤旗を見た時には思わず南極点かと思った。それ程良く似ている気がした。稜線は完全にクラストしておりアイゼンを着ける。

11月4日 出発(6:05) - 千丈乗越(6:35) - 硫黄乗越(9:15) - 新穂高下山(17:00)

硫黄乗越まで完全装備で行く。鏡平から下山ベースで一気に下る。(記 宮本)

〈偵察報告〉

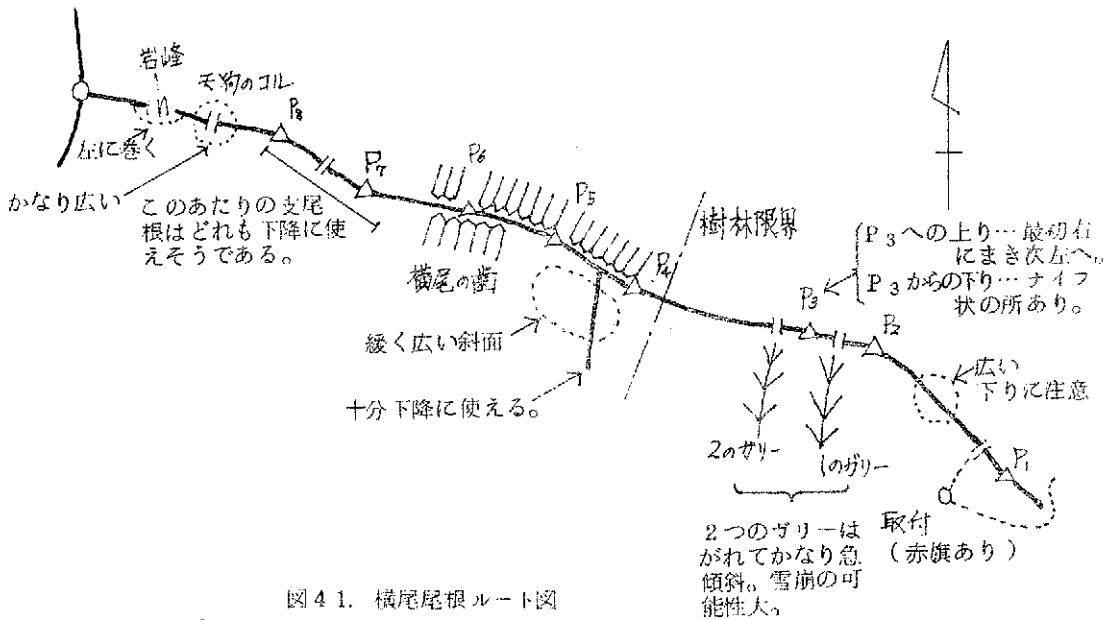


図41. 横尾尾根ルート図

鹿島槍天狗尾根偵察

天狗尾根 - 五竜岳 - 唐松岳 - 八方尾根

期間 11月1日～11月7日

参加者 後藤(L)、松尾、木嶋、井上、中島明神、山口

11月1日 ⑤ 信濃大町(8:10) - マイクロバス - 大谷ヶ原(9:35) - 荒沢出合(10:58) - 天狗尾根取付き(11:10) - 第1クローアル手前CS(15:50)

11月2日 ① 出発(6:20) - 第2ク

-クローアル直下(10:10) - 天狗の鼻(13:00)

11月3日 ① 出発(5:15) - 最低部(6:15) - 小舎岩(10:05) - 第1岩峰取付き(10:30) - 第2岩峰取付き(12:30) - 荒沢の頭(15:00) - 北峰直下100mCS(15:35)

11月4日 ① 出発(5:20) - 北峰(5:35) - 切戸小屋(8:00) - 五竜岳(13:40) - 五竜小屋CS(14:45)

11月5日 ① 出発(5:50) - 唐松小屋CS(9:10)

11月6日 ① 出発(6:20) - 唐松岳(6:35) - 不帰アタック Ⅲ峰(7:

40) - II峰 (8:00) I峰 (9:20)
 - 唐松岳 (10:10) - 唐松山荘 (12:
 15) - 八方池CS (15:35)
 11月7日 ① 出発 (7:10) - 国民宿
 舎 (7:50) - 咲花ゲレンデ下山 (10:
 15) (記 明神)

〈偵察報告〉

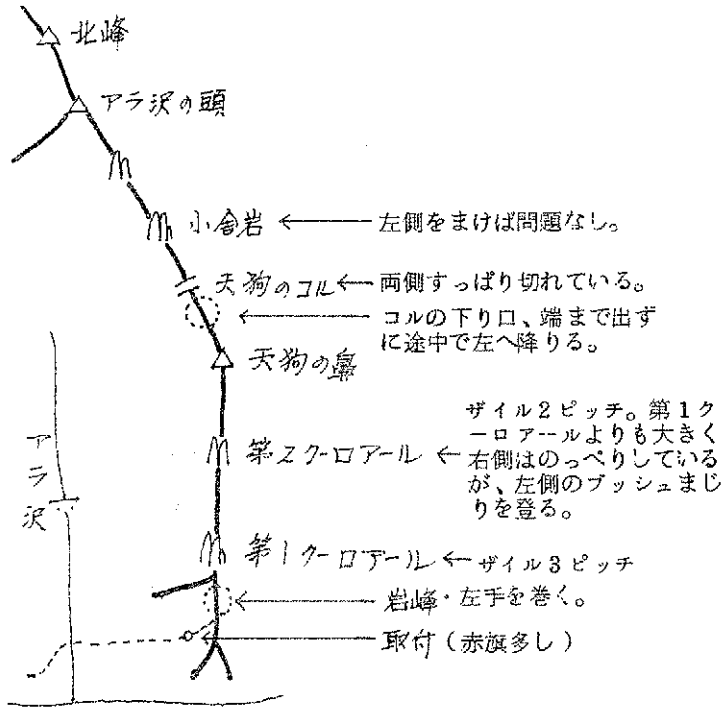


図 4.2. 鹿島槍天狗尾根ルート図

天狗の鼻へ登るまでに2ヶ所の危険地帯がある。まず第1クローアルは約30mの雪壁。そして、第2クローアルは2ピッチぎりぎりの急な雪壁。多人数パーティではフィックスザイル工事が望まれる。この第1および第2クローアル間のやせたリッジは雪庇の状態が複雑で注意が肝要。この尾根の最大の特徴は地形が複雑であること。尾根上の無数のコブ、小刻みな湾曲、両側が特別深い谷であることから異常な雪庇の出方があること。これらは鼻から小舎岩に至るまでの間に集中している。'73年の正月にも鼻の近くでカクネ里へ転落し行方不明になった事故があったが、原因は雪庇の踏み抜きである。過去にも意外にこの付近での事故が

多い。

第二の危険地帯は小舎岩付近から上部、荒沢ノ頭に致る地点である。この付近での滑落事故である。ここでは傾斜も壁と呼ぶ程急でもないが、これが落とし穴となっていて、落ちた後の行先が絶望的なのである。カクネ里にしろ荒沢にしろ停止するまでに500~600mは覚悟しなければならない。天狗のコルへの下降はブッシュ混じりのリッジ通しであるが荒沢側に注意を要する場所が多い。コルからは急な登りとなり、カクネ里へのスリップに注意する。ほとんど雪の斜面である。小舎岩は左側を巻けば問題はなく、ここで尾根は広々となる。しかし、そのすぐ上で15mの岩に行手をさえぎられる。ハー

ケンを打って直登する。さらに岩場が続くが、今度は右手上部へエスケープして雪上にルートをとる。再び左手の尾根上に戻ると、荒沢の頭はすぐそこだ。左手には荒沢の奥壁が目前にあり、右手にも北壁を眺む絶好の見物席。北峰へは狭い稜線を慎重にたどるだけでよい。

御岳アイゼン合宿

濁河温泉—五ノ池—二ノ池—八海山荘

期 間 11月22日～11月25日
 参加者 後藤（L） 松尾、木嶋、佐野、根本、井上、松浦、住田、山口、吉田、森、明神、宮本、石原（OB）、藪本（OB）

11月22日 ⑤ 飛騨小坂（8：25）—濁河温泉（12：00）—湯の花峠（15：40）—のぞき岩CS（16：20）

◀ピバーク訓練 松尾＝吉田▶

◀ピバーク訓練 木嶋＝明神▶

11月23日 ①のち③ 出発（6：30）—五ノ池（8：30）—二ノ池CS（10：55）

（雪上訓練 二ノ池正面 13：10～15：30）

◀ピバーク訓練 後藤＝山口▶

〃 佐野＝宮本▶

11月24日 ④ 訓練

◀ピバーク訓練 井上＝住田▶

〃 根本＝森 ▶

11月25日 〇 出発（8：00）—剣ヶ峰山頂（8：45）—八海山荘下山（11：40）

結果的には不十分な合宿に終わってしまったが、吹雪、強風下での撤収、歩行、設営等、得る点も多かった様に思う。 （記 後藤）

冬 山 合 宿

横尾尾根

沢渡—釜トンネル—上高地—横尾—横尾尾根—中岳—大喰岳—槍ヶ岳—同ルート帰還

期 間 12月24日～1月3日

参加者 後藤（L）、松尾、佐野、根本、井上、明神、森、住田、吉田、宮本

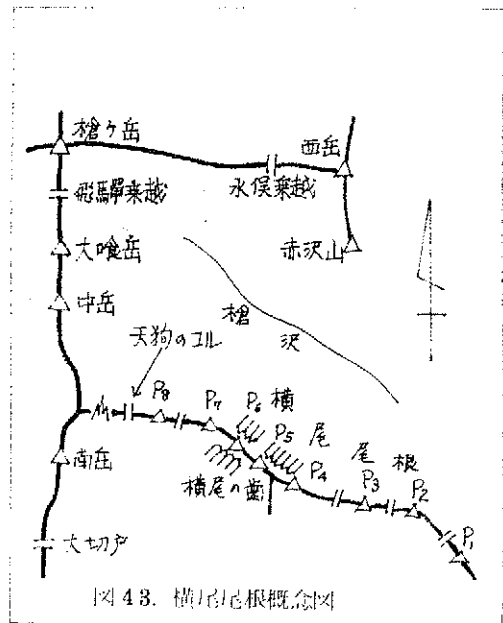


図43. 横尾尾根概念図

12月24日 ③のち② 松本—沢渡（9：10）—坂巻温泉（12：25）—取入トンネルCS（13：50）

所々、雪の消えた所もあるので、スキーをつけた我々のペースは快調とはいえなかった。

12月25日 ⑤ 出発（6：50）—大正池（11：10）—上高地バス停CS（15：30）

釜トンネルの中は氷がついている所が多く、かなり時間を喰う。大正池の所でシールをはずしたが、スキー技術の未熟さもあってペースは相変わらず低調。行動を終える頃には天気も回復し、月明りもさしてきた。

12月26日 ①時々① 出発(6:45)
一徳沢(12:50)一横尾直前の川岸CS
(16:30)

暗闇の中をヘッドランプをつけて出発。歩けば楽な道だが小さな起伏がたくさんあるのでシールをつけたスキーにとってはつらい。シールをつけないと少し滑ってころぶ繰返した。徳沢で40分近く休みここで行動を終わりたい思いをふりきって横尾に向かう。横尾近くでワカンをつけたパーティーに抜かれる。テントを設営し終わった頃には暗くなっていた。

12月27日 ① 出発(8:15)一スキー
デポ地(9:00)一横尾尾根取付き(10:
:00)一P₂CS(15:15)

P₁とP₂のゴル手前の林の中にスキーをデポし、ワカンにはき換える。取付きからP₁、P₂のゴルまでは傾斜がきつく、しかも雪の下がクマザサなのでステップがすぐ崩れ、登るのに手間取る。P₂の手前からトレールが現われた。後藤と井上が偵察に行く。

12月28日 ① 出発(7:35)一P₃
(10:00)一ニノガリー(13:10)
一次の小さなピークCS(16:00)

この日は前日までとうって変わってフィックスの連続である。トラバースは無理なので直登するが、ザックは引き上げを行なう。天気は良かったのでP₃からの眺めは抜群で、穂高、檜、常念と360度のパノラマを楽しむ。

12月29日 ①のち②風強し 出発(7:
10)一P₅のくぼ地横CS=BC(9:5
5)

出発早々の急斜面を登るとあとは緩斜面が続く。BC予定地に着く頃から風が出てきて、午後には雪も降り始める。半日停滞。

12月30日 ②のち③

悪天のため横尾の歯のフィックス工作にとどめる。(後藤、佐野)

12月31日 ①

槍アタック隊(後藤、松尾、根本、佐野、吉田)
出発(7:20)一天狗のゴルにAC設営
サポート隊(井上、明神) 出発(7:20)
一帰幕(9:55)

1月1日 ③のち④

槍アタック隊(後藤、松尾、根本、佐野)
出発(10:20)一稜線(10:45)一
槍の肩(12:15)一槍頂上(12:30)
一天狗のゴルAC帰幕(14:50)
朝のうちは雨も降っていたが、天気も回復して
きたのでアタック決行。

サポート隊(井上、森)

BC出発(10:00)一AC着(10:10)
ACへ着いた後、井上、吉田で南岳アタック。
後BCへ帰る。

1月2日 ④ AC撤収出発(7:30)一
BC着(9:00)一BC出発(10:10)
一スキーデポ地点(12:50)一徳沢CS
(16:10)

ニノガリーからP₂までは時間がかかるので、ニノガリーを直接横尾から沢沢への道へ降りる。そして、スキーをつけ、或いはかついで徳沢へ向かう。

1月3日 ⑤ 出発(8:30)一釜トンネ
ル(12:10)一沢渡下山(14:45)
順次、沢渡へ向かう。(記 森)

冬山。この印象から程遠いというのが一番強く感じた実感である。毎日毎日良い天気に恵まれ、合宿は一応成功したと言える。部員の減少、意欲の欠除というクラブの沈滞状態からの脱出の一步を踏み出すことができていると幸いであると思う。

(記 後藤)

春山合宿

鹿島槍天狗尾根

鹿島槍天狗尾根～爺ヶ岳東尾根

期 間 3月13日～3月19日

参加者 後藤（L）、松尾、住田、宮本、山口、
森、吉田、明神
高橋（OB）

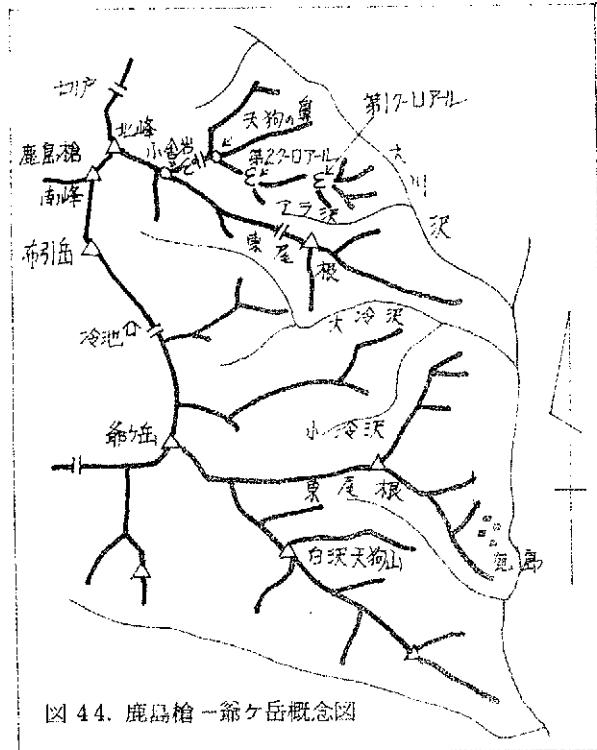


図 44. 鹿島槍～爺ヶ岳概念図

3月13日 ①のち⊗ 大町出発（9：30）
—大谷ヶ原（11：10）—アラ沢出合（12：45）—1,450m付近CS（14：55）
マイクロバスをチャーターして大谷ヶ原まで入り、大川沢の川原をワップで行く。1.6mの積雪。アラ沢出合からラッセルをたどり、急登してCS。

3月14日 ○ 起床（4：15）—1,640mデポ地（8：35）—1,800m付近CS（11：40）—デポ回収、フィックス工作—帰幕（16：20）
松尾、山口、森が先発フィックス隊として出発

する。天狗の鼻が見えだす頃からラッセルが消え、膝までのラッセルを延ばす。キスリングはこの地点にデポしておく。途中クレバスに架かるスノーブリッジを後藤がトップで進むが、クレバスに落ちる。しかしすぐに這い出した。ここは60mフィックスする。上部は80度位になり、ザイルをつかんで登る。1,800m地点にカマ天を張り、これより後藤、松尾、住田で第

1、第2クローアールをフィックス工作に行き残りしてデポ回収に行く。16：20、第1、第2クローアールのフィックスを完了して帰幕する。

3月15日 ○ 出発（6：20）—第1クローアール（6：45）—第2クローアール（8：10）—天狗の鼻（10：00）—小舎岩手前CS（11：25）

第1クローアールはただの雪壁で、11月の時とくらべ崩れやすい。第2クローアールまでのやせた尾根や、トラバースルートは、40kg近い荷物なので心配されたが、3人目ぐらいからバケツになり快調にいった。9：15、全員第2クローアールを登る。登ると先行していた2人パーティーが降りてきた。彼らは2日で天狗尾根をやったようだ。天狗の鼻からの見晴しは非常によく、北壁の取付き点など見ていると小舎岩あたりのトレースのすぐ横が雪崩れていた。後藤、松尾、宮本、吉田がフィックス工作に出、第2岩

峰取付きまでフィックスしてくる。

3月16日 ①のち⊙ 出発（6：00）—小舎岩（8：30）—第1岩峰（9：00）—第2岩峰（11：20）—アラ沢の頭（12：30）—北峰（13：50）—北峰を下った地点CS（15：40）

雲海が迫ってくる。最低コルを上がったところに雪壁があり、荷物を考えてフィックスする。小舎岩手前のトラバースは足場がせまく慎重に通過。カクネ里側にでっかい雪庇が次々に出ている。第1岩峰の11月に使った岩を右に巻くルートは垂直の雪壁になっていて使えず、岩を

そのまま登る。薄く雪の付いたルンゼ状でステップが崩れやすい。その後、3 m程の岩をスタカットで越える。アラ沢の頭に着く頃は視界がかなり悪くなっている。北峰から本峰への登りはクラストしていたが、雪質が地形によって変わり注意を要した。黒部側は切れていて、ゴツゴツした岩が突き出ている。最後の登りにはいる小さなコルで風が強くなり、北峰手前の広い平地まで引返すことにする。途中山口がスリップ。1.5 m程で岩にしがみつき、ステップを切って夏道までは上がる。高橋OBが、とっさにピッケルをつかんだため、大きく体勢が崩れなかったようだ。

3月17日 ○のち◎ 出発(7:10) - 南峰(8:20) - 冷池小屋CS(10:00)

最後の登りのトラバース部分をフィックスする。下りは夏道どうしにクラストした斜面を、どんどん下る。冷池小屋で半日停帯。

3月18日 ⊗のち◎ 沈殿

高橋、吉田、山口、森が吹雪の中、爺ヶ岳へ散歩に出る。

3月19日 ① 出発(5:30) - 北峰(6:40) - 鹿島部落(13:00)

東尾根に入ってから風がなくなり、ずいぶん暑い。下山後、鹿島山荘の方々にえらくお世話になった。(記 山口)

春山をふり返って自分に関して言うならば、物足りなかったの一言につきると思う。春山前、突然の不参加者の出現、学連の事故による鹿島槍北壁の取り止め、その他諸々のことがありすぎた。その上、山行中1年生が吊尾根に於てスリップするというアクシデントのおまけつきである。

リーダーとなって1年間、あれもやろうこれもやろうと思ったけれど、それはただ口先に過ぎず、土台となる山の研究を怠った為、むなしく過ぎ去った1年間だった。次年は松尾を中心に頑張っ欲しいと思う。(記 後藤)

1975年度（昭和50年度）活動記録

75年度 現 役 部 員

C . L	松 尾 敬 志	爾	2 (3)
S . L	佐 野 威和雄	理 物	3 (3)
	後 藤 正 教	法	2 (4)
	木 嶋 良 雄	工 冶	2 (2)
主 務	住 田 宏 己	基 情	2 (2)
	宮 本 敬 正	工 冶	2 (2)
会 計	明 神 知	基 制	2 (2)
	森 良 平	基 化	2 (2)
	山 口 誠 吾	人	2 (2)
	吉 田 真 三	医	3 (2)
	飯 塚 邦 彦	理 数	1 (1)
	岡 部 祐 二	工 冶	1 (1)
	近 藤 富 夫	工 酵	2 (1)
	重 田 邦 男	工 応 化	1 (1)
	西 畑 一 哉	法	1 (1)
	細 根 清 治	理 数	3 (1)
	森 保 知	工 建	1 (1)
	渡 辺 治 郎	法	1 (1)

5 月 山 行

新人歓迎白馬山行

期 間 4月27日～5月2日

参加者 松尾（L）、佐野、明神、住田、飯塚、
岡部、重田、西畑、森、渡辺

4月27日 リフト終点出発（10：20）

一榎ノ木寮（11：05）一成城大小屋（11：40）一天狗原（12：55）

天狗原への登りの頃よりガスり始め、偵察を出した後、例の岩のある前に設営する。

4月28日 雪訓（5：45～8：35）—
大池へ移動（11：00～13：20）

乗鞍の斜面は蹴り込むと靴が埋まってしまうが、新人にキックステップ、滑落停止を練習させ、明日の ATTACK に備える。

4月29日 白馬 ATTACK 出発（5：10）
—小蓮華（7：10）—白馬岳—帰幕（11：40）

荒天が予想されるが、熱のある重田を除いて全員白馬 ATTACK に出る。頂上ではかなり眺望がきき、新人には満足してもらえたであろう。やはり夕刻より雨となる。

4月30日

雨の為停滞。それでも9：00より2年2人は蓮華温泉スキーツアーの偵察に出る。

5月1日 白馬主稜 ATTACK 出発（3：00）
—小蓮華下り口（4：20）—白馬沢（6：55）—2,660m BS（14：00）翌
2日 BS 出発（3：50）—白馬頂上（6：30）—帰幕（12：40）

松尾、佐野が白馬主稜 ATTACK に出る。満天の星空の下、下級生に見送られて2人は一気に小蓮華の斜面を登った。小蓮華尾根は昨日の雨で荒れた素肌を露わにし、とても下れたものではないので右の急な沢をアイゼンを効かせて下

る。ブッシュが現われる頃から尾根に入り、1,960m位から派生している小尾根を下り白馬沢に出る。ここよりブッシュの多い斜面を目指す。移動高に支えられた太陽が照りつけ、我々の疲労は甚だしい。主稜自体はツボ足で、ザイルを出しているのも我々だけであった。

翌2日、アイゼンが良く効き一気に頂上へと向かう。雪庇は落ち、トレースがいやという程ついているがザイルを出し2ピッチで頂上へ出る。これより、先日、風邪で ATTACK できなかった重田を小蓮華に迎え、佐野が ATTACK について行く。

5月2日

<蓮華温泉スキーツアー隊> 出発（6：40）
—1,500m（9：40）—温泉（10：00）—帰幕（15：15）

1年の雪訓の後、明神、住田が蓮華温泉スキーツアーに出る。天狗原から北へのびる沢を下るが、下まで降りてしまわず、途中西へ登る。ここは迷いやすいので指導標に注意すべし。ここより夏道に入り、すごいゴルジュを見せる沢を渡ると蓮華温泉である。帰りは大池につき上げる夏道を忠実にたどる。

5月3日 出発（7：10）—親ノ原下山（10：40）

天狗原ではガスがかかり先頃は良い経験になったと思う。スキー隊も仲々上手に下ってゆく。
(記 松尾)

北鎌尾根

期 間 4月27日～4月30日

参加者 後藤（L）、山口

4月27日 ●のち◎ 葛温泉 出発（10：10）—東沢（11：55）—千天出合（16：50）

水俣川の第3吊橋が流されており、足首位の徒渉をしてやっと出合に着く。

4月28日 ◎のち① 出発（6：55）—P₅（12：50）—北鎌コル（14：15）

恐ろしい丸木橋で手すりになる針金が所々切れている。それを1人1人渡るとそこが北鎌の末端である。樹林の中の岩場をブッシュをつかんでどんどん登り、視界が開けるとP₄が目に入る。P₅のトラバースでザイルを出したのは我々だけだったが強い日射しの下、雪がくさっていやらしかった。北鎌のコルまでの下りはかなり急である。コルはデコボコしてそんなに広くはない。

4月29日 ◎のち● 出発(4:30) - 独標(7:35) - 北鎌平(11:50) - 柏の肩(12:40)

視界悪く風も強いが、昨日の遅れた分を取り戻すべく独標は越そうと早立ちする。霧の中に黒々とそびえる独標は正面ルンゼを登る。思いのほか、つるべ式で楽に越せた。そして、北鎌平までの平坦な稜線を過ぎ最後の大槍への登りにかかる。ここもザイル3ピッチで楽に穂先へ。肩にテントを設営したら雨が降り出した。

4月30日 ①のち◎

出発(14:00) - 徳沢(18:20)

小槍を1本登って肩の小屋を後にする。槍沢はシリセードで快適に下り、上高地へと向かう。

(記 山口)

魚沼三山

荒沢岳 - 中岳 - 五竜岳

期 間 4月27日～5月1日

参加者 上松(L)、吉田、森、宮本

4月27日 銀山平出発(11:30) - 下山滝出合(15:00) - P1067付近CS(16:05)

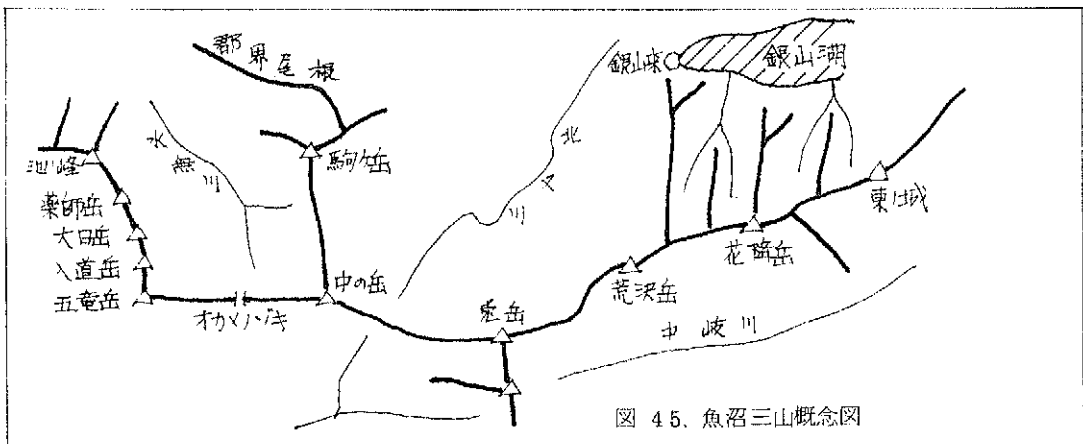
銀山平から舟で尾根に取付くつもりであったが、水位が低い上、湖岸が凍結していて舟は出せないとのこと。結局林道を進む。時間的に余裕が無いとのこと、下小滝沢右岸の支沢を上げ、さらにブッシュをこいでなだらかな雪面に出る。P1067より南西へ100m下った辺りかと思われる。

4月28日 出発(5:35) - 東ノ城(10:40) - 西ノ城(12:35) - 本城山CS(15:50)

ブッシュが雪に埋まって稜線を快適に行けると思っていたのが大間違い。雪は半分以上落ちていてエグイやぶこぎを強いられる。山腹には稜線直下まで雪がついているがクレパスが至る所口をあけている。クレパスのない所は雪上を歩けるがそれ以外は稜線通しのやぶこぎ。東ノ城回りから本城山手前まではやせている所が多い。もっと雪のある時期に来れば面白いと思われる。

4月29日 出発(6:00) - 花降岳(8:20) - 荒沢岳(10:45) - 灰の叉山(13:00)

花降岳回りで中岐川の方へ尾根を下って行く



可愛いクマを2頭見かけた。荒沢岳の登りは夏道と合し、岩峰が数ヶ所あるが鎖が出ている。稜線は馬の背状で好きな所を歩けるが中岐川に所々雪庇が残っている。

4月30日 出発(5:10) - 禿岳(8:20) - 中の岳(11:10) - 御目山と中の岳のCOLCS(12:00)

小雨がそば降る中、視界は数十メートル。尾根が広いので迷いやすい。中の岳からトレースに入り、滑り台を横に広げたような斜面を一気に駆け降りた所で視界悪い為テント設営。15:00頃よりガスが消え、御目山から派生している尾根が良く見える。左手の方は切れていてやばい。トレースも右の尾根についている。

5月1日 出発(5:15) - オカメノヅキ(8:00) - 五竜岳(10:20) - 千本松小屋(13:40) - 大倉口(16:30)

雪のないオカメは極く普通の道である。ハツ峰のI峰は鎖がついているものの重荷ではきつかった。が、他の岩峰はたいした事もない。ここを過ぎれば後は一路下山へとひた走る。

(記 吉田)

夏山定着合宿

穂高岳 BC 奥又白池～瀧沢

期 間 7月13日～7月26日

参加者 松尾(L)、佐野、木嶋、明神、住田、山口、宮本、吉田、森(良)、飯塚、岡部、岸田、近藤、重田、西畑、野津、細根、森(保)、渡辺、井上(OB)、高橋(OB)、藪田(OB)

<行動概要>

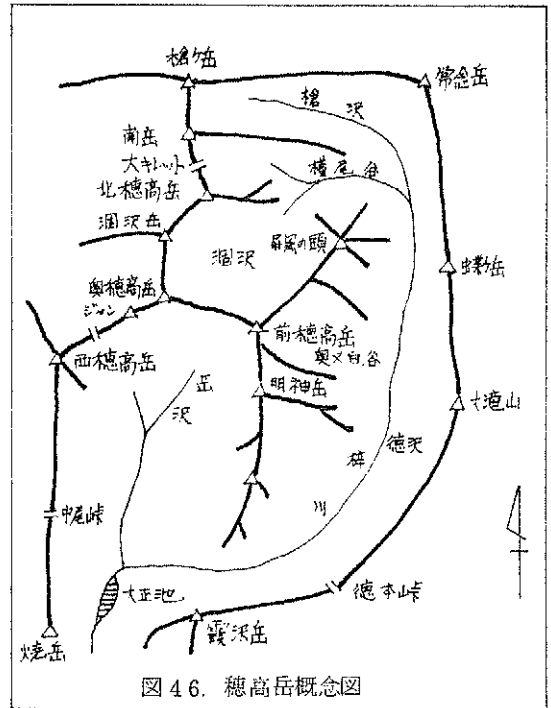


図46. 穂高岳概念図

先発隊(佐野、住田、山口)

7月13日 新島々にて大雨のため沈殿。

7月14日 沢渡着(8:35) - 中ノ湯(10:25) - 徳沢(15:50) - バスターミナル(19:20)

7月15日 出発(4:45) - 中ノ湯(6:25) - 荷物受け取り再び徳沢へ - バスターミナル(11:20) - 徳沢にて本隊と合流(15:00)

本隊

7月13日 島々駅出発(10:25) - 発電所(13:00)

大雨で島々谷は濁流。

7月14日 出発(7:15) - 二股(9:00) - 引き返し - 島々部落(13:00)

二股上手の橋が流されたとのことで、島々部落まで引き返し、朝日、中ノ湯から入山することにする。

7月15日 タクシーにて中ノ湯へ(7:15) - 大正池(9:00) - 徳沢(13:05)

7月16日 出発(7:00) - 松高ルンゼ下部デポ地点(9:20) - 奥又白の池

松高ルンゼ下部より、奥又白の池までダブル
ボッカをする。

7月17日

残っている荷を池まで上げる。

藪田OB入山。

7月18日

井上OB入山。

A沢下の雪溪にて雪訓

7月19日

- ・Ⅳ峰東南面中大ルート(住田、山口、吉田)
- ・Ⅳ峰東南面明大ルート(佐野、明神)
- ・北尾根上半遠足(松尾、飯塚、渡辺、井上OB)
- ・北尾根下半遠足(宮本、重田、岸田、藪田OB)
- ・槍ヶ岳ビバーク(森(良)、木嶋、岡部、西畑、森(保))

7月20日

- ・前穂北壁Aフェイス(松尾、宮本)
- ・A沢～前穂高遠足(吉田、野津、近藤、藪田OB)
- ・事故救援(20日～21日)
A沢にて事故との連絡に(18時頃)、松尾、佐野、住田、宮本、吉田が負傷者の収容に、木嶋、明神が徳沢へ連絡に下る。

7月21日

A沢より負傷者を池まで降ろし、ヘリにて下へ降ろす作業を手伝う。

高橋OB入山。

7月22日

パノラマコースよりBCを瀧沢へ移す。

7月23日

- ・滝谷Ⅳ尾根(吉田、住田)
- ・前穂北壁Aフェイス(木嶋、森(良))
- ・滝谷Ⅱ尾根遠足(松尾、重田、森(保)、高橋OB)
- ・霞沢岳ビバーク(山口、明神、飯塚、近藤)

7月24日

- ・クラック尾根(松尾、木嶋、森(良))
- ・北穂東稜遠足(西畑、高橋OB)
- ・岳沢ビバークⅠ(吉田、宮本、岸田、重田、細根)
- ・岳沢ビバークⅡ(住田、渡辺、野津)

7月25日

- ・ジャンダルム遠足(佐野、森(保)、高橋OB)
- ・北尾根遠足(森(良)、木嶋、岡部、西畑)

7月26日 瀧沢出発(9:30)ー上高地
下山(13:45)

〈登攀及び遠足の記録〉

北尾根Ⅳ峰東南面中大ルート

7月19日

参加者 住田、山口、吉田

タイム 取付き(6:50)ー終了(10:50)

白く細長い岩の手前で岩に移り登攀準備。

1P目、凹角を5m上へ、そして右ヘリッジを回り込んで緩やかな草付きのフェースを10m直上する。残置ハーケンのある草付きバンドにて確保する。

2P目、草付きバンドを右へ水平に5mトラバースし、5m直上した後、リッジを回り込んで右斜上へ抜け、りっぱなテラス手前でビレイ。

3P目、どうやらL字洞穴ルートに入ったらしい。住田、右へ抜けるルートを求めて10m直上するが諦めてクライミングダウンする。

4P目、黒い尖岩に向かって階段上の容易なフェースを40m登り尖岩の上に出る。

5P目、物足りない住田は難しいルートを選んでもう1ピッチのぼす。40mで登攀終了。技術的に難しいといった事はなく、魅力に欠けるルートであった。(記 吉田)

滝谷Ⅱ尾根

7月23日

参加者 松尾、重田、森(保)、高橋OB

北穂南峰からⅡ尾根を下る。P₁を過ぎP₂まではB沢側がすっぱり切れているのでC沢左俣寄りにルートをとる。P₂において主稜と北山稜に分かれるが主稜を下降する。左手にはドー

ム、右手にはクラック尾根、I尾根が真近に見える。と、突然雷の様なものすごい音が滝谷にこだまする。落石である。もう少し下った所を10mアップザイルンしてルンゼをトラバースし北山稜に取付く。北山稜はこれといった難しい所はなく快適な岩をどんどん登って行く。それでもP₂手前で2ピッチザイルを出して岩登り気分を味わう。ここよりも来た道に合流し、南峰へと向かう。(記 重田)

北穂稜稜

7月24日

参加者 西畑、高橋OB

タイム BC出発(5:30)ーゴジラの背(7:50)ー北穂(9:50)ーBC(12:25)

天候に恵まれ、快適な岩稜歩きが楽しめた。北穂沢上部雪溪との間のガレより雪溪を横断して東稜へ取付く。顕著な2つのルンゼのうち稜の末端寄りのルンゼを稜線目指して詰める。最後はハイ松の枝をつかんで稜上にとび出した。底の抜けたような青空の下、ハイ松を踏みしめて進んでいると、ようやく岩稜の様相を示し始める。踏み跡は切戸側を巻くようについているが忠実に岩稜をたどる。そして核心部のゴジラの背中最上部に至る。顕著なナイフリッジの連続で北穂沢側はかなり切れており高度感はある。コルへ懸垂下降した後も忠実に稜をたどり、岩を乗越して行くと、ひょっこり北穂小屋の展望台に出た。(記 西畑)

霞沢岳

参加者 山口、明神、飯塚、近藤

7月23日 BC出発(5:40)ー奥穂(7:50)ー河童橋(11:40)ー表霞沢取付き(12:00)ーBS(15:20)

奥穂を越えて上高地に下り表霞沢に取付く。大雨の後なので崩れて危く、ヘルメットを着用

する。岩場の崩れの甚だしい所は右手のブッシュに入ったりして進む。しかし崩れがひどいために正確なルートは全くわからない状態であるやがて水の流れていない滝に出会い、左手のブッシュの中をBSを捜しながら進む。

7月24日 BS出発(5:50)ー霞沢岳登頂を断念(9:10)ー取付点(14:00)ーBC(20:00)

左に大岩壁があり昨日同様岩場が崩れるので岩場とブッシュを繰り返して進む。しかし崩れは甚だしく、足場は安定していない。そして急な岩壁手前の安定した所に出た。岩壁の向こうに霞沢岳が見えるが時間的に登頂は無理と判断し、懸垂下降をしてガレ場を下る。

霞沢岳は大雨の為ルートが分からず、崩壊も甚だしい為にその右手の方へ出てしまったが、正確なルートは沢を左手に進んで行くのであると思われる。が、そこも非常に急な沢であった。

(記 近藤)

夏山縦走

剣岳北方稜線

樺平ー折尾谷ーブナクラ乗越ー赤谷山ー剣岳
ー内蔵助ー平ー針ノ木

期間 7月28日～8月3日

参加者 佐野(L)、松尾、中島、吉田、山口
飯塚、西畑

7月28日 ◎ 樺平出発(14:10)ー小黒部谷出合(18:40)

小黒部谷出合付近の沢を小黒部谷へ降りたが対岸へ渡ることが出来ず、またへつることも出来ないので出合少し上流に設営する。

7月29日 ① 出発(7:15)ー小黒部

谷一西谷出合(12:00)一折尾谷出合(13:40)一折尾谷CS(16:00)

小黒部谷右岸のブッシュの中を進む。何とか小黒部谷へ降り立ったものの、高巻きの連続で、行程ははかどらない。西谷へ入ってから遅々として進まず、日程の遅れを考慮して折尾谷を詰めることにする。ここもブッシュを高巻きながら左岸を進み、大きな赤岩のナメの横に設営する。

7月30日 ① 出発(6:05)一ブナクラ乗越(11:30)

沢通しに進む。ブナクラ乗越への最後の詰めで雪渓が現われ、雪上を最低鞍部へ一直線に向かう。ヤブこぎにも大して悩まされることなく乗越に着き、午後は心地良い風に吹かれながら昼寝をむさぼる。

7月31日 〇 出発(5:40)一赤谷山(9:30)一赤ハゲ(12:10)一白ハゲ(13:15)一犬窓(14:30)

朝からブッシュこぎの連続。赤谷山頂上からの剣岳の眺望もつかの間、再びブッシュが始まる。犬窓は我々のパーティーのみであった。

8月1日 〇 出発(6:40)一池ノ平山(8:35)一小窓(10:45)一三ノ窓(12:35)一剣本峰(14:50)一真砂沢(16:30)

池ノ平山への登りで部分的にガレている他は三ノ窓まで快調に進む。池ノ谷ガリーでは時々落石がありひやりとさせられる。長次郎のCOLから1年と吉田が頂上アタックし、頂上もそこに、長次郎左保を真砂へ下り、デポで腹を満たす。

8月2日 〇 出発(6:25)一ハシゴ谷乗越(8:10)一内蔵助(8:50)一黒部ダム(13:10)一平CS(17:00)

ハシゴ谷乗越へは尾根筋の道を進む。黒部ダムで中島氏が下山するのを見送り、平の渡し場へ向かう。急ぐ必要もないので平の小屋を少し行った路上にテントを設営する。

8月3日 〇 出発(5:35)一南沢出合(7:10)一針ノ木峠(11:10)一扇沢下山(13:20)

渡し場で上ノ廊下隊と分かれ、針ノ木峠へ向かう。思ったよりも早く峠に立ち、合宿の思い出を心に浮かべながら雪渓を一気に駆け下った。

(記 西畑)

黒部上ノ廊下

期間 8月3日～8月5日

参加者 佐野(L)、吉田、山口

8月3日 〇 平の渡し(6:40)一東沢出合(8:10)一下の黒ピンカ手前(14:25)一CS(15:20)

地図で兩岸に側壁の記号が出てくる辺りより徒渉が頻々になる。流れの早い徒渉の際には杖を携えるのが良策。沢が大きく右へ曲がると前方に節理の走る黒っぽい大岩壁が見えてくるが、その辺りは徒渉不能。岩壁右手のルンゼを少し登り、木の生えたテラスを目指しトラバース気味に登ると踏み跡がある。これをたどると容易に河原へ降りられる。これより両側はしばらく河原となり、格好の幕営地を見つける。

8月4日 〇 出発(6:30)一広河原(11:00)一金作谷出合(12:20)一直角屈曲点(14:40)一CS(15:15)

徒渉をまじえつつ右岸を行くとゴルジュ帯が現われる。小さく巻くつもりであったがどんどん上へ追いあげられ、結局懸垂4ピッチ、70mで河原へ下る。さらに河原を進むとゴルジュ帯の上の黒ピンガが現われる。シャワーの様に兩岸より滝が落ちかかり、白い壁と澄んだ水のコントラストが見事でとても美しい。金作谷出合のスノーブリッジはなく、若干の岩渓が残っているだけだった。しばらく河原が続いた後、再びゴルジュ帯が現われるがかなりへつれる。直角屈曲点の少し上流、支流出合で幕営する。

8月5日 〇 出発(6:10)一立石奇岩(7:40)一薬師沢出合(10:40)一折立口(15:00)

赤牛沢、岩葺小谷を過ぎて、やがて立石奇岩を見る。立石付近は一部ゴルジュになっている

が水量少なくどうということはない。そして源流の様相を示し始めると薬師沢は近い。水量少なく、おまけに連日快晴という好条件に恵まれた上ノ廊下遊行であった。(記 吉田)

南アルプス奥西河内遊行

期 間 7月29日～8月2日

参加者 住田(L)、宮本、重田

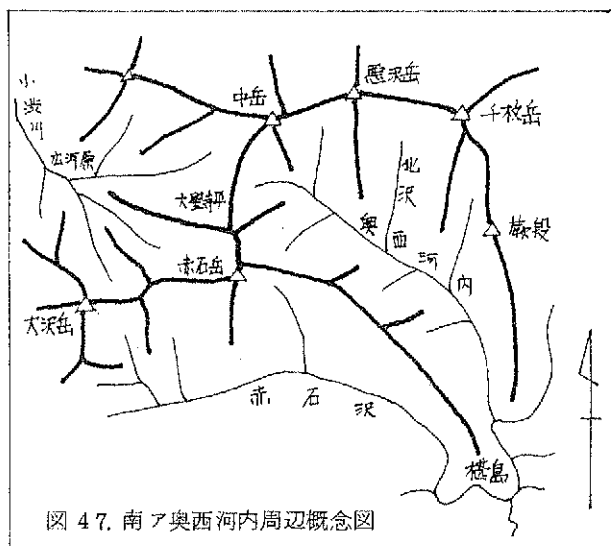


図 47. 南ア奥西河内周辺概念図

7月29日 ① 畑畑第1ダム(11:55)
-榎島(14:00)

うまく車に乗せてもらって随分早く榎島に着いたけれども、宮本はひどい熱で寝こんでしまう。

7月30日 ①

宮本の風邪がひどいので、住田、重田で赤石沢の偵察に出る。赤石沢は水量は案外少なく至る所徒渉できそうである。

7月31日 ① 榎島出発(5:55)-下砂沢出合(12:45)-樺沢出合(13:00)-北沢出合(14:25)

荒川岳への道の吊り橋の所から沢に入る。下ノ廊下は徒渉、へつりを繰り返す難無く通過する。奥西河内は赤石沢より水量少なく、膝上か

ら太もも位である。右岸より支沢が入ってから河原が続く、北沢出合までどんどん進める。この辺も広い河原で出合にテントを設営する。

8月1日 ① 出発(6:00)-上砂沢出合(7:15)-二俣(9:10)-大聖平(13:25)

北沢出合以後沢は急傾斜となり2m位の小滝が連続するようになる。上砂沢出合を過ぎると一階急になり4m位の滝がいくつも現われ、シャワークライミングを楽しむ。二俣を過ぎての大滝は右岸を高巻くが少々手こずる。大滝を過ぎると沢は源流の様相を示し始め、やがて草原の中へ消えて行く。

8月2日 ① 出発(5:25)
-広河原小屋(7:15)-小波の湯(10:20)

広河原小屋から沢通しに下るが単調な河原歩きである。徒渉を幾度かして、小波の湯に着いた。

(記 重田)

十勝岳～化雲岳縦走

十勝岳-オプタテシケ山-黄金ヶ原-沼ノ原-天人峽-クワウンナ

イ川遊行

期 間 7月29日～8月6日

参加者 木嶋(L)、明神、森(L)、岡部、岸田、近藤、野津、細根、森(保)、渡辺

7月29日 ①(のち②) 望岳台出発(11:00)-十勝岳(15:10)-CS(16:00)

望岳台までバスに乗り、ここで水を分けてもらって、雄大に広がる十勝岳、美咲岳を見ながらゆっくりと歩を進める。あいにくと天気は下り坂で、避難小屋回りからガスリ始め、稜線に出ると風が一段と激しくなり、我々は吹き飛ばされんばかりにして進んだ。

7月30日 ○●

昨日来の強風は依然として衰えず、おまけに雨にも見舞われる。天気回復の見込み立たず沈殿。

7月31日 ① 出発(7:00)ー石垣山(9:00)ーオプタテシケ山(10:40)ー黄金ヶ原手前CS(16:10)

オプタテシケ山を下った辺りから、ひどいブッシュが現われ、おまけにひどいぬかるみ道ときて参ってしまう。進んでも進んでも一向に目標に近づかないのは、北海道の山だからか。この日、高橋氏より頂いた花火を楽しみ下界が恋しくなる。

8月1日 ◎ 出発(5:45)ー黄金ヶ原(8:00)ーヒサゴ沼(12:15)

黄金ヶ原に出るまでブッシュが続く。この頃から再びガスにまかれ足下周辺しか見えない。トムラウシ山頂にコースをとったつもりが巻き道で、早々にヒサゴ沼にテントを設営する。

8月2日 ◎◎ 出発(5:55)ー五色岳(8:10)ー沼ノ原(10:50)

化雲岳へ少し登れば沼ノ原までずっと下りが続く。相変わらずのガスの為、本日も景色はさっぱり見えない。北海道の夏はいつもこうなのか。晴れていたら沼ノ原の眺めはさぞかし見ものであろうに。

8月3日 ◎ 出発(5:50)ー天人峡(12:30)

クワウンナイ川遡行の為の食料買出しに森兩名と渡辺が先発する。先発隊は旭川で食料を調達した後、天人峡へ引き返す。本隊はクワウンナイ川出合にテントを設営し帰りを待つ。

8月4日 ① 天人峡出発(9:15)ーポクワウンナイ川出合(13:20)ー二股手前CS(17:30)

いよいよクワウンナイ川遡行であるが、渡辺が風邪をひき、岸田は出発早々に転んでおでこに大きなコブを作ってしまったので、兩名を残す。クワウンナイ川下流は何の変哲も無い長い長い川である。二股手前にBSを見つけツェルトを被る。

8月5日 ◎ 出発(5:40)ー二股(8

:45)ー縦走路(14:00)ーヒサゴ沼(15:15)

二股より左の沢を進むと13の連続した滝が現われるがほとんど高巻く。そしてメインの2kmに及ぶ滑が現われる。しごく快適だ。さらに詰めると水の流れは雪溪の中へ消えていた。稜線に出てから風強く、ヒサゴ沼ではツェルトを張ることができず、ひっかぶって寝る。

8月6日 ◎ 出発(5:40)ー化雲岳(6:20)ー天人峡(9:30)

下山だけということで天人峡めがけ地下足袋で駆け降りる。足こそ軽かったが、痛さはひとしおだった。しかし、何といても「霧の北海道」であったのは残念だった。(記 森保)

11月偵察山行

奥大日尾根偵察

奥大日尾根ー剣沢ー樺平

期間 11月1日～11月6日

参加者 上松(L)、明神、吉田、飯塚、近藤、重田、岡部、細根、西畑、森(保)、渡辺

11月1日 馬場島出発(9:45)ー中山の科尔(14:15)

早月尾根、小窓尾根パーティーと別れ、中山の科尔を目指す。紅葉が美しいけれどもブッシュと急登にあえいで科尔まで出た。所々に赤旗があり、踏み跡もかすかながら尾根についている。

11月2日 出発(6:20)ークズバ山(14:50)ー西大谷山2つ手前の科尔(16:40)

中山の科尔からクズバ山まで笹の急登が続く。

クズバ山近くには小さなピークが幾つかあり、しばしば期待が裏切られる。クズバ山を越え、西大谷山手前のピークとのコルに、ブッシュを切り払ってテントを設営するが、水が全くないので、上松、吉田が懐電をつけてカシミ沢へ水を取りに降りる。

11月3日 出発(8:45) - 西大谷山(14:50) - プラトー(16:40)

起きてみると雪が散らついている。有難い。行動中は笹の葉についた雪をなめて、水不足を解消する。今日はブッシュもわずかながらうすくなり、起伏のない稜線がプラトーへと続いている。プラトーは広々とした所で、ここに着く頃より本格的な降雪となる。

11月4日 出発(8:00) - 大日稜線(12:25) - 室堂乗越(13:00) - 御前小屋(15:35)

奥大日稜線へ出るまで急登が続く。特に稜線直前はかなりの急傾斜で残置フィックスに頼

ての苦闘である。剣御前の小屋までは最後の急登とあって、各自夏道を必死に頑張る。小屋の裏からはクラストしており、早月隊はすでにテントを設営していた。

11月5日 立山アタック出発(7:00) - 大汝山(8:45) - 帰幕(10:25) - 出発(15:40) - 真砂(17:25) 明神、吉田が本峰アタックに出発するのを見送り、残りは立山アタックに出る。アイゼンでとばすと3時間程であった。剣本峰アタック隊を収容して、膝位まで雪のある剣沢を真砂沢ロッジへと駆け下る。

11月6日 出発(6:30) - 仙人池ヒュッテ(9:25) - 阿曾原(12:30) - 樺平(16:45)

二股から仙人へ上がり、樺平までの水平道を最終の列車に間に合うべく急ぐ。紅葉の美しい水平道であった。(記 岡部)

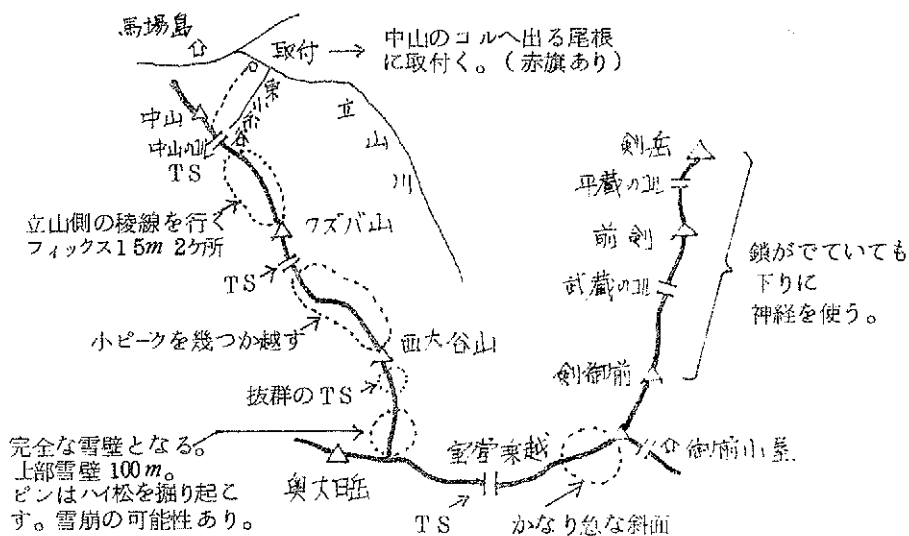


図 48. 奥大日尾根ルート図

小窓尾根偵察

期間 11月1日～11月5日
参加者 後藤(L)、木嶋

11月1日 馬場島 - 1,600m CS(16:30)

11月2日 出発(6:20) - 小窓の頭 - 三ノ窓(16:45)

11月3日 沈殿

11月4日 テンネ中央チムニー、aバンド
bクラックルート（取付き9：00-終了
14：55）

11月5日 出発（8：00）-早月尾根-
馬場島下山（14：55）（記 木嶋）

前穂北尾根偵察

期 間 11月1日～11月5日

参加者 松尾（L）、宮本、山口

11月1日 ○ 上高地出発（10：30）
-徳沢（11：55）-パノラマコース入口
（14：50）-慶応尾根下部CS（16：
00）

観光客でにぎわう上高地を逃げるように徳沢
を目指す。慶応尾根の1つ目のコルを松尾、山
口が偵察した後、パノラマコースをたどって慶
応尾根に出る。これより山口、宮本が空荷で下
って慶応尾根を偵察する。今日はこれで終了と
食事の準備中、バスが故障し使用不能となる。

11月2日 ○ 松尾、松本へ
バス修理（出発 5：20-VII
峰 19：35） 宮本、山口
VII峰へ（6：20-8：05）

松尾はバスを修理すべく松本へ出
発し、山口、宮本はVII峰へテント
を移す。その後、宮本、徳沢へ松尾
を迎えに、山口、慶応のコルで迎え
て、懐電をつけてトボトボとVII峰へ
帰る。

11月3日 ①のち② VII峰出発
（6：30）-VII峰（6：55）
V峰（9：10）-IV峰（10
：10）-前穂高（13：00）
奥穂高（15：50）

連休のせいか北尾根は満員。アイ
ゼンは小気味よく、トレースがつい
ているのでまずまずのペースで進む。
III峰で初めてザイルを使うが、数パ
ーティー入り乱れての登攀である。

吊り尾根をのろのろと奥穂に向かい、人気のな
い奥穂ではブロックにしぼし見とれる。

11月4日 ① 出発（7：10）-天狗の
コル（9：05）-西穂高（11：55）-
西穂山荘（13：50）-新穂への途中のC
S（15：00）

北尾根とは違った意味で緊張させられたのは
西穂の稜線である。奥穂からのやせ尾根には、
ほとほと参ってしまう。本日中にも下山はでき
たのであるが、秋の山を楽しもうということで
水場にテントを設営する。

11月5日 ① 出発（8：50）-新穂下
山（10：25）（記 宮本）

〈偵察報告〉

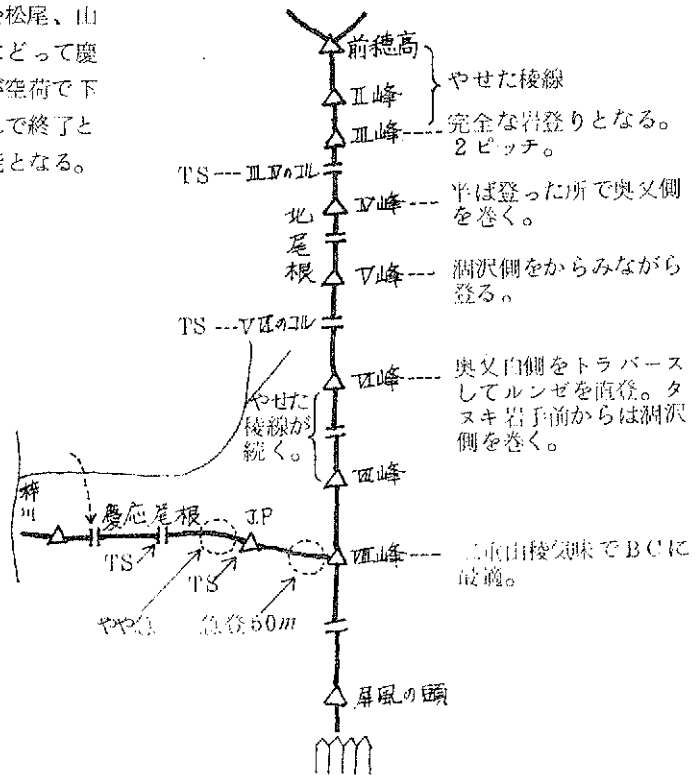


図 49. 前穂北尾根ルート図

御岳アイゼン合宿

期 間 11月22日～11月25日

参加者 松尾(L)、後藤、佐野、木嶋、明神、
住田、山口、宮本、森(良)、吉田、
飯塚、岡部、近藤、重田、細根、西畑、
森(保)、渡辺、石原(OB)、高橋(OB)

- 11月22日 ○ 濁河温泉出発(9:20)
一五ノ池(14:20)ーサイの河原(15:25)
- 11月23日 ◎のち◎ 出発(7:00)
一三ノ池(7:15) 雪訓(9:00～
11:20, 13:20～16:00)
- 11月24日 ◎のち① テント設営訓練の
後雪訓(11:15～13:30, 15:00
～17:00)
OB下山。
- 11月25日 ○ 出発(7:15)ー田ノ
原(10:15)ー八海山荘下山(10:05)
(記 森(保))

比較的雪の少ない御岳であった。宮本、吉田は、アブサラス遠征の訓練を兼ねてOBと共に行動する。現役上級生も23日午後は短い岩稜を登って少し冬の岩登りを経験した。23日の雪訓は午前十分にアイゼン歩行を行なった後御鉢廻り、午後はいまぐさだったのでサイの河原から1年生にルートをかます。24日、玉滝の小屋まで行った後、午後からザイル確保を行なう。最も安定した確保はピッケルにセットしたカラビナを通しての肩がらみか。25日、例により田ノ原より八海山荘まで走って下る。

冬 山 合 宿

白馬岳

期 間 12月26日～1月1日

参加者 上松(L)、中島、木嶋、吉田、岡部、
近藤、重田、西畑、細根、森(保)、渡
辺

- 12月26日 ①
糸魚川駅にスキーを忘れるやら、赤旗を忘れるやら、失敗の多い初日ではあったが、観ノ原バス停よりリフト尻日に林道を進めるだけ進む。
- 12月27日 ①のち◎
成城大小屋まで林道を進み、これより尾根に取付くが、風雪激しくなり、小屋の少し上、樹林帯の中にテントを設営する。尾根に入ってからラッセルは膝位である。
- 12月28日 ○
初めての快晴。朝日に染まる雪山は美しい。上部は風が強いらしく白馬もしきりと雪煙をあげている。出発が遅くなり、トレースは他パーティーにつけてもらったので天狗原まで苦もなく行く。午後は雪訓も兼ねて雪洞を掘ってみた。
- 12月29日 ○ 風強し
白馬アタック(上松、木嶋、吉田、岡部、重田、西畑、森)。出発当時の良かった天気もしだいに悪くなり、乗鞍へ上がると一段と風が強くなる。小蓮華にて吉田、西畑、森が引き返すが他は引き続いて進む。が、重田の顔面に白斑が現われるに及んで、頂上を目前に諦める。乗鞍を天狗原へ越すと虚のように風はおさまる。
- 12月30日 ◎
前夜より全員少々蒸があり動けぬ。この日の夕日に映える後立山は見ものであった。
- 12月31日 ◎のち①
乗鞍アタック(上松、木嶋、細根、西畑、森、渡辺)に出発するがガスの為方向わからず、

20m位進んだ後引き返す。しばらくテントにこもっているうち、ガスが晴れたので再度乗鞍へ向かい、アタック早々、阪大小屋へ駆け下る。

1月1日 ◎

スキー隊、徒歩隊と分かれ、追いつ追われつ親ノ原へ下山する。(記 木嶋)

前穂北尾根

慶応尾根—北尾根—前穂高

期間 12月21日～12月31日

参加者 松尾(L)、佐野、住田、明神、山口、森(良)

12月21日 ①のち◎ 沢渡出発(7:35)→大正池(11:10)→CS(14:05)

昨年に比べ積雪少なく随分アスファルトが見える。釜トンネル内部も路上は凍結せず、むしろ歩き良い。出口もガードレールが見える程度の雪である。木村小屋にて登山届を出す際、北尾根に2パーティーあるのを知る。上高地と明神の中間点にて幕営するが、雪を頂いた巨木が間の中で不気味であった。

12月22日 ◎ 出発(7:25)→徳沢(9:05)→慶応尾根取付き(11:50)→尾根を登った広いCS(12:35)

奥又の谷に入ってから膝までのラッセルとなる。慶応尾根最初のコルより少し登った所を取付点とする。この斜面はかなりの急傾斜で雪も薄く、ワッパをはずさなかった為少々手こずる。尾根を登った所が広がっているのでCSとし、2,150mのコルまで共装をデポする。周囲は全て白い木々で、誰かがホワイト・クリスマスと言ったがまさにそんなCSだった。

12月23日 ◎のち◎ 出発(7:00)→2,150mのコル(8:50)→JP(11:30)

デポ地から佐野、山口はキスリングのまま、他は空荷でラッセルをする。コルからの急登を

終え、平坦な所をトラバース気味に行き木々がまばらになる頃から、ラッセルが最高に達する。2mの新雪に悪戦苦闘する。さらに佐野、山口はⅧ峰まで偵察に行く。

12月24日 ○ 出発(6:50)→Ⅷ峰(9:30)→Ⅴ峰(16:45)→JP(18:45)

佐野、森、山口はⅧ峰までダブル、他はⅤ、Ⅵのコルまでフィックスに行く。12:10のトランシーバー交信で、佐野、山口はさらにⅤ、Ⅵのコルまでデポに行くことにするが、2人が追いついた時、フィックス隊はまだタヌキ岩の所でモタモタしていた。雪洞を掘り数時間待つが、折から吹き出した風の為、寒さこの上ない。Ⅴ峰の頭にデポし、帰路は懐電行動となる。

12月25日 ◎◎ 沈殿

11:45より松尾、明神が昨日のフィックスの補充に出る。

12月26日 ◎◎ JP 出発(10:25)→Ⅴ、Ⅵのコル(12:30)

9:15の気象通報より、Ⅴ、Ⅵのコルまで行けると判断。昨日より全員風邪をひき、佐野、山口はせきが止まらず苦しさこの上もないが、狭いコルに何とか六人天を張る。

12月27日 ◎◎ 出発(7:20)→Ⅴ、Ⅵのコル(12:10)

最初のフィックスは潤沢側のルンゼである。ここを慎重にクライミングダウンし、トラバースの後、5mの岩登りで稜線に出る。タヌキ岩まで下部が岩で、途中からブッシュ混じりの雪壁となる。スリップすれば潤沢までまっさかさま。雪が薄く、岩が混じって緊張の連続だった。この日、ブロックを作らなかった為、潤沢からの風に深夜フレームを折られ、テントが傾く。すごい風の為、ベグを打ち直し、以後4:00までテントを押さえる。

12月28日 ① 出発(10:15)→Ⅴ峰(13:50)→Ⅴ、Ⅵのコル帰幕(17:00)

疲労の為、何となく沈殿の気持ちになっっていたが、久しぶりの好天をのがすわけにはいかず、全員でアタックに出発。Ⅴ峰は岩と雪のミック

ス、Ⅳ峰は下部が岩で中央が緩い雪壁となり、奥又側のトラバースの後、ルンゼ状の雪壁と続く。フィックスに随分手間取り全員がⅣ峰に達した時、アタックは不能と知りⅤⅥの科尔へ引き返す。Ⅳ峰は懸垂、フィックス、懸垂と下る。

12月29日 ◎ アタック(松尾、佐野)
出発(7:00) - I, IIの科尔(10:10)
- 前穂(10:45) - Ⅳ峰(13:10)
- 帰幕(14:40)

松尾、佐野の両名がアタックに出るが、ラジオが不調の為天気図が取れず不安な出発だった。Ⅳ峰までは昨日通っているのでピッチは相当あがる。Ⅲ峰は快適につるべで登り、以後コンテ、スタカットと適宜ザイルを出したが、かなりの時間を食ってしまった。テントではアタック隊帰幕後、即、下山できるよう準備していたが、荒天の兆しが強まり出発を断念する。

12月30日 ⊗ 出発(7:40) - Ⅶ峰(11:00) - 徳沢(14:35)

下からどんどん登ってくる中を窮屈な思いをして下る。行きに比べ下りは何と楽なことか、何か物足らぬ気持ちを残しつつ、あっといふ間に徳沢に着いてしまった。

12月31日 ①時々◎ 出発(8:00) - 沢渡(12:20)
3ピッチで沢渡へ下山する。(記 山口)

春山合宿

剣岳

奥大日尾根～剣岳

期間 3月21日～4月1日

参加者 松尾(L)、佐野、住田、明神、山口、森(良)、飯塚、岡部、近藤、重田、細根、森(保)、渡辺

3月21日 ⊗のち◎のち⊗ 伊折出発(9:00) - 馬場島CS(13:00)

3月月下旬になろうというのに富山での寒さは厳しく伊折では雪が降っていた。馬場島荘で熱いお茶を御馳走になり、ひと息ついてから立山川沿いに少し進みテントを設営する。2年が東小糸谷へ偵察に出るが、雪が再び降り始め、テント内には憂うつな気分が漂う。

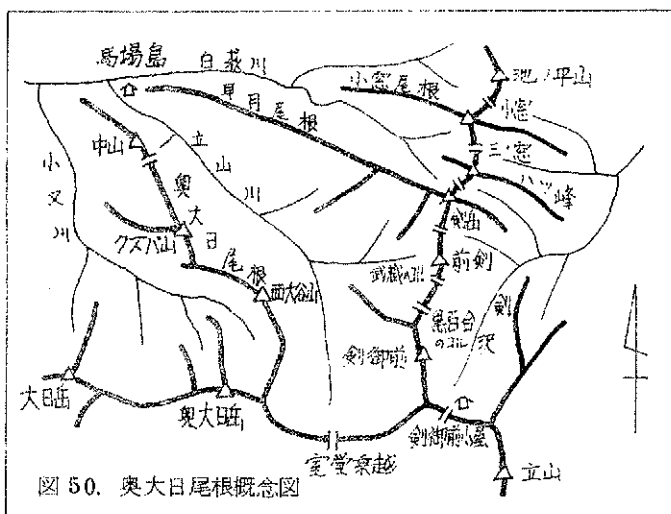


図 50. 奥大日尾根概念図

3月22日 ⊗のち①のち⊗ 出発(6:30) - 東小糸谷取付き(7:10) - 中山の科尔(9:00) - ダブル(9:00～11:30) - 1,625m手前デボ地点(15:20) - 帰幕(中山の科尔)(16:00)

雪の降りしきる中を立山川沿いに東小糸谷取付きまで進み、ここより中山の科尔までダブルをする。雪は膝位までで、人数も多いのでラッセルは楽である。科尔にテント設営後、松尾、住田、明神、山口、森(良)がフィックス工作に、少し遅れて佐野、近藤、岡部、重田、渡辺が1,625mプラト一手前にデボに出発する。傾斜はかなり急で40mのフィックスをする。引き返す頃より雪が降り始め、トレースが消えは

しないかと憂える。

3月23日 ◎のち⊗のち◎ 出発(6:30) - 1,625mプラトー(9:20) - クズバ山を越えたコル(15:20)

昨日のトレースがかすかに残っており、それを確かめるようにして進み、1,625mプラトーに着く。ここから、佐野、飯塚、重田、細根、森(保)がデポ回収に行き、残りは空荷でクズバ山を越えたコルまで先行する。ゴジラにはまると下は一面の笹で、11月の偵察時の苦しみを思い出しつつ、そして立山川に出ている雪庇を避けながら進む。クズバ山は思った程の樹林ではなく、この頃より降り始めた横なぐりの雪に苦労しながら、1,625mのデポを回収する。

3月24日 ①のち⊗ A隊出発(6:30) - 屈曲点(8:00) - 西大谷山手前のコル(11:30) - プラトー(12:40)、B隊出発(6:40) - 屈曲点(8:30) - 西大谷山手前のコル(10:20) - プラトー(14:00)

テントを出ると眼前に剣、大日が見え、気分爽快である。A、B隊に分かれ、1ピッチずつラッセル、ボッカを交互に行なって距離をかせぐ。ラッセルは膝位で、昨日と同様立山川側の雪庇に注意して小ピークを越えていくが、ゴジラによくはまり、ラッセルよりもゴジラから抜け出すのに苦労する。プラトーは予想通りの抜群のサイト地で広々としていて景色はいいし、雪崩の心配もないようである。この日は全員かなり疲労し、テントを張るのにも手間取る。

3月25日 ○ フィックス隊出発(5:50) - 本隊出発(7:00) - フィックス地点にて合流(10:50) - 奥大日稜線(12:40) - 室堂乗越(15:10)

松尾、明神、住田、森(良)のフィックス隊を送り出し、凍りついたテントを撤収してフィックス地点までダブルボッカ。傾斜はそれほどでもないが、下りを考えるとこのばか長い斜面は恐いだろうなと感ずる。20mと10m程のフィックスを越え、ヒョコッと稜線に顔を出した時には感無量。尙、このフィックス、ハイ松を掘り越すのに時間を食われたとのこと。室

堂乗越への最初の下りでクラストしている所が現われワッパでやばい思いをするが、これよりトレースが現われ難く乗越へ着く。

3月26日 ◎ 出発(6:40) - 剣御前小屋(10:00)

風強く完全装備で出発する。別山乗越への斜面は適度にクラストしていてアイゼンのきしむ音も心地良い。しかし上部ともなるとさすがに筋肉がつりそうになる。御前小屋付近は風の通り道で、その強風にあおられてかツァッケが立たない位ガチガチに凍っている。少し気を緩めれば吹き飛ばされそうである。小屋の裏手に回ってみるがテントは張れそうもないので、小屋の中に張らさせてもらう。山小屋の何と有難いことか、外の悪天を想像だにさせない。

3月27日 ◎

外は相変わらずの強風、沈殿とする。

3月28日 ① 前剣アタック出発(6:30) - 武蔵のコル(8:00) - 前剣(10:20) - 御前小屋(13:30)

虚のように風もおさまり絶好のアタック日和となる。雲海を見降ろしながら剣御前を過ぎ、黒百合のコルに着く。これより東大谷側を避け剣沢側を巻いて行くが、時々望む東大谷は岩にエビのシッポが張り付き見るからに険悪である。前剣への登り下部は予想に反しツボ足になっているが、上部15m位はアイゼンも効かないガチガチの水である。前剣登頂早々に下るが、ツボ足といってもやはり武蔵のコルまでザイル4ピッチフィックスする。もしここが完全にクラストしていたら1年は登頂できたかどうか。とにかく快適なアタックであった。

3月29日 ◎ 本峰アタック出発(5:00) - 前剣(7:10) - 本峰(8:30) - 御前小屋(13:00)

天気凶から午後より天気は崩れると予想されるので、早目に剣本峰アタックに出る。メンバーは佐野、住田、明神、森(良)、山口の5名。前剣、平蔵のコルと越え、カニの横バイは少し横へ行き過ぎたのでルンゼを1Pフィックスして登ったが恐い思いをする。本峰登頂後早々に下るが、カニの横バイの下から、佐野、森(良)

は南壁 A4 を懸垂下降し、住田、明神、山口は、ハシゴ側に懸垂下降する。黒百合の科尔から強風となり、やっとの思いで小屋に帰る。ザイル操作に時間がかかり、もう少し練習を十分やっていたらもっと早く到着できたと思う。とにかく外はすごい風で、出発を早くしたのが効を奏したと思われる。

3月30日 ⊗ 沈殿

3月31日 ①のち② 出発(6:30) - 室堂乗越(7:10) - プラト(12:15) - 屈曲点手前の科尔(14:15)

小屋を出る時強かった風が室堂乗越へ近づくにつれ虚のように弱くなってくる。この頃よりガスり始め、奥大日下り口の赤旗を見つけた時にはほっとするが、登りにしたフィックス通過はスベリ台の様になっていて恐い思いをする。西大谷山へと向かうが、雪もかなり解けていて、

来た時に比べ楽である。また木々も多くなった気がして別のルートをとっている感じがする。

4月1日 ②のち① 出発(6:20) - クズバ山(8:00) - 中山の科尔(11:10) - 馬場島(12:20)

春らしい感じのする朝である。遙か後方に見える剣を振り返ると何か不思議な感じがする。中山の科尔まで来ると馬場島はもうすぐで、最後川に落ちないように気をつけて、橋にたどりつく。ポカポカしていて、川のせせらぎが聞え、春の陽がまぶしい位である。ワカンをはずす皆の顔も笑っている。馬場島でテントを設営するつもりであったが、時刻は早いので反省会をした後、伊折へ向かう。実に満足のいく、そして未知への挑戦欲をかき立ててくれる奥大日尾根であった。

(記 近藤)

1976年度（昭和51年度）活動記録

'76年度 現 役 部 員

C . L	佐 野 威和雄	理 物	4 (4)
	松 尾 敬 志	齒	4 (4)
S . L	明 神 知	基 制	3 (3)
	木 嶋 良 雄	工 治	3 (3)
	住 田 宏 己	基 情	3 (3)
	宮 本 敬 正	工 治	3 (3)
	森 良 平	基 化	3 (3)
装 備	山 口 誠 吾	人	3 (3)
	吉 田 真 三	医	4 (3)
会 計	岡 部 祐 二	工 治	2 (2)
	近 藤 富 夫	工 酵	3 (2)
	重 田 邦 男	工 応化	2 (2)
	西 畑 一 哉	法	2 (2)
	森 保 知	工 建	2 (2)
	渡 辺 治 郎	法	2 (2)
	岡 部 友三朗	工 船	1 (1)
	金 谷 明	工 土	1 (1)
	広 田 雄 彦	経	1 (1)

5 月 山 行

新人歓迎白馬山行

期 間 4月29日～5月4日

参加者 森(良) L、渡辺、西畑、細根、新家
岡部(友)、金谷、広田

4月29日 白馬大池駅(8:30)ーリフト
ト終点(10:35)ー天狗原(14:50)
バス、ストの為タクシーで親ノ原へ。リフト
を乗り継ぎ、いざ出発。途中、新人の広田が少
々バテる。ゆっくりと天狗原へ。

4月30日 雪訓(6:00～8:30)乗
鞍東斜面にて雪上訓練を行なう。吹雪で視界も
悪い為、早々に切りあげ、以後停滞とする。

5月1日 雪訓

天気悪く停滞とする。午後より天気が少し回
復したところで、新人は雪訓、森(良)と細根
が白馬大池まで偵察に行く。昨日、今日と停滞
の為、欲求不満はつのるばかりである。

5月2日 白馬アタック(全員)出発(5:
15)ー小蓮華(8:30)ー三国境手前よ
り引き返す(9:40)ー帰幕(13:40)

風は強いが天気はもつとの判断からアタック
決行。小蓮華を過ぎて、三国境少し手前で、新
人の岡部の体調悪くなり引き返す。稜線上の風
はかなりきつく、新人にとってはきついアタッ
クであったと思う。

5月3日 沈殿

新人の金谷が昨夜より熱を出し、渡辺が連れ
て降ろすことにする。10:00頃、恩地先生
がテントに來られ、しばし雑談する。

5月4日 天狗原出発(6:15)ー榎ノ木
寮(6:45)ー親ノ原下山(8:50)

渡辺、新家はスキーで、他は歩いて下る。榎
ノ木寮にて恩地先生を待ち、共に下山する。

(記 西畑)

白馬スキーツアー

親ノ原ー白馬岳ー白馬大池ー蓮華温泉

期 間 4月29日～5月3日

参加者 明神(L)、近藤、岡部(祐)、
森(保)

4月29日 ㊦ 東急山荘(9:30)ー
成城大小屋(12:30)ー乗鞍(14:
35)ー白馬大池(15:10)

榎ノ森からスキーをつけたが、重い荷物の為
意のままに進めず、林道途中でスキーをはずし、
かついで行く。トレースはしっかりしているの
で速いペースで大池に着く。

4月30日 ㊦ 停滞

一度は出発したものの、小蓮華の登り途中で
風と雨の為引き返す。異常な雨水がテント内に
たまるので、ツェルトをフライがわりに張った
ところ、非常に効果があった。

5月1日 ㊦ 出発(6:50)ー三国境
手前(9:00)

稜線に出ると強烈な風雨に見舞われる。おま
けに小蓮華付近ではすごい雷でとても生きた心
地はしない。三国境手前でツェルトを被って待
機するが、ますます荒模様となってくるのでテ
ントを設営する。雪倉避難小屋までと思うも突
風が吹き荒れとても無理である。

5月2日 ㊦ 白馬アタック出発(5:
55)ー白馬山頂(6:45)ー帰幕(7:
30)ー撤収・出発(9:00)ー白馬大池
(11:10)ー蓮華温泉(16:40)

計画通り白馬北方稜線へ進むか、或いは蓮華
温泉へ下るか考えるが、予備日考えると白馬
アタックして蓮華温泉へ下ることにする。久し
ぶりの快晴に白馬山頂の眺望を満喫する。小蓮
華より蓮華温泉までスキーをつけるが、ビンデ
ィングの調子が悪く時間のロスは甚だしい。シ
ェプールがついていたから良かったが、ガスれ
ば迷う所であろう。

5月3日 ㊦ 出発(6:50)ー蓮華温
泉口(8:25)ー平岩(14:40)

シェプールのつけられたコースを転倒しながら、雪が消えるまでスキーで下る。今山行は天気が悪く散々であった。予備3日のうち2日を白馬大池で食われてしまったので、北方稜線を締めたのは賢明であったと思うが、蓮華温泉へのルートは全く考えていなかったのも、計画段階においてもっと慎重を期すべきだったと思う。

(記 岡部)

前穂高

期 間 5月1日～5月4日

参加者 松尾(L)、山口、重田

5月1日 ●のち◎ 岳沢CS(18:20)

大雨の為、上高地方面は通行止めとなり入山日より意気消沈する。夕刻上高地に着き岳沢のガレ場に設営する。

5月2日 ①時々◎ 出発(7:25)ー奥明神の科尔(14:25)ー前穂高(16:10)

重太郎新道を行こうとするが取付きが分からず、奥明神沢の1つ北の沢を詰める。が、落石激しく引き返して奥明神沢を詰める。稜線には雪がなく前穂まで夏道をたどる。前穂では雪洞が掘れる位の積雪である。

5月3日 ●

天気悪く、右岩稜は諦めたので松尾は先に下山する。山口、重田は滝谷パーティーを待つ。

5月4日 ●キ 前穂出発(7:25)ー奥明神沢の科尔(8:10)ー上高地(10:20)

明日になっても天気回復の見込みはないので、明神主後は諦めて奥明神沢を下る。中頃より一気に括沢ヒュッチまでシリセードで下る。悪天の為、今山行は前穂アタックと滝谷パーティーのサポートのみに終わってしまった。

(記 重田)

滝谷

滝谷出合ーB沢ー前穂高ー岳沢

期 間 4月29日～5月3日

参加者 佐野(L)、住田

4月29日 ●のち◎ 新穂高(9:55)ー白出沢出合(11:50)ー滝谷出合(13:20)

途中暗れ間も見えたが、それもつかの間、ガスにけむる滝谷が我々を迎えてくれた。雪は例年より少ないとのことで白出沢辺りからやっと雪道となる。谷はデブリがすごく雪崩の心配はもうほとんどない。小屋は3番乗りで快適に過ごす。

4月30日 ● 沈殿

5月1日 ●のち◎ 沈殿

昼前より雨もあがったので、雄滝を偵察する。

5月2日 ○のち① 出発(4:30)ー雄滝(5:20)ーナメ滝(5:50)ー合流点(8:20)ー北穂(12:40)ー滝沢岳(17:00)ー白出の科尔(17:20)

雄滝は順調にザイルで越し、ナメ滝で5Pザイルを出し、少々苦勞する所もあったが難無く通過し合流点へ向かう。ここで遺体を発見。出合の小屋まで降ろすべく他のパーティーと収容準備中に、今1人、C沢を滑落してくる。我々は以上の事を北穂小屋に伝えるべく伝令としてB沢を登ることにし、IV尾根登攀は諦める。IV尾根下部は雪が無く、上から見る限りではコンテに残っているようだ。小屋に伝言を伝えた後、白出の科尔まで慎重に行くが、精神的、肉体的疲労が激しく時間はかなりかかってしまう。

5月3日 ●のち◎ 出発(8:00)ー奥穂高(8:45)ー前穂高(10:40)

今日は前穂まで。吊り尾根で1ヶ所道を間違えた外は順調に前穂まで歩く。奥穂から最低科尔までコンテで行くが、トラバース道が多く、かえって危険性大であった。前穂頂上で山口らと合流して空腹を満たす。

5月4日 ●キ

前穂パーティーと行動を共に下山する。

(記 佐野)

夏山定着合宿

剣岳 BC 二股～真砂

期 間 7月22日～8月4日

参加者 佐野(L)、松尾、住田、明神、山口
森(良)、岡部(祐)、重田、森(保)
渡辺、西畑、新家、岡部(友)
金谷、広田
(概念図はP14 図1を参照)

〈行動概要〉

- 7月22日 ① 黒四ダム出発(9:25)
)-内蔵助谷出合(11:20)-内蔵助平
(16:00)
- 7月23日 ① 先発隊(松尾、森(良))出
発(5:40)-ハシゴ谷(7:45)-二
股(10:45)-小窓(13:35)-二
股(14:30)-合流(16:30)
本隊 出発(6:30)-ハシゴ谷(10:
50)-剣沢(13:35)-二股(16:
40)
- 7月24日 ① 雪訓出発(6:45)-
帰幕(17:30)三ノ窓～小窓
- 7月25日 〇
- ・ジャングルムCクラック(明神、森(保))
 - ・チンネ左稜線(住田、岡部(祐))
 - ・チンネ北条・新村 gチムニーcdクラック
(山口、西畑、渡辺)
 - ・ジャングルムAチムニー(佐野、広田)
 - ・剣尾根R3～上半(松尾、重田、岡部(友)、
金谷)
- 7月26日 ①
- ・チンネ北条・新村 gチムニーcdクラック
(明神、岡部(祐))
 - ・ジャングルム3本クラック(住田、西畑)
 - ・チンネ左稜線(佐野、渡辺)
 - ・チンネ左下カンテ～左方カンテ(松尾、山口)

・東大谷ビバーク(森(良)、森(保)、重田
新家)

7月27日 ● 沈殿

7月28日 ①

東大谷ビバーク隊救援

7月29日 ①

・小窓王南壁ダイレクト(山口、住田)

・ハツ峰Ⅳ峰Cフェイス(佐野、岡部(祐)、
広田)

・ハツ峰Ⅳ峰Dフェイス富大(明神、渡辺)

・本峰南壁A₂(松尾、金谷)

・チンネ左稜線(森(良)、西畑)

7月30日 ①

真砂へBC移動

・剣尾根ビバーク(松尾、森(良))

・黒部下の廊下ビバーク(住田、西畑、広田)

7月31日 ①

・チンネ左稜線(山口、新家)

・チンネ左下カンテ～左方カンテ(明神、重田)

・チンネ北条・新村 gチムニーcdクラック
(佐野、森(保))

8月1日 ①

・ハツ峰Ⅳ峰Dフェイス富大(森(良)、
森(保)、新家)

・ハツ峰下半遠足(松尾、岡部(友))

・剣尾根ビバーク(住田、明神)

・北方稜線ビバーク(山口、渡辺、岡部(祐)
金谷)

8月2日 ①

半日停滞、午後より雪訓

8月3日 ●

・源治郎尾根(山口、森(保)、西畑、
岡部(友))

・ハツ峰上半(森(良)、重田、金谷、新家)

・マイナーピーク(明神、岡部(祐))

8月4日 ① 出発(7:15)-内蔵助
平(10:50)-黒部ダム下山(14:
20)

〈登攀及び遠足の記録〉

ジャングルムCクラック

7月25日 ○

参加者 明神、森(保)

タイム 二股BC出発(6:10)―取付き(9:10)―P₂の頭(11:00)―BC着(14:50)

二股より三ノ窓雪溪を2ピッチで登る。登攀前のこのアルバイトは少々きつい。ジャングルムは隣にチンネを控えているせい取付いている人も少なく、本場が初めての者には手頃な岩場であろう。1段、バンドを上がってトラバースしCクラックに取付く。

1P目 右上する凹角に沿ってもよいし、右へ出てリップ通しに登ってもよい。スタンス、ホールド豊富なので快適な登攀が味わえる。最後のハング気味の所を強引に腕力で越すと広いテラスに出た。

2P目 ルンゼ状のガレをコンテでP₁とP₂のギャップまで登る。落石が甚だしい。

3P目 右手の階段状フェース(下部)に取付きP₂を目指す。ホールドは大きいが浮石が極めて多い。

4P目 右のリッジ通しに登って行く。上部は右手がすっぱり切れていて高度感がある。1ヶ所ハング気味の所に出るが強引にいくと傾斜はぐっとおちてリッジ通しにP₂の頭へ出る。ここで終了。

P₂の頭からチンネが良く観察できる。さすがにチンネは大きい。下降はチンネへ向かう踏み跡をたどるが、途中から二分しており、チンネとジャングルム間の雪溪を三ノ沢側へ下降することにする。しかし思いのほか急でザイルを出す。正しいルートは池ノ谷ガリー側へとるようだ。(記 森(保))

ジャングルム3本クラック

7月26日 ○

参加者 住田、西畑

タイム 二股BC出発(6:10)―取付き(9:00)―P₂の頭(12:00)―BC(14:00)

1P目 3本クラックの1番左のクラックに登るが、身体がクラックの中に半身しか入らず、傾斜もきついのでかなり苦しい。

2P目 P₁へのルートを捜すが見つからず、リッジ通しにハーケンが打ってあるがどう見ても人工のルート。正面にルートを求め10m直上するがゆき詰まり、P₁登頂を諦めP₁とP₂のコルに出る。

3P目 順番待ちの後取付くが、浮き石の多い所であり良い気はしない。

4P目 P₂の右のリッジ通しに行く。高度感はあるが浮石多い。40m一杯でP₂の頭に出、登攀終了。三ノ窓へ下る。(記 西畑)

チンネ日嶺g・c・d

7月31日 ①

参加者 佐野、森(保)

タイム 真砂BC出発(5:25)―取付き(10:00)―チンネの頭(13:45)―BC(16:30)

真砂より長次郎を詰め、チンネを廻り込んで取付く。三ノ窓雪溪を詰めるのも、このルートをとるのも大して変わらないであろう。日嶺ルートには既に先行パーティーがあり、落石激しい中、1時間近くも時間待ちをする。中央ルート、日嶺ルートに登攀している際には甚だしい落石を覚悟せねばならない。

1P目 一見易しそうなクラックが右上している。ぐいぐい行っていると中間部のリップで少々手間取る。りっぱなテラスでビレー。

2P目 凹角からリップに出て快適な登攀を味わう。それでもリップへ出る所が少々いやらしい。

3P目 このルートの核心部。ハーケン連打のかぶり切手のフェースを吊り上げてもらって強引に腕力で攀じる。このかぶり気味を抜けるとクラック状凹角があり、ここもいやな思いをする。行き詰まった所で右へ抜け、直登すると中央バンドである。ここで下ノ廊下隊とトランシーバ

一交信。今、眼の前に広がっている仙人にいるとのこと。

4 P目 gチムニー取付きまでコンテで行く。gチムニーも思いのほか簡単に行くがチムニーが終わってcクラックに移る所が少々いやらしい。5 P目 cクラックは浮石も少なく、ホールドも多いので快適に登攀する。行き詰まると左ヘトラバースしてdクラックへ。この辺どこでも登れそうで正確なルートは判明しない。岩も大まかになってチムニーの頭に出て終了。いつものことながら、初めてのピークに立っても感激しない。単純に喜ぶということを忘れてしまったのか。下降は池ノ谷ガリーへの踏み跡をたどり、長次郎谷をグリセードとばす。

(記 森(保))

小窓王南壁ダイレクトルート

7月29日 ①

参加者 住田、山口

タイム 取付き(9:00)ー終了(12:45)

取付きはダイレクトルートより右の新しいハーケンのルートに登る。1 P目の人工は、初めリッジ通し、後はチムニー状のガリーを乗越す。上部はガラガラで浮石に乗ってのジッヘル。ハーケンは非常に不安定。2 P目はコンテ。3 P目は中央バンドを凹角でコンテでトラバースする。4 P目、ハーケン連打のルート。ハーケンは他のピッチと比べると効いている方で、三角ハンク下に大きなテラスがありボルトが打っている。5 P目、ハーケンは割とましであるが、1本だけぐらぐらの曲がっているハーケンにアブミをかけねばならない。その回りはもろい岩で何本打っても同じだろう。3 mのアブミトラバースはA₃で腕力、脚力ともバテ気味。後3 m程人工で直上すると岩のしっかりしたフェイスに出る。フェイスのフリーは快適である。降り道は頂上のリッジを三ノ窓側へたどればすぐ道に出る。

(記 住田)

マイナー・ピーク

8月3日 ●のち◎

参加者 明神、岡部(祐)

タイム 真砂BC出発(5:35)ーマイナーピーク(8:00)ーBC(10:05)

二ノ沢を詰める。途中で10 m程の滝があり右岸を巻く。さらに踏み跡らしきものを左へ左へと行くうちにブッシュこぎとなる。小雨が降っているのも2人ともびしょ濡れになる。やがて尾根に出てのブッシュこぎとなるが、二ノ沢へ入った方が良いとの判断から右ヘトラバースし二ノ沢に入る。この辺りの二ノ沢は石がゴロゴロしている。なお進むと三角形の岩峰が見えてくる。これがマイナーピーク。下降は二ノ沢を4回のアブザイレンで下る。折りから増水した滝の水を全身に浴びてしまった。

(記 岡部(祐))

源治郎尾根

8月3日 ◎のち◎

参加者 山口、森(保)、西畑、岡部(友)

タイム 真砂BC出発(5:40)ーI峰(9:30)ー剣本峰(10:55)ーBC(12:45)

過去幾度か失敗してきた源治郎尾根だけに、我々の手でと、雨のそぼ降る中真砂を後にする。見ると剣沢より源治郎尾根末端へ入る雪溪が目についたのでこれをたどるが、このルンゼは下部に小さな滝をかけていて、上部はいかにもいやらしいので、ルンゼ左手のブッシュの尾根に取付く。踏み跡がかすかについてはいるが途中右へ寄り過ぎて前述のルンゼ上部の草付きに出る。このルンゼ右手には垂壁が切れ立っている。ルートを尾根上に修正し、忠実にハイ松のブッシュをこいでいくとI峰に出る。左手、ガスの中に落ちている壁がI峰平蔵谷側フェースか。無気味である。これより踏み跡明瞭となり、ブッシュこぎもなくなるが、簡単な岩混じりとなってくる。そしてII峰。この下降は大きな鉄のピンを支点に懸垂20 m、ハーケンピンにて20

mでコルへ降りる。40mザイル2本あれば1Pで降りられるであろう。このコルより長次郎谷へ雪溪通しに下ること可能。ここからルートはガレ場の剣本峰への登りとなる。ガスで何も見えない中、忠実に稜をたどると1時間ほどで頂上へと出た。我がクラブにとって初トレースか、などとうそぶく。(記 岡部(友)、森(保))

剣尾根ビバーク

8月1日 ①

参加者 明神、住田

タイム 二股BC出発(5:25)ーR10
取付き(8:50)ーコルC(11:00)
ードーム(10:05)

池ノ谷左俣を下りR10に取付く。R10は少し右側一枚岩のあたりを登れば落石も少ない。稜線はハイマツと岩のミックスである。P₃の登りはピンがあり30m。これより猛烈なハイ松のブッシュをこぎピークに出る。この頃よりガスり始め、風も強くなる。ドーム取付きで時間待ちした後、ドーム基部の人工をフリーで越す。門のV級ピッチは明神2~3m登り2つ目のピンを頼りに思い切って伸び上がるがホールド、ピンないので断念。続いて住田がクラック沿いに行くが力尽きて断念。結局これを諦め右ルートへトラバース。1ヶ所アプミを使用してドーム頂上に着く。少し傾斜のある草付きであるがここをBSとする。

8月2日 ② 出発 出発(5:00)

ー三ノ窓(7:00)ー真砂BC(8:50)

ドームを降りてR2を越した所にピンが出てくるが、岩が濡れて滑るのでR2より降りる。コルBより2回のアプザイルンの後、雪溪に降り立つ。さらにこの雪溪を50m下れば左俣で、これを詰めて三ノ窓に至る。(記 明神)

東大谷ビバーク

7月26日 ①のち②

参加者 森(良)L、重田、森(保)、
新家

タイム 二股BC出発(6:15)ー黒
百合のコル(10:45)ー中俣出合(16:
05)ー中ノ右俣出合付近BS(17:00)

黒百合のコルへは途中立入禁止区域があるので直線的には行けず大きく稜線をまわる。黒百合のコルから右俣へ入るが、右俣は30m程の滝を2回懸垂下降したのを始め、小滝でしばしばザイルを出す。剣岳は岩くずの集まりではないかと思うほど東大谷はボロボロの谷である。右俣上部は雪溪が落ちており、中俣出合に近づく頃から雪溪上を歩き始めるが、不安定な感じで落ち着かない。東大谷への岩場のアプローチとしては無理な様である。

7月27日 ③のち④ 出発(6:50)

ー左俣出合(7:10)ー立山川出合(8:
55)ー馬場島(14:05)ー早月避難小
屋(18:50)

昨日夕刻以来雨で、一晩中土砂崩れの音が絶えなかった。雨は止まないの中で中尾根登攀は諦めて馬場島へ下り早月を登ることにする。左俣出合から再び雪溪の状態悪く、左岸をトラバースして立山川出合に至る。これより地図の夏道を行くが崩壊が激しく、時々見失ってはへつり、徒渉を行なう。立山川がこんなにも厳しいとは予想などしなかった。北電ゲートから自動車道を馬場島まで進み早月尾根を登る。松尾平から森(保)がトランシーバー交信の為に先発し、避難小屋上部で交信するが応答なし。BCではさぞかし心配しているものと思われる。この日は避難小屋にてビバークするが食料不足で非常バックをあげる。

7月28日 ⑤のち① 出発(5:50)

ー剣本峰(10:20)ー帰幕(13:00)

皆心配しているだろうと早月尾根を急ぐ。2,800m付近で交信可能。無事を知らせ、佐野、住田の捜索隊が剣本峰にいる事を確認する。本峰で捜索隊と合流し無事帰幕する。

(記 新家)

夏 山 縦 走

後立山縦走

白馬岳—五竜岳—鹿島槍—針ノ木岳—烏帽子
岳—三俣蓮華岳—槍ヶ岳

期 間 8月6日～8月16日

参加者 明神(L)、森(保)、金谷

8月6日 ●◎ 猿倉出発(6:40)—
頂上村営小屋(11:45)

雨上がりの後の大雪溪を詰める。一般の登山客が多いが、山岳部らしく気取って登る。それにしてもガスの登高は何とも耐えられないものである。

8月7日 ●のち◎ 沈殿

テントは持ってきたもののポールを忘れる。木切れのポールでは、この強風下心細い限りであった。

8月8日 ① 出発(6:25)—不帰最低鞍部(9:50)—唐松岳(12:20)—
五竜山荘(14:50)

白馬山頂で日の出をカメラにおさめてから出発する。久しぶりの快晴に五竜手前で干上がってしまう。水を求めて明神が雪溪を下るが、パトロールの人に見つかり注意される。唐松で手に入れた樺切れ2本、ポール替りとして新穂まで持って降りることになる。

8月9日 ●のち◎ 沈殿

風雨激しく沈殿とする。おかげで貴重な水を手にした。

8月10日 ◎のち●のち◎ 出発(6:25)—
切戸小屋(11:10)—布引岳(13:50)—
冷池(14:30)

五竜、鹿島槍とメインを越えるが、ガスでさっぱり。おまけに切戸ではどしゃ降りの雨となる。冷池周辺にも水はなく、雨水を使用する。

8月11日 ◎のち① 出発(5:30)—
岩小屋沢岳(8:55)—赤沢岳(11:00)—
針ノ木小屋(14:15)

楽しい稜線慢歩を続ける。実に岩小屋沢岳からスバリ岳にかけては楽しい所である。これぞ縦走の醍醐味か。針ノ木での水場は小屋の人に教えられ針ノ木雪溪の方へ300m程下った所の湧き水を利用する。

8月12日 ◎のち① 出発(5:15)—
北葛岳(8:00)—不動岳(14:00)—
南沢岳(15:30)—烏帽子手前CS(16:00)

金谷の靴ずれひどく、以後、地下足袋とする。何とも用意のいい奴だ。不動岳周辺の道はひどくて、例のポールがブッシュにひっかかり南沢岳で完全にバテる。水はミジッコの泳ぐ池の水を使用。

8月13日 ◎のち● 出発(5:30)—
野口五郎岳(9:05)—岩苔乗越(11:45)—
三俣山荘(13:10)

再び天気が崩れ始める。野口五郎からガスり始め、風も強くなって遅々として進まない。

8月14日 ●ッ 出発(5:50)—
双六小屋(7:30)

雨の中、槍へ向かうが、縦沢岳の登りで風一段と激しくなり、突風姿勢をとっても吹き飛ばされそうである。西鎌のやせ尾根を恐れ、双六にテントを設営する。

8月15日 ●のち◎ 沈殿

依然として風雨衰えず出発を見合わせず。数張のテントが強風でつぶれている。

8月16日 ◎のち● 出発(5:40)—
千丈乗越(8:00)—槍ヶ岳山荘(8:45)—
槍平(11:20)—新穂下山(13:40)

ガスった西鎌を槍へ向かう。肩へ着く頃、再び雨が降り出し小屋で天気図をとってみる。天気図から判断し予備も含めて4日では西穂を越えられそうもないので、うしろ髪を引かれる思いで槍平へと下る。

山を広く歩き廻ってみたいという気持ちから、

この計画は生まれたものだが、毎日、毎日、雨の中を歩き廻ろうとは思ひもしなかった。おかげで水には不自由しなかったものの、何とも泥水臭い山行であった。しかしかえってその方が良かったかも知れない。白馬から五竜へ向かう時には晴れであったが、道行く登山者たるや行列をなし、時間待ちをする始末であった。登山の大衆化が進んだことは、こういう国境稜線にまで来る家族連れを目の当りにすると明瞭である。この傾向は良いと思うが、道から少しはずれるとすぐパトロール員に注意されたり、また山小屋の応対等を考えると、我々の様な登山者は主種から締め出される傾向にあるのを痛切に感じた。景色こそ楽しめなかったが、10日間、雨の中を過ごしたのは貴重な体験であったと思う。
(記 森(保))

南アルプス縦走

戸台—甲斐駒ヶ岳—北沢峠—仙丈岳—北岳—
間ノ岳—塩見岳—赤石岳—聖岳—茶臼岳

期 間 8月6日～8月16日

参加者 住田

8月6日 ◎ 戸台(8:00)—角兵衛
岩小屋(11:40)—大岩下岩小屋(15:
:00)

8月7日 ◎のち◎のち① 出発(13:
05)—第一高点とのコル(16:00)

8月8日 ① 起床(3:30)—第二高
点(9:40)—三ツ頭(12:10)—六
合石室(13:00)

8月9日 ◎のち◎ 出発(7:25)—
甲斐駒山頂(9:00)—双児岳(10:40)
)—ヤブ沢小屋(16:00)

8月10日 ◎ 出発(10:55)—仙
丈岳下りCS(14:15)

8月11日 ◎ 出発(5:20)—両俣
(10:15)—中白出沢の頭(14:20)
)—北岳山頂(16:00)

8月12日 ① 出発(5:25)—間ノ

岳(9:25)—雪投沢源頭(15:10)
8月13日 ◎のち◎ 出発(5:00)
)—烏帽子岳(10:10)—荒川小屋(16:
:45)

8月14日 ◎ 出発(4:40)—赤石
岳(6:45)—大沢岳(10:40)—聖
岳(16:30)—CS(15:15)

8月15日 ◎ 出発(6:35)—茶臼
岳(9:55)—光小屋(14:30)

8月16日 ◎のち① 出発(4:50)
)—易老岳(6:15)—本谷バス停(13:
00)

計画段階では他に新人2名を加えて計3名で
行く予定だったが、2人とも定着合宿で足に故
障をきたし参加できなくなった。図らずも単独
行ということになったが、南アの単独縦走は去
年の夏からの懸案だったし、少人数で縦走をす
るのを割と好む方なので、彼らには悪いが儲け
もんという感じがしないでもなかった。もちろ
ん、彼らとパーティーを組んで行けない為に奪
われる楽しみも多くあるのだが、そのことは置
いておくとして、山口が「単独で南に行くのも
ええで。」と、出発前に言ってくれたように、
独りという登山を好む連中は多いはずだと思う。
(記 住田)

秋山個人山行

穂高池巡り山行

期 間 10月11日～10月16日

参加者 重田(L)、岡部(友)、広田

10月11日 ① 上高地出発(8:00)
)—明神池(8:45)—新村橋(9:45)
)—奥又白池(14:30)

10月12日 ① 出発(7:20)一慶
応尾根コル(10:00)一北尾根最低コル
(11:20)一瀬沢(12:40)

10月13日 出発(6:20)一横尾本谷
瀬沢出合(7:13)一横尾本谷右俣出合(7:55)一天狗のコル(11:30)一中岳手前凹地CS(14:00)

10月14日 ㊟一時㊞ 沈殿

10月15日 ㊟のち㊞ 出発(11:00)一中岳(11:45)一大喰岳(12:55)一槍ヶ岳山荘(13:35)一千丈乗越(15:10)一双六池(18:10)

10月16日 ① 出発(6:15)一大ノマ乗越(7:30)一ワサビ平(9:40)一新穂(10:30) (記 広田)

「山溪」で「穂高・紅葉の池巡り」という記事を読んだことがある。その記事にひかれて紅葉の穂高連峰を訪れることにあいなった。

メンバーは2年1人に、1年2人。パーティーの技量に合わせて危険な所は外し、穂高の稜線へは登らず山頂をトラバースした。すなわち、奥又白の池から瀬沢の池へと廻り、横尾本谷右俣を登り、天狗の池を経て槍、双六池、鏡池と巡るコースである。十月の穂高連峰は夏の賑わい、冬の厳しさと異なった別な面白さがあった。岩の殿堂穂高のひっそりと静まった池を巡るのもまたいいものである。(記 重田)

北岳バットレス

期間 10月15日～10月19日

参加者 山口(L)、岡部(祐)、渡辺

10月15日 ① 夜叉神峠出発(11:20)一広河原(14:00)一大樽沢二俣(17:15)

10月16日 ㊟のち㊞ バットレス沢偵察(6:55～10:20)

10月17日 ① IV尾根登攀(取付き9:40～終了16:00)

10月18日 ㊞ 沈殿

10月19日 ㊞ 出発(13:15)一広河原下山(14:15) (記 渡辺)

夜叉神峠から歩き始めるが途中、トラックに捨ててもらい助かる。16日はバットレス沢を偵察するのに散々歩き回る。8:30頃より小雨が降り始め、岩壁上部一面雪化粧をする。翌17日、IV尾根に取付く。昨日の雪で北側にはかなりの雪が残っておりやばい思いをしながら攀じる。八本歯のコル辺りから懐電行動となる。翌日からは天気が崩れ、一本しか登れなかった。残念ではあったが、雪のついた岩登りができたのは良い経験であった。

槍ヶ岳

期間 10月15日～10月17日

参加者 近藤(L)、金谷

10月15日 ㊟のち㊞ 七倉着(7:50)一ニゴリ(9:50)一湯沢(12:20)一千天出合(15:00)

10月16日 ㊞たり㊞ 起床(4:00)一千丈沢乗越(12:10)一槍ノ肩(13:30)一緩生CS(15:20)

10月17日 ㊞ 出発(6:10)一横尾(8:55)一笹沢(9:50)一上高地(11:40) (記 金谷)

湯温泉から東沢迄高瀬川を眺めながらのんびり行けると思っていたが、ダンプがひっきりなしに通り期待はずれ。千天出合から吊り橋を渡って千丈沢へと向かう。ほぼ川沿いに進むが途中北鎌へ向かう踏み跡がよくできていて、天狗沢へ迷い込んでしまったが、千丈沢は川沿いに結めるのが良いようである。千丈乗越へは雪渓とガレの何とも登りにくい所であるが北鎌の黒い岩壁が魅力的であった。槍からは槍沢を下ったが、高瀬川の紅葉の方がきれいだとつくづく思った。(記 近藤)

11月偵察山行

剣岳北方稜線偵察

期間 11月1日～11月6日

参加者 佐野(L)、吉田、近藤

11月1日 ◎ 赤谷尾根取付き(8:40) - 1,500m地点CS(15:20)

タクシーで取付地点近くまで入ってもらい、赤旗のある末端に取付く。踏み跡に沿ってブッシュをこぐとききれいな尾根道に出してしまった。

11月2日 ① 出発(8:10) - 1,563mピーク(9:10) - 2,000mデポ地点(15:00)

1,563mのピークを過ぎる辺りから30cm位のラッセルを強いられる。1,800mを過ぎると緩やかとなりブッシュも薄くなる。2,000m付近のダケカンバに冬用デポを縛りつけた。

11月3日 ① 出発(7:05) - 赤谷山(9:30) - 赤兀(13:30) - 白兀(16:20) - 大窓(17:10)

赤谷山への最後の登りが急でアイゼン着用。赤兀から白兀まで尾根が極端にやせており、雪もついているのでザイル7ピッチを出す。

11月4日 ◎ 出発(7:00) - 2,561mピーク(11:30) - 池ノ平山(14:00) - 小窓(15:50)

ロウソク岩は小黒部谷側をトラバース気味にからみ、下りは白萩川側をザイル3Pトラバースする。小窓への下りは残置フィックス使用。

11月5日 ● 沈殿

11月6日 ◎ 出発(7:00) - 三ノ窓(10:25) - 本峰(13:30) - 伝蔵(16:00) - 馬場島(20:00)

雪がついている為、慎重に本峰を越え早月を下るが、5時過ぎから懐電行動となる。

(記 近藤)

< 偵察報告 >

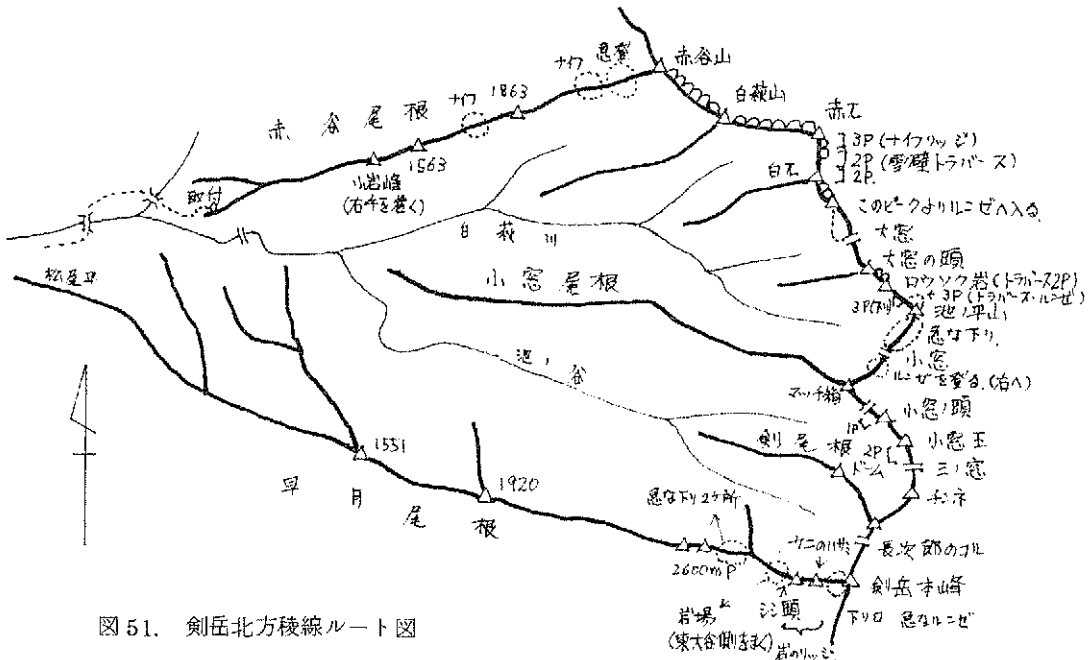


図 51. 剣岳北方稜線ルート図

抜戸岳南尾根偵察

期 間 10月31日～11月3日

参加者 明神(L)、森(保)、新家

10月31日 ◎時々● 新穂出発(8:40)ー取付き(10:25)ー1800mCS(15:30)

今にも降り出しそうな空の下、抜戸岳南尾根に取付くべく穴毛谷右岸を進むが、取付く頃には心配した通り雨が降り出す。かすかな踏み跡をたどってブッシュをどンドンこぐと2ヶ所小さな岩壁が現われるが、いずれも右手を巻いて行く。

11月1日 ◎のち① 出発(7:00)ークローアル(8:00)ー1,900m(11:00)ー似せ穴毛槍(11:50)ー2,250m(15:50)

似せ穴毛槍の長い登りにかかる手前まで、小さな凹凸が続き、雪がつけば結構ザイルが要りそう。このピークの下降は稜線通しに行けないので少々手間取る。

11月2日 ○ 出発(6:35)ー岩壁基部のコル(8:10)ートラバース終了(10:00)ールート工作(11:30～12:50)ー上のバンド(14:45)ーCS(16:00)

大きな岩壁が現われ、森(保)、新家それぞれ登ろうと試みるが、少々手強く諦める。明神が左手を突き上げる草付き混じりのルンゼにルートをとるが、こども馬鹿にできず、ザックは吊り上げる。さらに1ピッチ草付きを登ってザックを吊り上げ、テントサイトを求めた時にはもう暗くなり始めていた。

11月3日 ○ 出発(6:20)ー夏道(8:15)ーコル(8:30)ーアタック出発(8:50)ー抜戸山頂(11:05～11:45)ーコル(12:25～13:05)ー新穂着(16:00)

稜線に出るとラッセルが始まる。笠新道出合にザックをデポし軽装で抜戸岳をアタックする。遠くに槍の穂先が黒く見えていた。(記 森)

〈偵察報告〉 (偵察ルート図 P162図52)

問題となるのは次の5ヶ所であろう。

- A: 小さな岩壁右手を巻くが、かなりの急傾斜である。それでも樹林帯なのでピンには困らないだろう。
- B: 岩混じりのクローアル状急斜面。稜線上を進んでも良いがひどいブッシュで進めない。
- C: 似せ穴毛槍の降り、コルまで稜線通しに進むか、或いはトラバースするか迷う所である。稜線上は小さいが岩でストーンと切れている。
- D: 極めてやせており、岩壁手前のコルまで細く急なリッジを登って下る。
- E: 核心部、岩壁直登は無理と思われる。コルより岩壁基部をトラバースし、岩壁左の凹角をザイル2Pで抜けるが、非常に急なのでザックの吊上げが必要である。

表銀～笠ヶ岳偵察

期 間 10月31日～11月3日

参加者 森(良)(L)、重田、金谷

10月31日 ●のち② 中房温泉出発(9:40)ー合戦小屋(12:45)ー燕山荘(15:00)

中房温泉よりミズレと変わる。ミズレは合戦小屋付近より吹雪と変わり燕山荘へと急ぐ。

11月1日 ○ 出発(6:45)ー蛙岩(7:30)ー大天荘(11:15)ー大天井岳(11:40)ー大天井ヒュッテ(12:25)ーCS(14:40)

夏道通しに進む。大天井はあまりの風に山荘の方に回り込んでから登り、以後ずっと稜線通しに進む。

11月2日 ○ 出発(5:40)ー赤岩岳(7:10)ーヒュッテ西岳(8:15)ー水俣乗越(9:35)ーヒュッテ大槍(12:20)ー槍の肩(13:45)ー千丈沢乗越(14:45)ーCS(16:05)

赤岩岳すぐ南の岩峰は雪がつけばやばいであ

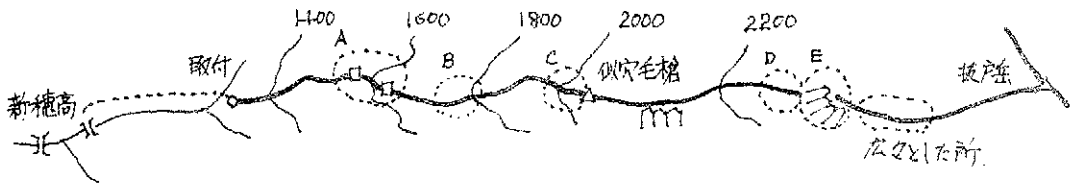


図 52. 抜戸岳南尾根ルート図

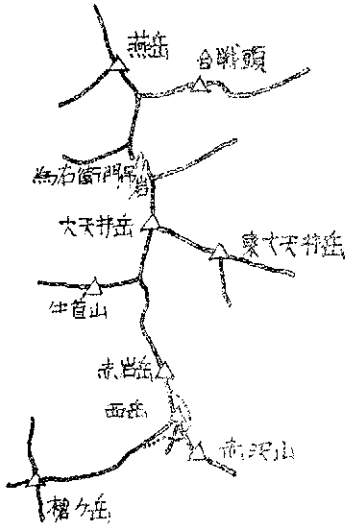


図 53. 表鑑概念図

ろう。西岳は南を巻いたが、水俣乗越への下りは、ハンゴ、針金のある箇所があるので注意する所である。槍の穂先も踏まず西鎌尾根を笠を目指すが、結構やばい所が多い。

11月3日 ○ 出発(7:30)→縦沢岳(10:40)→大ノマ乗越(13:35)→秩父平(15:30)

縦沢岳からは双六へ下らず稜線通しにハイ松のブッシュをこぐ。弓折の稜線は広々としていて気持ちのいい所である。

11月4日 ○
笠ヶ岳を経て新穂へ走り降りる。

〈偵察報告〉

蛙岩：南下する場合の第1岩峰は右手を巻く。
第2岩峰は岩峰間の割れ目を抜ける。第3岩峰は右手を巻く。要 Fix。

赤岩岳：登りは急で雪がつくと要 Fix。すぐ南

の小岩峰も要 Fix。

西岳：最低コルから簡単な岩場を10m位で抜ける。西岳へは登らず、ヒュッチより支尾根を下り、ルンゼをトラバースして稜線に出る。そこからさらにルンゼをトラバースして主稜へ出る。このルンゼ要 Fix。

2,595mピーク：2ヶ所にハンゴがあるが要 Fix。

三ノ窓荷上げ

期間 11月1日～11月6日

参加者 山口(L)、岡部(祐)、西畑

11月1日 ◎のち① 早月取付き(8:15)→奥松尾平(9:00)→1,900m尾根の頭(12:05)→避難小屋(13:40)

11月2日 ① 出発(6:40)→伝蔵小屋(7:50)→2,600m地点(10:00)→2,600m2つ目のポコと本峰への間のコルにデボ(10:45)、ここからダブル剣岳頂上(14:15)

11月3日 ① 出発(6:40)→三ノ窓(9:00)→三ノ窓にテントを張り、デボ回収に出発(10:25)→剣岳頂上(11:30)→デボ地点(12:20)→剣岳頂上(14:55)→三ノ窓(17:05)

11月4日 ◎のち◎のち◎ 出発(8:00)→長次郎のコル(9:00)→帰幕(10:00)

昨日、長次郎のコルにおいてあったデボを回収し、これをジャンダルムAクラック下取付き付近にデボ。

11月5日 ◎ 停滞

11月6日 ① 三ノ窓出発(8:00)
 一長次郎のコル(11:00)一本峰(12:20)
 一伝蔵小屋(14:00)一馬場島(17:30)
 (記 岡部(祐))

冬山合宿

池ノ平山荷上げ

期間 11月1日～11月7日
 参加者 松尾(L)、住田、木嶋、渡辺、岡部(友)、広田

- 11月1日 ① 馬場島ダム取入口出発(8:20)一コル(9:25)一西仙人谷出
 合約600m手前CS(13:00)、西仙人谷偵察の結果、ボッカ不可能と判断、樺平よりボッカする事に決定。
- 11月2日 ① 出発(6:15)一馬場島(9:40)一樺平(14:17)
- 11月3日 ① 出発(5:40)一阿曾原(10:40)一阿曾原峠(12:00)一仙人湯小屋(15:50)
- 11月4日 ①のち◎ デポに出発(6:30)一仙人山横手にデポ(10:20)一仙人湯小屋(11:50)一デポ地点(14:45)
- 11月5日 ◎のち◎ デポに出発(13:20)一池ノ平小屋(14:10)一住田、木嶋、渡辺は池ノ平山の偵察に行く一帰幕(16:05)
- 11月6日 ○ 出発(5:50)一池ノ平小屋(6:25)一池ノ平山(9:05)一ここにデポをする一池ノ平山発(9:40)一帰幕(11:40)一テント撤収後出発(12:10)一仙人湯小屋(14:35)一阿曾原(16:20)
- 11月7日 ① 出発(6:55)一志合谷(8:55)一樺平(10:15)
 (記 岡部(友))

剣岳・早月尾根

期間 12月25日～1月3日
 参加者 松尾(L)、森(良)、木嶋、岡部(祐)、重田、西畑、森(保)、渡辺、岡部(友)、金谷、広田

- 12月25日 ◎のち◎ 小又橋手前着(8:55)一出発(9:10)一馬場島(11:25)一松尾奥の平(12:30)一少し進んだCS(12:50)
 小又橋手前までマイクロバスで入り、馬場島まで快調なピッチでとばすが雨でザックはずぶ濡れ、後々までザックが凍りつき困る。
- 12月26日 ◎ 出発(6:40)一避難小屋(14:30)
 1,800m地点迄迄トレースがあり助かる。風雪激しくなったので、避難小屋を覗くが先客おり小屋前にテントを張る。
- 12月27日 ◎ 出発(7:50)一伝蔵小屋(11:50)
 新雪深くラッセルに苦しむ。一度は伝蔵小屋を通過したが、風雪激しく伝蔵へ引き返す。
- 12月28日 ◎ 出発(8:20)一2,450m地点(10:15)一伝蔵帰幕(11:15)、同出発(12:30)一2,450m地点(13:40)
 雪深くダブルをする。途中後続パーティーに抜かれ、正直言って助かる。
- 12月29日 ◎ 出発(10:30)一2,600m地点(11:25)一2,450m地点帰幕(12:35)一同出発(13:40)一2,600m地点(14:10)
 視界良くなる迄待機した後、2,600m地点までダブルをする。2,600m手前の露岩部分には少し緊張するが、無事BCを設営して、本

峰アタックに備える。

12月30日 ⊗ 停滞

12月31日 ⊗ 本峰アタック兼ルート
工作(松尾、木嶋、森(良)、岡部(祐)、
重田、西畑、渡辺)

BCでは、1年生は雪洞を掘って楽しむ。

1月1日 ⊗ 第2次本峰アタック(吉田、
森(保))

アタック隊は2,600m手前でビバークを強
いられる。一方この夜BCでは積雪激しく、徹
夜でラッセルに励む。

1月2日 ⊗ アタック隊サポート(松尾、
森(良)、西畑)(7:20~8:55)

2,600mBC撤収出発(13:30)-伝
蔵小屋(14:30)-松尾前の平(17:
00)

アタック隊回収後、下山を開始する。伝蔵ま
で慎重に行けば、後は滑り台の様なトレースを
シリセードで松尾前の平まで下る。

1月3日 ⊗ 出発(8:35)-馬場島
荘(8:55)-伊折(12:40)-蓬沢
下山(13:20)

北方稜線隊の無事を祈りつつ、先に下山する。
連日の荒天で冬山の厳しさを思い知らされた貴
重な山行だった。(記 広田)

〈第1次アタックの記録〉

12月30日 ⊗

参加者 松尾、木嶋、森(良)、
岡部(祐)、重田、西畑、
渡辺

タイム 出発(8:10)-カニのハ
サミ(11:10)-剣本峰(12:05)
-BC帰幕(15:55)

2,600mのポコはフィックスを使い、次の
コルからの登りは稜線通しに登らず、池ノ谷側
にトラバースし、雪崩そうな急斜面を登った。
そこからカニのハサミ迄は問題なく、カニのハ
サミの下りは残置フィックスを使う。最後の急登
を登りきるとすぐ本峰で。天気悪化の為急いで
下降する。カニのハサミは時間待ちの為池ノ谷

側をトラバースしたが雪がグサグサで渡辺が危
うく足場を崩しそうになる。2,600mのポコ
では木嶋が雪庇を踏み抜くがすぐはい上がり、
無事帰幕する。

〈第2次アタックの記録〉

参加者 吉田、森(保)

1月1日 ⊗ 出発(7:45)-カニ
のハサミ手前(10:00)-本峰(12:
45)-2,600mP手前のコルBS(16
:30)

1月2日 ⊗ BS出発(7:10)-B
C帰幕(8:55)

元日の本峰アタックということで勇んで出
発したものの、既に我々は先頭より20人目位で
あった。先頭は胸までのラッセルに苦しんで
いるが、我々はその後にくっつき、長い時間待ち
に足踏みをしているだけだった。特にカニのハ
サミの時間待ちは甚だしく、ここを通過した時
にはあれ程後続していたパーティーも1パーテ
ィーを除いて皆帰ってしまった。とにかく、我
々は赤旗に導かれ本峰に立った。その頃は風雪と
もに激しく、まつげが大きな氷のかたまりとな
って目をあけるのにも苦勞する。山頂をそこそ
こに急ぎ駆け下るが、ガスと粉雪の為ルートが釈
然としない。最も恐れていた2,800mの支尾
根は「左へ左へ進め」というアドバイスのもと、
すんなり通過する。2,600mのコル上部まで
昨日のフィックスに導かれたが、ここより稜線
を進もうと思えど先はすっぱりと切れており、そ
こを巻くのかとルンゼを下るとどンドン東大谷
へ降りてしまうようである。そうこうしてルー
トを捜しめぐねているうち、辺りはもう薄暗く、
ここに集まった九大、岡大パーティーとビバ
ークを余儀なくされる。本番でのビバークであ
るが、我々が御宿でしているビバーク訓練と大
して変わりなく、訓練の有効性を改めて感じる。
翌日、ガスの切れ間をぬってルートを見つける。
しかしすごい積雪で首までもぐる始末である。
そうこうしているうちに、松尾、森(良)、西
畑が迎えに来てくれ、皆感激してBCへと無事

着いた。皆には迷惑をかけたけれど、風雪の中でビバークをした貴重なアタックであった。

(記 森(保))

剣岳北方稜線

赤谷尾根—赤兀—白兀—大窓—池ノ平山—小窓—三ノ窓—剣本峰—早月尾根

期 間 12月21日～1月7日

参加者 佐野(L)、住田、明神、山口

(概念図はP 92 図 35 参照)

12月22日 ◎のち● 馬場島出発(11:20)—ブナクラ谷出合(13:05)—赤谷尾根取付きCS(14:05)—1,260m地点デポ(15:00～16:50)

赤谷尾根には12月10日に専修大学が入山した後、どこも入山していないとのことでトレースは全くない。早月尾根取付き直前よりワカンをつけ左に進路をとる。ラッセルは大したことはない。左に曲がるのが遅すぎた為5m位のシリセードで道に降りた他は順調に進む。取付きは11月に赤旗を打った所(取入口100m手前)から台地上の所へ入り、1番右端の尾根である。(赤旗が多く打ってある。)最初の急登をシングルで登るのは時間的に無理とみてダブルをやることにし、今日は取付き手前に設営。半分以上の荷物を1,260m地点迄デポする。途中目の前に黒い動く物を見つけ、熊かと思ったがカモシカだった。テントに帰った頃から雨が降り出し全員シュラフはビショ濡れ。前途多難の様相を程する。

12月23日 ◎のち◎ 出発(7:05)—デポ回収(8:15～8:45)—1,563mのピーク(10:43)—1,863mのピーク(13:30)—デポ確認(1950m)—1,970m付近CS(14:35)—デポ回収(15:35～15:45)

昨日夜からの雨で濡れネズミで出発。気分はさえない。それでも積雪が少ないので順調にとばす。昨日のデポを回収し、一気に1,563m

のピークに着く。全くあっけない。時間も早いので行ける所まで行くことにして先を急ぐ。途中1,750m手前がナイフ状になっていて小さい雪庇が白萩側に出ていた。又1,863mのピークへの登り手前で少しナイフ状になってはいるが大したことはない。ラッセルは平均して膝位で、馬場島から3日でデポ地点(1,950m)到着という計画が虚の様である。デポを確認し、少し先の雪の吹きだまった所に設営。この頃よりガスが踏れてきて夜には満天の星となる。デポ回収し内容を確認、9日分持って出発することにする。残り4日分は赤谷頂上にデポすることにして再びバックする。この結果、大窓最終到着日は12月27日となる。

12月24日 ◎のち⊕ 出発(7:50)—赤谷山(9:25～9:45)—CS(10:45)—赤谷山(12:00)—デポ(12:15)—出発(12:45)—白萩山(13:30)—赤兀手前のコルCS(13:45)

計画通り赤谷山迄はダブルをする。朝、テントから出ると剣本峰はガスに見え隠れしながらも、我々に黒々とした姿で迫ってきた。いよいよこれから勝負である。出発時、山口のアイゼンが装着不能でかなり出発が遅れた。最初の赤谷山への登りで3人パーティーに会ったが、これは専修大のデポ回収隊と分かる。赤谷山の登りは急ではあるが、雪質が良かったのでほとんど心配はなかった。ただ戻る際ルートはずす可能性があるため赤旗をベタ打ちにする。赤谷山には専修大のベースがあった。その近くに4日分の食糧とガソリンをデポして先に進む。途中帰途につく専修大アタックパーティーに会ったが、これから先小窓迄、人の姿を全く見ないことになるとは全く思いもよらなかった。山口の調子が悪かったのと、風が強いことを考えに入れ、今日は白萩山の先のコルで泊ることにする。夕方馬場島に現在位置を後発隊に知らせてもらうよう、伝言を頼む。

12月25日 ⊕ 出発(8:45)—フィックス完了(12:30)—赤兀CS(12:15)

昨日、12:00の天気図では日本海に低気圧が発生していた。この低気圧に吹き込む南よりの風で湿雪になったのだろう。ヤック、オーバーボンがびしょ濡れである。赤兀、白兀間の稜線で前線通過になるのを恐れ、今日は赤兀にテントを設営することにする。明神と住田は赤兀から先1P、フィックスする。テントに入ってから前線通過を待ったが一向にその様子はなく、天気図をとるとまだ日本海にいる。速度が非常に遅い。全くだらになってしまう。

12月26日 ⊗ 出発(6:35) - 白兀
手前のコル(11:20) - 白兀(13:
25) - CS

風は昨日とあまり変わらない。前線は通過したはずであり、その割に風が強くないので出発することにする。明神と住田で昨日フィックスした先1Pをフィックスし、その間、佐野と山口で荷物を運ぶ。この先、3人パーティー交互にフィックスと歩荷をやることにする。白兀迄は全くリッジ通しで雪庇には用心しなければならぬ。白兀手前のコルから風が強くなり始め、視界は2~3mもない位になる。この時が本当の前線通過であったことがあとで分かる。低気圧はものみごとに我々を裏切ったのである。このコルからの登りは急な雪壁でフィックスの際、山口が雪崩にあり、5m程流されたが大事には至らなかった。雪壁の登りは予想以上に時間を食い、このため全員手に凍傷を負うはめになる。白兀の頂上にテントをはり、少し下へルンゼ状の所をザイルを使って偵察したがルートははっきりしなかった。早月隊は避難小屋に幕営とのことであった。

12月27日 ⊗ 停滞

4:30に起床したが、風が強くて視界が全くない為、9:15の天気図をとる迄待機する。天気図は冬型を示しており、回復の可能性は全くない。この為、終日停滞と決定

12月28日 ⊗ 偵察出発(10:00)
) - 帰幕(10:30) - 偵察出発(13:
30) - 大窓へのルンゼ上部 - 帰幕(16:
30)

朝起きると、風は弱いが視界は全くない。ル

ートがはっきりしないので、出発は見合わせ天候の状態を見て、偵察兼フィックスをすることにする。午前中、一回偵察に出たものの、昨日と同じルンゼを1ピッチ下っただけ(150~200m)で引き返す。午後から視界が開けてきたので佐野と明神が再び出る。足元から崩れていく雪崩が何度もあったが、大窓への下り口のルンゼ迄行って、引き返す途中、3ピッチ、フィックスをしたが、ルンゼに入る迄、もう2ピッチ、フィックスが必要である。

12月29日 ⊗ のち◎のち① 起床(3:
05) - ツェルト内で待機 - 出発(8:10)
) - 白兀に戻る(8:30) - 設営(9:30)
) - 再び出発(14:00) - 大窓(20:
10)

視界は数mあったが、昨日フィックス工作をしていたので出発する。しかし視界の悪さで時間がかかりすぎるようなので再び白兀頂上にテントを張り直す。ところが、昼過ぎから明るくなり始め、ラジオも冬型の小康状態と言っていたので、急遽、大窓へ向けて出発することにし、急いで撤収にとりかかった。フィックスが比較的連続し、中間支点も少なかった為、通過に手間取り、昨日の偵察地点へ着く頃にはすでに暗くなっていた。しかし天気は良く、上弦の月明りのもとヘッドランプをつけて大窓へと下る。途中、剣のシルエットが星夜に浮かんでいた。大窓は穴だらけで、非常に歩きづらい所である。富山の町の灯がキラキラと輝いて見え、我々の疲れをいやしてくれたのだった。

12月30日 ⊕ 出発(10:00) -
大窓から1つ目のピーク(13:40) - C
S

赤谷山に戻る期限は過ぎていたものの、白兀 = 大窓という考えで前進することにする。これは必ずしも当を得た判断とは言いがたいが、ここ迄来た以上少しでも足を延ばしたいという気持ちの方が作用したためであろう。昨日と違って変わって再び天候は荒れ模様となる。9:15の天気図を取り、出発を決めるが、若干の不安を伴う。大窓から最初のピークに着く時間で判断することにし、休みなしで登る。途中、登り

口に1ヶ所フィックス30mを要しただけで、適度にクラストした急な登りを懸命に登った。予想以上に時間を消費し、池ノ平山のデポ確認に出ようとしたものの、時間的、肉体的に不可能とみて中止、このピークに泊ることにする。食糧分はあと4日分しかなく、2/3ずつ消費することにして2日分を浮かす。今日を含めて6日分あれば、明日池ノ平山へ向かい、デポがない場合でもベミカンと合わせれば赤谷山へ戻ることは可能であるという判断である。従って明日前進できなければ戻るしかない。

12月31日 ⊗ 出発(8:50)ーローソク岩手前(9:50)ー大窓の頭手前のコル(12:30)ー大窓の頭(13:15)ーデポ確認(17:10)ー池ノ平山頂上直下(17:50)

朝起きると依然として雪である。しばらくテント内で待機したが、意を決して池ノ平山へ向かう。ローソク岩迄で一ヶ所きわどいトラバースが5m程あったが、他は順調に行く。ローソク岩は小黒部谷側を巻くが、最初、下に回り込んだ為、雪に行手をさえぎられ、結局、岩壁に雪がくっついている不安定な所をトラバースする。残置ハーケンがあり、一応ここがルートであることが分かる。多少、時間ロスがあったが、核心部の一つを順調に越せたのはよかった。池ノ平山最後の登りに時間を食いそうだったのでできるだけノンザイルで行く。途中、大窓の頭からの下りに2ピッチザイルを出しただけで最後のフィックス地点に到着、この頃より西よりの風が強くなり、息をするのも苦しい程となる。2ピッチでフィックスは終了したが、デポを確認した頃には既にあたりは薄暗くなっていた。結局池ノ平山直下のCSに全員が到着した時には、あたりは真暗、散々な大晦日となった。ザイルは夜間のため回収を見合わせ、明日天候が回復したら回収することにして、紅白歌合戦を聞きながら1976年最後の日を送った。

1月1日 ⊗ 沈殿

今年最初の朝は吹雪である。昨日夕方の交信がトランシーバーの凍結でできず、今朝は寝過ぎて再び交信ができない。早月隊の行動が気

になるところである。我々は早々に沈殿と決め、朝からデポの整理に当たる。

1月2日 ⊗ 出発(9:00)ーフィックス回収の後帰幕(10:00)ー出発(11:25)ーフィックスをして帰幕(15:30)

今日も雪、しかし昨夜からの風はおさまって行動はできそうである。佐野の体調がすぐれず、行動不能の為、明神、住田でフィックス回収、それに山口を加えて小窓迄のフィックスを行なう。小窓は6人ズー一張があったとのこと。どこからのパーティーだろうか。

1月3日 ⊗ 出発(9:00)ー設営開始(8:00)ー設営終了(9:30)

朝の交信で、早月尾根のフィックスに関して確認する。早月隊は今日で下山、我々もこんな生活とできるものならおさらばしたい気分である。一応撤収して外に出るが、山口のアイゼン装着に手間取り、午後より天候の崩れる恐れもあったので、出発を取りやめ、再び設営する。(2日分を池ノ平山にデポする。)夜、22:30頃より猛吹雪。生きた心地はしなかった。

1月4日 ⊗のち◎のち◎ 出発(11:30)ー小窓(13:20)ー小窓を少し登った所のCS(13:40)ー設営完了(15:00)

一旦起きるが、風が収まっておらず、再び寝る。9:15の天気図を取り、ラジオの放送で、午後から冬型の小嵐状態になるとのことで、小窓迄は下ることにする。フィックスがしてあるので順調に下る。小窓には明大の4人パーティーが幕営している。北仙人尾根から人山したとのことで、5日間天気待ちをしているとか。久しぶりに人の顔を見る。天気が良いので先に行きたい気持ちもあるが、三ノ窓迄はテント場がないということもあり、結局小窓に設営する。小窓からは、久しぶりに赤谷山が望まれた。

1月5日 ◎のち◎のち◎ 出発(6:30)ー小窓尾根分岐(8:50)ー小窓王トラバース手前(10:35)ー三ノ窓(12:00)ー池ノ谷乗越(13:05)ー13:15)ー長次郎のコル(15:05)

一雪洞に入る(15:35)

いよいよ三ノ窓入りである。朝暗いうちから出発する。表層雪崩の危険も去ってはいないが、強硬に突破する。軽迄のラッセルで、非常にしんどいアルバイトであったが、休みなしに明大パーティーと交互に登る。マッチ箱のゴルへの下りで30mフィックスしたが、実際問題としてここはフィックスの必要なし。三ノ窓で一ヶ所フィックスの必要な登りがあったが、明大のトレースがあったので、それに続く。小窓王のトラバースはザイル3本を結び100mのフィックス、三ノ窓でデボ確認をしたが、残り日数の少ないこともあり、デボを放棄して先に進む。長次郎のゴル迄は全くノンザイル、池ノ谷ガリ一はクラストしていて雪崩の危険はない。池ノ谷乗越からの登りはルンゼをつめる。後は稜線を忠実にたどって長次郎のゴルへ。途中、佐野がシュルンドに落ちかけ、ザイルで引き上げる。長次郎のゴルで雪洞を見つけ、撤収時間短縮のため、これに入る。夕方、頂上にいる明大パーティーに中継してもらい、伝蔵小屋に現状と今後の行動予定を伝えてもらう。

1月6日 ◎のち◎ 出発(7:30)一
頂上(9:30~9:45)一中尾根に迷い
こんだ事を知る。(13:05)一早月尾根に
戻る(13:05)一2,800m(13:50)
一2,600m手前のゴル(4:50)一
2,450m付近のCS(16:05)

雪洞生活になれていない為、結局、撤収にテントと同じ位かかる。長次郎のゴルからの登りは左の雪壁に登るが、胸までのラッセルで雪崩の危険を感じながら必死で登る。頂上で昨晚、明大パーティーが使用したと思われる雪洞で休憩。全く“感激”という感情はわいてこない。まだ早月の下りという気を抜けない所が残っているだけに気は重い。降りには赤旗がベタ打ちで間違うことはない。残置フィックスを頼りに慎重に降りる。カニのはさみを過ぎて獅子頭にかかる途中で、視界が2m位だったこともあって、中尾根に迷い込み、時間を大幅にロスする。この間、明神がスリップしたが、事無きを得た。早月尾根に戻ってからは順調なペースで降りる。

今日中に安全圏に入りたいという気持ちから休みをあまりとらなかつた為、皆の疲労は極限に達する。2,450m付近で山口がバランスを崩し、5m程スリップしたので、これ以上先に進むのを諦め、小さなゴルに幕営する。

1月7日 ◎のち◎ 出発(8:50)一
伝蔵小屋(10:05~10:15)一馬場
島(13:20~14:10)一伊折(17
:05)

今日こそ下山できる！と皆一生懸命に降りる。伝蔵小屋までは赤旗が10mおき位にあり、全く心配ない。伝蔵小屋で暖いお茶を御馳走になり、しばし談笑して、一目散に馬場島へ。明大、北大のつけてくれたトレースは高速道路で、全くありがたい。馬場島で下山届を出し、タクシーを予約して伊折へ。この長い、17日間に渡る冬山に終止符を打つ。どの顔も無事下山できた安堵感で緑んでいた。(記 佐野)

石鎚山

保井野一 堂ヶ森一 西ノ冠岳一 石鎚山一 成就

期間 12月28日~12月30日
参加者 上松(L)、近藤

12月28日 ◎のち◎ 川之瀬出発(8
:40)一保井野(10:10)一1,250
m付近CS(13:10)

伊予小松から車で保井野まではいる予定が川之瀬までしかはいれなくて川之瀬から歩くことにする。保井野で登山届を見ると1パーティーはいつているだけであった。放牧場を過ぎ夏道に沿って進むと、四国の山とはいえ、雪が多くなってくる。1,250m付近のブッシュの中にこの日は設営する。

12月29日 ◎のち◎ 出発(6:00)
一 堂ヶ森(8:20)一 二ノ森(11:
10)一 西ノ冠岳(14:10)一 石鎚手前
のゴル(16:00)

まだ薄暗い中を懐電をつけて出発する。樹林帯の中をアイゼンの音を響かせながら進み稜線

上に出る。堂ヶ森を過ぎ二ノ森までは起伏の少ない稜線であるが、所々ラッセルがひどく、二ノ森手前からワカンをつける。二ノ森からは急に両側が切れていて、かなり緊張する所であった。西ノ冠岳の岩峰をトラバースする所では視界が悪いため岩峰がよく見えず、下部のトラバースではラッセルに悩まされ、上部へ行くとかなり急な斜面が出たりしてかなり時間を食ってしまった。西ノ冠岳を過ぎた頃から視界が晴れ、石鎚が望めるようになった。

12月30日 ⊗ 出発(8:00) - 二ノ鎖(9:00) - 石鎚山(9:35) - 石鎚神社(10:40) - 成就(12:00) - 下谷(13:00) 下山

朝天気が悪く、少し天気待ちしてから二ノ鎖まで行く。頂上までは二ノ鎖、三ノ鎖と、それぞれ40m位の傾斜50度位の岩の斜面を登るのであるが、最初ザックをかついで登ろうとしたが無理で、結局ザックは置いて登頂する事にする。頂上でもガスのため何も見えず、すぐ石鎚神社まで下る。このあたりから登山者を見かけるようになり、成就まですぐに着いた。四国の山でも1m位の積雪があったのには驚いた。

(記 近藤)

春 山 合 宿

表銀座縦走

燕岳 - 大天井岳 - 赤岩岳 - 槍ヶ岳 - 新穂

期 間 3月12日～3月20日

参加者 森(良)L、住田、山口、岡部(祐)
近藤、重田

(概念図はP162図53参照)

3月12日 ○ 黒川沢手前迄タクシーで
(8:40) - 中房温泉(13:55)

雪のない道を左手に有明山を眺めながら快調なペースで歩く。中房温泉もほとんど雪がなく合戦尾根取付きもすぐわかる。春の陽射しが気持ちよい。

3月13日 ◎のち① 出発(5:15)
- 合戦小屋(10:55) - 燕山荘(13:15) - 燕アタック(14:30～15:40)

合戦尾根の最初の登りはかなり急でガチガチに凍っている。合戦小屋から2,489mの登りを過ぎると燕山荘迄はなだらかな稜線が続く。燕山荘付近では雪も飛ばされて夏道がきれいに出ていたのには驚く。燕からの展望はしばし時を忘れる思いであった。

3月14日 ⊗のち◎ 沈殿

蛙岩のフィックス工作をする(住田、山口、近藤、重田)。第1岩峰は右手を巻き、第2岩峰は岩と岩の間を通り抜け、第3岩峰は右手を巻いて10mフィックス。

3月15日 ①◎ 出発(6:20) - 蛙岩(7:00) - 大天井岳(12:00) - 大天井ヒュッテ(12:45)

蛙岩を過ぎてからも稜線上は所々雪がある程度で、ほとんど風に飛ばされている。大天井岳は常念側の巻き道を登り、すぐヒュッテまで下る。右手のトラバース道も見えてはいたが雪崩そうだ。

3月16日 ◎ 出発(6:20) - 赤岩岳(10:30) - 西岳小屋(13:10)
2,766mのピークを過ぎると稜線は緩くなり槍がどんどん近づいてくる。赤岩岳迄、2、3急な所を登るとすぐ両側の切れた岩峰が現われる。40mフィックスして越せば西岳迄は楽な稜線であった。

3月17日 ⊗ 沈殿

3月18日 ◎のち⊗ 出発(5:40)
- 水俣乗越(8:05) - 2,595mピーク(10:10) - CS(13:05)

西岳からの下りのルンゼ100mのフィックスは雪がグサグサで快適に下れ、むしろここまでのトラバースの方が緊張する。朝は赤く染まっていた槍にもガスがかかり、水俣乗越を過ぎ

たあたりから天気が悪化し、ミズレとなる。1ヶ所はしごを登って2,595mのピークに達するが、下りは急なので40mのフィックスの後、懸垂下降をする。以後稜線はやせていてテント地を捜すがなかなか見つからない。

3月19日 ◎ 出発(6:35) - 槍ヶ岳山荘(12:00)

深いラッセルで遅々として進まないが、ヒュッテ大槍を過ぎハシゴを1つ登るとすぐ槍ヶ岳山荘に到着する。槍頂上アタックするが、風強く視界も無い為すぐ降りる。ザイルを使用しなかったが、雪のつき具合等から必要性を感じた。

3月20日 ◎ 出発(6:05) - 奥丸山(9:00) - 中崎山(14:00) - 新穂(16:10)

山荘からの下りは急で緊張するが、雪は適度に締まっているので、アイゼンを効かせて中崎尾根目がけ駆け下る。それでも奥丸山を過ぎた辺りから沈み始め、おまけにガスも出始めたので慎重に新穂へ下る。新穂では雪も降り始め中房温泉での暖かさが虚のようであった。

(記 近藤)

抜戸岳南尾根

期間 3月12日～3月22日

参加者 明神(L)、宮本、森(保)、渡辺
(概念図はP171図54参照)

3月12日 ① 新穂出発(9:40)
- 取付き(11:45) - CS(14:20)

弓折サポート隊に荷を預け新穂を後にする。橋の手前より穴毛谷の夏道に入るが、錫杖岳稜線からのデブリが数ヶ所ある。砂防ダムの右岸を越え取付くが、ブッシュ混じりのラッセルを強いられる。1,500m付近の台地をCSとした後、明神、宮本、森でデポ及びルート工作に出るが、ナイフリッジ10mと岩塔を巻くのに60mフィックスして引き返す。

3月13日 ①のち◎ 出発(6:05)
- 2,117m CS(15:40)

出発早々のブッシュで渡辺がメガネを失うが続登する。2,117mピーク下の台地までブッシ

ュ混じりの急登と、5m位ではあるがストーンと切れ落ちた下りが前後して現われ、ザイルを頻繁に使用する。稜線は極めてやせているがブッシュの中なのでどうということはない。

3月14日 ◎のち◎のち① 出発(7:40) - 2,117mピーク(10:00) - 2,238mピーク(13:20)

夜中、ミズレがしきりに降り、出発時も雨が降っているが、2,117mピーク迄100mフィックスして雪崩そうな斜面を登る。ピークに達する頃には雨もあがりガスも晴れてくるが、笠の東面では雪崩の音がしきりと聞こえる。これよりナイフリッジを進むが極めて不安定なので、この部分はトラバースをする。明神、渡辺でルート工作の途中、トップの足元が雪崩れるが大事に至らない。雪崩れた後の雪質は安定しているので以後このルートを使い2,238mピークまでダブルをする。さらに明神、渡辺は核心部手前迄ルート伸ばす。

3月15日 ○ 出発(6:20) - 核心部手前のコル(9:40) - 中間テラス(15:50) - 岩壁を越した肩(17:50) - 稜線(18:55)

明神・渡辺、宮本・森が引き続いて核心部岩壁基部を左へ80mフィックスする。これより西南面のルンゼに入り、ルンゼを30m直上して横断バンドに達する。このバンドまで宮本、森でザックの吊り上げを行なうが、20mの吊り上げには腕力もバテる。ここよりさらに20m直上して再びザックの吊り上げを行なう。全員がこの核心部を突破した頃にはもう星が輝き始めていた。しかしテント地を求め急な斜面をラッセルに苦しみながら稜線まで出る。満天の星であった。

3月16日 ①のち◎ 出発(8:30)
- 抜戸岳(10:00) - 秩父平(13:00)

抜戸の稜線には手前に2m位の雪庇が張り出している。その1番小さい所を目指す、あまりの急斜面に森空荷でステップを切る。主稜線上はさすがに風きついが、秩父平へカールのトラバース40mフィックスしただけで駆け降り

る。弓折隊は既にテントを設営しており再会を喜び合う。以後行動を共にする。

(記 明神)

弓折岳南尾根

弓折岳南尾根—笠ヶ岳—双六—槍ヶ岳—中崎尾根

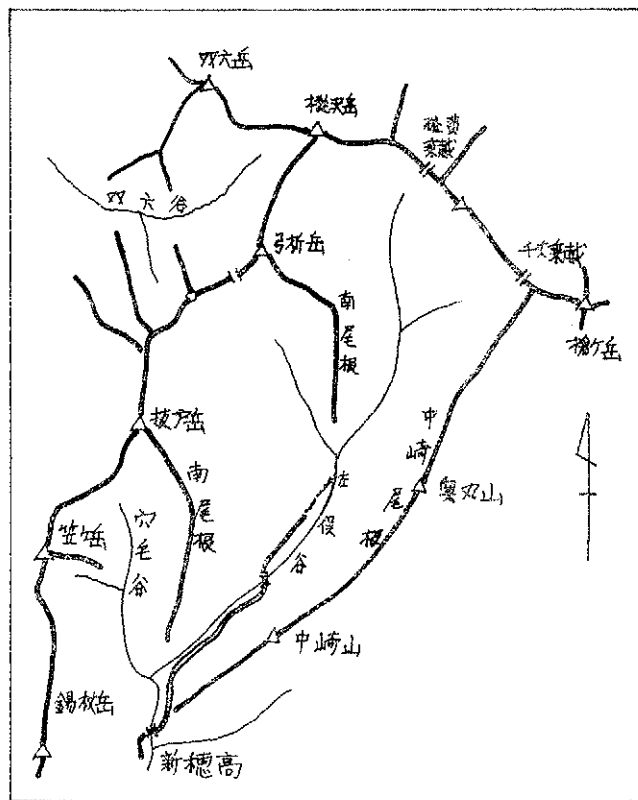


図 54. 笠—槍ヶ岳概念図

期 間 3月12日～3月22日
参加者 佐野(L)、木嶋、岡部(友)、金谷
広田

3月12日 ○ 新穂出発(9:40)—
ワサビ平小屋北CS(12:50)—デポ回
収(13:45～18:20)
笠山荘前にて荷分けをした後、ワサビ平目指
し出発する。ワサビ平小屋北方にテント設営し

た後、抜戸サポート用のデポを回収に下る。

3月13日 ◎のち⊗ 出発(7:05)
—南尾根取付点CS(8:05)—デポ回収
(9:15～10:45)—2,200m付近
デポ(11:45～15:30)

南尾根取付点にテント設営後、出発地点まで
デポ回収に戻る。さらに時間の許す限り荷を上
げておく為、早々に出発し2,200m付近にデポ
する。

3月14日 ⊗のち●のち①
出発(10:45)—2,200
m付近CS(13:45)
天気図をとった後、撤収出発。
2,200m付近までは緩傾斜である
がその先100mナイフエッジ
なので、佐野、木嶋がフィッ
クスしておく。16:15、抜
戸隊と交信し、核心部手前にい
ることを確認する。

3月15日 ○ 出発(6
:40)—2,300m地点(8
:20)—弓折岳デポ(9
:00～12:15)—
2,400mCS(13:55)
2,300m地点までデポをし、
テントに引き返す。さらに弓折
岳ピークまでデポをした後、
2,400m屈曲点までテントを
移す。連日のダブルが続く。

3月16日 ◎ 出発(6
:40)—弓折岳(7:15)
)—秩父平(10:40)
朝は雪がよく締まっていますア
イゼンが快適である。弓折岳に不必要な装備、
食料をデポして秩父平へと向かう。大ノマ乗越へ
の下りに予想外に手間取り、また登りにしても
表面のみクラストした雪質には大いに閉口する。
秩父平にテント設営後、抜戸隊が雪壁に姿を見せ
無事を喜ぶ。

3月17日 ⊗時々① 笠アタックの日で
あるが悪天の為沈殿

3月18日 ①のち⊗ 笠アタック出発(

4:45)ー抜戸岳(6:05)ー笠ヶ岳(8:35)ー帰幕(11:25)

満天の星空の下、懐電をつけて笠ヶ岳アタックに出る。次第に明けゆく空、モルゲンロートが美しい。抜戸岳を過ぎる頃よりガスが出始め、笠を目前にして天候は極端に悪化する。木嶋、明神がコンテで偵察に行くが何ということはない、笠の小屋の直前であった。真白で何も見えない笠のピークに立ったものの、何の感慨も浮かんでこない。急ぎ冬期小屋へ逃げ込む。

3月19日 ◎のち○ 出発(6:40)

ー弓折岳(9:00)ー双六小屋(11:50)ー縦沢岳を下ったコルCS(14:05)

槍を目指し秩父平を出発するが、弓折岳のデポが動物に荒されているのを発見する。被害はレーション等わずかであったが、デポの仕方に不備を感じる。デポは雪の中に深く埋めた方が良さそうだ。縦沢岳の登りから風強くなるが、下りナイフリッジ12mフィックスした後、コルにテント設営する。

3月20日 ◎ 偵察隊(7:00~15:35)、本隊出発(11:15)ー硫黄JP手前(13:00)ーデポ回収(13:00~15:35)

明神、木嶋、森、渡辺が西鎌尾根の偵察とルート工作に先発する。偵察の結果、テントを硫黄尾根JP手前まで移すことにし、偵察隊はさらに中崎尾根上部までルートを伸ばしデポをする。中崎尾根への下り口は結構危険である。

3月21日 ○ 出発(6:10)ー千丈乗越(8:45)ー槍ヶ岳アタック(9:30~10:55~13:15)ー中崎尾根上部CS(14:10)

西鎌尾根は、2,674mピークの下り、2,683mピークとフィックスしたが、思いのほか、スムーズに通過する。曇ひとつない好天で次第に目指す槍が近づいてくるのは気持ちがいいものだ。予想外の早い時間に、千丈乗越より槍アタックとする。穂先は雪もほとんど付いておらず、今山行のクライマックスとして申し分のないものであった。肩からの下りは槍平への急斜面をトラバース気味に120mフィック

スして下る。千丈乗越からの下りも雪質グサグサとなり思ったよりもスムーズに中崎尾根上部に着く。

3月22日 ◎ 出発(9:40)ー中崎山(12:20)ー新穂(15:00)

滝谷を左手に見ながらゆっくりと下る。トレースは明瞭で無事新穂下山。途中、表銀隊のベミカンを見つけ無事を確認する。春山らしい充実した山行であった。(記 岡部(友))

1977年度（昭和52年度）活動記録

77年度 現 役 部 員

C . L	明 神 知	基 制	4 (4)
S . L	山 口 誠 吾	人	3 (4)
	木 嶋 良 雄	工 冶	3 (4)
	住 田 宏 己	基 情	4 (4)
	宮 本 敬 正	工 冶	3 (4)
	森 良 平	基 化	4 (4)
	吉 田 真 三	医	5 (4) (退)
主 務	岡 部 祐 二	工 冶	3 (3)
	近 藤 富 夫	工 酵	4 (3)
装 備	重 田 邦 男	工 応 化	3 (3)
	西 畑 一 哉	法	3 (3) (休)
	森 保 知	工 建	3 (3)
	渡 辺 治 郎	法	3 (3)
	岡 部 友三朗	工 船	2 (2)
	金 谷 明	工 土	2 (2)
	広 田 雄 彦	経	2 (2)
	浅 井 利 彦	基 制	1 (1)
	片 山 幸 治	理 数	1 (1) (退)
	中 田 雅 弘	工 環	1 (1) (退)
	西 尾 良 司	工 溶	1 (1)
	村 田 正 弘	工 酵	1 (1)

5 月 山 行

新人歓迎白馬山行

天狗原—白馬大池—白馬岳アタック

期 間 4月29日～5月3日

参加者 森(良)(L)、重田、岡部(友)
 新人 坂本、芝原、中田、西尾、村田
 O B 大野、後藤、松尾

4月29日 ◎のち◎のち⊗ 東急山荘出発
 (10:00)—成城大小屋(12:15)
 天狗原(14:50)

東急山荘から上を見上げると、上部は雲に隠れていて天気が悪そうだ。成城大小屋辺りから雪が降り出し、髪の毛が凍りついてくる。天狗原への急登を終え、平坦になった頃には、風雪強まり、いつもの岩の所に急いでテントを設営する。

4月30日 ○ 雪訓(7:40～11:00) 出発(11:15)—乗鞍頂上(12:00)—大池(12:30)

乗鞍の急斜面の下にキスリングを置き、上部で雪上訓練をしたが、雪が悪く満足な訓練ができなかった。11時前に松尾OBが到着し、全員で大池まで移動する。大池の東斜面は岩とハイ松が出ていたがまだ水は流れていない。

5月1日 ○ 出発(6:30)—小蓮華尾根下り口(8:00)—小蓮華(8:15)—白馬頂上(10:20)—小蓮華(12:10)—小蓮華尾根下り口(12:15)—帰幕(13:20)

大野OBは蓮華温泉へ下山し、他は白馬アタックに出る。小蓮華を登ってから風が強まり突風姿勢を取りながら進む。頂上もそこそこに駆け降りるが、帰路予定していた後藤OB、森による主稜アタックは悪天が予想される為に延期

とする。

5月2日 ●ツのち◎ 沈殿

夜半から非常に激しい雨となりテントの内まで水びたしとなる。明日は下山なので、重田と岡部は強風の中、ヒバーク訓練に出る。

5月3日 ① 出発(7:15)—天狗原(8:20)—成城大小屋(9:25)—阪大小屋(9:50)—親ノ原下山(12:30)

天狗原から後藤OBと重田がスキーで下るが、天狗原の急斜面で重田がスキーを流してしまう。新人も元気に親ノ原へ下山する。(記 重田)

明神岳稜線

上高地—宮川のコーレ—ヒョウタン池—明神主峰—前穂—北穂—上高地

期 間 4月29日～5月2日

参加者 木嶋(L)、広田

4月29日 ◎のち①のち⊗ 上高地出発(8:10)—明神池(9:00)—宮川のコーレ(11:00)—ヒョウタン池(12:30)

養魚場裏手の踏み跡をたどると林の中を抜け、小さな溜沢に出、そして下宮川主流に入る。支流を宮川のコーレ迄詰めると、ここから五峰中央フェース、梓川が良く見え気分が良い。ヒョウタン池は雪におおわれていた。

4月30日 ○ 出発(6:05)—第1階段(6:50)—ラクダのコブ(8:15)—明神主峰(10:00)—前穂(12:30)

ラクダのコブを越えた所で主峰が顔を出してきた。このコブより直上すると10m程の凹角の岩登りがある。ここは東稜の中で一番緊張させられた。主峰からの眺めは非常によく、西穂の稜線もよく見える。

5月1日 ① 出発(6:15)—奥穂(8:00)—北穂(11:35)—溜沢小屋(12:25)

奥穂から山荘への下りと、涸沢岳の下りに緊張させられる。北穂より北穂沢をシリセードで涸沢小屋へ。夜半から雨となりフライを持って来なかったのを悔やむ。

5月2日 ● 出発(7:15) - 横尾(8:30) - 徳沢(9:40) - 上高地(10:50)

昨夜からの雨でずぶ濡れとなったシュラフで眠るのを嫌って雨の中を下山。(記 広田)

北岳バットレス

cガリー大滝～Ⅳ尾根

dガリー奥壁

ピラミッドフェース

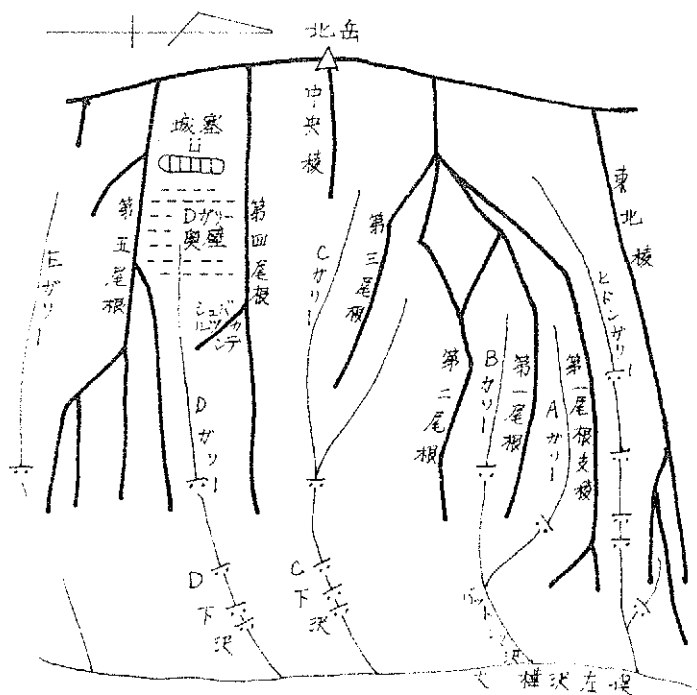


図 55. 北岳バットレス概念図

期 間 4月29日～5月3日

参加者 山口(L)、住田、岡部(祐)、金谷

4月29日 ① 広河原小屋着(19:30)

4月30日 ○ 出発(7:40) - 二俣(10:20) - 偵察出発(13:05) - 帰幕(15:20)

大権沢中、バットレス側をテント場とする。

山口、岡部でdガリー大滝の偵察。

住田、金谷でcガリー1P目の偵察。

5月1日 ○ 出発(5:00) - 北岳山頂(13:45) - 帰幕(14:40)

住田、金谷パーティ...cガリー大滝よりⅣ尾根

- マッテ箱コルは雪多く、中央稜取付きへのトラバースは危険な感じがする。

- 途中で時間待ちがある。先行パーティはb、dガリー経由らしい。

山口、岡部パーティ...dガリー大滝よりdガリー奥壁

5月2日 ● 停 滞

5月3日 ○ 出 発(5:40) - 帰幕(12:20)
下山開始(14:00) - 広河原ロッジ下山(15:30)

住田、金谷パーティ...Ⅱ尾根

Ⅱ尾根は、つららがクラックに垂れ下がり、水も流れているので引き返した。

山口、岡部パーティ...ピラミッドフェース

4日、5日は悪天の予想の為、早目下山とする。

(記 住田)

〈登攀報告〉

Cガリー大滝よりⅣ尾根

5月1日 ○

参加者 住田、金谷

タイム 大滝取付き(6:05)→Ⅳ尾根付き
(9:00)→稜線(12:45)

1P目、cガリー大滝の右手のリッジに取付き、少し直上してから左の凹角へとトラバース。トラバースしてから金谷行き詰まり、残置ハーケンにて、ピッチを切る。

2P目、凹角を強引につめて、ハング気味の所につき当ってから、左のフェースに出る。傾斜はあまりないがホールドが非常に細かく微妙なバランスを強いられる。このフェースの上部のクラックでピッチを切る。

3P目、住田、確保地点の左をシュリングで乗越しバンドに出る。ホールドは大きいと解けなかった氷が張り付いていてハンマーで割りながら登る。残置ハーケンでかぶり気味の所を乗越した直後、住田がザイルの切断していることを発見、おそらくフェースにたれていたザイルに落石が直撃したのであろう。早々に右手のブッシュの中のバンドでピッチを切る。

4P目、木をホールドに20mほど直上してから緩傾斜に出る。

ここから上部をコンテで行く。ブッシュ帯を抜けてから左へトラバースし、cガリー大滝上部の雪渓に出る。それを直上し左へトラバースしてⅣ尾根に取付く。白い岩のクラック下までコンテで行きここからザイルを出す。

1P目、傾斜のあるハングの右のフェースを少し直上し、左へフェースを攀じり、リッジに出る。

2、3、4、5P目、硬い岩のリッジを攀じる。

6P目、A₀でハーケンを利用し垂壁を乗り越す。

マッチ箱のコレへ15mの懸垂。

7P目、クラックのあるフェース。

8P目、ピンを利用してフェースを登り左へトラバース気味にリッジに出てテラスへ出る。

9P目、傾斜の緩いリッジを登りきり登攀終了。
(記 金谷)

dガリー奥壁

5月1日 ○

参加者 山口、岡部

タイム dガリー大滝取付き(6:15)→下部岩壁(7:30)→終了(11:30)→稜線到着(11:45)

1P目、草付きのフェースに所々水が流れているが問題となる所はない。

2P目、バンドからフェースへの取付きがかぶっており、フェースもホールド、スタンス共に細かい。トップは左の小さなルンゼから凹角状の所へルートを求めるが、最初の所は微妙なバランスを要する。

3P目、問題なくdガリー奥壁のハング帯の左に着く。

4P目、これからdガリー奥壁の本来ルートに入り、気持ちの良いクラックを登ってバンドに立つ。そのままこのクラックを直上するとハング気味の所に突き当たるがA₀で抜けて尚もクラックを直上する。ホールド細かく難しいバランスクライムを強いられるが、40m一杯伸ばして左手のバンドでピッチを切る。

5P目、このピッチでルートを間違っているのを知ったが、ハーケンが上に見えるのでそのままクラックとフェースを直上する。全体に細かく難しいフリックが続くが40mで城塞の下に着く。

6P目、城塞は水が流れていて、又、下から息の抜けない登攀が続いていたので、右へトラバースしてⅣ尾根の終了点直前に出た。

(記 岡部)

ピラミッドフェース

5月3日 ○

参加者 山口、岡部

タイム 取付き(7:30)ー横断バンド(8:45)ーⅣ尾根取付点終了(10:35)

1P目、dガリー大滝の上、ピラミッドフェースのずっと左側に走るdガリー側のクラックを登る。水が流れていたためアイゼンを着けたまま登るが問題なく30m程で横断バンドに着く。

2P目、ハングとハングの間の階段をコンテで抜ける。

3P目、取付きがかぶっている所から登攀開始。本来は左のクラックなのだろうが濡れていたため右のクラックから行く。しかしここは結構難しく、ハーケン3本打って25m程で核心部手前に到着する。

4P目、核心部のクラック状の凹角は確かに逆層でかぶっていて難しく、廻りに登って左側のフェースに出る。このフェースもかなり細かい。ルートブックにはA₁とあったが全くのフリー、もしくはA₀で抜けられる。

5P目、左のハーケン連打をA₀で抜けて上の草付きフェースからブッシュ帯に入り、右へトラバース気味に登ってⅣ尾根取付きに到着し終了。尚、ピラミッドフェースは今回は下部がかなり雪に埋まっていたが、夏などには高感度もあり、傾斜も相当きつく、登攀中常に頭上に逆層のハングを見ながらの登攀となりそうなので、結構豪快で快適な登攀が味わえると思う。

(記 岡部)

剣岳八ツ峰縦走

黒四ダムー内蔵助ーハシゴ谷乗越ー四ノ沢ーⅠ峰ーⅡ峰ー八ツ峰の頭ー三ノ窓ー池ノ谷ー馬場島

期間 4月29日～5月3日

参加者 明神(L)、宮本、近藤、森(保)

4月29日 ◎のち⊗ 黒四ダム(9:00)ー内蔵助平(11:45)ーハシゴ谷乗越(12:55)

黒部川を渡り、夏道を行くと道が崩れかけているらしく、人が渋滞しているため引き返し川沿いに進む。快調なペースで次々に他のパーティーを抜き去り、いつの間にか内蔵助平に着いた。広々とした内蔵助平を後に、ハシゴ谷乗越へ向かう頃から粉雪が降り始め、しだいに激しくなるのでハシゴ谷乗越にテントを設営する。

4月30日 ① 出発(4:40)ー四ノ沢出合(5:30)ー四ノ沢源頭(9:10)ーⅠ峰(11:00)ーⅠ、ⅡのCOL(14:00)

外へ出ると新雪が15cm程積もっている。まだ夜が明けきらぬ中を尾根伝いに下って行くと、八ツ峰がしだいはっきりと姿を現わし始めた。四ノ沢は登るに従って傾斜も急になり、新雪の後だけに雪がサラサラと落ちて行くのが不気味である。Ⅰ峰直下は急斜面で、ハイ松のブッシュ帯から40mフィックスしてⅠ峰に到着。Ⅰ峰の下りは岩とハイ松の出ている急な下りでCOL迄50mフィックス。そこから小さなボコが2つあり20mフィックス。宮本、森がⅡ峰の下りを偵察中、残りⅠ、ⅡのCOLへ荷物を運ぶ。Ⅱ峰の下りは雪が崩れやすく、明朝、COLからトラバースすることにして本日はここにテントを設営する。Ⅰ、ⅡのCOLは四人天がやっと張れる位の危なっかしい所であった。

5月1日 ① 出発(4:30)ーⅢ峰(8:35)ーⅤ峰(7:45)ーⅥ峰(12:25)ー八ツ峰の頭(14:25)ー三ノ窓(16:25)

Ⅰ、ⅡのCOLから長次郎側を40mトラバース、さらに40mトラバースの後、50mでⅡ、ⅢのCOLへ出る。このルートをとったのは我々だけで後ろから来るパーティーはⅡ峰からブッシュ帯沿いにⅡ、ⅢのCOLへ下っていた。Ⅲ峰はナイフリッジのピークで、下りはハイ松をピンに懸垂20m。Ⅳ峰の下りは岩角を利用して三ノ窓側懸垂20m。Ⅴ峰迄は徐々に雪被でⅤ峰の下りは残置ハーケンをピンに40m、ハイ松をピンに40m、さらに残置ハーケンにて40mと、ほとんど長次郎谷へ懸垂で下ってしまった。直接Ⅴ、ⅥのCOLへ懸垂すれば空中懸垂

となるであろうが、40mで足りるだろうか。VI峰へはザイルを出しているパーティーもあったが、ツボ足なのでノンザイル。それでも下に吸い込まれそうで緊張する。VI峰手前で前のパーティーに追いつき時間待ちをする。VI峰のフェースにはたくさんのパーティーが取付いているし、八ツ峰下半も次々と新しいパーティーがやって来るし「すごい人やなあ。」と感心する。

ピークが2つあり2つ目がVI峰の頭で、下りは残置ハーケルにて20m懸垂。そこからはずっとナイフリッジなので、スタカットでVII峰迄4ピッチ。VII峰の下りは後ろ向きに慎重に下り、VIII峰迄は雪壁を3ピッチ、頭迄50mフィックスして八ツ峰を終えた。チンネの裏から池ノ谷ガリーへは雪がグサグサで50mフィックス。落石をさけながら三ノ窓へ下ると、まさにテン

ト村といった感じであった。

5月2日 ● 停滞

昨夜来の風雨が強く、交代でテントの補強に出る。三ノ窓のデボも跡形もなく消えていて皆の表情も沈みがちであった。

5月3日 ●のち◎ 出発(11:30)ー池ノ谷二股(12:10)ー馬場島(14:35)

風強くガスも出ていて9時迄天気待ち。しばらくして、ガスが晴れてきたので池ノ谷を下ることにするが、池ノ谷はガスっていて不気味な感じである。途中デボの空きカンが見つかり官本が持つ。アッという間に下ってしまい、早月とエライ違いであった。やはり山を下るともう五月なんだという感じが、ほほをなでる風から感じられた。(記 近藤)

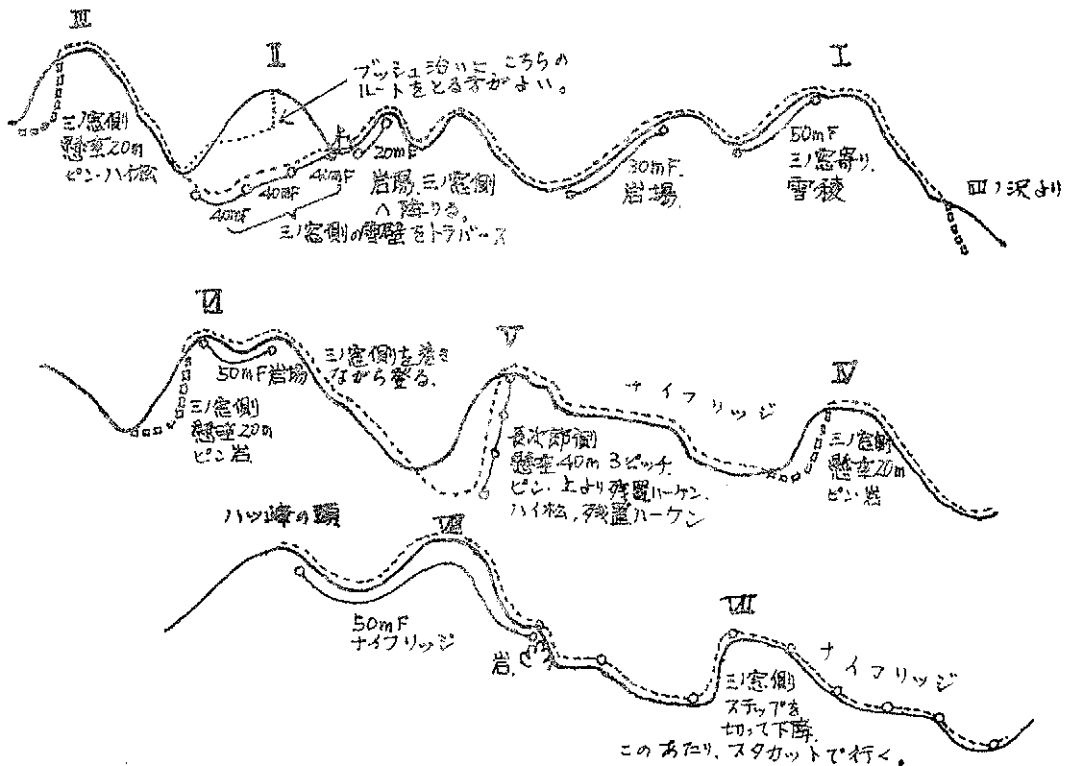


図 56. 八ツ峰ルート図

夏山定着合宿

槍ヶ岳・千丈沢周辺

BC赤岳四ノ沢と六ノ沢間の右岸台地

期 間 7月16日～7月26日

参加者 山口(L)、木嶋、宮本、吉田、重田、
森(保)、金谷、岡部(友)、広田、
浅井、片山、中田、西尾、村田

O B 高橋、松尾、佐野

夏山合宿をどこでやるかについて、リーダーを引き受けた時随分迷った。これまでの通り剣沢や淵沢で定着し、ポピュラールートを入の渦の中で登るには抵抗があった。また岩登りを中心に据えることにも疑問を感じていた。しかし、これらの事に解答を与えるにはリーダー自身が新しい行動原理を持つ必要があったが、私は部員を説得させ得る信念を持ち得ず、また臨時リーダーであるとの甘えも手伝い結局は消極的な妥協案に終わった。情熱があり継続性のある方針がない以上、クラブを絶やさないうえにも、登山学校として夏山を考えることであった。それでも千丈沢に我々だけがテントを張り、薪でハンゴウを炊く二週間は何かの形でクラブの連帯に貢献するのではないかという期待もあった。だが実際は、そうした雰囲気を作るのに不協定な性格の私は荷立つばかりであった。クラブの将来に対する悲観は私の考え過ぎかもしれず、部員達はこれからも十分積極的に山に登って行くだろう。しかし今の私には、徒勞感しかなく、このような形で現役最後の夏山を終わったのは残念な気がする。(記 山口)

<行動概要>

(概念図はP39,44図12,13,15参照)

7月16日 ① 新穂出発(9:30)→白出沢(12:20)→滝谷出合(14:50) 出発当時は元気な1年生も、滝谷出合に着く頃には、さすがにへばってしまった。

7月17日 ●のち◎ 徒渉後出発(7:40)→槍平(9:10) デポ出発(10:30)→千丈乗越(13:10)→槍平帰幕(16:20)

千丈沢雪渓上部、途中の露岩まで40mフィックスして、露岩下部にデポ。槍平に帰ると、高橋、松尾OBが来ておられる。

7月18日 ◎ 出発(6:00)→千丈乗越(8:40)→赤岳四ノ沢出合下部の右岸台地BC(10:50) デポ回収(12:50～14:20)

昨日と同じ所をフィックスして千丈沢下降。初めて仰ぐ北鎌側壁に心もはずむ。

7月19日 ◎

雪訓後、aルンゼ偵察隊(吉田、金谷)、岩場取付偵察隊(木嶋、重田)、硫黄尾根ビバーク隊(森、広田)、槍アタック隊(残り)と分散する。尙、雪訓は傾斜も緩く雪もグサグサの為、満足にできなかった。

7月20日 ①

- ・小槍ポピュラールート 小槍尾根～大槍 (吉田、岡部、佐野OB)
- ・ツルムポピュラールート (木嶋、片山)
- ・B稜～大槍 (山口、中田、松尾OB)
- ・赤岳遠足 (重田、村田、高橋OB)
- ・ワリモ沢ビバーク (宮本、西尾)

7月21日 ○

- ・小槍西壁 (山口、金谷)
- ・A稜～大槍 (木嶋、片山)
- ・B稜～大槍 (吉田、浅井)
- ・D稜～大槍 (重田、岡部、松尾OB)

7月22日 ①

- ・雪訓(ツルム基部、bルンゼ下部) (木嶋、宮本、吉田、森、広田、浅井、片山、西尾、松尾OB)

- ・滝谷ビバーク (山口、岡部)
- ・雲ノ平ビバーク (重田、金谷、中田、村田)

7月23日 ○

- ・小檜中央、ポピュラールート 小檜尾根 (広田 松尾OB)
- ・小檜北東面凹角ルート～ポピュラールート 小檜尾根 (宮本、森)
- ・北穂遠足 (吉田、片山)
- ・天上沢遠足 (木嶋、浅井)

7月24日 ○

- ・雪訓(ツルム基部、bルンゼ下部) (山口、重田、金谷、岡部、中田、村田)
- ・ツルムチムニー直上～ポピュラールート (森、広田)
- ・C稜～大檜 (宮本、西尾、松尾OB)
- ・双六谷ビバーク (吉田、浅井)
- ・双六岳ビバーク (木嶋、片山)

7月25日 ①

- ・小檜西壁 (重田、広田)
- ・赤岳遠足 (山口、岡部、中田、松尾OB)
- ・北鎌遠足 (森、金谷、西尾)

7月26日 ①のち● 出発(10:10)

滝谷定着隊、上高地下山隊、新穂下山隊と分かれて下山。

< 登攀報告 >

A 稜

7月21日 ○

参加者 木嶋(L)、片山、佐野OB
 タイム BC出発(5:30)-ピラミッドフェース(7:50)-檜ノ肩(12:30)-BC(15:00)

A稜は、さほど顕著な尾根ではなく、草付き成いは、ブッシュの連続であり、小さな岩場がところどころ突出しているという感じで、解放的な遠足が楽しめるようなルートである。B、C、D稜の地形の概要を把握するには、絶好のルートである。BCより、約2時間で遭遇するのがピラミッドフェースで、高さ約25mの容易な、クラック直上ルートである。ここを終了した後、約1時間、平坦な稜を歩くと、次なる岩場が現われる。すっかりしたカンテで馬乗り同然の姿

勢で乗越す。このピッチを過ぎると後は、容易な岩稜歩きとなり、登攀終了後、ザイルをしまい檜までの稜線漫歩を楽しむ。大檜頂上でしばし休憩の後、千丈乗越を経て、BCへと急ぐ。

(記 木嶋)

B 稜

7月20日 ①

参加者 山口(L)、中田、松尾OB
 タイム BC出発(5:35)-取付き(7:55)-ピナクル(10:20)-北鎌稜線(13:20)-BC(17:00)
 BCより六ノ沢に出、六ノ沢を一担詰めて五ノ沢ツルム直下にトラバースする。そしてツルムを見ながらcルンゼからbルンゼに入り取付く。
 1P目、取付きは洞穴状滝手前。5m程のクラックで、2m位の所にハーケンがあり、そこをあぶみで越す。腕力消耗する。

この後、コンテでピナクルまで行く。

2、3、4P目、スタンス、ホールドとも豊富な快適なリッジ。

B稜II峰を右のチョックストーン滝のあるルンゼの方へ巻く。

5P目、ツルツルのフェース。スカイフックでやっと越える。中田はその奥の滝の横をあぶみで越える。

登攀終了後、中田がバテ、ゆっくりBCへ下る。
 (記 山口)

C 稜

7月24日 ①

参加者 宮本(L)、西尾、松尾OB
 BCを出て、六ノ沢に入り、dルンゼよりC稜のゴルに出る。特にザイルを出す必要もないのでbルンゼ側のバンドを伝い、木をつかんで再びC稜へ出る。C稜は簡単な稜で、1ヶ所岩登りらしい所があるだけだった。稜線を忠実に登ると、フェイス下のハイ松のテラスに着き、ここからbルンゼ側に回りこんで、残置ピンのあるフェイス

を登る。しばらく進むと、ピナクルがあり、ピナクル下よりbルンゼ側へ約20mの懸垂下降をし、再び稜上に立つ。上部は複雑で資料にある所が分からず、そのままガラガラのルンゼを詰めて北鎌稜線に出た。(記 西尾)

ここからdルンゼ側を巻いて主稜線へ出た。
(記 重田)

小槍西壁

7月21日 ○

参加者 山口(L)、金谷

タイム BC出発(5:35)ー西壁基部(8:20)ー取付き(9:50)ー小槍頂上(11:20)ーBC(13:30)

雪訓をした雪溪(千丈本沢上部)の左上のルンゼを詰めるが、この沢は西鎌へ突き上げているので左へブッシュをこいでトラバースして、小槍に突き上げる沢に入る。右に小槍の一般ルートに突き上げていく沢を見ながら左右2本あるルンゼの左をスカットで登る。1P登った後で、正面に取付きまで続いているらしいルンゼを発見。コンテで取付きまで登る。岩壁の基部は浮石多く、落石多発。

D 稜

7月21日 ①

参加者 重田(L)、岡部、松尾OB

タイム BC出発(5:30)ーD稜取付き(8:20)ー双子岩下部(8:50)ー北鎌主稜(12:30)ー槍(14:00)ーBC(16:15)

取付きはローック岩基部のガリーで50mでコルに出る。

図 57. D稜ルート図

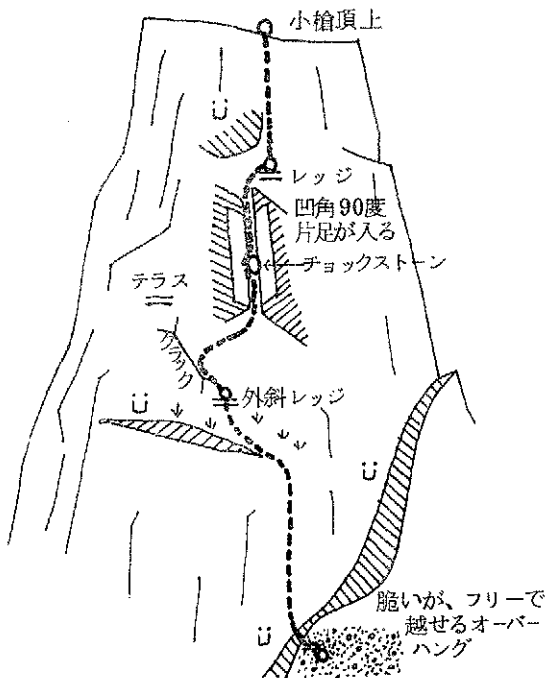
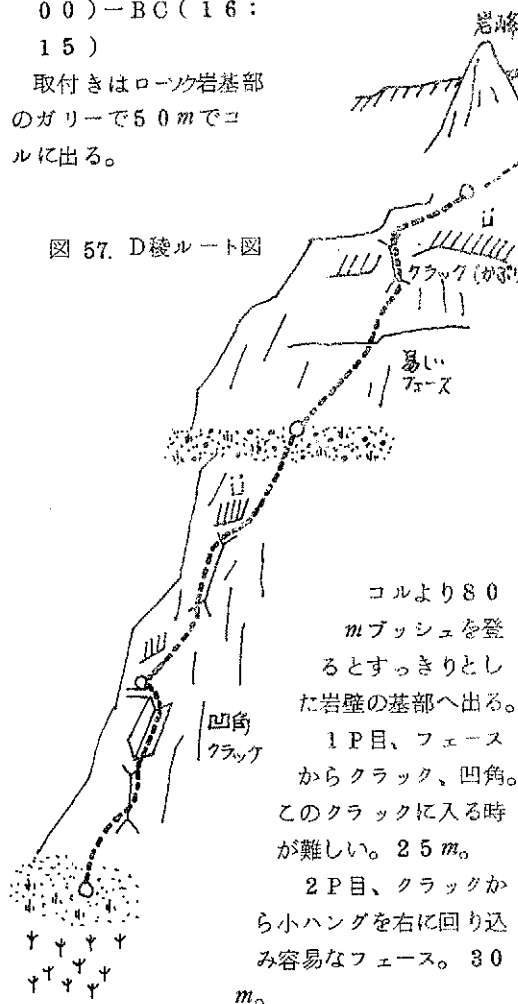


図 58. 小槍西壁

1 P目、残置ピンを利用し、強引にずり上がる。そこから上は岩が非常に脆く緊張させられる所であるが、要所にピンがある。上部の傾斜の落ちた所をフリクションで快適に登り、凹角を5 m程登った所でピンを打ちピッチを切る。

2 P目、ビレーの場所から傾斜の落ちた脆い所を慎重に登ると、圧倒的なハンクに突き当たる。そのハンクと左のかぶり気味のフェースの間の凹角状のクラックをルートに取るわけだが、上部に行く程傾斜がきつくなり、ピンは要所にあるものの腕力をかなり消費する。そこを抜けて上部が巨岩でおおわれているレッジでピッチを切る。

3 P目、上部は巨岩でおおわれて不可能なので、左手のレッジに出ると後は容易に40 mいっばいでピークに出て終了。（記 金谷）

て、ザックを吊り上げる。この時、宮本のタバコが空中に散って行く。

3 P目、同じく大きいチムニーの中を上るテラスへと抜ける。概して岩は大ざっぱである。

4 P目、ハンク気味の所をシュリンゲ1本使って乗越し、チムニーを尻と足のフリクションで直上する。快適に進むが、チムニーからテラスへの出口がイヤらしい。

5 P目、テラスからハンク気味の所をアブミで乗越し、ハーケン連打のフェースを直上する。やけにピンが多いと思ったら、左手はぼっさりと切れ落ちていた。フェースを越し右手へ廻り込むと、小楯頂上からの2回目の懸垂下降地点に出、後はポピュラールートに合流する。（記 森）

小楯北東面～ポピュラールート

7月23日 ①

参加者 宮本(L)、森

タイム BC出発(5:30)

一小楯取付き(8:10)一小楯頂

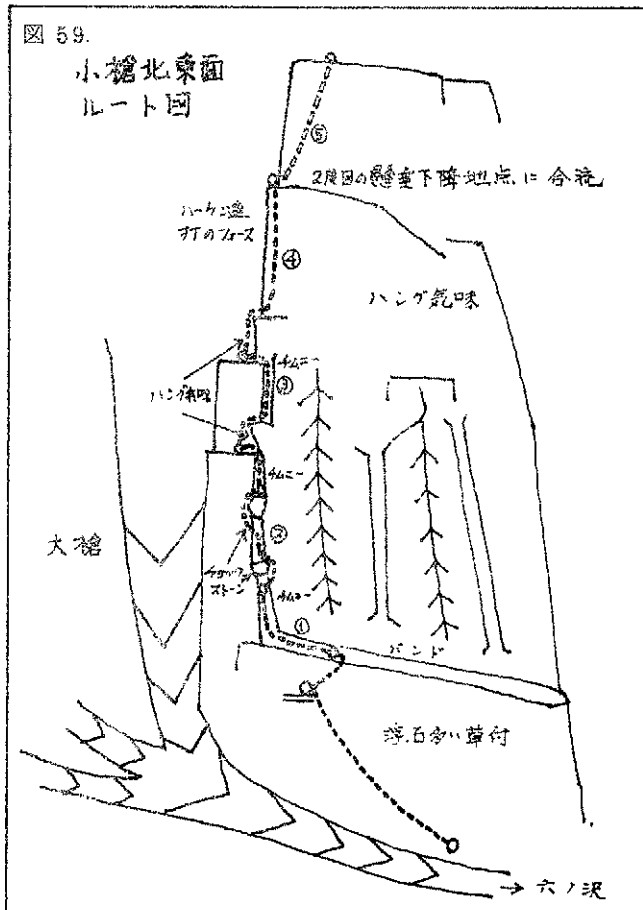
上(12:20)一大楯(14:

20)一BC(15:30)

五ノ沢を詰めるとやがて3つの沢に分かれる。我々は真中のガラガラの沢を北鎌主稜線近くまで詰め小楯の方へトラバースし、基部のバンドに達してから1番左のルンゼをルートに取った。正面も見た限りではたやすく登れそうなので試みてみたが敗退した。

1 P目、大まかなルンゼをチムニーへと登って行くが、上部ハンク気味。強引に腕力で越すと今にも抜けそうなポロポロのハーケンを見つける。さらに少し行きチムニーの中のテラスでビレイする。

2 P目、バック・アンド・ニーで今にもとび出しそうになりながらチムニーを1段上のテラスまでずり上が



ツルムポピュラールート

7月20日 ①

参加者 木嶋(L)、金谷

タイム BC出発(5:40)-取付き(6:40)

1P目、取付きから左の凹角を登るのが正常と思われるが、右に回り込み上がかぶさっている所に突き当たる。ここでハーケンを打ち、ハーケンを頼りに左にトラバースし直上しようと思ったが、岩が濡れていて、またハーケンを打ちやるとブッシュ帯に逃げる。

2P目、ブッシュ草付きを直上し左の岩をまたいで乗越し、上部の岩にはばまれた所でピッチを切る。

3P目、岩壁の基部をトラバースし、突き当りの凹角を強引に攀じる。

4P目、草付きを攀じその上部のかたい岩のスラブを快適に攀じる。上部の1枚スラブと左の凹角に圧倒される。

5P目、上部は登攀できないと判断し、右へフリクションでトラバースして右の木のああるリッジを登る。

6P目、上記と同じようなリッジを登り、気持ちのいいテラスでピッチを切る。

7P目、テラスの上の大岩とリッジの岩を強引に登り、浮石の多いリッジを登りつめ、テラス上に出る。その上部は岩がかたくフリクションも良く効き、ピンもあり気持ちのいい所である。

8P目、3ルートあるうちの正面ルートに取付き。上部は大岩がかぶさっていて、左に回り込む感じで登ると登攀終了。(記 金谷)

ツルムチムニー直上からポピュラールート

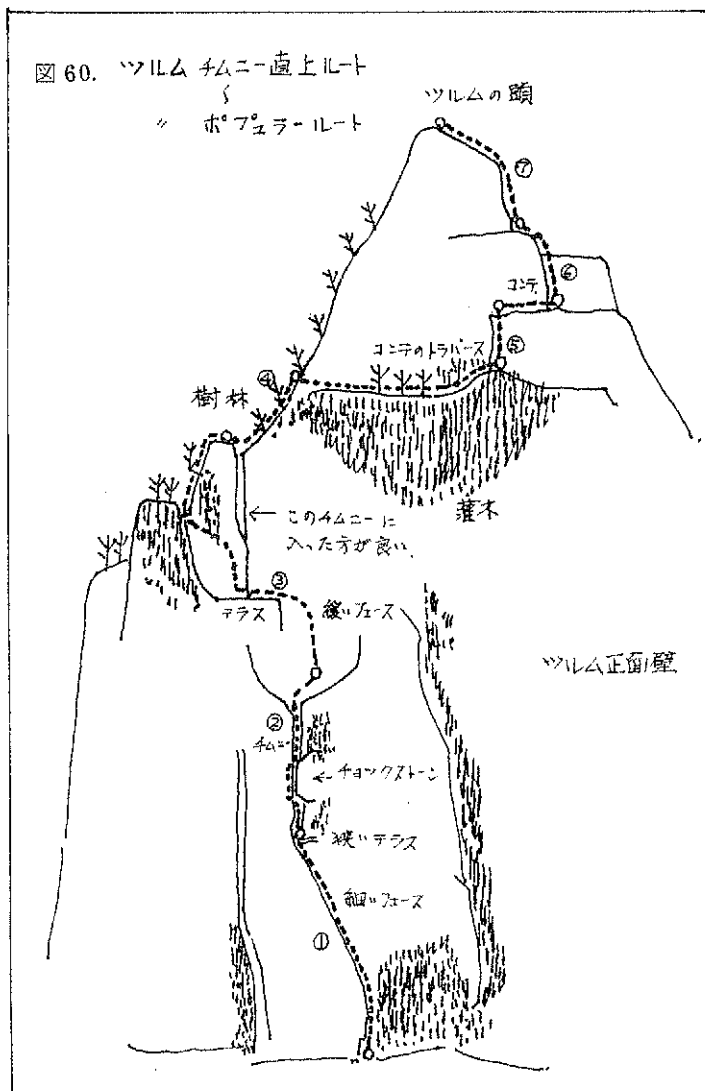
7月24日 ①

参加者 森(L)、広田

タイム BC出発(5:50)-取付き(7:20)-ツルム頭(12:55)-BC(15:00)

BCからツルムを眺めると正面左寄りに二本チムニーらしきものが走っていて、ブッシュが付いているのが見える。我々はこのうち、右側のチムニーに取付いた。

1P目、取付きはツルム基部左手の草付き。下部



は緩傾斜のフェースであるが、ホールドが細かく微妙なバランスを強いられる。それでもハーケンは要所にあるので想像していたよりは気が楽である。上部、フェースから草付きの凹角状ヘルートを求め、右手のテラスでピッチを切る。

2 P目、草付きのチムニーの直上。1ヶ所かぶり気味の所があり、ザックがつかえる。露のついた草をつかんで腕力で強引に登ると再び緩傾斜のフェースに出る。このテラスでビレイ。このピッチが核心部か。

3 P目、緩傾斜のホールド豊かなフェースを直上して左手のテラスに出る。ここから少し上のチムニーに入ろうと試みるが無理で左手を大きく巻く。ここは、左手へ少し巻くとピンがあったから、これで振り子トラバースすべき所か。

4 P目、岩の出ているブッシュの中を行く。40 m伸ばした所で、上部も同様なブッシュらしいのでツルム正面を横断するブッシュバンドをつたって右手にトラバースし、ポピュラールートに合流する。

5 P目、ホールド豊富なリッジを快適に攀じる。

6 P目、岩も硬く、ピンもある快適なリッジを登って大きいテラスに出る。

7 P目、ハンド下をトラバースして、フリクションの良く効く、硬いフェースをツルムの頭へ抜けて終了。

下降は頭から1ピッチアップザイレンの後、踏み跡をたどってC稜のゴルへ出る。これより簡単にCルンゼに下る。 (記 広田)

<遠足及びビバークの記録>

天上沢

7月23日 ①

参加者 木嶋(L)、浅井

タイム BC出発(5:40)→千天出合(7:40)→水俣乗越(12:35)→槍(14:20)→BC(15:45)

千天出合まで1時間余りだと聞いていたが倍もかかってしまう。出合から天上沢を少し進む

と丸太1本を針金で吊った吊り橋が現われる。渡るのには少々怖い所である。渡った所が北鎌の取付きらしく赤旗がベタ打ちである。1時間半も行くと沢は石ころだらけの河原となり、今まで狭かった視野がだんだん広がってきて、青空を突くような柏の勇姿が見えてくる。1,900 m地点あたりから沢は幾筋にも分かれ、水俣乗越への沢は散々捜しまわった後、やっと見つけ出した。割に目立たない枯れ沢で、所々にあるケルンを頼りに進んで行くと、上部小雪溪を経て水俣乗越に着く。これという魅力に乏しい沢だった。 (記 浅井)

赤岳(二ノ沢から三ノ沢下降)

7月25日 〇

参加者 山口(L)、岡部、中田、松尾O B

タイム BC出発(5:30)→二ノ沢出合(5:50)→赤岳I峰(9:30)→赤岳II峰(10:00)→三ノ沢出合(11:20)→BC(11:30)

二ノ沢を詰め早く稜線上へ行こうとして、左へ左へとルートをとった為、猛烈なブッシュの尾根上に出てしまった。左へ行かず右の沢を詰めるのが正しいようである。しかし、ブッシュも長くは続かず、やがて踏み跡らしきものが現われ、稜線に出る。主稜線上は硫黄の臭気がきつく、岩は脆く、剝離し易い。II峰を西鎌の方へ下った所が三ノ沢上部のゴルで、三ノ沢には崩壊寸前の雪溪が残っていた。 (記 岡部)

北鎌主稜線

7月25日 ①いり ●ニ

参加者 森(L)、金谷、西尾

タイム BC出発(5:35)→千天出合(7:20)→取付き(7:50)→2,426 m(11:20)→独標(12:20)→槍→BC(16:10)

かの有名な北鎌尾根を踏めるとあって期待に胸を弾ませて取付いたが、もう完全に道がついていて、正直言って少し期待はずれの感がしないでもなかった。しかし、積雪期ともなればその名の示す通りの難稜となることは十分期待できる。

下半は岩場混じりの樹林の中、アップダウンが激しく、次々に現われる急登には閉口した。初め下降するつもりであった独標沢は、上部から見る限りいかにもいやらしそうで、時間的にも十分な余裕があったので大槍を廻ることにする。天は、せっかく来たのだから1日で北鎌をこなしてやろう、という気持ちも十分にあったのだが。独標を越すとガラリと様相は変わり、樹木はほとんど見当らず、ただガラガラの岩が連続するだけである。大槍最後の急登を登りきった時にはさすがにぐったりであったけれど、多分に充実した遠足であった。（記 西尾、森）

硫黄尾根

参加者 森（L）、広田

7月19日 ◎ BC出発（13：20）—小次郎沢出合（15：35）—小次郎沢のコル直下BS（17：45）

千丈本沢で雪訓をした後、2人分かれて千丈沢を下る。下ったものの小次郎沢をはっきり確認できず、手間取る。小次郎沢は比較的緩いガラガラの沢でコル直下にBSを見つける。

7月20日 ① BS出発（5：35）—硫黄岳（8：40）—ブッシュピーク（14：40）—赤岳I峰の手前のピーク（17：10）—赤岳I峰（18：30）—中山沢コルBS（19：10）

小次郎沢コル直下からブッシュをこいで接線の上に出ると、かすかながら踏み跡がある。硫黄岳を越えるまで猛烈なブッシュであるが、越えると突然お花畑に出た。硫黄岳からの下りは身を没するハイ松のブッシュこぎの為、方向が分かりにくい、右手寄りにこのお花畑を目指せば良い。2,511mの下りから赤茶けた岩が始まり、

次々と現われる針峰群をスタカット、コンテで乗り越えて行く。赤岳I峰の2つ手前のピークが最も危険で、千丈沢側に垂直に切れおちている。ここはリッジ通しに残置ハーケンを利用して20mアップザイレン。赤岳I峰の登りもルートによっては行き詰まってしまう所である。中山沢のコルは結構広く、ここをBSとするが、水がきれいなのでルンゼに残っている汚い雪溪をとかす。

7月21日 ○ 出発（4：45）—赤岳II峰（7：00）—赤岳III峰（8：00）—赤岳IV峰（8：45）—赤岳を抜けてブッシュへ（9：05）—西鎌稜線（11：10）—BC（14：40）

コルからコンテで行く。赤岳IV峰を越すまで岩は相変わらず崩れっぱなしで、落石の音が絶えない。IV峰を抜けるとブッシュが始まるが水がないので力も入らない。しかし西鎌に近づくにつれ、踏み跡が明瞭になってくるので助かった。硫黄尾根の核心部はブッシュピークから赤岳I峰辺りであろうが、硫黄岳から見る限りでは、雪がつけば小次郎沢のコルから末端側にある前衛峰周辺も結構危険に思える。

（記 広田、森）

ワリモ沢

参加者 宮本（L）、西尾

7月20日 ① BC出発（5：30）—千丈出合（6：55）—ワリモ沢出合（9：45）—赤沢出合（13：00）—三俣BS（16：20）

入って間もなく、ゴーロを少し高巻いて支流の滝下に出る。河原の切れる所から膝から腰位の徒渉を3回した後、河原を進むと、本流20mの滝にぶつかる。これは、ゴルジュの出口にあり、上は河原で平凡である。右岸を登って滝口に出たが、滝の上は、徒渉もできず右岸が壁で前進できないのでハーケン1枚を打ち、懸垂下降の後、引き返すことにした。再び徒渉3回の後湯俣川に出る。ここから夏道を三俣へ向かう。

何とも甘く見過ぎた為の敗退であった。

7月21日 ① 出発(4:30)-双六(5:45)-BC(8:40)

西鎌をただひた走りにBCへと駆ける。

(記 西尾)

滝谷・ドーム

参加者 山口(L)、岡部

7月22日 ① BC出発(5:20)-檜(7:45)-北穂(12:00)-ドーム中央稜取付き(14:05)-ドームの頭(15:15)

まあまあのペースで北穂のテント場に着き、登攀用具のみ持ち、ドーム中央稜へ向かう。

1P目、凹角から容易な岩稜40m。

2P目、凹角25m。最上部の凹角から外へ回り出る所いやすい。

3、4P目、傾斜の緩い容易な岩稜。

後の考察より、このルートは正規のドーム中央稜の右側の凹角に取付いたものとわかった。しかも、三尾根をあまり下まで下らなかったため、この登攀はドームの上部のみだった。

7月23日 ① 出発(5:00)-ドーム中央稜取付き(5:45)-ドームの頭(7:50)-BCへ出発(9:15)-檜(13:00)-BC(14:30)

三尾根を下り、取付きまでトラバース。

1P目、凹角40m。取付きがかぶっていて、いやらしく、腕力を要求される。スカイフックで乗り切る。

2P目、リッジ25m。これは「日本の岩場」に出ている40mいっぱいいくピッチを25mで切ったもの。

3P目、リッジ15m。(40mピッチの残り)

4P目、かぶり気味の凹角の手前までの容易な岩稜。

5P目、かぶり気味と云うより、明らかに上部がかぶっている凹角の下部は、レイバックで登ると快適。フェイスの登り方でいくと、腕が

バテる。

6P目、容易なリッジでドームの頭に出て登攀終了。

急いでツェルトを撤収し千丈沢BCへと向かう。

今回の様にアプローチが極端に長い場合は、腕力、脚力共に著しく疲労する為、普段、簡単に乗越えている所でも、非常に困難になるということを考慮する必要があると思う。

(記 岡部)

双六谷

参加者 吉田(L)、浅井

7月24日 ① BC出発(6:00)-双六小屋(10:00)-九郎右衛門谷出合(15:45)-蓮華谷出合(16:15)-BS(17:30)

双六谷を3時間も行かないうちに浅井のワラジが半分くらいになってしまい、九郎右衛門谷出合に着くまでには、使いのものにならなくなってしまった。今日は九郎右衛門谷の最初の大滝を越えたあたりでビバークする予定であったが、その大滝を越えるのに一旦蓮華谷を遡行しかけたものの、割と困難で、時間も遅くなってきたので少し引き返したところでビバークする。

7月25日 ①のち● BC出発(6:45)-双六南峰付近(14:00)-双六小屋(16:00)-BC(19:00)

昨日のように一旦蓮華谷を遡行し、小屋根を越えて九郎右衛門谷に入るはずであったが、思うように進めず、時間的にも切迫してきたので、あきらめて双六から派生している尾根を登って、双六岳へ向かう。尾根は、後半すごいブッシュでかなり疲れた。双六南峰に出たあたりでガスってきて、位置がわからなくなったが、やっと双六小屋に着いた時には、ほっとした。西鎌を帰る時には雨も降り出し、散々だった。

(記 浅井)

夏山縦走

南アルプス縦走

甲斐駒—仙丈岳—北岳—塩見岳—赤石岳—聖岳—光岳—寸又峽

期 間 7月28日～8月7日

参加者 広田(L)、岡部(安)、中田、村田

定着からの下山の疲労が尾を引いたのか、北沢峠への八丁坂で一年生がバテ気味だったので、2日目は甲斐駒アタックで打ち切った。3日目、両俣小屋まで予定したが、無理であろうと判断し、高望池に設営。4日目は北岳の登りを考えると、馬鹿尾根通しに熊の平へ行った方が負担が少ないと考え、5日目に北岳をアタックとした。豊鳥岳へも足を延ばそうと岡部の提案だったが、長丁場の山行故、以後の負担になってはいけないと思い、がまんしてもらった。あとは、ほぼ予定通り行動できた。

2年は怠け者と最初からあきらめたのか、1年生は色々な仕事をよくやってくれた。2年生2人、1年生2人のメンバー構成は、仕事の区分、協力もスムーズに行なわれ、気持ちよく、怪我、事故もなく山行を成功させた。

(記 広田)

7月28日 ① 出発(8:55)—丹沢小屋(12:50)—北沢小屋(16:30)

計画どおりの買出しができず、食料への一末の不安を感じながらも縦走への第一歩を踏み出す。八丁坂の単調な坂道を詰めて北沢峠小屋に着く。

7月29日 ① 出発(5:50)—双児岳(7:20)—甲斐駒ヶ岳(8:45)—BC(11:20)

軽装で駒ヶ岳アタックとする。双児岳から駒

ヶ岳の間、2級まがいの岩場もあって楽しい思いをする。

7月30日 ① 出発(5:30)—小仙丈岳(8:50)—仙丈岳(11:20)—高望池(14:25)

小仙丈の登りと、馬鹿尾根と、カンカン照りつける太陽にバテてしまい、高望池までしか進めない。それにしても馬鹿尾根の倒木にはまいった。

7月31日 ① 出発(6:00)—三峰岳(12:50)—熊ノ平(14:40)

野呂川越で北岳を廻るつもりであったが、1年の状態思わしくなく、熊の平コースを進む。それでも倒木帯に悩まされ、やっとの思いで三峰岳に着く。

8月1日 ① 出発(4:40)—間ノ岳(6:15)—北岳(8:10)—熊ノ平BC(11:20)

サブザックで北岳に向かう。雪溪の残る山腹に目をやりながら中白峰に来ると、目の前にくっきりと北岳が浮きあがってきた。鎖をつかんで山頂へ出るが、思ったより狭い山頂であった。

8月2日 ① 出発(5:00)—塩見岳(9:40)—三伏小屋(13:10)

塩見岳からが曲者で、山腹をぐるっと巻いて本谷山へ出るのであるがニセのピークといえるものがある。おまけに三伏峠小屋を目前に、ひどい夕立ちとなりびしょ濡れになって小屋に着く。

8月3日 ① 出発(5:05)—小河内岳(7:05)—高山裏避難小屋(10:10)

8月4日 ① 出発(5:00)—荒川岳(7:15)—赤石岳(10:40)—百間祠CS(12:25)

荒川岳から中岳へ散歩を楽しんだ後、ガラ場を下る。赤石岳は歩いていっているうちに通り過ぎてしまったという感じである。

8月5日 ① 出発(4:50)—兎岳(8:25)—聖岳(10:20)—聖平CS(11:50)

ツェルトをかぶってガス待ちの後、聖岳へ向かう。縦走最後の3,000m級の山とあって、

登りきるのが惜しい登りであった。

8月6日 ① 出発(5:05)→茶臼山(8:05)→光岳小屋(12:15)→信濃俣(16:20)

上河内岳からお花畑の続く、本当に南アらしい感じのする縦走である。そして、光岳を見た瞬間、いよいよクライマックスに入ったことを感じる。

8月7日 ① 出発(5:00)→林道に出る(7:25)→寸又峽温泉(11:40)→千頭駅(14:20)

寸又峽目指して駆け降りる。林道では車に拾ってもらって良い思いをした。(記 村田)

雲ノ平～剣岳縦走

双六→雲ノ平→薬師岳→五色ヶ原→立山→剣岳→馬場島

期間 7月28日～8月5日

参加者 森(保)(L)、宮本、浅井、片山

今山行は全く好天に恵まれ、何の苦勞もすることなく無事馬場島まで完走した。今や登山道も整備され、登山者も数多い北アルプス縦走は敬遠されがちであるが、山の初心者にとっては今尚魅力的で、今回は3,000mの稜線慢歩をおおいに楽しんだ。また沢登りを加えたのは割と好評で、山を駆け巡る私の理想に1歩近づいたものだった。しかし1年生の感想を聞くと、沢登りは良かったが縦走はただしんどかったとの返答に、リーダーとして複雑な気持ちになってしまう。縦走とはただ重い荷物をおかつぎ歩き回るだけ、そこに残ったものは重荷に耐えた苦痛だけ、といったものではないと思うのだが。

(記 森)

7月28日 ① 新穂出発(7:20)→大ノマ乗越(13:30)→双六池(16:45)

ワサビ平まで長い林道をただひたすらに歩いて、大ノマ乗越への登山道に入る。夏の太陽が

照りつける中、3,000mの稜線までは苦しい登りである。

7月29日 ① 出発(6:15)→三俣山荘(9:15)→祖父岳(13:15)→雲ノ平(13:50)

背後に定着を行なった北鎌を控えて稜線慢歩が始まる。三俣から宮本は直接雲ノ平に入り、他は鷲羽のピークを踏み、祖父岳を経て雲ノ平に下る。

7月30日 ①

宮本、片山パーティー→立石遠足

出発(5:55)→高天原(9:30)→金作谷出合(14:20)→帰幕(18:10)

立石までのつもりがどこでどう間違っただのか、金作谷出合まで行ってしまい、あわてて引き返す。

森、浅井パーティー→赤牛沢ビバーク

出発(6:10)→高天原(9:35)→赤牛沢出合(11:20)→赤牛岳稜線BS(14:10)

翌31日、BS 出発(5:10)→水晶岳(7:35)→帰幕(9:45)

黒部源流は例年になく水が少ないので赤牛沢出合まで楽に行ける。もっとも我々も出合を見過ごして通り過ぎてしまったのだが。遡行は緩やかな滑りに始まる。小さな滝を幾つか過ぎ、雪溪のトンネルをくぐったりして進むと、しだいにガレ沢となり、そのガレが赤牛稜線までつながり赤牛沢は終わる。緑少なく生気の乏しい沢であった。稜線のハイ松の中にBSを求め、翌日は雲ノ平BCまで地下足袋で駆ける。

7月31日 ①

宮本、片山パーティー→晴天休養

8月1日 ①のち② 赤城沢遡行 出発(5:35)→赤城沢出合(8:45)→中俣乗越(11:55)→黒部五郎岳(12:40)→三俣山荘(15:30)→帰幕(16:55)

宮本はこの朝横尾に向かい、我々は赤城沢を楽しみたく祖父沢を下降する。出合は美しいトロとなり、その後は滑床に小滝が連続する生氣あふれる楽しい沢である。中程の大滝は左岸に

巻き道があり難無く通過する。中俣乗越からガスリ始めたので、黒部五郎のピークを踏んで急いで帰幕する。

8月2日 ① 出発(6:10)―薬師沢出合(9:10)―太郎小屋(13:50)

雲ノ平定着を終え、太郎を目指し出発する。太陽はあいかわらずジリジリと照りつけ、太郎のテント場にやっとの思いでたどり着く。

8月3日 ① 出発(4:50)―薬師岳(7:00)―スゴ小屋(10:15)―越中沢岳を越えたコル(15:20)

あまりに早いスゴ小屋到着に五色を目指すことにする。水がないので水制限をしていたところ、真夏の太陽に負けてしまって越中沢岳手前のピークでダウン。1時間の昼寝の後出発するが越中沢岳を下ったコルで力尽きる。

8月4日 ①のち②ニ 出発(4:55)―五色ヶ原(6:20)―一ノ越(10:00)―剣沢(13:30)

立山を越えるが、雄山はまるでお祭りのようである。我々はそれを嫌って剣沢目指して一目散に駆け降りた。夕方、久しぶりに雨が降る。

8月5日 ①のち③のち④ 出発(4:45)―本峰(8:00)―馬場島下山(13:25)

本峰1番のりを目指す、キスリングでは思うに進まず、後から来る人に次々と追い抜かれる。人の多い頂上を早々に馬場島まで走り降りた。(記 片山、浅井、森)

滝谷～西穂縦走

滝谷IV尾根、ツルム正面壁

北穂―奥穂―西穂縦走、双六谷廻行

期間 7月26日～8月1日

参加者 重田(L)、山口、金谷、西尾

今回の山行で最も反省すべき点は、滝谷における転落事故であろう。幸いけがもなく無事であったが、パーティーの安全をはかるべきリーダー

―自らが転落したということは、やはりリーダー自身の山行に対する安易な気持ちということについて考えなければならない。リーダーとしての自覚、もっと慎重な態度をもって山に対すべきであった。

槍穂の縦走および双六谷廻行は晴天に恵まれ、最終下山日より1週間も早く、全員無事下山した。(記 重田)

7月26日 千丈沢出発(10:10)―槍ノ肩(13:30)

7月27日 出発(6:15)―南穂(8:25)―北穂(12:15)

7月28日

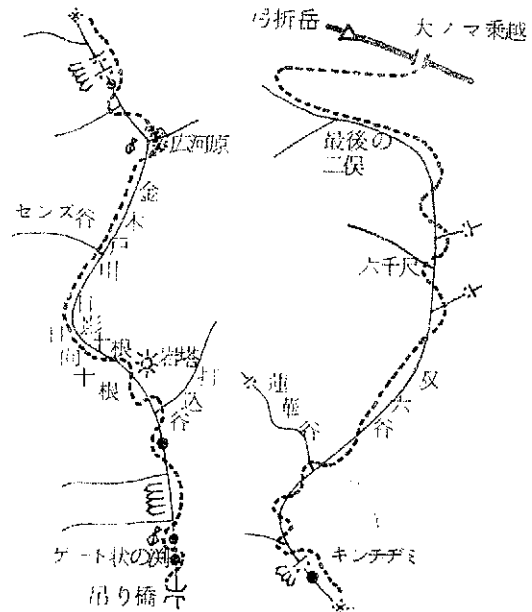
重田、金谷パーティー…ツルム正面壁

山口、西尾パーティー…IV尾根

7月29日 出発(5:20)―奥穂(8:10)―ジャンダルム(9:10)―天狗のコル(10:05)―西穂(12:20)―西穂山荘(14:00)―小鍋谷飯場小屋(15:50)

西穂山荘までのつもりが思ったよりも早く新穂へ下山した。西穂平周辺は背丈をこす笹や草が茂って二度と行く気のしない所である。

図 61. 金木戸川概念図



7月30日 出発(9:30)ー嘗林畧ゲイト前(10:35)ー広河原北陸電力ダム(12:50)ー吊り橋(13:05)ーCS(14:10)

吊り橋よりわらじをつけて河原へ降りるが、すぐに淵があって30分ほど高巻く。徒渉を2回ほどして進むと、ゲート状の淵があった。とても美しい所である。ここは、左岸から岩棚を伝い、途中で右へ渡って高巻いて通過する。もう1つ淵を右岸を高巻いて通過し、しばらく行くと砂地の所にテントを張る。

7月31日 出発(7:10)ー打込谷出合(10:45)ーセンス谷出合(14:35)ー広河原(15:10)

最初の淵を過ぎると滑滝があり、ゴルジュに入る。左岸沿いにつるつるの壁をへつりながら進む。ゴルジュの奥には3mほどの滝がある。滝の落口にシュリンゲが見えるが通過を諦めて戻り、そのまま高巻く。すぐに4mほどの滝があり、河が右へ折れると、小滝や淵、巨岩が打込谷出合を過ぎるまで続く。左岸は岩塔状で下に滝がある所を過ぎると変化のない流れになり、ゴーロの中を左岸伝いに進む。単調な巨岩の乗越しで疲れる。屈曲部にはロープがフィックスされており、それ伝いに右岸に渡る。すぐにセンス谷出合で、すぐ広河原に着く。

8月1日 出発(7:00)ー蓮華谷出合(9:45)ー二俣(14:30)ー新穂下山(17:50)

小ゴルジュを2つほど過ぎると、大きな淵があり奥には2m弱の滝が懸っている。左岸を高巻いて通過する。徒渉したり、大岩をへつったりしながら進むと、キンチヂミになる。ひざ上の徒渉の後、左岸のバンドを伝って進み、大岩の間を空身で登り通過する。そこから徒渉をくり返した後、蓮華谷出合に着くが、予定を変更し、双六本谷を詰めることにする。何の変哲もない普通の谷で、六千尺の滝というのがあるはずだが見当たらない。最後の二股より左岸伝いにある小道を伝って行くと、水はすぐに枯れ

てしまう。右上に道が見えた所で直上し、小池新道に入った。(記 西尾)

下又白谷とヒシ形岩壁

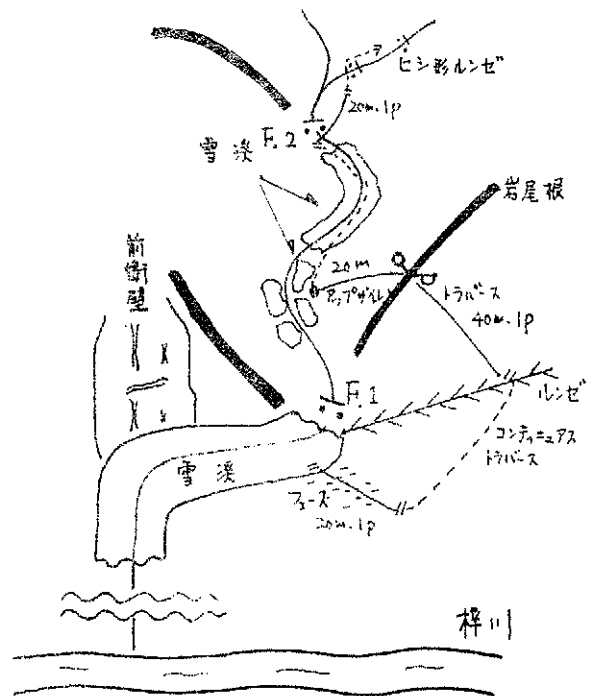
期間 8月1日～8月2日

参加者 山口(L)、岡部(祐)

8月1日 ①のち● 徳沢出発(7:25) F₁(9:05)ーF₂上(12:55)ーBS(14:00)

梓川を徒渉して対岸の道を少し下り、環境庁の立て札の所より入る。(赤紐有り)幾つもの倒木を越えて、30分も進めば、急に視界が開

図62. 下又白谷下部ルート図



け、雪溪が見えてくる。雪溪に取付いてからは、図62参照。F1の下で、雪溪は大きく口をあけており、とても近づけない。とにかくすごい勢いで落ちているようだ。このルート中、40mのトラバースの草付きが、草付きとアンサウンドロックで泣かされる。F2をセカンドが登っている時、雷が轟き、にわかの大粒の雨。またたく間に、壁は滝のようになる。先程濡れないように雪溪の下を急いだのがばからしい。すっかり濡れてしまうが、ツェルトを被って雨の治まるのを待つ。ヒシ形ルンゼの水を、真正面に浴びながら30分登り、右岸のオーバーハングの下をビバークサイトとする。ここはほとんど水がかからない。目標のヒシ形岩壁の黒々とした姿がわずかに見える。

8月2日 © 出発(6:30)ー登攀開始(7:20)ーピナクル上(12:10)ー(これより下降)ー取付き(13:30)ー奥又の池を経て新村橋(18:00)

ビバーク地すぐ上の4m程の滝を越すのにザイルを使う。取付きは、ヒシ形岩壁のほぼ中央に位置するルンゼ内にボルトがある。我々は岩の多い所をつないでいった。ここの草付きは、一見やさしそうであるが、いざ取付くとかなり苦しい。テラスに出る手前は、草付きのオーバーハングのようになっていて、はい上がるように登る。この辺りから傾斜がきつくなり、ハーケン連打の凹角まで40m水平にトラバース。最初、草付きを行くが、凹角まであと3mの所でバンドが消え、必死で戻ってくる。この間、手にした岩は全て動いていた。気をとりなおし、一段下を行く。凹角中央には、リスが走っており、ハーケン連打だが、これは全て効いていない。トップが登攀中、手で引いただけで2本が抜ける。ハンマーでたたいても、リスがどンドン広がってゆきそうだ。ハーケン3、クサビ1を打ち足し、スカイフックを数回使用してなんとかピナクルにたどりつく。このピナクル直前の5m程のトラバースは特に悪く、かぶり気味の所に1本のハーケンもない。その上、乏しいホールド、スタンスは動いている。(この1Pにトップは2時間以上を費した。) 苦しい姿勢でハーケン

を打とうとするが、リスが広がりどうしようもない。いつ足場がくずれるかわからない所である。ピナクルは片足が1本立つだけで、そこからスッパリ切れ落ちている。右上へ、真新しいボルトが続いていた。すこし偵察してみるが、今回は、ここまでで下降することにする。空は、今にも雨が降りそうだった。40m、40m、20mの懸垂で、取付きに戻る。これより奥又の池を経て下山。

付1 ヒシ形ルンゼは滝(いづれも5m以内のチムニー状)も数本あり、側壁がボロボロの割には、川床が堅い。F2より2〜3時間で稜線に出られるだろう。そこより30分ブッシュをこげば、奥又の池である。

付2 「日本の岩場Ⅱ」には、我々の登ったところは、Ⅲ級なのだが、我々の実力不足か、とてもそんなものではなかった。又下降した跡が随所にみられたが、少なくとも、1パーティーは完登していると思われる。ヒシ形岩壁は、我々の印象では、困難というよりも、危険な壁に思えた。
(記 山口)

秋山個人山行

鹿島槍〜五竜岳

期 間 10月8日〜10月10日

参加者 金谷(L)、浅井

10月8日 ©のち● 大谷原出発(7:35)ー高千穂平(10:50)ー冷地(13:10)

大谷原から、かなり頻繁にダンブカーの通る

林道を1ピッチで西俣出合に着く。ここより赤岩尾根に入るが、この頃から、雨がぼらつき始めた。急坂が続きかなり疲れる。所々にはしごがあるが、登りにくいしごである。しとしと降る雨に雨具を着る機会を失い、高千穂平に着くころは2人ともぐっしょり濡れていた。やっとのこと稜線に出ると横なぐりの雨であった。

10月9日 ①のち● 出発(6:00)ー布引山(7:10)ー鹿島槍南峰(8:05)ー五竜岳(13:50)ー五竜山荘(15:10)

冷池小屋で水2ℓを買い出発する。晴れてはいたが何となく雲行きが怪しい。鹿島槍までは難無くたどり着く。遠く槍の穂先まで見渡せ近くは剣のふもとの紅葉が美しい。ここからキレット小屋に着くまでに空は雲に被われ、着いた時には完全にガスってしまった。長居は無用と小屋を早々後にして五竜に向かう。とたんに雨がパラパラ降り出してきた。昨日の二の舞は踏むまいとさっそく雨具を着込む。五竜までの道のりは大変長く、行けども行けども視界20mのガスの中からピークが次々現われ、いつかは着くだろうと諦めた頃にやっと頂上に着いた。

10月10日 ① 出発(6:45)ー中遠見山(8:25)ー遠見小屋(9:40)ー神城駅(11:15)

遠見尾根に出るのに白岳をトラバースして、西遠見山の手前まで出た。中遠見山までの道は平坦で歩きやすいが、中遠見を経てスキー場に至るこの道は、あまりにガラガラしすぎている。

(記 浅井)

山岳部に入ってリーダーとしての初めての山行だけに、印象の深い山行であった。今までは、言われるがままに出発し休憩していたので、たいへん気の使った山行であった。元来私は雨男としてクラブでも定評があったが、この時も大谷原でタクシーを降りた時から雲行きが怪しくなり、とうとう途中で降り出した。結局いつものように冷池小屋についた時は必ず濡れ。でも次の日、ほんのつかの間ではあったが視界に恵まれ、剣、立山など展望出来たのはついていた。

とにかく1年と2人だけなので、ちょっとガスるといつになく不安になったが、無事神城駅に着いた時は充実した感で一杯であった。

(記 金谷)

荒川本谷遊行

期間 10月9日～10月11日

参加者 広田(し)、村田

10月9日 鷲ノ住山(10:00)ー荒川橋(11:15)ー北沢出合(13:50)ー荒川本谷(14:50)

発電所から道路に出るまで、あるいは熊の平に出るまでは、道がガケになっている。全体的に道は荒れはてていて、ルートファインディングは困難である。

10月10日 出発(6:20)ー白滝(6:50)ー荒川出合(10:50)ー農鳥小屋直下(18:20)

前日、天気よかったので、水量に心配することはなかったが、アスナロ沢と荒川本谷の出合を間違えたので、農鳥岳の山頂に続く稜線に出た。正午頃よりガスが出始め、周囲の状況がつかめない。引返すのも危険であったので、ブッシュをこいで西へ西へと進んだ。(農鳥小屋の山腹に出るまで2つの沢を渡る。)少しのガスの晴れ間から、我々のルートが正しいことを確信し、山腹の平らな所にテントを設営する。

10月11日 出発(6:30)ー農鳥小屋(7:30)ー間ノ岳(8:55)ー八本歯の科尔(11:40)ー広河原(15:20)

前日の予定では、農鳥小屋まで行くことになっていたが行けなかったで、そのロスを取り戻すべく、早々に出発する。八本歯の科尔へ通じる道が発見しにくかったし、また、八本歯の科尔から大榎沢へ出るまで少し危険であったが、無事に広河原に着いた。(記 村田)

自分なりにルートを調べて行ったつもりなのだが、ルートを間違ってしまった。尾根に取付

いて登って行くうちガスで視界がきかなかつたので磁石を見ていると、どうも方向がおかしく間違つたとわかつた。この尾根を下降することも考えたが、かなりの急なブッシュ帯なので谷と尾根をトラバースして、正しい尾根に行くことにした。ガスが晴れて農鳥小屋が見えた時にはホッとした。地図の見方、ルートのとり方は、難しいとつくづく思った。夏の縦走で苦勞した馬鹿尾根は紅葉で美しかった。(記 広田)

11月偵察山行

冬の対象として明神岳、小窓尾根、毛勝西北尾根を、春山として宇奈月尾根を経て西谷の頭までをそれぞれ偵察した。特に小窓隊はチンネの登攀を行ない、その結果、冬のチンネが非常に困難なものになるということが予想される。我々の場合は、冬の壁の経験が全くない者ばかりなので不安はぬぐえないが頑張ってもらいたい。

春は、宇奈月尾根から北方稜線を経て早月尾根への縦走を考えており、このために毛勝山にデポを置いたが、結構ブナクラ谷までの北方稜線は気の抜けない箇所が幾つかあり、リーダーシップを次の代へ譲ることもあって気をつけてもらいたい。(記 明神)

毛勝山西北尾根偵察

宗次郎谷出合→毛勝山→釜谷山→猫又山→ブナクラ乗越→赤谷山

期 間 11月1日～11月5日

参加者 明神(L)、渡辺、広田、西尾

11月1日 ①のち● 取付き(8:25)→

主稜線(10:50)→1,400m(13:00)→1,500m(15:00)

阿部木谷途中の橋より西北尾根に取付く。ブッシュの中にはかすかながら踏み跡があり、赤旗もしばしば目に付く。1,550m付近のブッシュを切り広げてテントを設営する頃より雨となり、コッヘルで水を集める。

11月2日 ●のち◎ 出発(5:35)→1,650m(8:00)→2,000m(14:40)

雨の降るなか懐電をつけて出発する。1,700m付近まで尾根はやせているが、そこを過ぎると池端が現われ始め、草原といった感じになってくる。

11月3日 ◎のち① 出発(5:25)→2,151m(8:30)→毛勝山(11:35)→釜谷山(14:15)→釜谷山を下ったコル(14:40)

毛勝山北面は草付き、そしてダケカンバとハイ松の濃いブッシュである。頂上でデポを木にくくりつけた後、稜線東側の草付き斜面をへつるようにして進む。釜谷山より踏み跡に従い、二重山稜の鞍部にテントを設営する。雲海が出て、剣、立山連峰が美しい。

11月4日 ◎ 出発(5:05)→ブナクラ乗越(10:45)

猫又山の下りは尾根が入り混じって複雑、再三トラバースしたりしてブナクラ乗越に着く。これより、渡辺、広田が赤谷山頂上まで偵察し、水がないので明神がブナクラ谷を下る。

11月5日 ◎のち① 出発(7:00)→馬場島下山(12:00)

中程、壁が切り立っている所が1ヶ所あるが問題なく馬場島へ下る。(記 西尾)

〈偵察報告〉

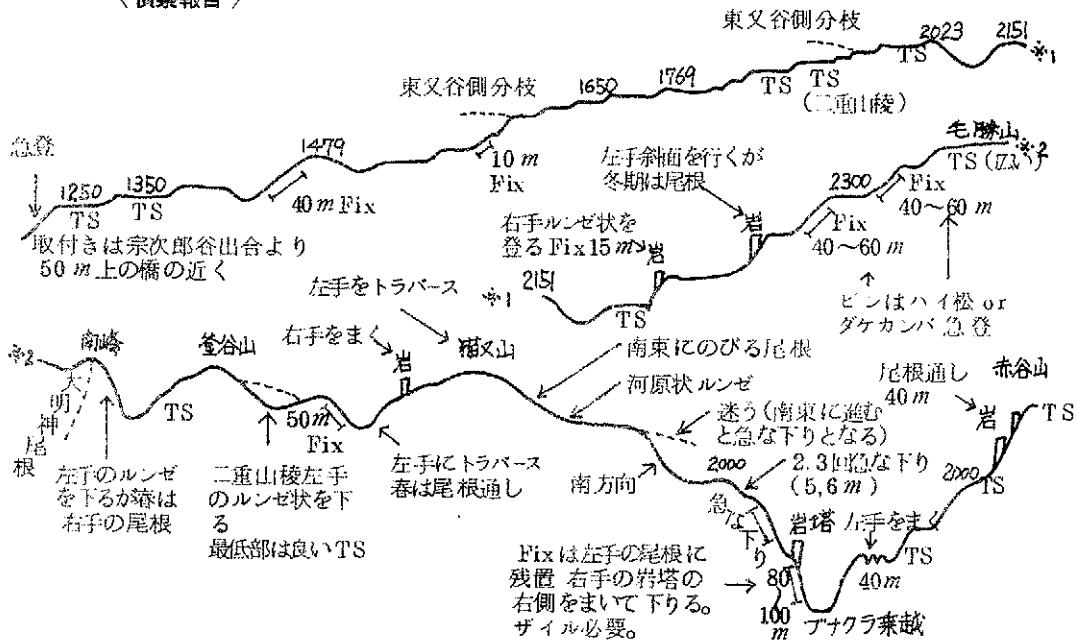


図 63. 毛勝西北尾根～赤谷山ルート図

宇奈月尾根偵察

僧ヶ岳一駒ヶ岳一滝倉山一ウドの頭一西谷の頭

期間 11月1日～11月5日

参加者 木嶋(L)、森(保)

11月1日 ① 宇奈月出発(9:20)一避難小屋(13:00)一1,431mを越した所(14:40)

宇奈月の役場にて僧ヶ岳方面の様子を聞くと、1,200m付近に避難小屋があって、水場があると教えてくれる。11月とは信じられない陽気の中を進むが水場は案の定枯れていた。沢筋にも水の流れる気配は感じられない。

11月2日 ●のち◎ 出発(6:15)一僧ヶ岳(8:30)一駒ヶ岳(13:40)一200m下ったコル上部(16:00)

僧ヶ岳まで登山道を行くが、僧ヶ岳の下りから猛烈なブッシュが始まる。いくら傾斜が落

ちてくるとかすかに踏み跡らしきものが現われる。それでも遅々として進めず、駒ヶ岳があまりに速く感じられた。

11月3日 ◎のち① 出発(6:35)一滝倉山前衛峰手前のコル(14:30)

駒ヶ岳、滝倉山間は小さなピークが次々と現われ、しかも最悪のブッシュである。水がないので行動中は禁水の1日であった。

11月4日 ◎ 出発(6:00)一滝倉山(9:20)一ウドの頭(13:00)一西谷のコル(15:10)

残り水、わずかに1.8ℓとなる。谷へ水を取りに行くのにはあまりに下すぎる。口の中もボソボソと気持ち悪い。滝倉山を過ぎてウドの頭のコルに至る所に、コブが2つあり少々やばい。雪がつけば懸垂か。ウドの頭へは非常な急登で雪壁となるであろう。

11月5日 ◎のち① 出発(6:05)一西谷の頭(7:05)一三階棚滝(12:30)一発電所(14:30)

水がないので西谷の頭まで偵察して東又谷を

下降することにする。見た限りでは毛勝の登りは非常に苦しそう。東又谷は、途中の三階棚滝で滝つぼまで懸垂20mした他は、問題なく下る。

〈偵察報告〉

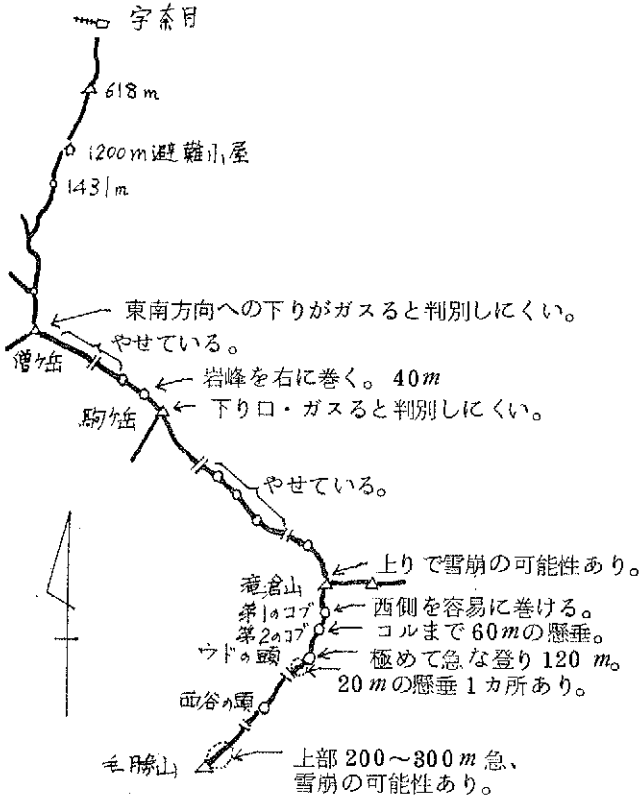


図 64. 宇奈月～毛勝山ルート図 (記 木嶋)

明神岳V峰西南尾根偵察

前明神沢出合—明神岳V峰—主峰—前穂—奥穂—湊沢岳—白出沢出合—新穂

期 間 11月2日～11月4日

参加者 山口(L)、重田

11月2日 ●のち① 上高地出発(7:55)→前明神沢出合(9:00)→2,300m(13:00)→V峰台地(14:40)

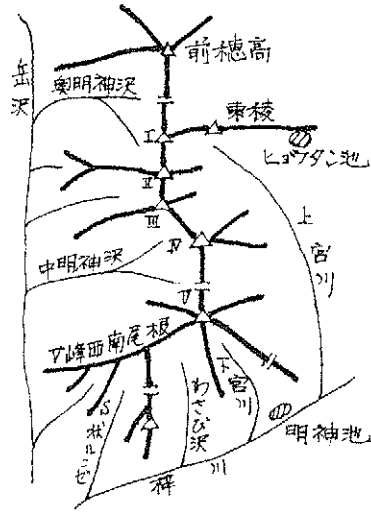


図 65. 明神岳主稜概念図

—V峰(15:35)

赤布をつけながらV峰西南尾根をただひたすらに登る。V峰台地ではガスの晴れ間に西穂の稜線が望め気持ちが良い。11月というのに稜線には全く雪がなく夏山のようなのである。

11月3日 ◎のち● 出発(6:20)→II峰(8:10)→奥明神沢のコル(10:20)→奥穂(14:10)→白出のコル(14:50)

テントから出ると眼下に雲海が広がり、主稜が金色に輝いている。IV峰は問題なくIII峰は急な岩稜。II峰

は明神槍と呼ばれる岩峰で、梓川側を巻く。最初バンドを20m下り、15mのアップザイレンでI、IIのコルに立つ。ここから奥穂にかけてずっと岩稜が続き、奥穂の小屋で水を分けてもらい水不足を解消する。

11月4日 ◎のち● 出発(8:00)→湊沢岳(8:15)→白出沢の登山道(9:30)→白出沢出合(11:35)→新穂(14:00)

湊沢岳西尾根を下っているつもりが、湊沢岳南西尾根であった。尾根上には岩峰が出てくるので白出沢にルートを求め、新穂へ駆け降りた。

〈偵察報告〉

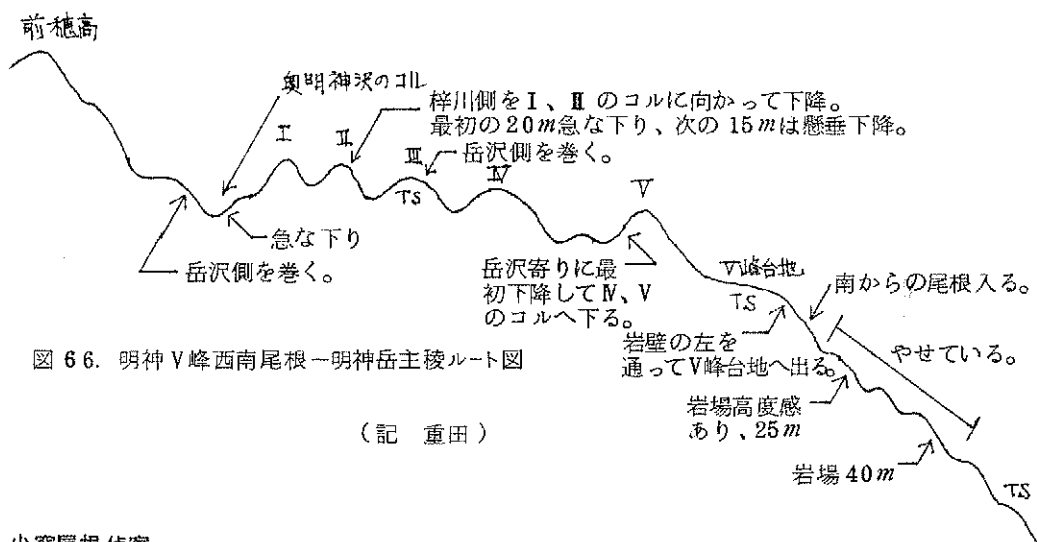


図 66. 明神V峰西南尾根—明神岳主稜ルート図

(記 重田)

小窓尾根偵察

白萩川—小窓尾根—三ノ窓—剣岳—早月尾根

期 間 11月1日～11月5日

参加者 住田(L)、岡部(祐)

11月1日 ① 取入口(8:00)—取付き
(10:27)—1,614m(12:10)
—1,990m(15:00)

三ツ道具を持って、個装15kgで、共装と4ℓの水を合わせると35kgは優に越える重量となる。実に鍛えられる偵察山行となる。

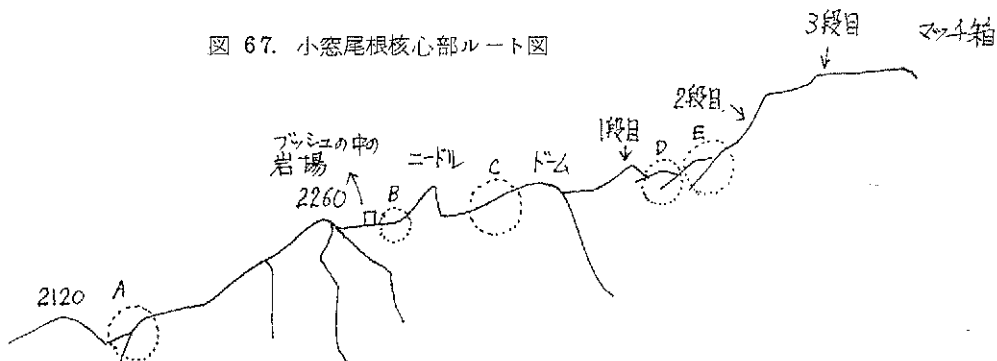
11月2日 ② 出発(7:20)—ニードル(9:45)—ドーム(11:45)—
2,650m(14:35)—三ノ窓(15:35)

1日中霧雨で写真を撮すのもままならぬ。ブッシュをこいだので全身びしょ濡れであった。11月3日以後は早月ボッカ隊と行動を共にする。

〈偵察報告〉

- A: 雪崩そうな急斜面を直登する。要Fix。
 - B: 岩場のナイフリッジ。要Fix。
 - C: 雪崩そうな急斜面を直登する。ブッシュをつかむ登りであるが要Fix。
 - D: 岩場のナイフリッジで、リッジ通したがやや左手をからみながら登る。要Fix。
 - E: コルより左手のわき腹を巻きつつ登るがかなり急な岩場リッジである。
- ニードル: 左手のバンドを行き、右手に走るク

図 67. 小窓尾根核心区部ルート図



ラックを5m直上する。ニードル上からはハイ松を下り5mの岩場をクライミングダウンしてコルに達する。

マッチ箱1段目(ピラミッドピーク):腹に40mフィックスしてバンドに達し、バンドをぐるっと右へ巻いて岩壁沿いに右斜上する。

マッチ箱2段目:岩峰右手の広いルンゼに入り、池ノ谷側に右斜上。ルンゼを登りきらずに40m位で右手の稜線に出れば緩傾斜となる。さらにやばい三角形リッジを右に水平にたどれば3段目のコルに出る。

マッチ箱3段目:リッジ通しに行くなら5mのフェース登攀と、危険なリッジを渡る。白萩側に巻くなら、40mのルンゼを降り岩峰の向こう側の急なルンゼを40m登らねばならない。雪崩の危険大である。(記 住田)

昨日小窓隊と合流したので予定通りテンネ登攀に向かう。残念ながらテンネには雪は全くついていなかった。

11月4日 ◎ デボ回収出発(6:20)
一早月尾根2,600mデボ地点(8:15)
一三ノ窓(11:10)

2,600mまで戻りデボを回収する。午後風が強くなり、夕方より雪となる。

11月5日 ◎のち① 出発(6:10)一
剣本峰(10:00)一伝蔵小屋(12:15)一馬場島(15:15)

昨日の積雪で本峰まで結構危険になり池ノ谷乗越を過ぎた辺りと長次郎の頭のトラバースにザイルを出す。本峰以後はガスも消え馬場島を眺めながらの下山となる。(記 岡部(友))

三ノ窓荷上げ

馬場島一剣岳一三ノ窓一早月尾根

期間 11月1日~11月5日

参加者 宮本(L)、岡部(友)、金谷

11月1日 ①のち● 馬場島出発(8:00)一松尾奥の平(9:40)一避難小屋(15:40)

早月尾根には雪は全くなく、枯葉のじゅうたんの階段をただひたすらに登る。水を心配するがこの夜雨となって助かる。

11月2日 ● 出発(6:00)一伝蔵小屋(7:30)一剣本峰(13:00)一三ノ窓(16:15)

伝蔵小屋で佐伯伝蔵氏の話のうちがう。これ程雪のない11月は小屋を開設して以来始めて、今年の冬はドカ雪間違いなしとの事。池ノ谷乗越手前で1ピッチフィックスする。

11月3日 ◎

・テンネ日嶺gcdルート(住田、金谷)
・テンネ左下カンテ~左方カンテ

(宮本、岡部(祐))

御岳アイゼン合宿

期間 11月19日~11月23日

参加者 森(保)(L)、森(良)、渡辺、重田、岡部(友)、金谷、広田、浅井、西尾、村田
OB 後藤、松尾

11月19日 ① 濁河温泉出発(9:25)
一サイの河原(14:20)

11月20日 ① 出発(7:30)一御鉢廻りの後一の池(9:30)
後発隊 田ノ原出発(6:20)一一の池合流(9:30)

11月21日 ① 継子岳アタック出発(7:00)一五の池(8:30)一継子岳(9:15)一一の池(12:35)

11月22日 ◎ 御鉢廻り(6:30~9:30) 読図訓練(11:15~14:10)

11月23日 ◎のち◎ 出発(7:40)

一王滝(8:45)一田ノ原(10:45)
一八海山荘(12:00) (記 西尾)

下にいる時から今年は雪がないと言われていたが、実際山へ入山してみても案の定雪はなかった。雪訓を目的に御岳に入山したものの、全く雪訓にはならず、ただザックを背負い雪もないのにアイゼンをつけて歩き廻るに終わった。入山する前から雪はないと噂し合っていたにもかかわらず、現地に電話して確める者が1人としてなかった事、上級生は私事を理由に参加を渋った事等、最近自分も含めて、他人まかせの風潮が強くなってきているのではないか。今後反省すべき点である。(記 燕^柳)

冬山合宿

昨年のような寒波はさほど吹かず、結構好天に恵まれた山行であった。1年生は結局ただ1人しか参加できなかったが、ラッセルのつらさはよくわかってもらったと思う。ただアイゼンはほとんど使用する事にならなかった。毛勝山では春用のデボが完全に埋まっており、荷上げ時の場所選定が非常に甘かった。小窓は最後まで出発時の食料、デボの保険扱い等の問題が多かったが、2年生も頑張り成果は大きい。ただ冬の剣はいつもこんなものと思ってもらっては困る。常に昨年のような教訓を生かしてまめに動くことである。春からはリーダーシップを3年に譲る。大変であろうが頑張ってもらいたい。(記 明神)

毛勝山

西北尾根から毛勝北峰アタック

期間 12月25日～1月1日
参加者 明神(L)、木嶋、森(良)、渡辺、浅井

12月25日 ◎ 第3発電所手前出発(8:55)一第4発電所(9:50)一取付き手前(15:00)

魚津駅より片貝第3発電所手前までタクシーで入る。雨が降っているので雨具を着、荷を整えて歩き始める。昨夜来の雨で雪の下には水が流れ歩きにくかった。第四発電所を過ぎ、大明神山の尾根を回り込む所で道の横にトンネルがあるのに気付き、ネスリングを背負っても歩けそうなのでトンネルを行く。1km程で出口に出て、すぐ下の橋を渡り、右岸の林道を行く。1時間半程して第五発電所を右手に見ながら阿部木谷に入る。

12月26日 ◎時々⊗ 明神、西尾 CS 出発(7:20) 他4名CS出発(8:00)一取付き(8:55)一1,250m(デボ)(14:30)一取付き(15:10)一帰幕(15:50)、明神帰幕(14:40)

離阪前より風邪をひいていた西尾が身体の具合が悪いと訴えたため、西尾を下山させることにする(明神が同行)。他の4名は不必要な食料、装備を1,250m地点までデボに行く。宗次郎谷出合50m上の橋の所に取付く。取付きからはかなりの急登で、これにラッセルが加わるのでよけいにしんどかった。共装は各自10kg程度で、これがシングルボックスであれば相当シビアではないかと思われる。

12月27日 ◎のち⊗ 出発(7:05)一取付き(7:30)一1,200m(デボ地)(10:00)一1,350m(12:25)(12:40～13:55)デボ回収

半ば雪に埋もれた昨日のトレースをたどり、割と楽にデボ地に着く。デボを横目で見ながら通り過ぎ、ここからチョウセンボックスに移る。1,350mで荷を下ろし、デボを回収しに行く途中、甲南大パーティーとすれ違う。これからは抜きつ抜かれつになりそうである。

12月28日 ⊗のち○ CS出発(7:4

5) - 1,750m 付近

1,479m 急登直下付近に甲南大パーティーのテントがあった。テント内には誰もおらず、どうやらデポをしに行ったらしい。さすがにシングルのボッカは厳しく、甲南大パーティーのトレースは有難かった。1,479m の登りはフィックスする予定であったが、無しで通過する。天候がだんだん良くなり、青空が見えたかと思うとたちまち快晴になってしまった。1,600m 過ぎたあたりで甲南大に追い付き、ここからチョウセンボッカで行く。

12月29日 ○ 2,100m デポ (7:05 ~ 9:40) CS 出発 (10:45) - 2,100m (12:00) - 第1次アタック (出発 12:25 ~ 毛勝北峰 13:05 ~ 帰幕 13:40)

ダブルで行くことにするが、昨日とうってかわって快調な足どり、あっという間に2,000m。ここで芝浦工大パーティーに出会う。今日下山だそうだ。ちょっとした急登を30分ばかり登ると2,100m。すぐ先の鞍部にデポの後、引き返す。テント撤収の後再び2,100mへ。2,100m に着いてすぐ森、木嶋、毛勝山北峰アタック。他はテントを設営する。設営後、速くでコールらしきものが聞こえる。あっという間に帰ってきた。

12月30日 ◎のち① 明神、渡辺、浅井 第2次アタック (出発 11:50 - 北峰 12:50 - CS 13:45) - CS 出発 (15:05) - 2,000m (16:10)

早朝ガスのため視界悪く、不気味な天気のため停滞。みんなでトランプをやって楽しむ。屋近くなって晴れ出してきたため、明神、渡辺、浅井の3人、北峰アタックに行く。雪は適当にクラストして歩きやすい。少々急であるがフィックスの必要は全く無し。頂上はかなり広く、天気も上々、東に後立山、剣を見、西に日本海、能登半島を望む 360度の大自然であった。11月偵察山行時の春用デポを捜すが、雪下深く埋まっており掘り出し不可能。頂上でアイゼンにはきかえて降りるが、途中ザイルを出す。CSに着いてすぐ撤収し、食料2日分ほどここ

に残し降りる。

12月31日 ● 出発 (7:10) - 1,750m (7:30) - 1,350m (10:15) - 取付き (12:40) - 第四発電所 (16:10)

ころげながら降りる。雨の為雪はスズスズで片足を1歩踏み出すと下手をすれば腰までもぐってしまう。途中で浅井、足を引っかけ斜面を頭から4~5m ころげ落ちるが、ビッケルをさして止まる。他全員少なくとも1回は滑ったりころんだり、ほうほうの体で何とか取付きに着き、これで一安心。

1月1日 ◎ 第四発電所出発 (12:15) 一片具発電管理所 (13:30) - 東蔵下山 (15:45) (記 浅井)

明神岳

明神岳V峰西南尾根~前穂

(概念図はP194 図65参照)

期間 12月25日~12月30日

参加者 山口(L)、重田、広田

12月25日 ●のち⊗ 沢渡出発 (8:00) - 大正池 (11:55) - 木村小屋 (13:10) - 岳沢CS (14:30)

タクシーで沢渡まで入る。あいにくと小雨で、どうも出鼻をくじかれた感じた。沢渡の小屋の中には、10人程の人々が入山の用意をしていた。我々もカッパを着て出発。釜トンを抜けると、雪は25cm位。河童橋を渡って、岳沢への道を20分程行ったところにテントを張る。

12月26日 ⊗ 出発 (6:30) - 前明神沢 (7:45) - 取付き (8:00) - 2,300m CS (13:10)

前明神沢まで、薄く雪に隠れた岩や木で、ワカン歩行が困難。西南尾根に取付いても、雪は少ないし、先行パーティーのトレースもあり、比較的楽に進み、岩場手前、約2,300m 地点にテントを張る。単調な登りだったが、明日は岩場が出てくるので変化がありそうだ。

12月27日 ⑧ 出発(7:10) - V峰台地(11:30)

岩場に取り付く。第1の岩場(40m程)は、さほど危険でもないし、残置のフィックスロープをつかんで通過。第2の岩場(25m程)は、やや危険。岳沢の方に切れていて、最後の10mは四つんばいになる所もある。ここも残置のフィックスロープを使って通過する。ここから南から尾根の入る所まで、やや急な登り。V峰台地の手前で風が強くなり、ツェルトを被って待機。V峰台地にテントを張る。

12月28日 ① 出発(7:00) - V峰頂上直下(7:40) - IV峰(8:50) - III峰(10:45) - CS(12:00)

V峰への登りがくっきり見える。よい天気だ。V峰へは、薄く雪に隠れたハイ松の上を歩くが、なかなか歩きにくい。V峰頂上左手を巻いて、IV峰とのコルに降りる。天気も眺めもよく、こんな時に稜線上を歩くのは気持ちが良い。IV峰を越えて、III峰直下へ。III峰への登りは急で、ザイル1Pフィックスする。III峰を岳沢へ巻いて、そこにBCをつくる。

12月29日 ① 出発(5:55) - II峰(6:05) - I、IIのコル(7:15) - 奥明神沢のコル(8:00) - 前穂頂上(9:45) - I、IIのコル(11:45) - BC(13:00)

今日は前穂アタック。II峰へ一気に登る。梓川側へ40m程懸垂下降。後は主峰を越えて前穂へ向かう。奥明神沢のコルまで岳沢側を行き、後は梓川側。岳沢からの風で顔が痛い。前穂の頂上からの眺めは非常によかった。頂上に立つといつも鉄路を見る時のような感動を覚える。帰りは、II峰への登りにてこずる。取付きのところが困難で、残置フィックスをつかんで強引にずり上がる。

12月30日 ① 出発(7:05) - IV・Vのコル(8:00) - V峰台地(8:50) - 岳沢入口(12:00) - 沢渡(16:35)

今日は下山だ。朝のうち、天気は悪かったが次第によくなってきた。岳沢からの風が相変わ

らず顔に痛い。III峰の下りは、残置フィックスロープをつかんで降りる。後は、どンドン降りていき、岩場のフィックスを通過したらもう危険はない。下に行くに従って陽気に溶けたのか、身体が雪で濡れる。岳沢入口から各自気ままに沢渡へ。天気に恵まれた稜線歩きは楽しいものだった。(記 広田)

今回の我々の山行は、偶然の異常気象により、はからずも遊び的、ある意味で同好会風山行になった。悪く言えば、訓れ合い的、愈けもの的の山行だった。リーダーの意志決定における、山からの規定要因が乏しかったことで、私は強いてそれ以上の行動を行なおうとしなかった。山での墮落を批難されそうだが、計画遂行という目的から、かなり自由であった為に、これまでになかった冬山の雰囲気を楽しめたと思っている。是非はともかく、こんな山行もいいのではないか。(記 山口)

剣岳

小窓尾根～剣岳～早月尾根

期間 12月24日～1月3日

参加者 住田(L)、宮本、岡部(祐)、森(栄)、岡部(友)、金谷

12月24日 ①時々● 伊折出発(8:40) - 馬場島(11:50) - デポ出発(12:25) - 船馬場島(13:40)

いつもの様に大阪を出発し、いつもの様に富山に着き、いつもの所で飯を食い、いつもの様に伊折に着いた。そして荷分けをしている時だった。ポールがないのに気付いたのである。思えばこれがケチのつき始めだった。仕方がないので後発の毛勝隊に富山駅まで持ってきてもらうこととし、住田が引き返す。残りは馬場島荘にて、泊めてもらうこととし、入山初日は思いもよらず、暖かいストーブと、毛布で過ごすことになった。午後は取入口の途中にある橋手

前にデポ。

12月25日 ●のち⊗ 出発(9:10)
—デポ回収(10:20)取入口着(11:
10)—デポ出発(12:00)—赤谷支尾
根稜線(14:00)—帰取入口(16:5
0)

昨夜からの雨で、屋根の雪も落ちている。飯は早く食ったものの、住田との連絡も考えて、出発を遅る。昨日、赤谷尾根に取付いたパーティーが有り、取入口までトレースが残っている。今日は取入口に幕営することしデポに出発。ここからのトラバースは雪が完全に斜面に付いておらず、ワカンをけりこむと草付きの斜面が鉄を出したりして危険な思いをする。目指すルンゼに入り、(この頃住田も追いつく。)タカノ巣ワリを巻いて、支稜線に出る。上がってはみたものの、どうも尾根の方向がおかしい。目指す支稜線のずっと手前の支稜線に上がってしまったようだ。急いで、今ラッセルをして上がってきたルンゼを駆け降りる。時間も遅くなっているので、取入口より少しトラバースした辺りにデポすることとし、住田、岡部(祐)、森で目指す支稜の偵察を行なうが、どうしてもその支稜がわからず、疲れきって取入口に引き返す。

12月26日 ⊗ 出発(7:20)—ダムを越える(10:55)—デポ出発(11:10)—池ノ谷出合(12:30)—小窓尾根取付き(14:10)—帰取入口(15:00)
宮本、岡部(祐)、金谷で空身で先行する。トラバースは相変わらずいやらしい。デポまで僅少しの所、8:00頃、木に片足をかけていた森が、バランスを崩して15m程転落。調度ダムを越えた所で止まった。幸いにしてカスリ傷一つしなかったが、今思えば背筋がゾットする。この思わぬ出来事の為そして幸いにも、ダムの右岸にうまい具合に雪が着いていてダムを容易に乗越せる事がわかったので、全員取入口から川沿いに進むことにする。途中渡渉三回、といっても丸太棒、飛石、スノーブリッジで、うまく水につかる事なく小窓取付きまで行きデポする。しかしこの川沿いのルートは両側からいつ新雪雪崩が出て来ても不思議ではない様な所で、明

日もまた通るのかと思うとゾットする。

12月27日 ◎時々⊗ 出発(7:10)
—取付(9:05)—デポ回収(9:40)
—稜線上(13:40)—1,600m地点(15:30)

昨日のトレースが残っているのでペースは速い。しかし思った通り、昨夜のうちに新雪雪崩が所々にでていて、デブリでトレースが消されている。恐る恐る、しかし急いで通過してしまう。デポを回収すると、キスリングが一段とふくらみ肩にズシリと食い込む。トップとセカンドが空身でラッセルするが、それでもキスリングを荷いだ3番目が踏み込むとスポッとほまり、3番目もラッセルしている様なものだった。この苦しい急登とラッセルは1,600m地点まで続き、ここに着いた時には全員バテバテであった。

12月28日 ⊗のち○ 出発(7:20)
—1,900m地点(10:45)—2,126
m地点(11:45)—2,260m地点(16:40)

傾斜は緩くなったものの相変わらずきついラッセルが続く。出発当時、雪が降っていたが9:00近くになると青空が広がってきて、たちまちに快晴となる。全く信じがたい事だが青空になってしまった。おかげで池ノ谷にすっぱり切れ落ちているのが良くわかる。その向こうには早月尾根が本峰に続いているのも壮観である。1,900m地点に達すると、俄然と真新しいトレースが現われ、前方に近大のパーティーが見える。そうこうしているうちに上から学習院大のパーティーも降りてくる。2,260mの登りから、宮本、岡部(祐)でフィックス工作をするが、近大とここでぶつかり時間のロスは甚だしい。

12月29日 ○ 出発(7:10)—エー
ドル越え(9:00)—ドーム越え(10:
10)—一段目越え(12:00)—マツチ
箱のピーク(16:30)

今日は核心部を越えるとあって、快晴に全員で感謝する。2,260m出発早々からフィックスのベタ張り。宮本、岡部(祐)でフィックス工作。他はダブルボッカをする。まずは黒々と岩

膚を現わし、垂直にすっぱりと白萩川へ切れ落ちているニードル越え。雪が少ないのか、風で吹き飛ばされるのかニードル手前の細い岩稜も岩が出ており恐る恐る歩を進める。そして、5m程の岩登りに、重いキスリングのため思わず後へのけぞりそうになる。ここを越えると、フィックス隊は既にドームを登りきろうとしており、負けてはならじとばかり、我々もダブルポックに引き返す。ドームの登りはただ急だけでやばい所はないが、フィックスは必要。ドームを越えたコルで初めて一息入れる。このコルからの登り15m程が非常に急登で、残置フィックスをも握っての悪戦苦闘だった。そして第2の核心部が始まる。雪のついた岩稜、5m程の岩登り、ハイ松のでた急登。ここからも急登が続き、やっとマッチ箱のピーク。最後の懸念されていた3段目は、雪が付いて何でもない所だった。

12月30日 ◎のち○ 出発(10:55)
一三ノ窓(13:50)

濃いガスの為、9:15分の天気図まで時間待ち。そうしているうちに青空が広がり始めたので急いで撤収し、三ノ窓に向かう。今年は雪が少ないので、小窓ノ王もフィックス100mで難無く通過。幸いにデボも五箇とも有り、必要分だけ取った後、三ノ窓、池ノ谷よりの岩のふもとに残りをデボする。しかし五月にさえ、このデボは出ているかどうか。

12月31日 ◎

低気圧接近による悪天か、本日は沈殿。温度は高く、ミゾレからしだいに雨に変わっていった。今日は大晦日だし、食料もたっぷりとおることだし、せい沢な気分が一日中ゴロゴロとする。「昨年のは早月、今日一次アタックでやはり天気が悪かったなあ。」等と思う。

1月1日 ◎ 出発(7:45)一池ノ谷乗越(8:35)一長次郎のコル(12:35)
一本峰(13:50)

今日は元旦、心気一転した気分でシュラフから飛び出す。外は我々の期待を裏切り、ガソッて粉雪が降っている。それでも意を決し、本峰を目指し出発する。池ノ谷ガリーは薄くクラ

ストした上に新雪が積もっていて、アイゼンをけり込むと、ズボッとうまくステップができ、難無く登り切ってしまう。ここから右手のルンゼ40mフィックスで稜線へ。例年より雪が少ないため結構やばく、稜線上ずっとフィックスのしどうしである。長次郎のコルへは剣沢側をトラバース気味に下るが、所々シュルンド部分が薄くなっており落ち込んで転倒した時は全く肝を冷やした。ここから急登の後、タラタラとした稜線を忠実にたどって行くといつものまにかそこは本峰であった。今年は祠もわずかに見え、頂上はナイフリッジ状で改めて雪の少なさを知らされる。

1月2日 ◎のち① 出発(7:00)一分岐点から引き返す。再度出発(11:30)
一2,600m 2つ手前のコル(17:30)
今日は下山と強気で出たものの、強風と加えて視界の悪さに早月分岐点付近まで行った後下降をあきらめて再び本峰に設営し、停滞と決め込む。しかし設営後少しして青空が広がり始めたため、あわてて撤収し下山を開始する。

下山は昨年とは大変な違いでクラストした上に新雪が薄く積もっている。非常に危険な思いをする。シシ頭を越えてからも急な下降が続き、フィックスと時間待ちのため、遅々として進まず、結局2,600mの2つ手前のコルで斜面を削り取ってやっとテントを設営するような具合だった。不思議なもので、ここは昨年昨日、吉田と森が本峰アタックの後にビバークを強いられた所であった。

1月3日 ◎のち◎時々◎ 出発(8:40)
一伝蔵(10:00)一馬場島(12:10)
一伊折(15:30)

早月の核心部も越えた事だし、後はかって知ったる雪の道、馬場島に向けて走り降りるだけである。それでも、2,600mからの下り、ザイル2Pを要した。伝蔵からはトレース明瞭との事で、気ままに下る。馬場島でガスの早月尾根を見上げた時には何とも言えぬ気分であった。

(記 森(保))

暖冬で天気には恵まれており、メンバーも2年生2人を含むが強力な隊だった。3年生の強さに驚き、2年生はやはり2年生であるというのが素直な感想である。しかし、失敗を続け、ポールを大阪に忘れてきたこと、取入口から取付き迄のルートを誤ったことについてはリーダーとして反省している。また森が外傷はなかったものの数十メートル転落したことを含め、山行の前半は胃袋が変になりそうな山行であった。

乾いた粉雪が降っていた。

「モリ」の直後に自分がいて、前にはラッセル員が2人空身でいた。余りにも急な雪壁だった。「モリ」は枯木と悪質な雪壁とに足をおいていた。微かな枯木の振動で「モリ」が一瞬フラッとした。「モリ」も自分もキスリングを背負っていた。もう一歩進めば手が届くはずや…と思う間に、すっと落ちた。転がりながらダムへと消えた。

今思い起してもゾツとしない。

しかし、最大の難所であるマッチ箱では、予

想外の好天に恵まれ無事切りぬけられた事は幸運だった。

後少し個人的感想を書かせてもらえれば、一体、今年もなんであの山へ行ったか。ただ無事下山に安堵するばかりで、次への発展、気構えが全く浮かんでこないのは何んですか。そう感じるの自分一人か。元々、冬山の厳しさが好きで、その厳しい冬山のある部分で障害を乗り越える時に「おもしろみ」があり、乗り越えられない時にも倒錯した「おもしろみ」があったんだが。

冬山は一人では登れっこない。小窓下部の変なラッセルコンビネーション。すばらしく能率の上がるコンビネーションだったが、あれが阪大山岳部の良さか、悪さか。

リーダーとしては非常に楽なパターンである。しかし、やはり自分の山は自分の為だけに登るものだと山行後、今頃になって自分に言い聞かせている。

ともあれ、今後の阪大山岳部各部員の健闘を祈る。
(記 住田)

索 引

山 名	年・月	頁	山 名	年・月	頁
—— 剣岳・立山・黒部 ——			裏剣（阿曾原—剣岳）	72.10	98
〈無雪期〉			立山—槍ヶ岳縦走	71.10	85
八ッ峰Ⅵ峰Dフェース	68.7	16	立山—西穂縦走	74.8	126
〃 Ⅵ峰三ノ窓フェース	70.8	58	立山中央山稜上、下部偵察	68.11	26
〃 Ⅶ峰フェース	〃	58	真砂尾根上部偵察	〃	26
八ッ峰下半	73.7	109	黒部別山南尾根偵察	〃	27
〃 マイナーピーク	76.8	155	奥大日尾根偵察	75.11	142
〃 3稜偵察	68.11	28	黒部丸山東壁ダイレクトルート	68.11	29
〃 4稜偵察	〃	27	〃	71.8	84
源治郎Ⅱ峰長次郎側			黒部上ノ廊下	69.8	47
白い岩脈ルート	68.7	15	黒部（上ノ廊下、高天原）	70.8	61
源治郎尾根	76.8	155	黒部源流・赤牛沢	74.7	124
チンネ、左下カンテ—左方カンテ	70.8	56	〃 岩苔小谷	〃	124
〃 左稜線	73.7	109	〃 赤城沢—薬師沢左俣	〃	124
〃 日嶺 g・c・d	76.7	154	〃 赤城沢—ウマ沢	〃	125
ジャンダルム左稜線	70.8	57	〃 薬師沢右俣	〃	125
〃 Aテムニー	73.7	109	黒部上ノ廊下	75.8	140
〃 Cクラック	76.7	154	雲ノ平—剣岳縦走	77.8	187
〃 3本クラック	〃	154	毛勝山（中谷—毛勝山）	70.8	59
R5, 6から剣尾根上半	71.7	80	毛勝山西北尾根偵察	77.11	192
剣尾根	76.8	156	サンナビキ尾根偵察	71.11	86
池ノ谷右俣奥壁	71.7	80	宇奈月尾根偵察	77.11	193
池ノ谷尾根R稜	〃	81			
東大谷右俣下降	76.7	156	〈積雪期〉		
小窓尾根ニードル沢	71.7	82	剣岳北方稜線	72.3	92
小窓王南壁ダイレクトルート	76.7	155	剣岳・奥大日尾根	76.3	147
小窓尾根偵察	75.11	143	剣岳・早月尾根	77.1	163
〃	77.11	195	剣岳北方稜線	〃	165
剣大滝偵察	68.7	16	剣岳・八ッ峰縦走	77.5	176
剣岳北方稜線	73.7	108	剣岳・小窓尾根	78.1	199
剣岳北方稜線縦走	75.8	139	立山中央山稜OB行	68.5	13
剣岳北方稜線偵察	71.11	87	立山中央山稜	69.5	37
〃	76.11	160	立山第2, 3尾根中間稜	〃	38
剣岳—笠ヶ岳縦走	68.8	17	毛勝山・西北尾根	78.1	197
剣岳—槍ヶ岳縦走	〃	18			
剣岳—東沢縦走	〃	19			
北アルプス横断（早月尾根—ブナ立て尾根）	71.	85			

山名	年・月	頁
—— 穂高・槍ヶ岳 ——		
〈無雪期〉		
前穂北尾根ビバーク	69. 7	43
" IV峰正面北条・新村ルート	69. 9	49
" IV峰東南面中大ルート	75. 7	138
前穂北尾根偵察	75.11	144
滝谷II尾根	75. 7	138
" ドーム	77. 7	185
滝谷-西穂, 双六谷	77. 8	188
北穂東稜	75. 7	139
霞沢岳	"	139
北鎌側稜 A稜	69. 7	40
" "	77. 7	179
" B稜	69. 7	41
" "	77. 7	179
" C稜ツルム阪大ルート	69. 7	41
" C稜ツルム側壁	"	41
" C稜	77. 7	179
" C稜ツルムポピュラー	"	182
" C稜ツルムチムニー	"	
" 直上-ポピュラー	"	182
" D稜	69. 7	42
" "	77. 7	180
小槍	69. 7	42
" 西壁	77. 7	180
" 北東面	"	181
硫黄尾根 上半	69. 7	44
" "	77. 7	184
" 下半	69. 7	43
北鎌主稜	77. 7	183
赤岳(二ノ沢-三ノ沢)	"	183
天上沢	"	183
ワリモ沢敗退	"	184
双六谷 "	"	185
下又白谷とヒシ形岩壁	77. 8	189
北ア南部横断(中尾峠~徳本峠)	66.10	48
穂高池巡り	79. 8	158
槍ヶ岳・千丈沢	"	159
槍ヶ岳周辺	74. 8	127
横尾尾根偵察	74.11	127

山名	年・月	頁
抜戸岳南尾根偵察	76.11	161
表銀-笠ヶ岳偵察	"	161
明神岳V峰西南尾根偵察	77.11	194
〈積雪期〉		
南岳西山稜	68. 5	11
槍-穂高縦走	70. 5	54
西穂-天狗のコル敗退	74. 5	121
前穂北尾根	76. 1	146
滝谷	76. 5	152
北鎌尾根	75. 5	135
横尾尾根	75. 1	130
表銀縦走	77. 3	169
抜戸岳南尾根	77. 3	170
弓折岳南尾根	"	171
明神岳東稜	77. 5	173
明神岳V峰西南尾根	78. 1	198
—— 中ア, 南ア ——		
〈無積期〉		
双六岳-針ノ木岳縦走	69. 8	46
北ア北部横断(赤石尾根-室堂)	69.11	45
杓子双子尾根-後立山縦走	71. 8	50
後立・東谷	72.11	82
扇沢周辺偵察	74.11	98
鹿島槍天狗尾根偵察	76. 8	128
白馬-槍ヶ岳縦走	77.10	157
鹿島槍-五竜岳	69. 8	190
〈積雪期〉		
新人歓迎白馬岳合宿	71. 5	78
"	72. 5	95
"	74. 5	121
"	75. 5	135
"	76. 5	151
"	77. 5	173
新人白馬岳合宿	69. 1	30
"	76. 1	145
白馬岳-蓮華温泉(スキー山行)	76. 5	151

山名	年・月	頁	山名	年・月	頁
白馬主稜	68. 5	11			
〃	73. 3	104	〈無雪期〉		
突坂尾根より白馬岳初縦走	69. 1	31	東大雪縦走	73. 8	110
白馬岳一五竜岳縦走	71. 1	70	十勝岳一化雲岳,クワウンナイ川廻行	75. 8	141
杓子双子尾根	70. 1	51	八海山偵察	70.11	64
〃	73. 3	101	郡界尾根偵察	〃	66
新人遠見尾根合宿	71. 1	71	駒ヶ岳一中ノ岳偵察	〃	69
鹿島槍天狗尾根	75. 3	132	薬師岳偵察	73.11	112
蓮華岳東尾根	73. 1	100	笠ヶ岳第1岩稜	68. 8	19
			小太郎岩	68. 9	21
			大峰山神童子谷	68.10	23
—— その他の山城 ——					
〈無雪期〉					
中央ア単独行(空木岳一宝剣岳)	71.10	86	〈積雪期〉		
南ア北半縦走(甲斐駒一農鳥岳)	68.10	23	東大雪	74. 3	115
南ア南半縦走(荒川岳一茶臼山)	〃	21	魚沼三山縦走	71. 3	72
荒川三山縦走	70.10	63	〃	75. 5	136
南ア南半縦走(千枚岳一聖岳)	73.10	111	薬師寺	74. 1	113
南ア全山〃(甲斐駒一茶臼山)	76. 8	158	戸隠山塊 P ₁ 尾根,ダイレクト尾根	71. 5	77
〃(〃一光岳)	77. 8	186	白山	68. 5	13
北岳バットレスⅣ尾根, Dガリー大屋根	70.10	63	新人歓迎大峰山行	69. 5	38
〃Ⅳ尾根	76.10	159	新人歓迎大杉谷山行	70. 5	56
奥西河内廻行	75. 8	141	大峰山横断(稲村ヶ岳一犬普賢岳)	〃	55
荒川本谷廻行	77.10	191	大峰七面山南壁試登	71. 4	78
			大峰山神童子谷	72. 5	96
			大峰山北部(行者選岳一山上岳)	74. 1	107
				77. 1	168
〈積雪期〉					
八ヶ岳縦走	70. 4	53			
中ア縦走(麦草山一南駒ヶ岳)	70. 5	54			
中ア、滑川三ノ沢周辺	72. 1	90			
塩見岳蝙蝠尾根	〃	89			
鋸岳一甲斐駒ヶ岳	〃	90			
北岳バットレス・Cガリー大滝一Ⅳ尾根	77. 5	175			
〃dガリー奥壁	〃	175			
〃ピラミッドフェース	〃	175			

編 集 後 記

今、ここに、10年間休刊しておりました「時報」を発刊し、お送りできますことは、編集者一同この上もない喜びであります。

「時報」発刊の動きは'69年以来幾度かありましたが、部員減少と共に低迷期に入った山岳部にとっては発刊するまでには至らず、中途半端な結果に終わっていたのが実情です。そして、部活動も安定してきた最近になって再びその気運が高まり「時報16号」の刊行を見たわけではありますが、定期刊行物の発刊は団体組織、特に正規の学生団体に於ては義務であると思われるから、今後、クラブ活動の一環として定期的に(2年毎が最も適当であると思われる)発刊することは絶対に守られるべきです。

「時報16号」には'68年来の活動記録をほとんど全て記載しましたが、載せるに足らない記録も数多くあり、選択すべきであったかも知れません。しかし、これを見て頂ければ'68年以来の阪大山岳部の歩みは如実にお分かり頂けると思います。

冬の岩壁登攀、海外遠征等に社会人山岳団体の活躍は目覚ましいものがありますが、それらにいたずらに迎合することなく我々大学山岳部は大学山岳部らしい目標を見出し、その道を進むしか大学山岳部のとる道はないと思います。その意味でも、この「時報16号」は、前号までの「時報」と合わせて、今後の世代の活動に何らかの参考になれば幸いです。

最後に「時報16号」発刊に対して御尽力頂いたOB諸兄、並びに出版を引き受けて頂いた秀栄社の方々、特に高橋氏に感謝の意を表します。

昭和53年10月25日

編集委員代表 森

編集委員 山田 靖則, 石原 敏雄, 黒岩 芳夫, 大宅 幸夫
高橋 正身, 上松 一雄, 佐野威和雄, 森 保知

発行所 大阪大学体育会山岳部 〒565 豊中市待兼山町1の1

印刷所 秀 栄 社 〒534 大阪市都島区片町2の7の21
電話(06)353-5268



別山垂城より望む剣岳